

堂の前貝塚発掘調査報告書 Ⅲ

平成24年度復興交付金対象事業関連遺跡発掘調査

2018

岩手県陸前高田市教育委員会

どうのまえかいづかはくつちょうさほうこくしょ
堂の前貝塚発掘調査報告書 Ⅲ

平成24年度復興交付金対象事業関連遺跡発掘調査

2018

岩手県陸前高田市教育委員会

序 文

陸前高田市は、岩手県南部の県内では温暖な気候の地域にあり、縄文時代から現在にいたるまで、山、川、そして三陸の海がもたらす豊かな自然の恩恵を享受し発展してまいりました。

市内には、白砂青松で知られる名勝高田松原や学史的にも著名な国指定史跡の中沢浜貝塚などの多様な歴史文化遺産が数多く存在しております。

市内の「周知の埋蔵文化財包蔵地」も約 270 か所を数え、縄文時代の貝塚、墨書土器・刻書土器を出土する古代遺跡、中世に築かれた 55 か所の城館跡など各時代の様々な種類の遺構・遺物を包蔵している土地でもあります。

このような自然や文化財を保護し活用しながら後世に伝えることは、現在を生きる私たちの責務です。

一方、市勢発展や地域活性化のためには、公共事業や社会資本整備等を充実させ市民生活に還元するが必要であることも事実です。

しかし、破壊された遺跡は元には戻らず、遺跡に残された先人が生きた証は永久に失われてしまいます。

陸前高田市教育委員会は、開発事業や東日本大震災後の復興事業と遺跡の保護を両立するため、関係機関と事前の協議・調整を行いながら、事業によりやむを得ず消滅してしまう遺跡について発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は、東日本大震災からの復興のための個人住宅再建に伴い実施した、堂の前貝塚の発掘調査成果を収録したものです。

今回ご報告するのは、平成 24 年度に実施した堂の前貝塚の発掘調査で明らかとなった、縄文時代の人々が大地に刻んだ暮らしの跡や、日々の暮らしで使った土器・石器などです。

また当遺跡の発掘調査成果は、全国 4 ヶ所で開催された「発掘された日本列島 2015」展で、広く紹介され注目を浴びた遺跡でもあります。

本書が、学術研究、地域での教育活動に広く活用され、ひいては文化財保護意識の普及啓蒙にお役立ていただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご指導、ご協力をいただきました関係各位に深く御礼申し上げます。

平成 30 年 9 月

陸前高田市教育委員会

教育長 金 賢治

例 言

- 1 本書は、岩手県陸前高田市米崎町字堂の前 121 - 1 他に所在する堂の前貝塚の発掘調査報告書である。
- 2 平成 24 年から平成 27 年にかけて、堂の前貝塚内で東日本大震災による住宅等の再建を主な原因として復興庁復興交付金の交付を受けて実施された事前発掘調査のうち、本書には平成 24 年度に実施した 1 ～ 3 区の発掘調査成果を所収した。
- 3 本遺跡は岩手県遺跡台帳に NF68 -2130 として登録されている。
市の遺跡登録番号は 160、略号は DNM あるいは、堂の前貝塚 2012 年度調査を表す DNM12 である。
- 4 発掘調査は、陸前高田市教育委員会が文化庁・岩手県教育委員会の指導の下、県内外の公共団体と関係機関の協力を受け実施した。調査期間、調査面積、担当者は以下のとおりである。調査を実施した組織については巻末に記した。
 - 1 区調査 平成 24 年 4 月 26 日～8 月 21 日 1,429m² 担当 遠藤勝博
 - 2 区調査 平成 24 年 8 月 20 日～12 月 7 日 914m² 担当 遠藤勝博
 - 3 区調査 平成 24 年 7 月 18 日～11 月 19 日 918m² 担当 遠藤勝博
- 5 遺物の水洗・注記などの基礎的整理作業については、陸前高田市教育委員会が発掘調査と並行して行い、遺物復元・実測作業と貝層コラムサンプルの処理・分析については外部機関へ委託し実施した。委託機関は以下のとおりである。
 - 1 区出土縄文土器復元・実測：北上市
 - 2 区出土縄文土器復元・実測：花巻市
 - 1・2 区土製品・土器片製円盤実測：花巻市
 - 1～3 区出土石器実測：株式会社 ラング
 - 採取貝層コラムサンプル処理・分析：独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所
- 6 本書刊行作業は陸前高田市教育委員会が平成 28～29 年度に実施した。詳細は以下のとおりである。
 - 原稿執筆・編集：増崎勝仁（担当） 原稿執筆・遺物実測指導：遠藤勝博
 - 原稿執筆：曳地隆元
 - 版下作成・遺物実測：村上奈穂子 版下作成・編集補助：村上紀子
 - 遺物実測・写真撮影補助：今野一弘 菅野江理子 藤村京子
- 7 本書の執筆は第三章第 1 節 3 と第 2 節 3 の「縄文土器」と第 V 章の「縄文土器について」を遠藤勝博が、第二章を曳地隆元、その他を曳地・遠藤の助言を受け増崎勝仁が行った。編集は増崎が行った。
また、動物遺存体の分析は独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 松崎哲也・山崎 健氏に、炭化材の放射性炭素分析年代測定結果については株式会社加速器分析研究所に執筆いただいた。
- 8 本書の写真は、調査中は各調査員が撮影し、動物遺存体を除く遺物は増崎が撮影した。
- 9 本書に収録した出土遺物及び調査記録は、陸前高田市教育委員会で保管している。
- 10 発掘調査から整理作業、報告書刊行に至るまで、以下の方々と機関にご指導・ご協力をいただいた。記して深謝いたします。（順不同・敬称略）
発掘調査に従事された地元作業員の皆様（巻末別記） 熊本県教育委員会 京都市教育委員会
秋田県教育委員会 岩手県立博物館（公財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
八木光則 熊谷常正 鈴木めぐみ 中村哲也 藤崎芳樹 上野純司 原田亨二 小川勝和 宮川博司
高城大輔
- 11 本書刊行前に調査成果の一部が、現地説明会や各地での展示会で公開されたが、本書の記載内容が優先する。

凡 例

- 1 本書で使用した方位は磁北で、標高は海拔高である。
- 2 調査中に任意に設置したグリッドポイントは、世界測地系（測地成果 2011）に則し測量した。
その成果は、下記のとおりである。
グリッド配置基点：EA20 グリッドポイント X - 110 088.728 Y 72 793.285
真北方向角 -0° 31' 44.4" 標高 32. 210m
グリッド配置基軸線である EA ラインは、真北方向から東へ 14° 56' 24.3" 傾向する。
- 3 本書で用いた遺構略号は以下のとおりで、種別ごとに番号を付した。
NR：自然流路 SB：建物跡 SF：道路跡 SI：竪穴建物跡 SK：土坑 SL：焼土跡
SP：小穴 SS：配石 SU：遺物集積
- 4 調査時に付した遺構略号と番号は、整理作業の中で整理順列し新たに付した。遺構略号と番号の変遷と新旧の対照は、添付 C D 内の「堂の前貝塚 1～3 区 遺構名変遷表」を参照されたい。
- 5 挿図の縮尺は、遺構平面・断面図は 1/40・1/50、遺物実測図については完形土器 1/4、土器破片 1/3 石器と土製品 3/5・1/3 を基本としているが、図によっては変更しているものがある。
- 6 遺物図版は挿図と同一縮尺を基本としているが、縮尺を明示し変更したものがある。
- 7 土壌の色調は『新版 標準土色帖 (2013 版)』（農林水産省農林技術会事務局監修）に準拠した。
- 8 一部の石器・石製品の石材の肉眼による岩種鑑定には、『河原の石の CD 岩石鑑定図鑑』（2003 版）有限会社考古石材研究所発行を参照した。
- 9 挿図中の配色・トーンは以下のとおりである。



- 10 各遺構の土層説明を含む記述に関しては、整理作業での調整・変更は最小限にとどめ、調査時に作成された記録を最優先した。【規模】は、最大長軸値×最大短軸値×最大深さ値である。【重複】は、調査時に判断された先後関係を記載している。【出土遺物】は、調査者が遺構内出土と認定し図示した資料のみ記載している。
- 11 遺物挿図・写真に付した () 内の番号と遺物図版に付した番号は、完形土器については堂の前貝塚 1～3 区出土資料内での識別番号で、H は花巻市総合文化財センター実測、K は北上市埋蔵文化財センター実測を表し、石器・ミニチュア土器を含む土製品・骨角器については、教育委員会で作成した市内遺跡出土遺物登録台帳への登録番号を表す。
- 12 本書の空中写真は、昭和 23 年 9 月 19 日米軍撮影 整理番号 52V 82RSP コース番号 R1782 撮影縮尺 4 万分の 1 を拡大し使用した。
- 13 図示した完形土器・石器・土偶・土製品・土器片製円盤の出土グリッド・計測値・石材等の属性情報については、調査区を分けて「土器属性表」「石器属性表」「土偶・土製品属性表」「土器片製円盤属性表」「骨角器属性表」に記載し、採集された全ての動物遺存体についても一覧表を作成し、添付 CD-ROM に XLS・CSV・TXT 形式で記録した。

目次

本文目次

序文
例言
凡例

第 I 章 調査概要	1
第 1 節 調査に至る経緯	1
第 2 節 整理の経過	1
第 II 章 遺跡の立地と環境	5
第 1 節 地理的環境	5
第 2 節 歴史的環境	5
第 III 章 調査成果	8
第 1 節 1 区の調査	8
1 調査の経過と方法	8
2 遺構の概要と基本層序	8
3 遺構と出土遺物	14
竪穴建物跡	14
建物跡	16
土坑	18
焼土跡	19
小穴	20
自然流路	22
4 遺構外の出土遺物	30
縄文土器	30
土製品	79
土器片製円盤	79
石器	84
石製品	108
第 2 節 2 区の調査	121
1 調査の経過と方法	121
2 遺構の概要と基本層序	121
3 遺構と出土遺物	127
焼土跡	127
小穴	129
配石	130
遺物集積	132

4 遺構外の出土遺物	136
縄文土器	136
土製品	162
土器片製円盤	171
石器	171
石製品	179
骨角器	185
第3節 3区の調査	189
1 調査の経過と方法	189
2 遺構の概要と基本層序	189
3 遺構と出土遺物	193
竪穴建物跡	193
土坑	201
焼土跡	214
道路跡	214
小穴	214
4 遺構外の出土遺物	232
土製品	232
土器片製円盤	232
石器	232
石製品	235
第4節 その他の遺物	236
第5節 1～3区出土の動物遺存体	239
第IV章 自然科学分析	249
第1節 堂の前貝塚における放射性炭素年代(AMS測定)	249
第V章 まとめ	253

報告書抄録

挿図目次

第1図 堂の前貝塚調査地点集成	3	第9図 SI1・2、SL5	14
第2図 堂の前貝塚と周辺の遺跡	6	第10図 SI1 出土土器	15
第3図 堂の前貝塚と周辺の地形	7	第11図 SI1 出土石器(1)	15
第4図 1区遺構分布	9	第12図 SI1 出土石器(2)	16
第5図 1区グリッド別出土土器重量分布	10	第13図 SB1-a・b・c	16
第6図 1区A・Bライン土層断面	11	第14図 SB1	17
第7図 1区C・Dライン土層断面	12	第15図 SB1 出土石器	17
第8図 1区Eライン土層断面	13	第16図 SK1～3	18

第 17 図	SK1 出土土器	18	第 59 図	粗製土器 (7)	55
第 18 図	SK1 ~ 3 出土石器	18	第 60 図	粗製土器 (8)	56
第 19 図	SL1 ~ 4	19	第 61 図	縄文時代中期末葉、 後期初頭~前葉 (1)	57
第 20 図	SL2・5 出土石器	20	第 62 図	縄文時代後期初頭~前葉 (2)	58
第 21 図	SP1	20	第 63 図	縄文時代後期初頭~前葉 (3)	59
第 22 図	SP2	20	第 64 図	縄文時代後期初頭~前葉 (4)	60
第 23 図	SP2 出土石器	20	第 65 図	縄文時代後期初頭~前葉 (5)	61
第 24 図	SL1・3・5 出土土器	21	第 66 図	縄文時代後期初頭~前葉 (6)	62
第 25 図	NR1	22	第 67 図	縄文時代後期初頭~前葉 (7)	63
第 26 図	NR2・3	23	第 68 図	縄文時代後期初頭~前葉 (8)	64
第 27 図	NR1 出土土器 (1)	24	第 69 図	縄文時代後期初頭~前葉 (9)	65
第 28 図	NR1 出土土器 (2)	25	第 70 図	縄文時代後期初頭~前葉 (10)	66
第 29 図	NR1・2 出土土器	26	第 71 図	縄文時代後期初頭~前葉 (11)	67
第 30 図	NR1・2 出土石器 (1)	27	第 72 図	縄文時代後期初頭~前葉 (12)	68
第 31 図	NR1・2 出土石器 (2)	28	第 73 図	縄文時代後期初頭~前葉 (13)	69
第 32 図	NR1 出土石器	29	第 74 図	縄文時代後期初頭~前葉 (14)	70
第 33 図	縄文時代中期中葉の土器	30	第 75 図	縄文時代後期中葉 (1)	71
第 34 図	縄文時代中期末葉の土器	31	第 76 図	縄文時代後期中葉 (2)	72
第 35 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (1)	32	第 77 図	縄文時代後期中葉 (3)	73
第 36 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (2)	33	第 78 図	縄文時代後期中葉 (4)	74
第 37 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (3)	34	第 79 図	縄文時代後期後葉 (1)	75
第 38 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (4)	35	第 80 図	縄文時代後期後葉 (2)	76
第 39 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (5)	36	第 81 図	縄文時代後期粗製 (1)	77
第 40 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (6)	37	第 82 図	縄文時代後期粗製 (2)	78
第 41 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (7)	38	第 83 図	ミニチュア土器	79
第 42 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (8)	39	第 84 図	土製品	80
第 43 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (9)	40	第 85 図	土偶 (1)	81
第 44 図	縄文時代後期初頭~前葉の土器 (10)	41	第 86 図	土偶 (2)	82
第 45 図	縄文時代後期中葉の土器	42	第 87 図	土器片製円盤	83
第 46 図	縄文時代後期前葉~中葉の土器 (1)	43	第 88 図	石鏃 (有茎)	84
第 47 図	縄文時代後期前葉~中葉の土器 (2)	44	第 89 図	石鏃 (有茎・無茎)	85
第 48 図	縄文時代後期前葉~中葉の土器 (3)	45	第 90 図	石鏃 (無茎)	86
第 49 図	縄文時代後期前葉~中葉の土器 (4)	46	第 91 図	石錐	87
第 50 図	縄文時代後期前葉~中葉の土器 (5)	47	第 92 図	石匙	88
第 51 図	蓋 他	48	第 93 図	石篋	88
第 52 図	縄文時代後期後葉の土器	48	第 94 図	両極石器 (1)	89
第 53 図	粗製土器 (1)	49	第 95 図	両極石器 (2)	90
第 54 図	粗製土器 (2)	50	第 96 図	搔器 (1)	90
第 55 図	粗製土器 (3)	51	第 97 図	搔器 (2)	91
第 56 図	粗製土器 (4)	52	第 98 図	搔器 (3)	92
第 57 図	粗製土器 (5)	53	第 99 図	搔器 (4)	93
第 58 図	粗製土器 (6)	54			

第 100 図	搔器 (5)	94	第 138 図	SP5・6	131
第 101 図	搔器 (6)	95	第 139 図	SS1 出土石器	132
第 102 図	搔器 (7)	96	第 140 図	SU1	133
第 103 図	石核	97	第 141 図	SU1 出土土器 (1)	134
第 104 図	打製石斧 (1)	98	第 142 図	SU1 出土土器 (2)	135
第 105 図	打製石斧 (2)	99	第 143 図	縄文時代中期中葉の土器	136
第 106 図	磨製石斧 (1)	100	第 144 図	縄文時代中期後葉の土器 (1)	137
第 107 図	磨製石斧 (2)	101	第 145 図	縄文時代中期後葉の土器 (2)	138
第 108 図	敲石 (1)	102	第 146 図	縄文時代中期後葉の土器 (3)	139
第 109 図	敲石 (2)	103	第 147 図	縄文時代中期末葉の土器 (1)	140
第 110 図	敲石 (3)	104	第 148 図	縄文時代中期末葉の土器 (2)	141
第 111 図	磨石 (1)	105	第 149 図	縄文時代中期末葉の土器 (3)	142
第 112 図	磨石 (2)	106	第 150 図	縄文時代中期末葉の土器 (4)	143
第 113 図	磨石 (3)・砥石	107	第 151 図	縄文時代中期末葉の土器 (5)	144
第 114 図	凹石	107	第 152 図	縄文時代中期末葉の土器 (6)	145
第 115 図	礫器 (1)	109	第 153 図	縄文時代中期末葉の土器 (7)	146
第 116 図	礫器 (2)	110	第 154 図	縄文時代中期末葉の土器 (8)	147
第 117 図	礫器 (3)	111	第 155 図	縄文時代中期末葉の土器 (9)	148
第 118 図	礫器 (4)	112	第 156 図	縄文時代中期末葉の土器 (10)	149
第 119 図	礫器 (5)	113	第 157 図	縄文時代後期初頭の土器 (1)	150
第 120 図	石皿 (1)	114	第 158 図	縄文時代後期初頭の土器 (2)	151
第 121 図	石皿 (2)	115	第 159 図	縄文時代後期初頭の土器 (3)	152
第 122 図	台石 (1)	116	第 160 図	粗製土器 (1)	153
第 123 図	台石 (2)	117	第 161 図	粗製土器 (2)	154
第 124 図	石棒	118	第 162 図	粗製土器 (3)	155
第 125 図	石剣・石刀	119	第 163 図	粗製土器 (4)	156
第 126 図	石製装身具	119	第 164 図	粗製土器 (5)	157
第 127 図	石製容器	119	第 165 図	粗製土器 (6)	158
第 128 図	石製円盤	120	第 166 図	粗製土器 (7)	159
第 129 図	2 区遺構分布	122	第 167 図	器台・高台	160
第 130 図	2 区グリッド別出土土器重量分布	123	第 168 図	土器底部 (1)	160
第 131 図	2 区土層断面 (A・B・C ライン)	124	第 169 図	土器底部 (2)	161
第 132 図	2 区土層断面 (D・E・F ライン)	125	第 170 図	ミニチュア土器	162
	2 区土層断面説明 (A・B・C・D・E・F ライン)	126	第 171 図	有孔土製品	164
第 133 図	SL6～8	127	第 172 図	耳飾 他	165
第 134 図	SL9～14	128	第 173 図	鐸形土製品	165
第 135 図	SL8・9・11・19 出土石器	129	第 174 図	土版	166
第 136 図	SL15～19	130	第 175 図	有孔棒状土製品	166
第 137 図	SP3・4、SS1	131	第 176 図	土偶 (1)	167
			第 177 図	土偶 (2)	168
			第 178 図	土偶 (3)	169
			第 179 図	土偶 (4)	170

第 180 図	土偶 (5)	171	第 221 図	SK16・17	208
第 181 図	土器片製円盤	172	第 222 図	SK16 出土土器	209
第 182 図	石鏃・石槍	174	第 223 図	SK16 出土石器 (1)	209
第 183 図	石錐・石匙・石篋	175	第 224 図	SK16 出土石器 (2)、	
第 184 図	搔器・石鑿	176		SK17 出土石器	210
第 185 図	磨製石斧 (1)	177	第 225 図	SK18	211
第 186 図	磨製石斧 (2)・砥石	178	第 226 図	SK19	211
第 187 図	敲石	179	第 227 図	SK18 出土土器	211
第 188 図	石皿 (1)	180	第 228 図	SK18 出土石器 (1)	212
第 189 図	石皿 (2)	181	第 229 図	SK18 出土石器 (2)	213
第 190 図	石皿 (3)	182	第 230 図	SL20	213
第 191 図	石皿 (4)・石棒 (1)	183	第 231 図	SL20 出土土器	213
第 192 図	石棒 (2)	184	第 232 図	SL20 出土石器	214
第 193 図	石刀・石劍・異形石器・		第 233 図	SF1	214
	石製円盤・有孔装飾品	186	第 234 図	SP7 ~ 12	216
第 194 図	装飾品・有孔軽石・釣針	187	第 235 図	SP13 ~ 23	217
第 195 図	骨角器	188	第 236 図	SP24 ~ 35	218
第 196 図	3 区遺構分布	190	第 237 図	SP36 ~ 47	219
第 197 図	3 区北半部遺構分布	191	第 238 図	SP48 ~ 59	220
第 198 図	3 区南半部遺構分布	192	第 239 図	SP60 ~ 70	221
第 199 図	SI3 出土土器	193	第 240 図	SP71 ~ 82	222
第 200 図	SI3 出土石器 (1)	193	第 241 図	SP83 ~ 95	223
第 201 図	SI3 出土石器 (2)	194	第 242 図	SP96 ~ 102	224
第 202 図	SI3	195	第 243 図	SP103 ~ 115	225
第 203 図	SI3 土層断面	196	第 244 図	SP116 ~ 126	226
第 204 図	SI3 炉	197	第 245 図	SP127 ~ 138	227
第 205 図	SI3 柱穴 (1)	198	第 246 図	SP139 ~ 151	228
第 206 図	SI3 柱穴 (2)	199	第 247 図	SP152 ~ 161	229
第 207 図	SI3 柱穴 (3)	200	第 248 図	SP162 ~ 170	230
第 208 図	SK4 ~ 7	202	第 249 図	SP14・58・67・70・76・90	
第 209 図	SK7 出土土器	203		出土土器	231
第 210 図	SK7 出土石器 (1)	203	第 250 図	SP11・68・95・129	
第 211 図	SK7 出土石器 (2)	204		出土石器	231
第 212 図	SK8 ~ 10	205	第 251 図	土製垂飾品	232
第 213 図	SK10 出土土器	205	第 252 図	土器片製円盤	233
第 214 図	SK10 出土石器・石製円盤	205	第 253 図	遺構外出土石器	234
第 215 図	SK11	206	第 254 図	遺構外出土石製品	235
第 216 図	SK11 出土石器 (1)	206			
第 217 図	SK11 出土石器 (2)	207			
第 218 図	SK12 ~ 15	207			
第 219 図	SK14・15 出土土器	208			
第 220 図	SK14 出土石器	208			

表目次

表 1 平成 24～27 年度 堂の前貝塚調査組織表・・・・・・・・・・2	表 8 堂の前貝塚出土哺乳類・鳥類・爬虫類・ 両生類集計表・・・・・・・・・・248
表 2 堂の前貝塚と周辺の遺跡・・・・・・・・・・5	表 9 堂の前貝塚 2 区放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 補正值)・・・・・・・・・・251
表 3 3 区小穴計測表 (1)・・・・・・・・・・215	表 10 堂の前貝塚 2 区放射性炭素年代測定結果 ($\delta^{13}\text{C}$ 未補正值、暦年校正用 14C 年代、校正年代) ・・・・・・・・・・251
表 4 3 区小穴計測表 (2)・・・・・・・・・・216	
表 5 堂の前貝塚出土動物遺存体種名表・・・・246	
表 6 堂の前貝塚出土貝類集計表・・・・・・・・246	
表 7 堂の前貝塚出土魚類集計表・・・・・・・・247	

図表目次

図表 1 1 区出土土器片製円盤の属性分布・・・・83	図表 5 魚類組成・・・・・・・・・・241
図表 2 2 区出土土器片製円盤の属性分布・・・・173	図表 6 哺乳類組成・・・・・・・・・・242
図表 3 3 区出土土器片製円盤の属性分布・・・・233	図表 7 焼骨の割合・・・・・・・・・・243
図表 4 貝類組成・・・・・・・・・・240	図表 8 動物遺存体の割合・・・・・・・・・・243

写真目次

写真 1 現在の堂の前貝塚・・・・・・・・・・1	写真 6 赤彩土器片 (1)・・・・・・・・・・237
写真 2 2 区調査状況・・・・・・・・・・121	写真 7 赤彩土器片 (2)・・・・・・・・・・238
写真 3 岩偶・・・・・・・・・・188	写真 8 小形赤彩土器・・・・・・・・・・238
写真 4 3 区表土掘削状況・・・・・・・・・・189	写真 9 珪化木・・・・・・・・・・238
写真 5 赤色顔料塊・・・・・・・・・・236	

図版目次

図版 1 堂の前貝塚の位置	図版 17 3 区調査状況 (9)
図版 2 1 区調査状況 (1)	図版 18 3 区調査状況 (10)
図版 3 1 区調査状況 (2)	図版 19 3 区調査状況 (11)
図版 4 1 区調査状況 (3)	図版 20 現地説明会実施状況
図版 5 2 区調査状況 (1)	図版 21 1 区縄文土器 (1)
図版 6 2 区調査状況 (2)	図版 22 1 区縄文土器 (2)
図版 7 2 区調査状況 (3)	図版 23 1 区縄文土器 (3)
図版 8 2 区調査状況 (4)	図版 24 1 区縄文土器 (4)
図版 9 3 区調査状況 (1)	図版 25 1 区縄文土器 (5)
図版 10 3 区調査状況 (2)	図版 26 1 区縄文土器 (6)
図版 11 3 区調査状況 (3)	図版 27 1 区縄文土器 (7)
図版 12 3 区調査状況 (4)	図版 28 1 区縄文土器 (8)
図版 13 3 区調査状況 (5)	図版 29 1 区縄文土器 (9)
図版 14 3 区調査状況 (6)	図版 30 1 区縄文土器 (10)・ミニチュア土器
図版 15 3 区調査状況 (7)	図版 31 1 区土製品・土偶
図版 16 3 区調査状況 (8)	図版 32 1 区土器片製円盤

図版 33	1 区石器 (1)	図版 56	2 区縄文土器 (9)
図版 34	1 区石器 (2)	図版 57	2 区縄文土器 (10)
図版 35	1 区石器 (3)	図版 58	2 区縄文土器 (11)
図版 36	1 区石器 (4)	図版 59	2 区縄文土器 (12)
図版 37	1 区石器 (5)	図版 60	2 区縄文土器 (13)
図版 38	1 区石器 (6)	図版 61	2 区縄文土器 (14)・ミニチュア土器
図版 39	1 区石器 (7)	図版 62	2 区土製品
図版 40	1 区石器 (8)	図版 63	2 区土偶 (1)
図版 41	1 区石器 (9)	図版 64	2 区土偶 (2)・土器片製円盤
図版 42	1 区石器 (10)	図版 65	2 区石器 (1)
図版 43	1 区石器 (11)	図版 66	2 区石器 (2)
図版 44	1 区石器 (12)	図版 67	2 区石器 (3)
図版 45	1 区石器 (13)	図版 68	2 区石器 (4)
図版 46	1 区石器 (14)	図版 69	2 区石器 (5)・骨角器
図版 47	1 区石器 (15)	図版 70	3 区土製品・土器片製円盤
図版 48	2 区縄文土器 (1)	図版 71	3 区石器 (1)
図版 49	2 区縄文土器 (2)	図版 72	3 区石器 (2)
図版 50	2 区縄文土器 (3)	図版 73	3 区石器 (3)
図版 51	2 区縄文土器 (4)	図版 74	3 区石器 (4)
図版 52	2 区縄文土器 (5)	図版 75	3 区石器 (5)
図版 53	2 区縄文土器 (6)	図版 76	3 区石器 (6)
図版 54	2 区縄文土器 (7)	図版 77	1～3 区出土動物遺存体 (1)
図版 55	2 区縄文土器 (8)	図版 78	1～3 区出土動物遺存体 (2)

添付 CD 所収内容

堂の前貝塚 1～3 区 遺構名変遷表

石器属性表

土器属性表

土偶・土製品属性表

土器片製円盤属性表

骨角器属性表

動物遺存体一覧表

*すべての表を XLS・CSV・TXT 形式で記録した。

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経緯(第1図 表1)

堂の前貝塚の旧状は、南の広田湾に向け緩やかに傾斜する丘陵に果樹畑が広がっていた。

過去の発掘調査は、昭和46年の学術調査を端緒に、平成8・9年には農道整備事業に伴った事前発掘調査が実施された。

その後平成23～26年にかけて、果樹畑を宅地へと造成するため文化財保護法93条に基づく届出が、相次いで市教育委員会に提出された。届出の多くは、東日本大地震が発生源となった津波による被害を受けた個人が、高台へ専用住宅を再建するという事業であった。

事業計画地は堂の前貝塚の範囲内と周辺であり、市教育委員会は事業ごとに現地踏査・試掘調査等を行い、事業地内に所在する埋蔵文化財について適切な処置を講じた。

平成23～26年にかけて、堂の前貝塚周辺で計画された事業は25件、そのうち埋蔵文化財について本調査が必要と判断されたのは10件である。

市教育委員会は、それぞれの事業地を発掘調査区域に分け、事業届出順に堂の前貝塚発掘調査1～10区と呼称して調査を実施した。

調査原因となる開発行為が、住居と暮らしの再建という切迫した要因によるもので、必然的に現地調査は短期間を望まれるものであった。市教育委員会は、文化庁・県教育委員会の指導と協力をうけ、全国の公共団体の支援により派遣された埋蔵文化財担当職員を調査員として発掘調査を完了した。

第2節 整理の経過

市教育委員会は、1～10区の調査区を主として担当した各調査員が、任期が限られた全国の公共団体あるいは公的機関から派遣された職員であることを考慮し、各調査区の出土遺物の水洗・注記などの基本的整理と作成図面・写真類の整理と引き継ぎを優先して整理作業を遂行した。

発掘調査および基本的整理の進行に従って、各調査区間に出土遺物量に大きな格差があることが明らかとなり、特に1・2・7区からの出土量は膨大であった。

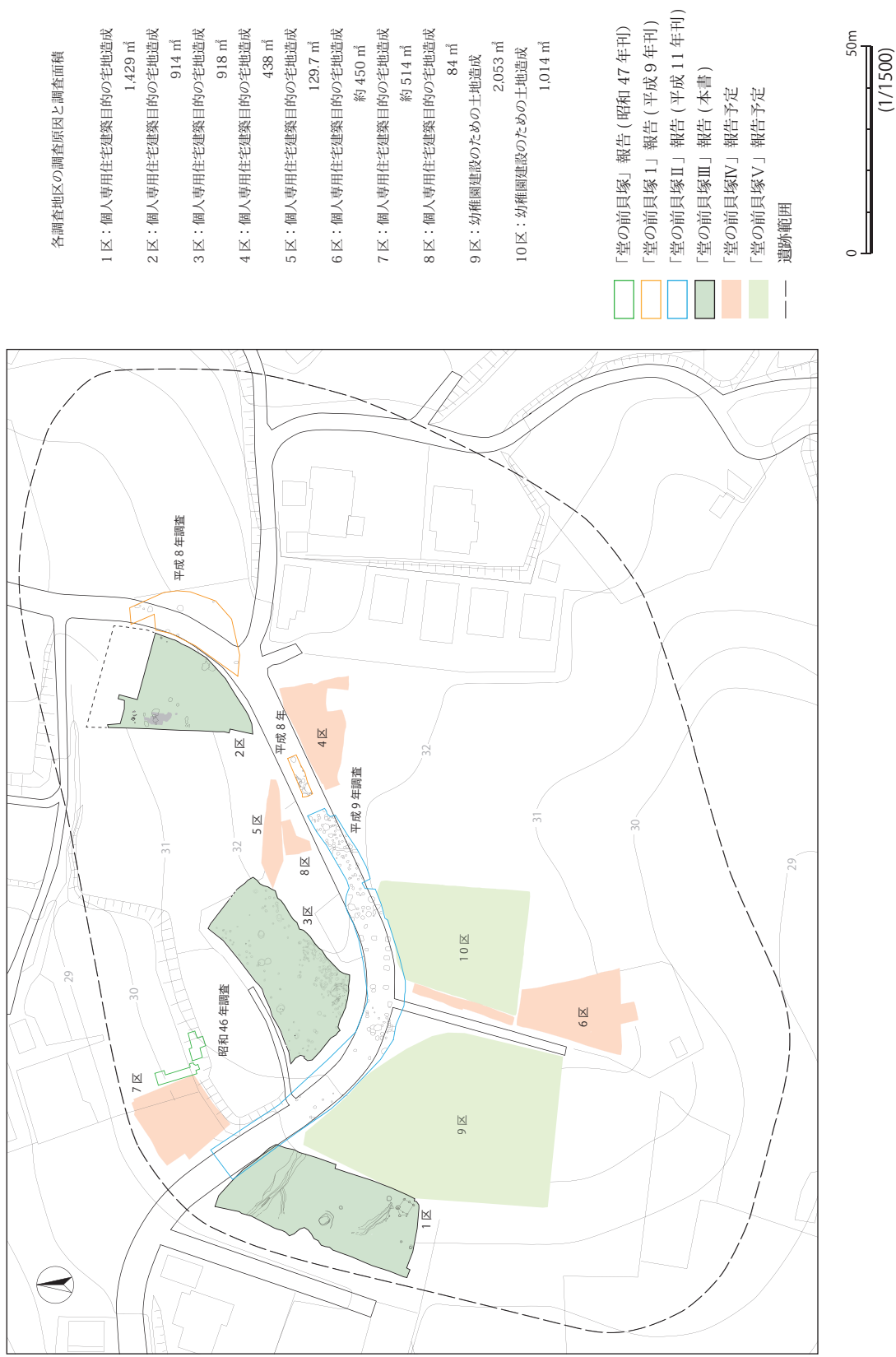
相次ぎ発生する発掘調査への対応に追われ十分な整理期間を確保できないことから、平成24年度の市教育委員会の体制の下での早期の調査報告書刊行は困難と判断せざるを得ず、市教育委員会は、基本的整理が完了して遺物数量の正確な把握が済み、市登録台帳に登録した遺物の整理を外部委託とすることとした。



写真1 現在の堂の前貝塚(写真中央の調査区域を北東から望む 平成30年2月撮影)

表1 平成24～27年度堂の前貝塚調査組織表

調査年度	調査区番号	地番 (字堂の前)	調査面積 (㎡)	調査期間 始 終	調査組織				
					調査担当者 (所属・派遣元)	調査員 (派遣元)	県教委調査員		事務 職名 (所属・派遣元)
							調査員 (派遣元)	教育長	
24	1	121-1、122-1	1,429	4月26日 8月21日	遠藤勝博 (市教委嘱託)		宇田川浩一 (秋田県) 長谷部善一 (熊本県)	山田市雄	生涯学習課長 金 賢治 副主幹 岩淵 計 (岩手県) 課長補佐兼係長 伊藤真基 主任主事 河北直知 (京都市) 学芸員 曳地隆元 (平成25年1月から) 発掘調査員 遠藤優子 (市教委嘱託9月まで)
	2	134-2・6	914	8月20日 12月7日					
	3	136-6・10	918	7月18日 11月19日					
25	4	139-1	438	4月23日 6月10日	主査 葛西智義 (深川市)		山田市雄	生涯学習課長 大久保裕明 課長補佐 伊藤真基 係長 吉田幸喜 主事 桐木 亮 (京都市) 学芸員 曳地隆元	
	5	139-4の一部	129.7	5月7日 6月5日	主任 安井宣也 (奈良市)				主任主事 阿部泰之 (福岡市)
	6	138-1の一部 138-3	約450	6月12日 9月17日					
	7	133-1	約514	6月13日 10月3日	主査 葛西智義 (深川市)				
	8	139-4の一部	84	9月18日	主任 安井宣也 (奈良市)				
26	9	136-1	2,053	8月21日 平成27年 3月13日	主査 加藤隆也 (福岡市)	鳥居達人 村本周三 (北海道) 浅野晴樹 (埼玉県) 今福利恵 (山梨県) 上床 真 (鹿児島県) 中澤寛将 (青森県)	山田市雄	生涯学習課長 大久保裕明 課長補佐 高橋一成 係長 吉田志真 主任主事 桐木 亮 (京都市) 学芸員 曳地隆元	
	10	138-1の一部	820.7						
27	10	138-1の一部	193.3	4月27日 6月11日	主査 瀧本正志 (福岡市)		山田市雄	生涯学習課長 堺 伸也 課長補佐 高橋一成 係長 吉田志真 主任 藤元剛史 (京都市) 学芸員 曳地隆元	



第1図 堂の前貝塚調査地点集成

1～3区の基本的整理が完了した平成25年度には、出土縄文土器の分類・接合・復元・実測・トレース作業を1区分を北上市埋蔵文化財センターに、2区分を花巻市総合文化財センターにそれぞれ委託した。

石器・土製品は市の台帳に登載後、1～3区出土石器の実測を平成24年度と平成29年度に分け株式会社ラングに、1～3区出土土製品の実測を平成25年度に花巻市総合文化財センターに委託した。

また、2区調査中に採取した貝層サンプリングの水洗別と動物遺存体の分析・同定は、平成25年度に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に委託した。2区出土炭化材の年代測定は、株式会社加速器分析研究所に委託した。

平成25年度に調査を実施した4～7区の基本的整理は同年度中に完了し、7区の出土土器を二分して、平成26年度に花巻市総合文化財センターと平成26・27年度に北上市埋蔵文化財センターへ、それぞれの分類・接合・実測・トレース作業を委託した。また、調査中に採取した炭化材の年代測定と花粉分析は、平成25年度に株式会社加速器分析研究所と株式会社古環境研究所に委託した。7区から採取した貝層サンプリングの水洗別と動物遺存体の分析・同定は、平成28年度に独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所に委託した。

平成26年度には、9区から検出された大形掘立柱建物の構築年代を推定するため、同遺構から出土した炭化材の年代測定を株式会社加速器分析研究所に委託している。

さらに市教育委員会は、堂の前貝塚内での復興事業に伴う発掘調査が終息し、1～10調査区の基本的整理と各委託事業が完了した平成27年度には、堂の前貝塚発掘調査で得られた成果を、調査年度ごとに分冊して刊行するため、複数年度にわたる事業計画を策定した。

市教育委員会は、平成28年度から計画に沿って体制を整え、平成31年度にすべての報告書を刊行することを目指し事業を開始した。

報告書に所収した発掘調査成果は、各調査者が作成した調査概要報告書・遺構カード・第2原図・調査日誌・調査写真等を基に、各委託成果品を構成し作成した。

各調査区の報告書記載内容については、可能な限り粗密の無いように統一することを心掛けたが、各調査区間で掲載遺物の抽出、土層説明の記述、挿図表現の細部において相違する部分も生じている。

調査から整理作業までの一貫した標準を設定することが困難な状況であったためである。ご容赦いただきたい。

なお縄文土器片の拓本実測・掲載遺物の写真撮影は、陸前高田市教育委員会が行った。

報告書は、挿図・図版作成にアドビシステムズ社製アプリケーション PhotoShop CS6・IllustratorCS6を、編集・構成に InDesign CS6 を使用した。

報告書に掲載した出土遺物は、資料検索の利便性を考慮し挿図・図版毎に分割して収納した。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境 (第2・3図 図版1)

堂の前貝塚は、岩手県陸前高田市米崎町字堂の前地内に所在し、市中心部から直線距離で東北東に約4km、BRTのJR脇ノ沢駅から南南東に約720mに位置する。

陸前高田市は、岩手県の南東端に位置し、北は気仙郡住田町、東は大船渡市、西は一関市大東町、南は宮城県気仙沼市と接している。南に広がる広田湾を中心として、東に箱根山、西に笹長根山、北に氷上山などの山々を配しており、箱根山の南には仁田山と大森山を擁する広田半島が広がっている。

堂の前貝塚が所在する米崎町は、大船渡市と隣接する市域の東端に位置し、箱根山の北から南東までの地域を、山の裾を囲むように位置している。遺跡は、箱根山から南に延びている花崗岩が形成する丘陵上の先端にあり、標高は20～30m、南面は海食崖の急傾斜となっており、さらに南に約80mで現在の海岸線となる。遺跡北側から西にかけては緩斜面となっており、この緩斜面下を沿うように勝木田川が流れている。

川を挟んだ北側の低地は水田として利用されており、過去の試掘確認調査等による調査結果では、地表下40～60cmで礫層となり包含層や遺構・遺物などは確認されていない。東日本大震災以前はリンゴなどの果樹畑の中に宅地が散在する状況であったが、震災後は被災者の自力再建に伴う宅地化が進んでいる。

第2節 歴史的環境 (第2・3図 表2 図版1)

陸前高田市には平成29年4月現在267か所の周知の埋蔵文化財包蔵地が確認されており、当遺跡の周辺には、縄文時代の遺跡を主要とする70か所の遺跡(表2・第2図)が所在する。

堂の前貝塚周辺における貝塚としては、海をはさんで西の広田湾に突出した米ヶ崎東側に米ヶ崎遺跡(20)、南の矢の浦漁港を望む傾斜地に藍胎漆器(平成11年調査、未報告)などを出土した瀬沢貝塚(48)が所在する。

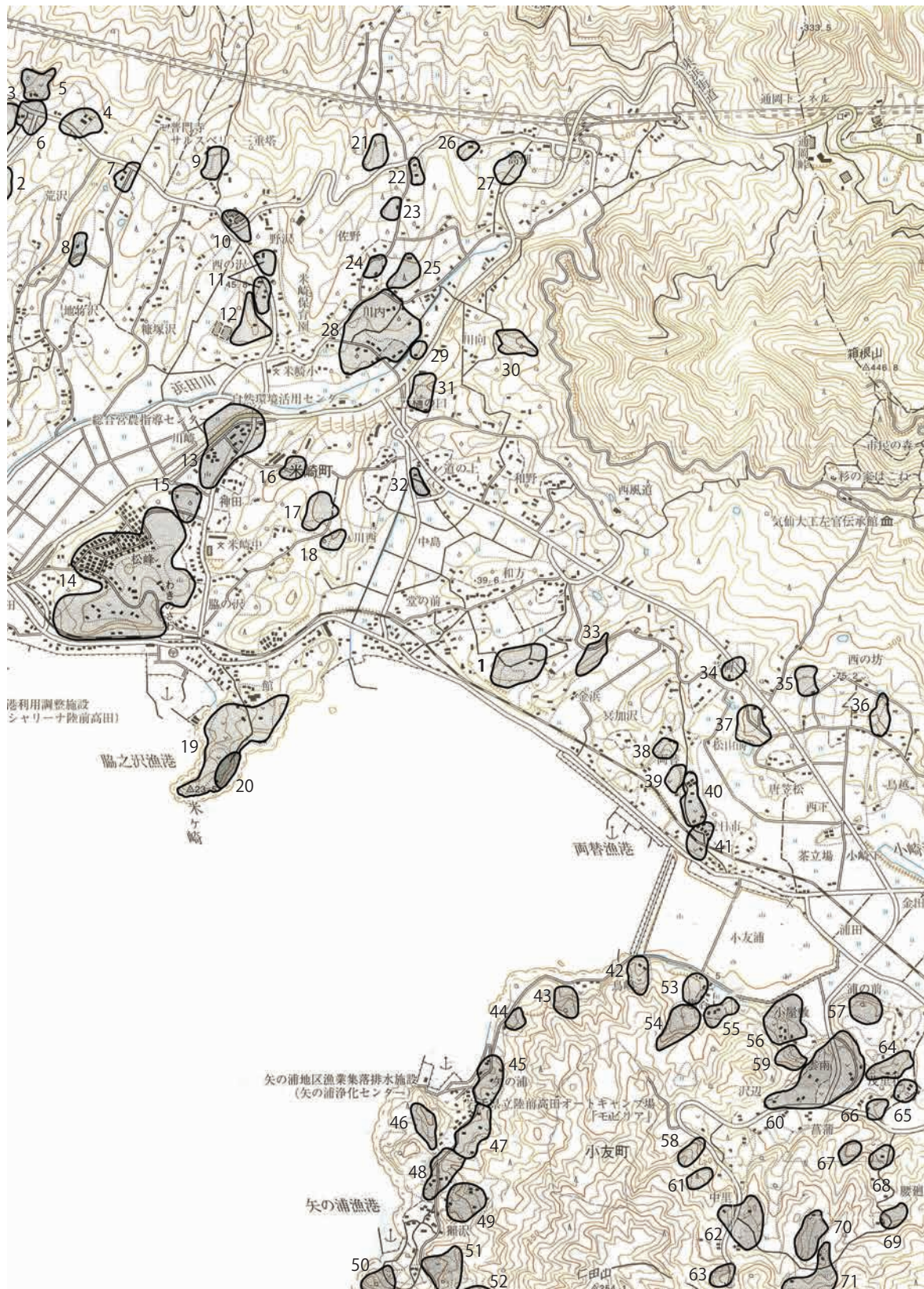
平成2年の調査で弓矢状配石遺構が検出され注目された、縄文時代後期初頭の土器型式「門前式」の標式遺跡である門前貝塚は、本遺跡の南東3kmに所在する。

また周辺の縄文時代集落跡は、川内遺跡(28)、雲南遺跡(60)などの遺跡が挙げられる。

川内遺跡(28)では、3.3×2.3mの長方形を呈する竪穴状遺構1軒を検出しているが、炉・柱穴などは確

No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	No.	遺跡名	種別	遺構・遺物	No.	遺跡名	種別	遺構・遺物
1	堂の前貝塚	集落跡・貝塚	竪穴建物・土坑・焼土跡 縄文土器・石器・土偶	24	佐野Ⅳ	散布地	土師器	48	瀬沢貝塚	貝塚	縄文土器・骨角器・石斧・石棒・動物骨(魚・獣類)
				25	佐野Ⅴ	散布地	土師器	49	瀬沢Ⅰ	散布地	縄文土器
2	豆の通	金炊跡	土師器	26	高畑Ⅰ	散布地	土師器・須恵器	50	瀬沢Ⅱ	散布地	土師器
3	荒沢Ⅰ	散布地	土師器	27	高畑Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)	51	瀬沢Ⅲ	散布地	内黒土器
4	荒沢Ⅱ	散布地	縄文土器(後期)	28	川内	集落跡	縄文土器・小剥片・土師器・須恵器	52	長茂館(跳館)	散布地	城館跡
5	大隅Ⅰ	散布地	土師器	29	川向	散布地	縄文土器	53	塩谷Ⅰ	散布地	
6	大隅Ⅱ	散布地	縄文土器・土師器	30	一起館(一騎館)	城館跡	二郭	54	塩谷Ⅱ	散布地	土師器
7	地竹沢Ⅰ	散布地	縄文土器・土師器・剥片	31	中陣(高木城・日高城)	城館跡	平場・空堀	55	塩谷Ⅲ	散布地	土師器
8	地竹沢Ⅱ	散布地	土師器	32	中島Ⅱ	散布地		56	小屋敷	散布地	石核・剥片・縄文土器(前・中期)
9	野沢Ⅰ	散布地	土師器・須恵器	33	金浜	散布地	土師器	57	浦の前	散布地	石核・剥片
10	野沢Ⅱ	散布地	土師器	34	岩井沢	集落跡	土師器・須恵器・石鏃・剥片・煎手刀	58	沢辺Ⅰ	散布地	縄文土器
11	野沢Ⅲ	散布地	土師器・須恵器	35	西之坊	散布地	剥片・縄文土器(後期)・土師器	59	沢辺Ⅱ	散布地	不明土器・石鏃
12	中山館	城館跡	空堀	36	中西Ⅰ	散布地	土師器	60	雲南	集落跡	縄文土器・石鏃・石匙・石斧・土師器
13	川崎	散布地		37	松山前	集落跡	土師器・時期不明土器	61	中里Ⅰ	散布地	土師器
14	松峰Ⅰ	散布地	土師器	38	高替Ⅰ	散布地	かまど跡・土師器・時期不明土器	62	中里Ⅱ	散布地	縄文土器
15	松峰Ⅱ	散布地	石器	39	高替Ⅱ	散布地	剥片	63	中里Ⅲ	集落跡	
16	神田	散布地	土師器	40	三日月Ⅱ	散布地	縄文土器	64	森崎Ⅰ	散布地	土師器
17	脇沢館(島崎城)	城館跡	主郭・二の郭・空堀	41	三日月Ⅰ	集落跡	縄文土器・土師器	65	森崎Ⅱ	散布地	土師器
18	川西	散布地	剥片	42	鳥嶋Ⅰ	散布地	土師器	66	森崎Ⅲ	散布地	土師器・須恵器
19	米崎城(浜田城)	城館跡	腰廊・空堀・土塁	43	鳥嶋Ⅱ	散布地	土師器	67	腰廻Ⅰ	散布地	土師器
20	米ヶ崎	貝塚	縄文土器・貝殻・土師器	44	鳥嶋Ⅲ	散布地		68	腰廻Ⅱ	散布地	土師器
21	佐野Ⅰ	散布地	縄文土器	45	矢之浦Ⅰ	散布地	縄文土器(中期・後期)	69	腰廻Ⅲ	散布地	土師器
22	佐野Ⅱ	散布地	土師器・剥片	46	矢之浦Ⅱ	散布地	土師器	70	腰廻Ⅳ	散布地	
23	佐野Ⅲ	散布地	土師器	47	矢之浦Ⅲ	散布地	縄文土器・動物骨・貝殻	71	腰廻Ⅴ	散布地	縄文土器

表2 堂の前貝塚と周辺の遺跡

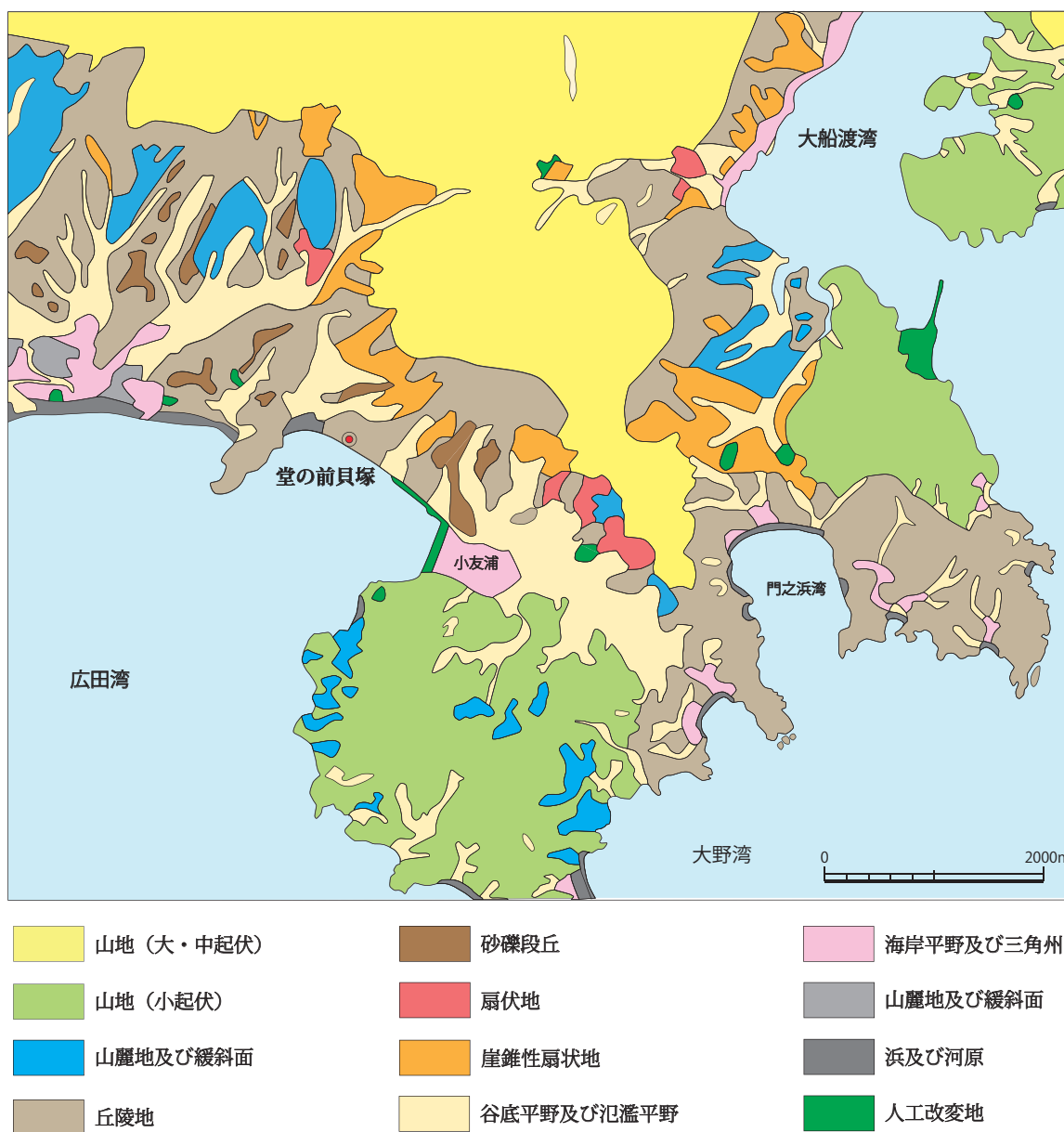


第2図 堂の前貝塚と周辺の遺跡

認できず、伴出した土器は小破片で縄文時代中～晩期に比定されるが、構築時期は特定されていない。

雲南遺跡 (60) では、多くの土器・石器、魚骨・動物骨を含む包含層下から竪穴建物3軒を検出した。構築時期は、いずれも縄文時代前期後半と推定されている。他に土坑や焼土跡も多数検出され、縄文時代前期後半の大規模な集落遺跡であると推定される。

周辺には、昭和36年に開墾作業中に発見され、市指定有形文化財となっている蕨手刀が出土した岩井沢遺跡 (34)、平成16年に調査され奈良時代の竪穴建物8軒が検出された松山前遺跡 (37) 等の奈良・平安時代の遺跡も所在する。



第3図 堂の前貝塚と周辺の地形

第三章 調査成果

第1節 1区の調査

1 調査の経過と方法

平成23年6月、堂の前貝塚の範囲内である陸前高田市米崎町字堂の前121-1、122-1において宅地造成工事が計画され、事業者から文化財保護法93条第1項に基づき「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。市教育委員会は、直ちに県教育委員会へ進達を行い工事着手前に発掘調査を実施すべき旨の指示を受けた。指示に基づき事業者と協議し、平成24年4月26日から調査に着手した。

調査は、1～3区調査対象範囲を同一グリッド・システムで調査する事を考慮し、調査区内の任意の2点を結ぶ基軸線(EAグリッド・ライン)を設定し、基軸線から5m毎に東にEB, EC・・・、西にWZ, WY,・・・とした。南北方向は、基点を20とし、5m毎に北に19, 18・・・、南に21, 22・・・とした。グリッド名称は、東西と南北の軸線の北西交点名とした。

次に、調査区内の層序把握のため、グリッドラインに沿ってトレンチ発掘を先行して行い、縄文時代の遺物包含層が堆積することを確認した。トレンチ発掘で把握した果樹畑耕作によって攪乱を受けている表土を重機で除去し、縄文時代中・後期の遺物包含層および遺構を検出した。

調査中に検出した遺構は、文化庁『発掘調査のてびき』の遺構略号記載に準拠して名称と番号を付した。遺構実測は、グリッドラインを基準に遣り方測量を行い縮尺は20分の1と10分の1を基本とした。記録写真は、35mmフィルムカメラでモノクロームとリバーサルの2種を撮影した。補助的に35mmデジタルカメラも使用した。出土遺物は、グリッド・遺構・層位ごとに採取した。さらに調査過程によっては、グリッド内を四分分割し北西小区をa、北東小区をb、南西小区をc、南東小区をdとして区分し採取した。現地での調査が終了したのは平成24年8月21日であった。

2 遺構の概要と基本層序(第4～8図 図版2～4)

1区の遺構は、竪穴建物跡2棟・掘立柱建物跡1棟・土坑3基・焼土跡5基・小穴2基を数え、他に自然流路3基を検出した。

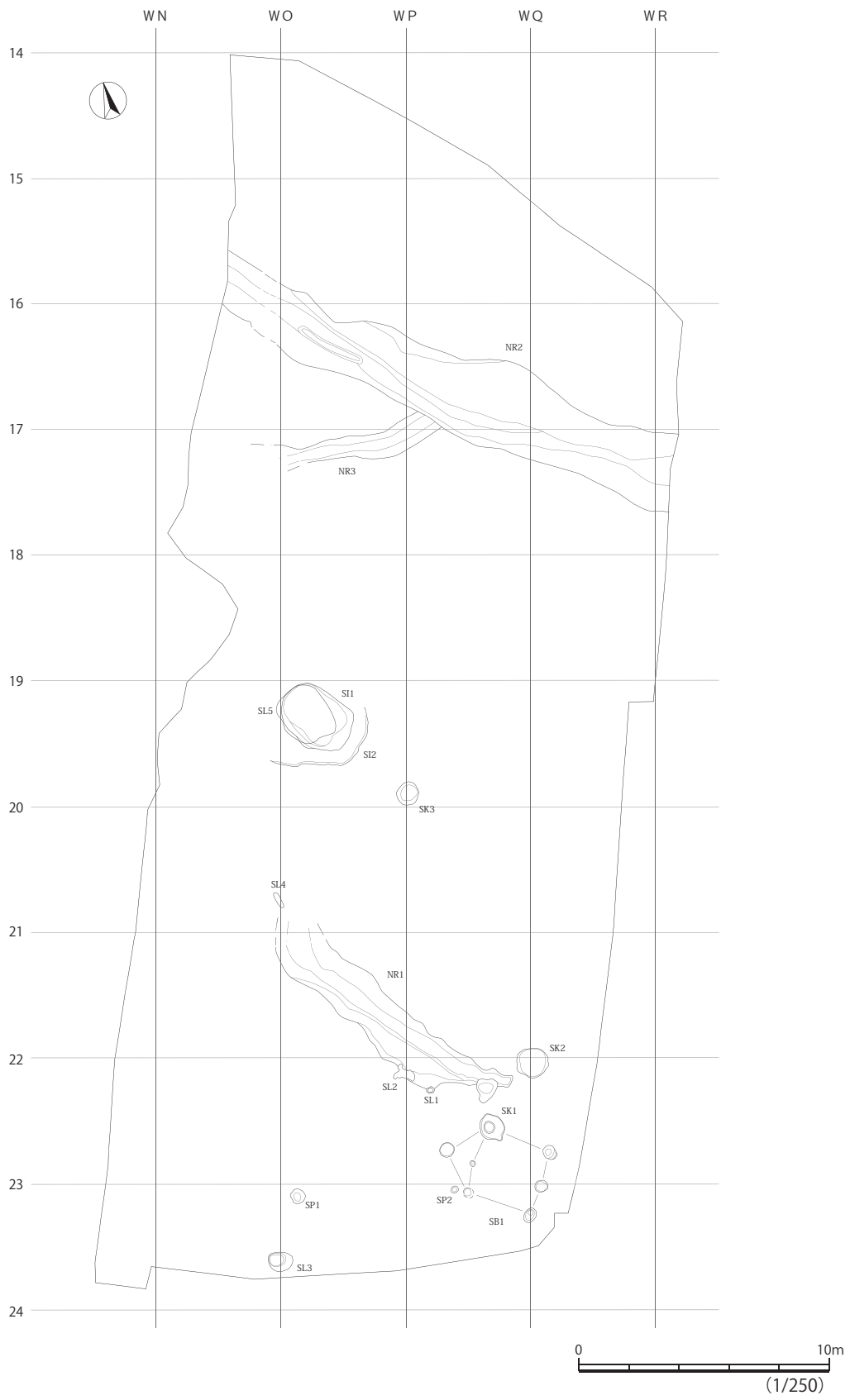
調査区は、標高30m～29mの緩傾斜地で、南西に向け傾斜している。地表から遺構確認面までの深さは約1mを測る。調査区内の堆積層は、表土層である近・現代の果樹畑耕作土を除去すると、縄文土器片を多量に包含した、黒褐～暗褐色土を基調とする層群が堆積している。これらの層群には大小の礫が無数に混じり、地形傾斜に沿って堆積する。調査区の一部では、果樹畑造成に伴った客土や攪乱が見受けられる。

表土下の層序に特に目立った乱れはなく、ほぼプライマリーな状態である。しかし、土層の不連続や消失は随所に見られ、斜面を流下する水の影響を大きく受けているようである。調査区全体に多量に分布する大小の礫も、角の取れた円礫の形状を呈しており、大半が流水等により摩耗した転石と判断される。

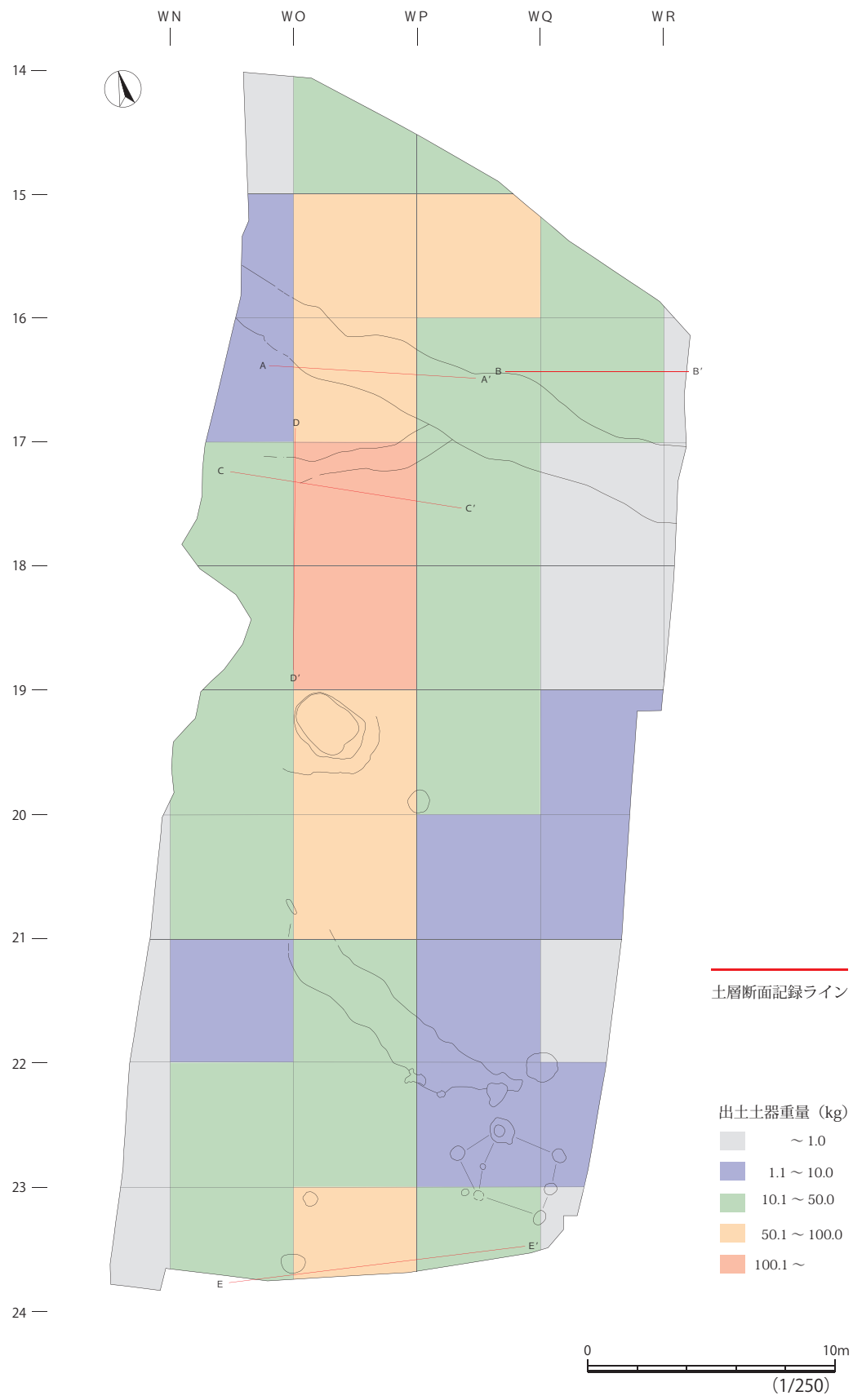
調査時の記録写真では土坑底面や焼土跡周辺には、人為的な配置をうかがわせる礫群も見受けられるが、自然堆積した多数の礫の中での可能性を指摘するにとどまっている。

調査区を通した堆積土の観察では、斜面の一部を削平し平場を造成している可能性も考慮されたが、遺構として認定するには至らなかった。

調査区グリッド毎の出土土器片の重量分布は、中央部に多く南東側では少ない。特にSI1・2竪穴建物周辺に土器片の集中を指摘できる。



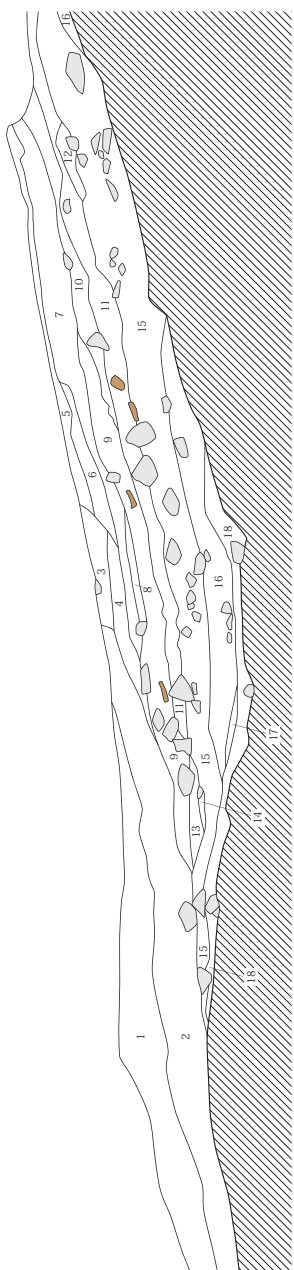
第4図 1区遺構分布



第5図 1区グリッド別出土土器重量分布

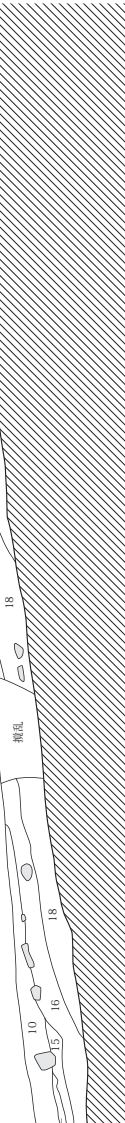
— A' —

A — 28.00m



— B' —

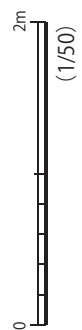
B — 28.00m



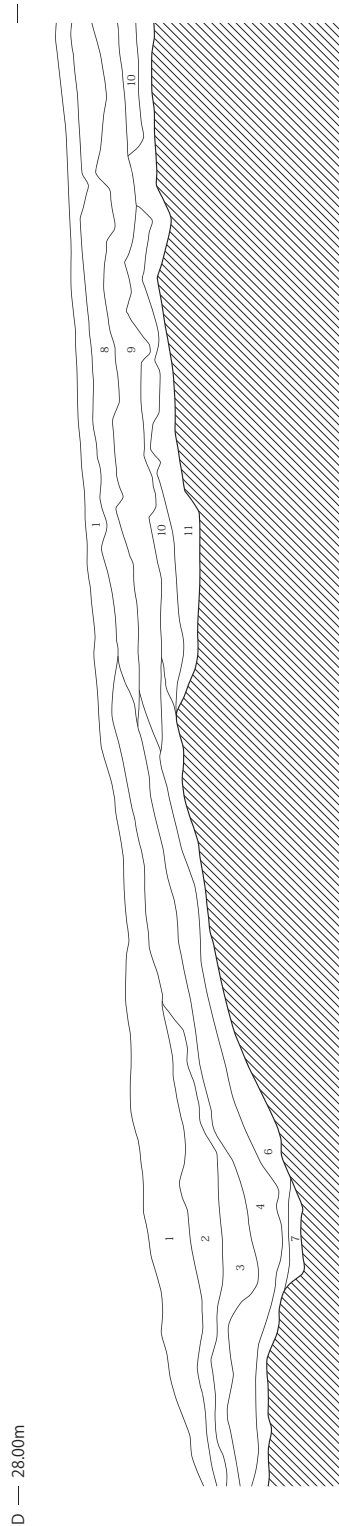
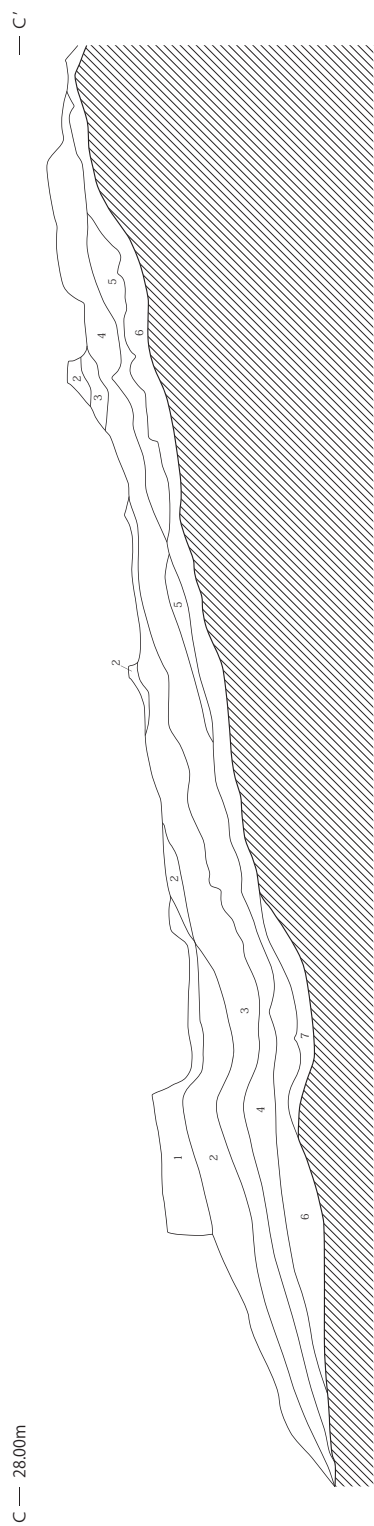
- 1層 2.5X3/1 砂礫を全体に含み硬く締まる 縄文土器片、小礫を多く含む（客土の可能性有）
- 2層 10YR4/2 主体となる土は微細で地形傾斜に沿った堆積が顕著である 層の下部ほど硬く締まり、締まる傾向がある 小礫が層の下部によく見られる 縄文後期土器片を多く含む
- 3層 10YR3/2 小礫、焼土、炭化物を粘状に層中に片断なく含む 磨滅した縄文後期土器片を含む
- 4層 10YR4/2 3層より小礫の含有は少なく砂粒を多く含む 粒状に附れた土器片、焼土を含む
- 5層 10YR3/1 小礫、砂粒を多く含む 磨滅した縄文土器片を少量含む
- 6層 10YR2/2 小礫、砂粒を多く含む 縄文後期「前式土器」深鉢、口縁部を包含する
- 7層 10YR3/2 小礫、砂粒を多く含み硬く締まる 可塑性の高い粘質土
- 8層 10YR4/2 小礫、砂粒を多く含む 7層に比して可塑性は低い
- 9層 10YR3/3 径5～10cmの礫を含む 可塑性は高い
- 10層 10YR3/2 径5～10cmの礫を含む 可塑性は高い
- 11層 10YR2/3 径5～10cmの礫を含む 可塑性は高い
- 12層 10YR3/3 径5～10cmの礫を含む 可塑性は高い
- 13層 10YR4/3 自然流路の最下床にあたる 流水による粘質土の堆積が見られる
- 14層 10YR3/1 10～15cm程度の丸礫、角礫を多く含む粘質土 層間に砂粒層を薄く含む 遺物少ない
- 15層 10YR2/2 10～15cm程度の丸礫、角礫を多く含む粘質土 層間に砂粒層を薄く含む 遺物少ない
- 16層 10YR3/1 10～15cm程度の丸礫、角礫を多く含む粘質土 層間に砂粒層を薄く含む 遺物少ない
- 17層 10YR3/2 10～15cm程度の丸礫、角礫を多く含む粘質土 層間に砂粒層を薄く含む 遺物少ない
- 18層 10YR3/2 地山との混土層 砂粒を多く含む 5～10cmの礫を地山に認める

地形傾斜に沿った堆積が見られる、ラミナ状堆積を示している
主に磨滅した縄文後期初期の遺物を多く含む

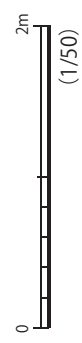
多量の縄文時代中期後葉～後期前葉の遺物を包含する。



第6図 1区A・Bライン土層断面

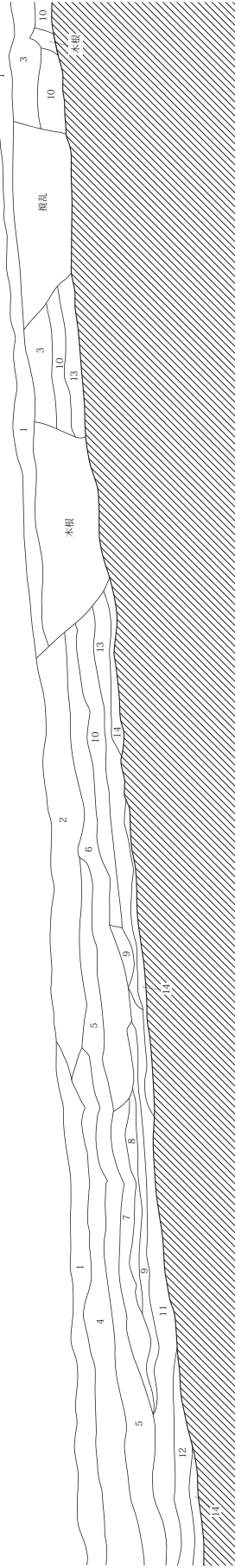


- | | | | | | | |
|-----|-------------------|--------|-----|------|----------------------------|-------------------|
| 1層 | 10YR3/2 ~ 2.5Y3/1 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性弱 | 地山由来の礫φ10 ~ 100㎜ 5 ~ 7%を含む | 遺物を多く含む |
| 2層 | 10YR2/1 ~ 2.5Y2/1 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性弱 | 地山由来の礫φ10 ~ 100㎜ 1 ~ 3%を含む | 遺物を多く含む |
| 3層 | 10YR2/1 ~ 2/2 | 亜角塊状壤土 | 高密 | 可塑性弱 | 地山由来の礫φ10 ~ 200㎜ 30%含む | 遺物を多く含む |
| 4層 | 10YR2/1 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性弱 | 6層に比して粗しよう | 遺物を多く含む |
| 5層 | 10YR3/2 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性弱 | 地山由来の礫φ10 ~ 200㎜ 50%を含む | 遺物を多く含む |
| 6層 | 10YR3/2 ~ 2.5Y3/2 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性有 | 地山由来の礫φ10 ~ 30㎜ 3 ~ 5%を含む | 1・2層の間層で礫が少なく土が多い |
| 7層 | 10YR4/2 ~ 2.5Y4/3 | 亜角塊状壤土 | 密 | 可塑性有 | 地山由来の礫φ10 ~ 100㎜ 30%を含む | 遺物を多く含む |
| 8層 | 10YR2/1 ~ 2/2 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性弱 | 地山由来の礫φ10 ~ 200㎜ 30%を含む | 遺物を多く含む |
| 9層 | 10YR2/1 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性弱 | 地山由来の礫φ10 ~ 200㎜ 50%を含む | 遺物を多く含む |
| 10層 | 10YR3/2 ~ 2.5Y3/2 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性有 | 地山由来の礫φ10 ~ 100㎜ 30%を含む | 遺物を多く含む |
| 11層 | 10YR3/2 ~ 2.5Y3/2 | 亜角塊状壤土 | 極高密 | 可塑性有 | 地山由来の礫φ10 ~ 100㎜ 30%を含む | 遺物を多く含む |



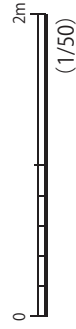
第7図 1区C・Dライン土層断面

E — 29.00m — E'



第8図 1区Eライン土層断面

- 1層 10YR2/2 垂角塊状砂質壤土 低密 可塑性極弱 礫φ10～100mm5%、遺物を含む 遺物を含む耕作土と客土が混じった土壌 2層に比して粗しよう
- 2層 10YR2/2 垂角塊状砂質壤土 低密 可塑性弱 礫φ10～100mm5%、遺物を含む 遺物を含む耕作土と客土が混じった土壌 1層に比して密
- 3層 10YR2/2～2/3 垂角塊状壤土 密 可塑性弱 礫φ10～100mm5～10%混入 土器大形破片が目立つ
- 4層 10YR2/2～2/1 垂角塊状壤土 密 可塑性弱 礫φ10～100mm3%、遺物を含む
- 5層 10YR2/2～2/1 垂角塊状壤土 密 可塑性弱 礫φ10～100mm10%、炭化物を含む 遺物を多く含む
- 6層 10YR2/2～2/1 垂角塊状壤土 極高密 可塑性弱 礫φ10～100mm10%、使土粒φ1～3mm3%、炭化物を含む 遺物を多く含む
- 7層 10YR2/2～2/1 垂角塊状壤土 極高密可塑性弱 礫φ10～50mm5%、使土粒φ1～3mm3%、炭化物を含む 遺物を多く含む
- 8層 10YR2/2～5YR2/2 垂角塊状壤土 密 可塑性弱 礫φ10mm1%、使土粒φ1～3mm3%、炭化物φ5mm10%を含む S.L3の炭化物が多く含む S.L3の腐葉面
- 9層 10YR2/1を基質とし、胎床に用いられた地山由来の黄褐色ブロック7.5YR5/8～10YR4/6が斑状に混じる 垂角塊状壤土 極高密 可塑性極弱 地山由来の胎床でφ50～200mmのブロックが斑状に混じる S.L3の平坦面
- 10層 10YR2/1 垂角塊状壤土 粘土分に富む 極高密 可塑性有 礫φ10～50mm10%、地山粒φ5mm1%を含む
- 11層 10YR2/2 垂角塊状壤土 粘土分に富む 密 可塑性有 礫φ10～50mm10%、地山粒φ5mm1～3%を含む
- 12層 10YR2/2 垂角塊状壤土 粘土分に富む 密 可塑性有 礫φ10～50mm5%、地山粒φ5mm1～3%を含む 11層に比して粗い
- 13層 10YR2/1～2/2 垂角塊状壤土 粘土分に富む 極高密 可塑性有 礫φ10～50mm5%、地山粒φ10mm1%を含む 遺物を含む層形成前の旧地表土
- 14層 7.5YR3/2 垂角塊状壤土 極高密 可塑性強 礫φ10～100mm5%を含む 地山崩移層



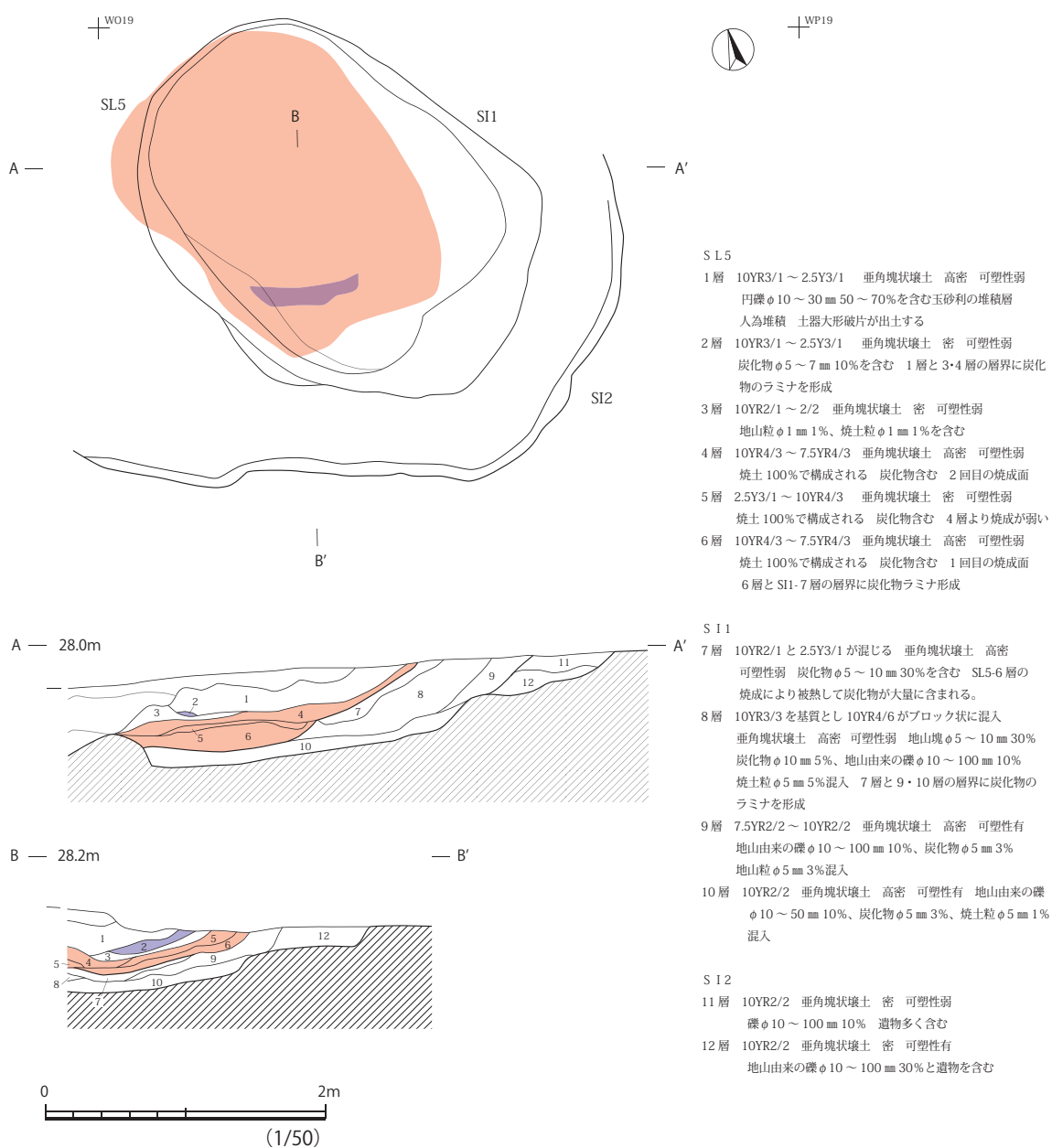
3 遺構と出土遺物

竪穴建物跡

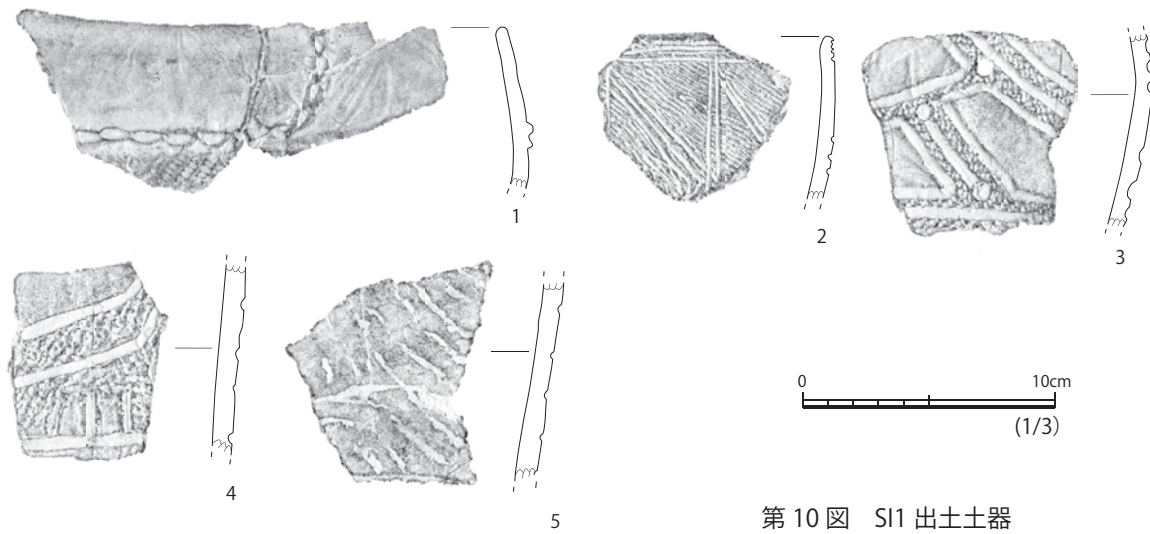
SI1・2ともに、炉や柱穴などが検出されず永続的に居住したとは考えがたいが、竪穴建物跡と同様な平面形と平坦な底面を有している。短期的な小屋掛け程度の構造物が想像されるが、便宜的に竪穴建物跡とする。

SI1 竪穴建物跡 (第9～12図 図版2・33)

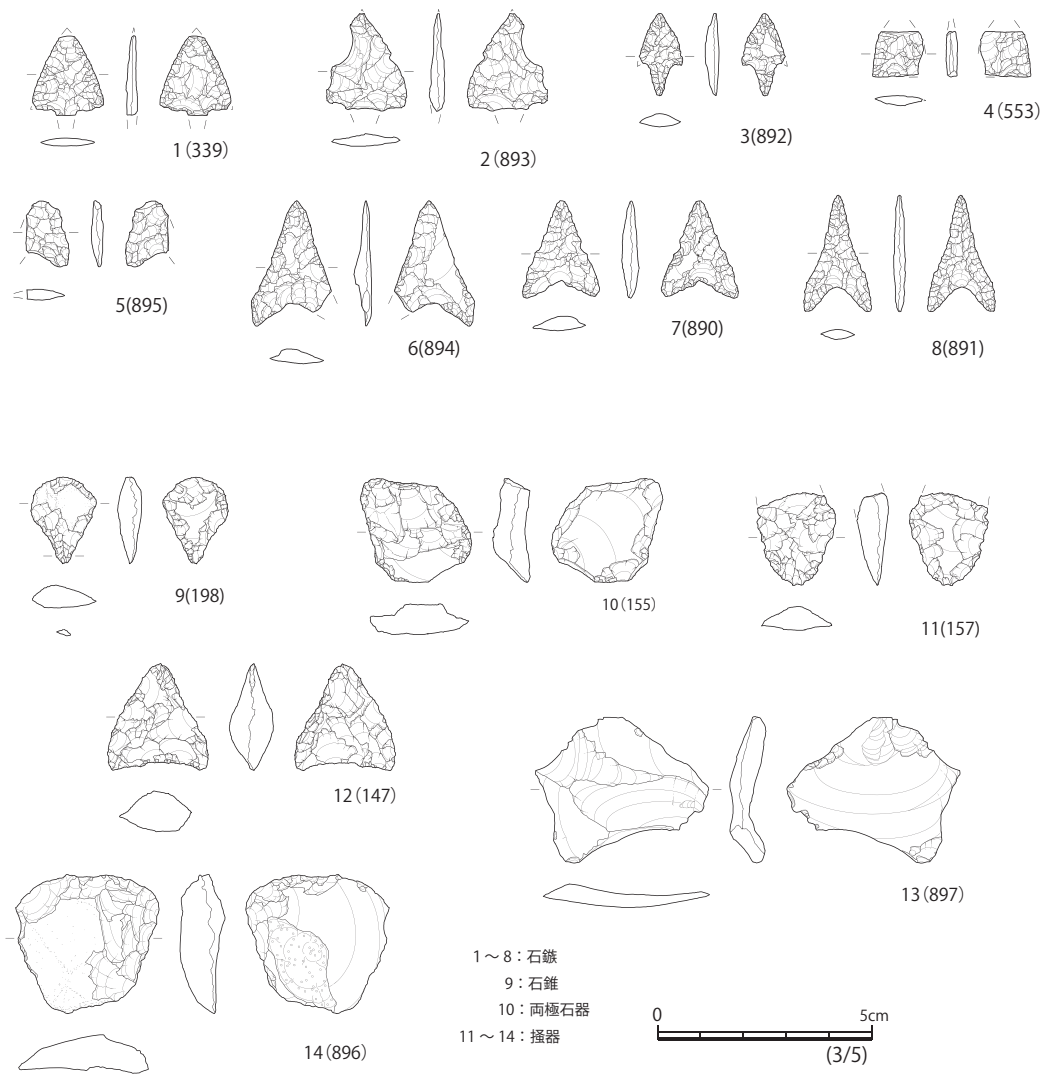
【位置】調査区中央付近、WO18・19グリッド 【規模】310×240×60cm 【重複】SI2・SL5、先後関係はSI2→SI1→SL5 【出土遺物】縄文土器片5(後期)、石鏃8・搔器4・磨石2・礫器1・石錐1・両極石器1 【所見】当初、SI2の一部としてとらえていたが、平面形と堆積土の観察・検討によってSI1として分離した。



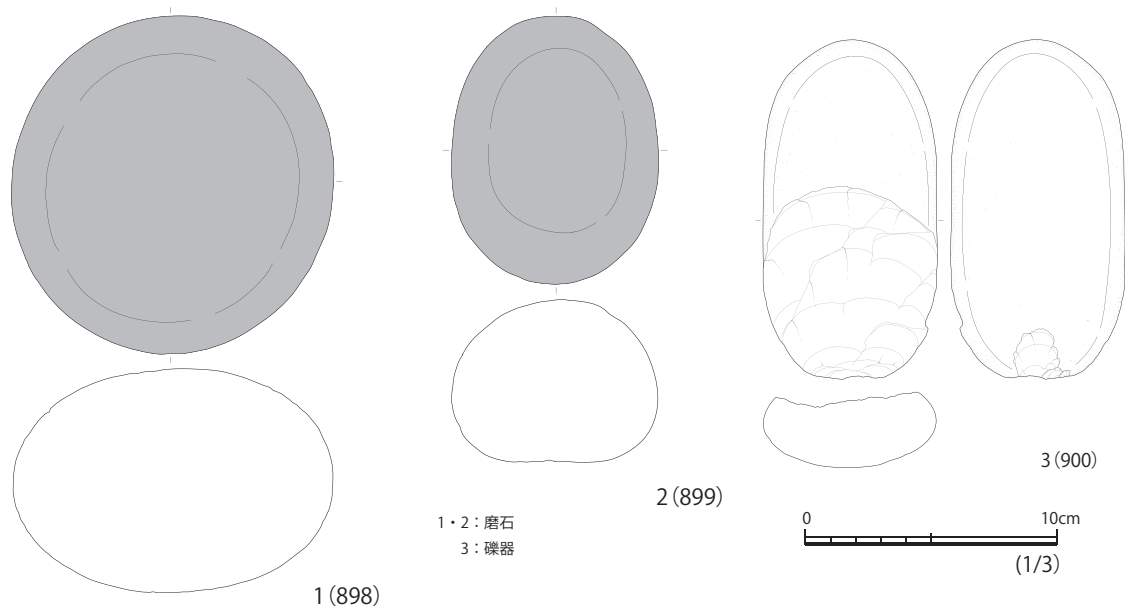
第9図 SI1・2、SL5



第10图 S11 出土石器



第11图 S11 出土石器(1)



第 12 図 SI1 出土石器 (2)

SI2 竪穴建物跡 (第 9 図・図版 2)

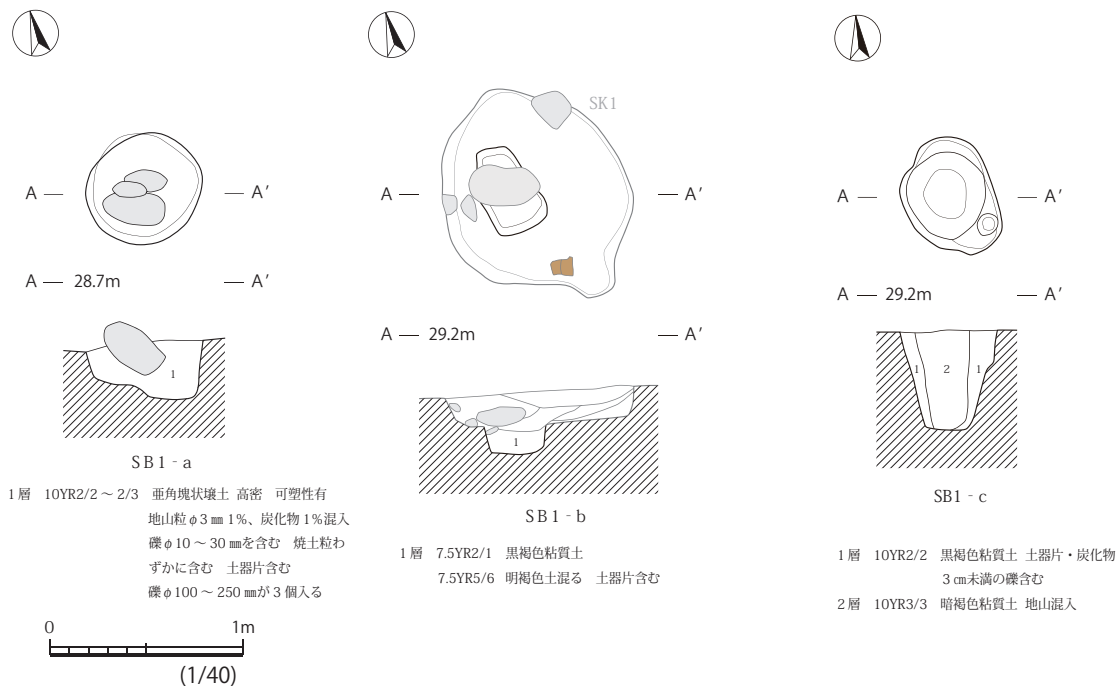
【位置】調査区中央付近 WN19・WO 19 グリッド 【規模】390 × 250 × 15cm 【重複】SI1 SL5、先後関係は SI2 → SI1 → SL5 【所見】北西側の壁と床は消失して検出できなかった。

建物跡

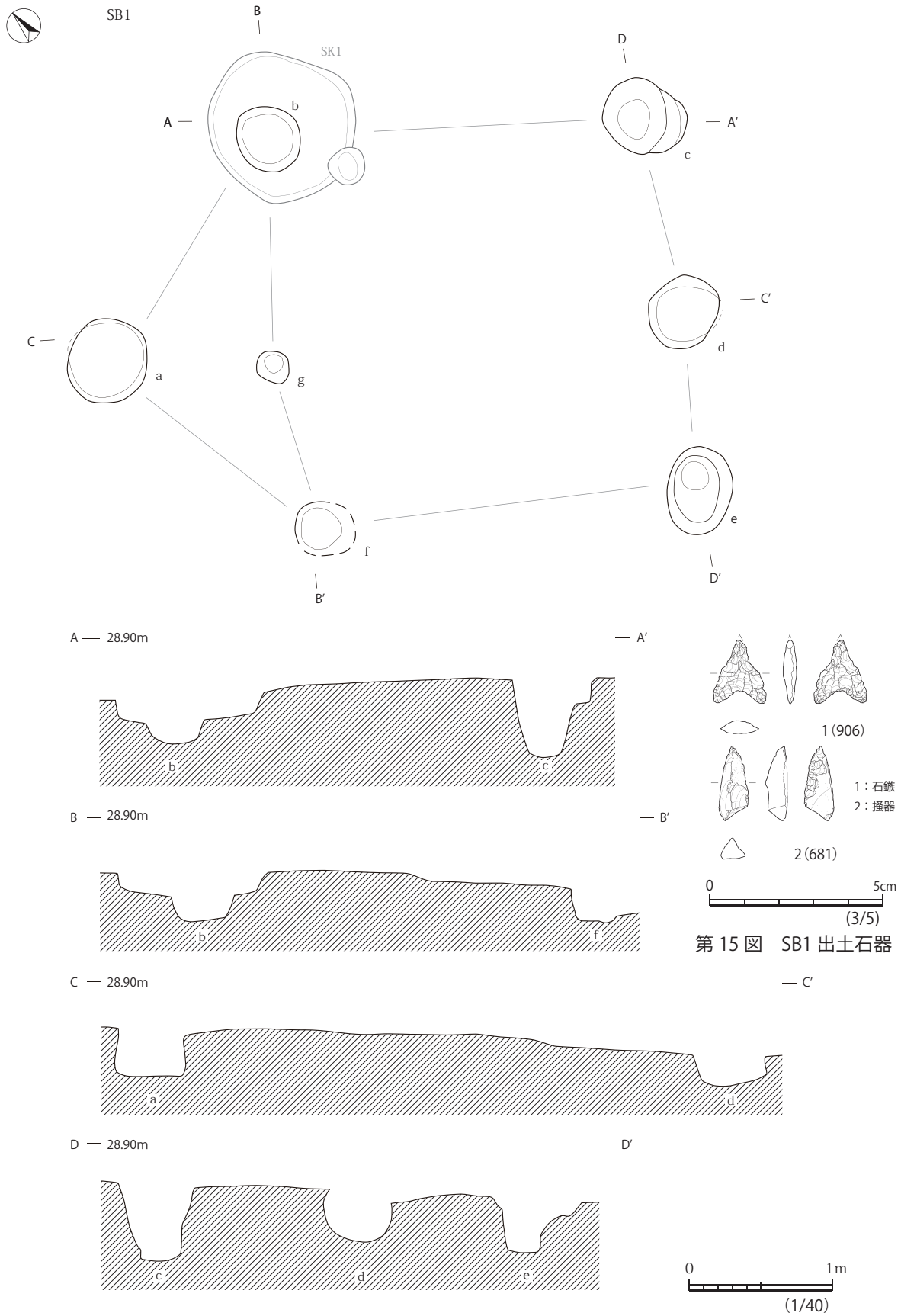
SB1 建物跡 (第 13～15 図 図版 2・33)

【位置】調査区南東隅、WP22・23、WQ22・23 グリッド

【規模】460 × 320cm 【重複】柱穴 b と SK1 が重複、先後は柱穴 b → SK1 である。



第 13 図 SB1-a・b・c

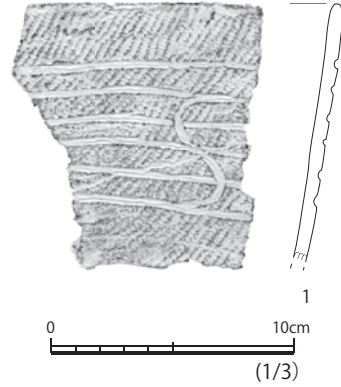


第 14 图 SB1

第 15 图 SB1 出土石器

【出土遺物】柱穴 a から石鏃 1、c から搔器 1

【所見】1 × 2 間の方形建物に、棟持柱 2 本が付属する亀甲形の掘立柱建物で、東側の棟持柱は調査区外にあると推定される。a ~ g の柱穴 7 本を検出した。



第 17 図 SK1 出土土器

土坑

SK1 土坑 (第 16 ~ 18 図 図版 2・33)

【位置】調査区南東隅、WP22 グリッド

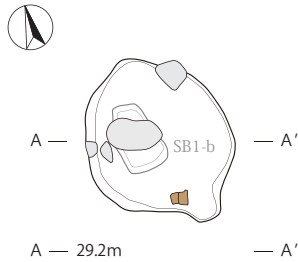
【規模】108 × 104 × 19.5cm

【重複】SB1 柱穴 b と重複、先後は SB1 柱穴 b → SK1 である。

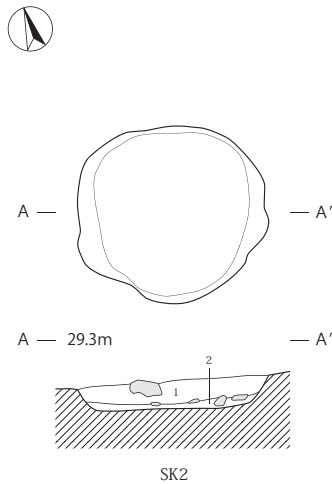
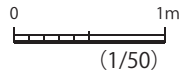
【出土遺物】縄文土器片 1 (後期)、搔器 1

SK2 土坑 (第 16・18 図 図版 3・33)

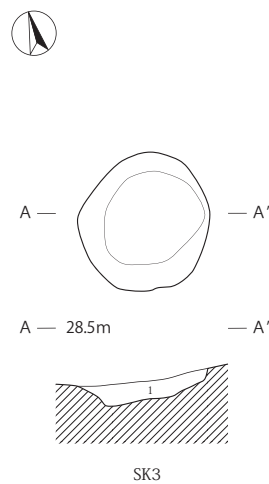
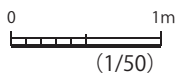
【位置】調査区南東、WQ21・22、WP21・22 グリッド



- 1層 10YR3/3 暗褐色粘質土 赤色粒、炭化物、土器片含む
- 2層 10YR2/2 黒褐色粘質土 土器片、炭化物、大型の礫含む
- 3層 10YR3/3 黒褐色粘質土 2層よりやや明るい色調
炭化物、土器片、3cm未満の礫含む
- 4層 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 3層より暗い色調
炭化物、土器片、3cm未満の礫含む
- 5層 10YR2/1 黒褐色粘質土 4層よりやや暗い色調
炭化物、3cm未満の礫含む

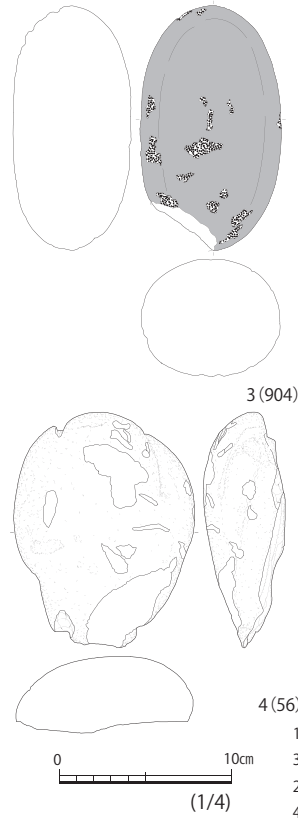
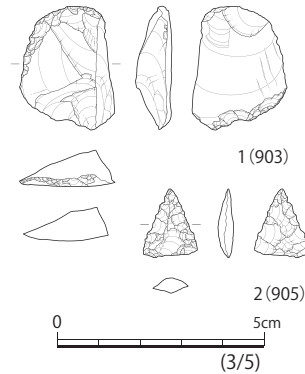


- 1層 10YR3/1 黒褐色粘質土 土器片含む
一部に灰褐砂混入 大形の礫含む
- 2層 10YR3/4 暗褐色粘質土 5 ~ 10 cm ほどの礫含む



- 1層 10YR2/3 垂角塊状 高密で可塑性有
地山由来の礫φ50 ~ 150 mm 20%、
地山塊φ10 mm 5 ~ 7%を含む
土器大破片を含む 人為堆積で礫を多く埋める

第 16 図 SK1 ~ 3



- 1 : SK1 搔器
- 3 : SK2 磨石
- 2 : SK3 石鏃
- 4 : SK3 礫器

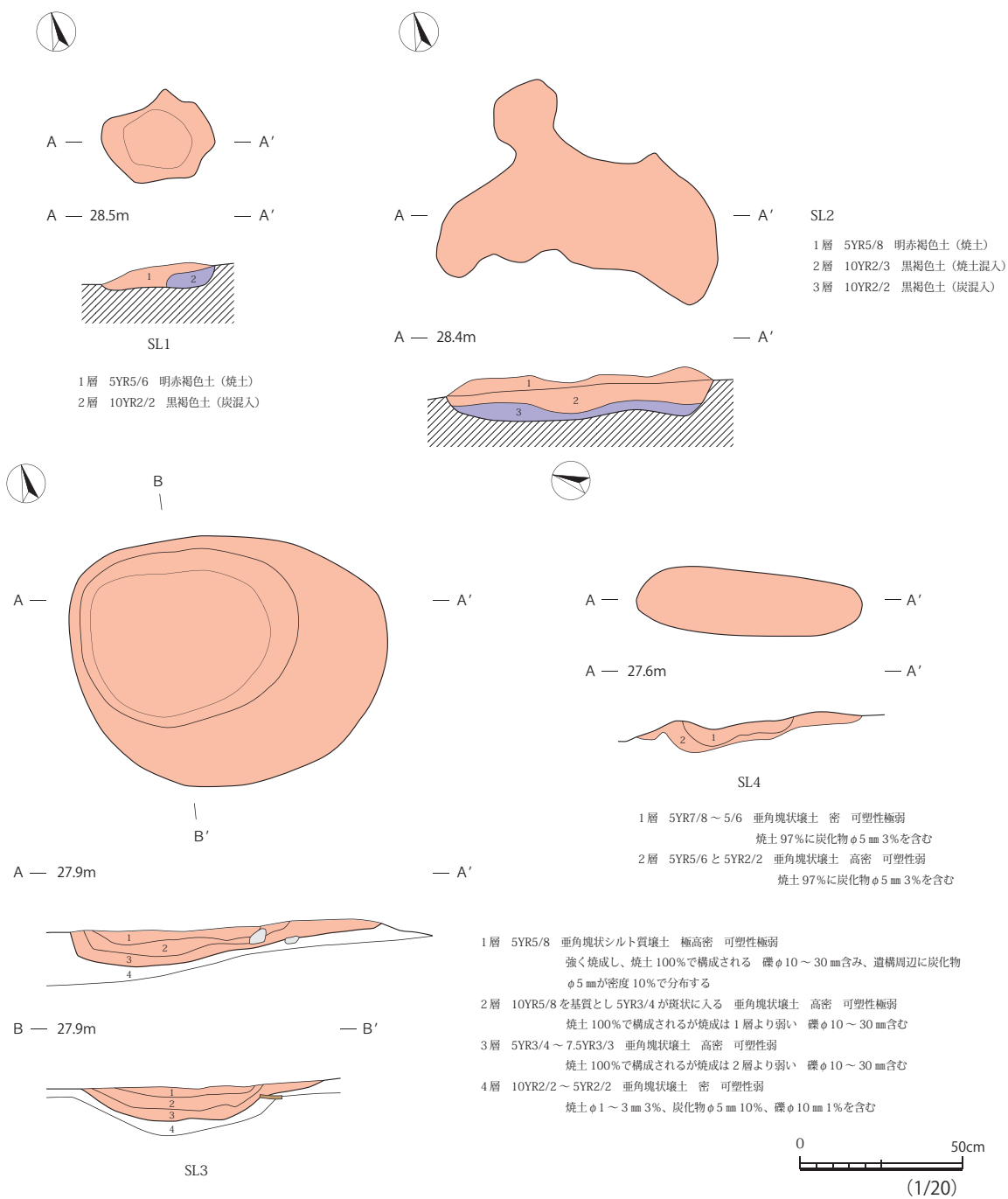
第 18 図 SK1 ~ 3 出土石器

【規模】128 × 120 × 24.5cm 【出土遺物】磨石1
 SK3 土坑 (第16・18図 図版3・33)
 【位置】調査区中央、WO19・WP19 グリッド
 【規模】92 × 86 × 10cm 【出土遺物】石鏃1・礫器1

焼土跡

SL1 焼土跡 (第19・24図 図版3)

【位置】調査区南東、WP22 グリッド 【規模】40 × 35 × 14.1cm 【重複】NR1 と重複、NR1 は自然



第19図 SL1～4

流路と推定される。先後は NR1 → SL1 【出土遺物】縄文土器片 1 (後期)

SL2 焼土跡 (第 19・20 図 図版 33)

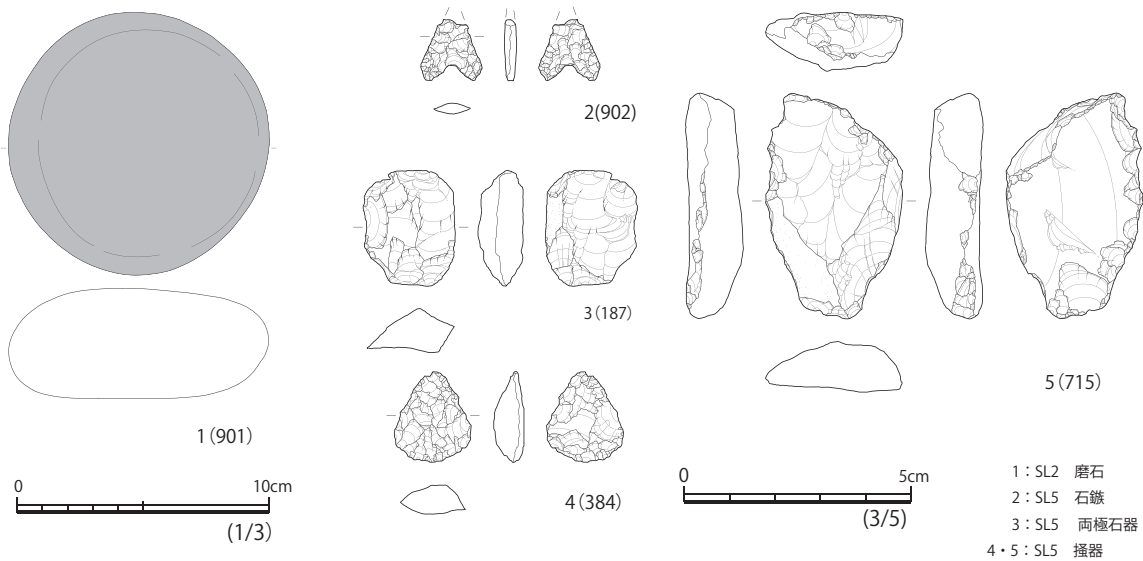
【位置】調査区南、WO22、WP22 グリッド 【規模】83 × 63 × 15.9cm 【重複】NR1 と重複、NR1 は自然流路と推定される。先後は NR1 → SL2 【出土遺物】磨石 1

SL3 焼土跡 (第 19・24 図 図版 3)

【位置】調査区南端、WN23、WO23 グリッド 【規模】100 × 78 × 10cm 【出土遺物】縄文土器片 1 (後期)

SL4 焼土跡 (第 19 図)

【位置】調査区中央、WN20、WO20 グリッド 【規模】70 × 20 × 10cm

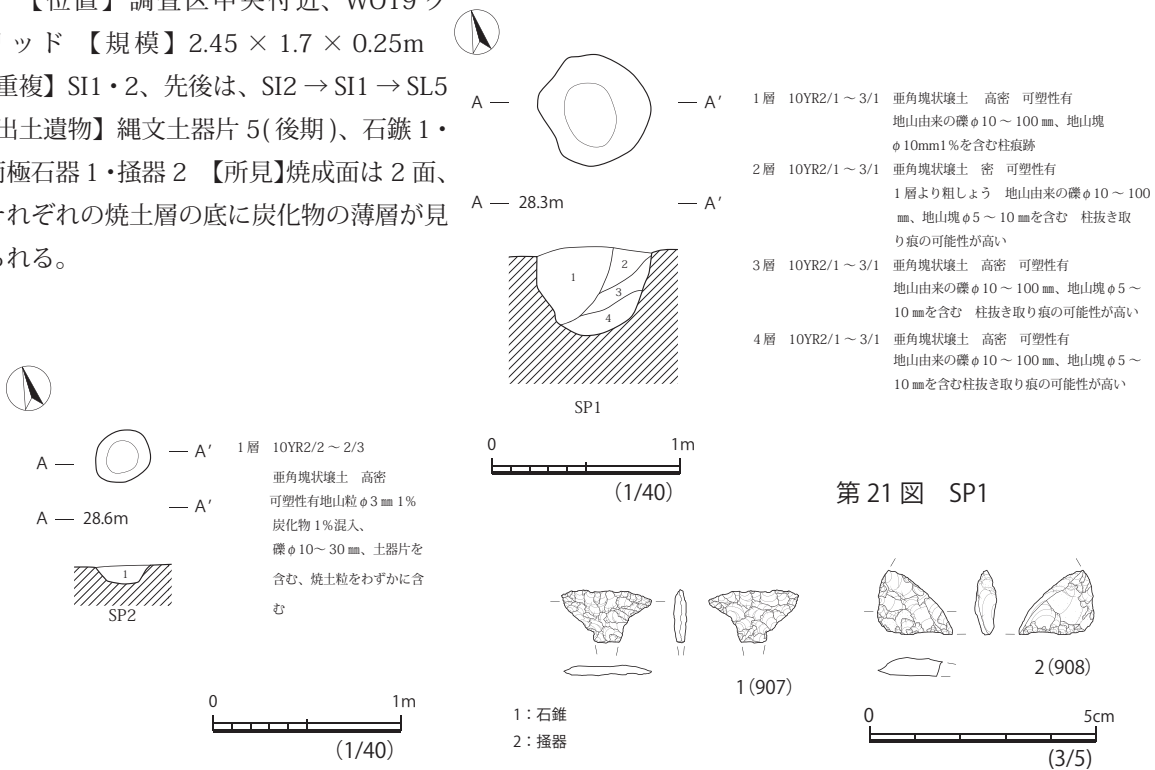


第 20 図 SL2・5 出土石器

SL5 焼土跡 (第 9・20・24 図 図版 3・33)

【位置】調査区中央付近、WO19 グリッド 【規模】2.45 × 1.7 × 0.25m

【重複】SI1・2、先後は、SI2 → SI1 → SL5 【出土遺物】縄文土器片 5 (後期)、石鏃 1・両極石器 1・搔器 2 【所見】焼成面は 2 面、それぞれの焼土層の底に炭化物の薄層が見られる。



第 22 図 SP2

第 23 図 SP2 出土石器



第 24 图 SL1・3・5 出土土器

小穴

SP1 小穴 (第 21 図 図版 3)

【位置】 調査区南、WO23 グリッド 【規模】 60 × 60 × 46cm

SP2 小穴 (第 22・23 図 図版 33)

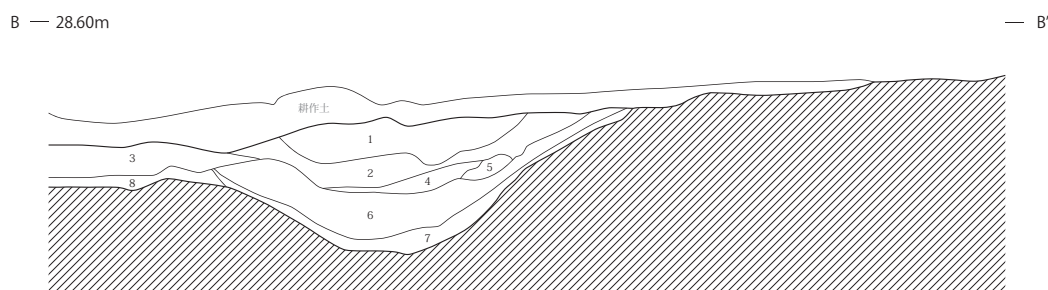
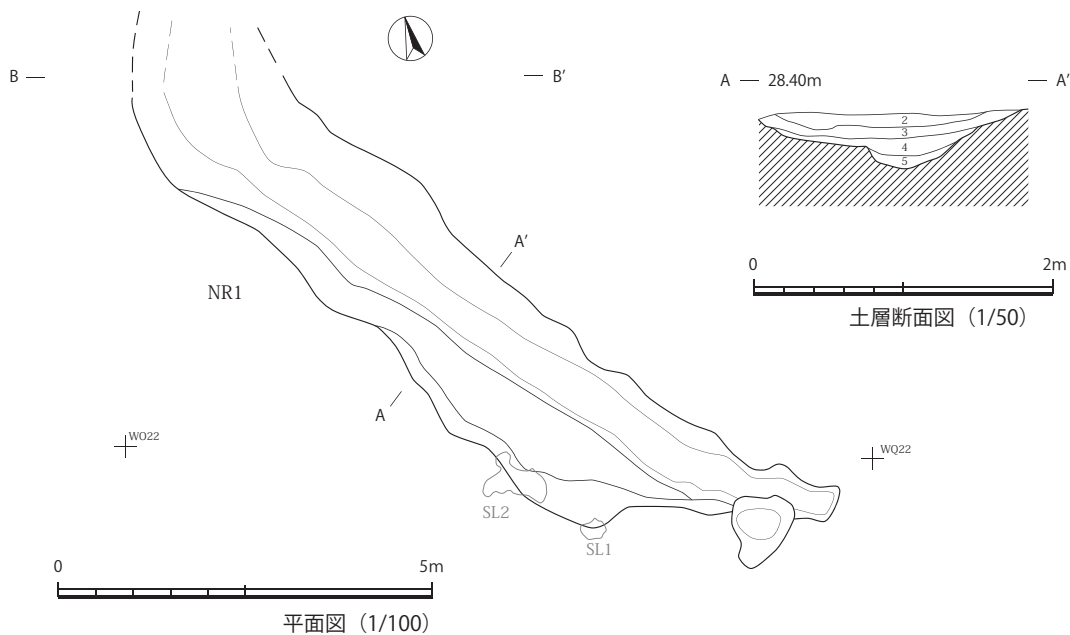
【位置】 調査区南東、WP23 グリッド 【規模】 30 × 32 × 8cm 【出土遺物】 石錐片 1・搔器片 1

自然流路

NR1 自然流路 (第 25・27～32 図 図版 34)

【位置】 調査区南、WN 20・21、WO20・21・22、WP21・22 グリッド 【規模】 11.5 × 2.2 × 2.1m

【重複】 SL1・2 と重複する。先後は NR1 → SL1・2 【出土遺物】 縄文土器片 24(後期)、石鏃 3・搔器 2・両極石器 2・石筥 1・礫器 1・石核 1・石棒 1・石皿 1



- 1層 10YR2/1～2.5Y2/1 垂角塊状壤土 高密 可塑性有 礫φ10～100mm 5%、地山粒φ5mm、炭化物、縄文土器を含む
- 2層 2.5Y2/1 垂角塊状壤土 高密 可塑性有 礫φ10～100mm 5%、炭化物、縄文土器を含む 1層より炭化物に富み炭化物がラミナを形成する
- 3層 10YR3/1～3/2 垂角塊状壤土 高密 可塑性有 地山由来土のブロックφ10～20mm 1%、地山由来礫φ10～100mmを含む
- 4層 10YR2/1～2/2 垂角塊状壤土 高密 可塑性有 礫φ10～100mm 5%、地山由来土φ10～30mmを斑状10%含む 炭化物φ5～10mmが目立ち、縄文土器を含む 6層との層界に炭化物ラミナを形成する
- 5層 10YR2/2を基質とし10YR3/3がブロック状に現れる 垂角塊状壤土 高密 可塑性有 地山ブロックを50%含む地山の投げ込みにより形成される
- 6層 10YR2/2を基質とし10YR2/3～3/3がブロック状に現れる 垂角塊状壤土 高密 可塑性強 漸移層由来の暗黄褐色土30～50%、焼土粒φ1～3mm 1～3%、炭化物φ5～10mm 5%、礫φ10～100mmを含む 骨片が目立つ
- 7層 10YR2/2を基質とし10YR2/3～3/3がブロック状に現れる 垂角塊状壤土 高密 可塑性強 漸移層由来の暗黄褐色土30～50%、焼土粒φ1～3mm 1～3%、炭化物φ5～10mm 3～5%、礫φ10～100mm 5%を含む
- 8層 10YR2/3～3/2 垂角塊状壤土 高密 可塑性有 地山由来礫φ10～100mm 10%を含む 黒色土と地山土が斑状となる

第 25 図 NR1

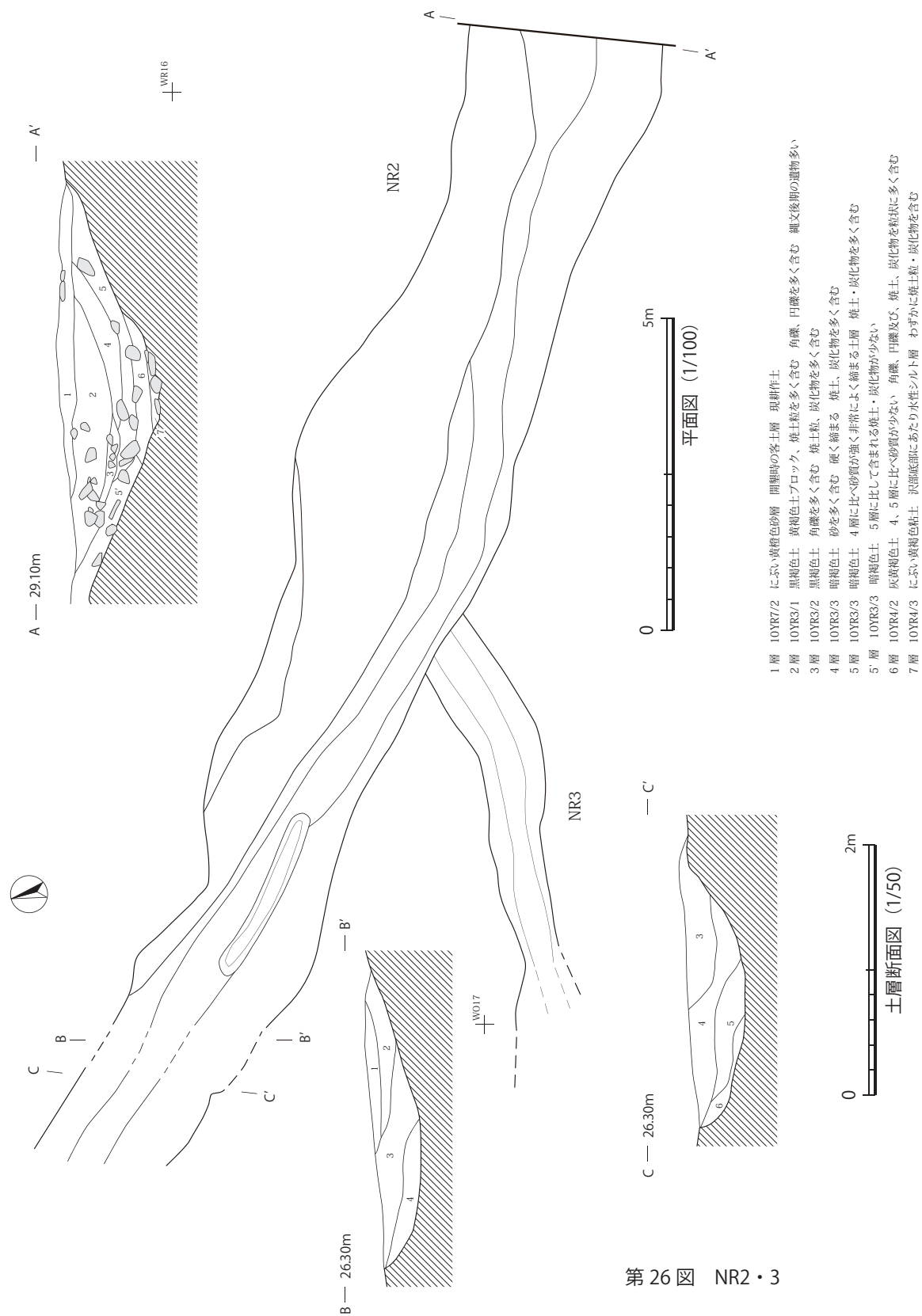
NR2 自然流路 (第 26・29～31 図 図版 3・34)

【位置】 調査区北、WN15・16、WO 15・16、WP16・17、WQ16・17、WR17

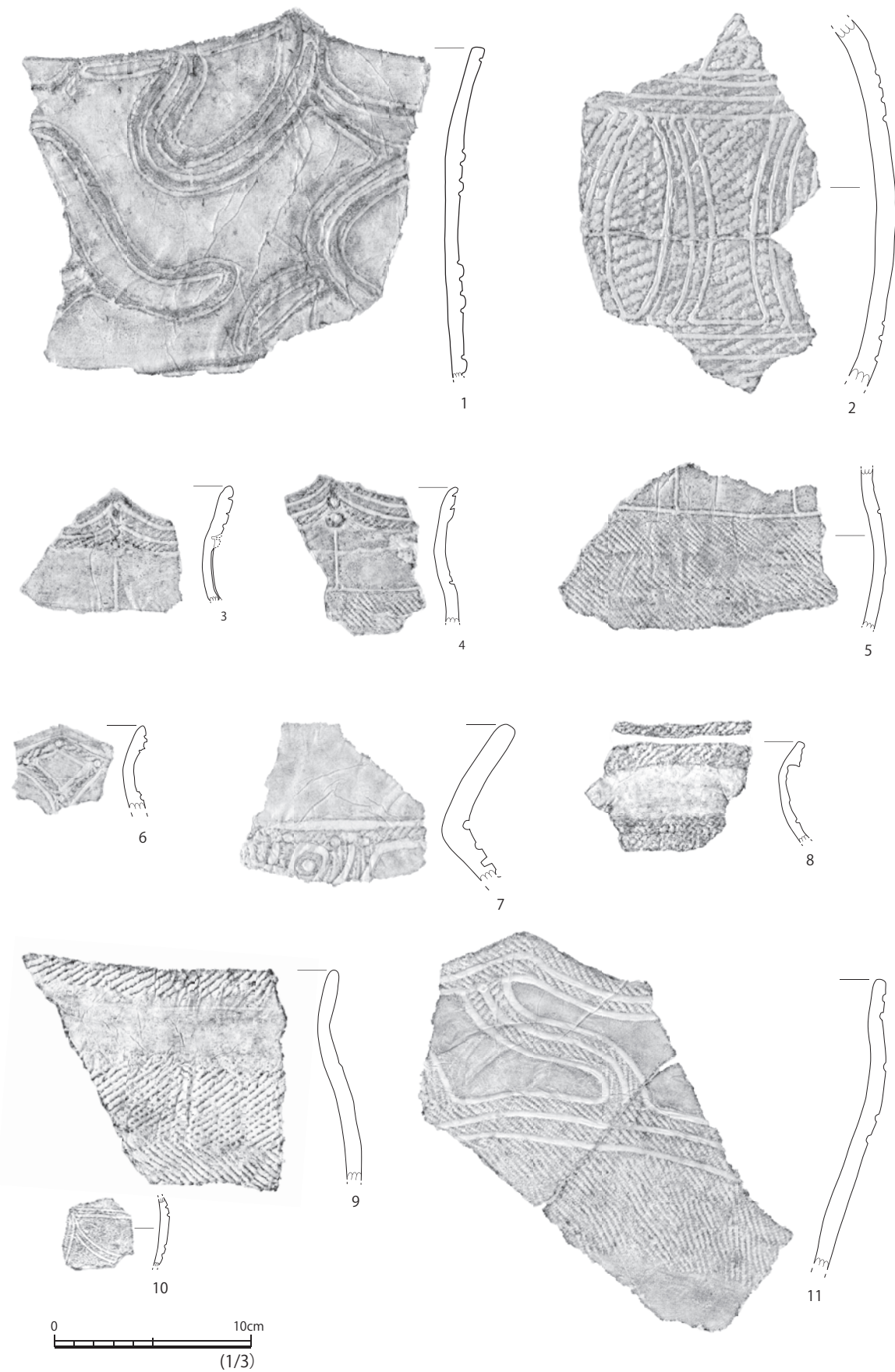
【規模】 20 × 3.5 × 0.8 m 【重複】 NR3 と連結する。【出土遺物】 縄文土器片 1 (後期)、石錐 2・両極石器 1・搔器 2・磨石 1・敲石 1・台石 1

NR3 自然流路 (第 26 図)

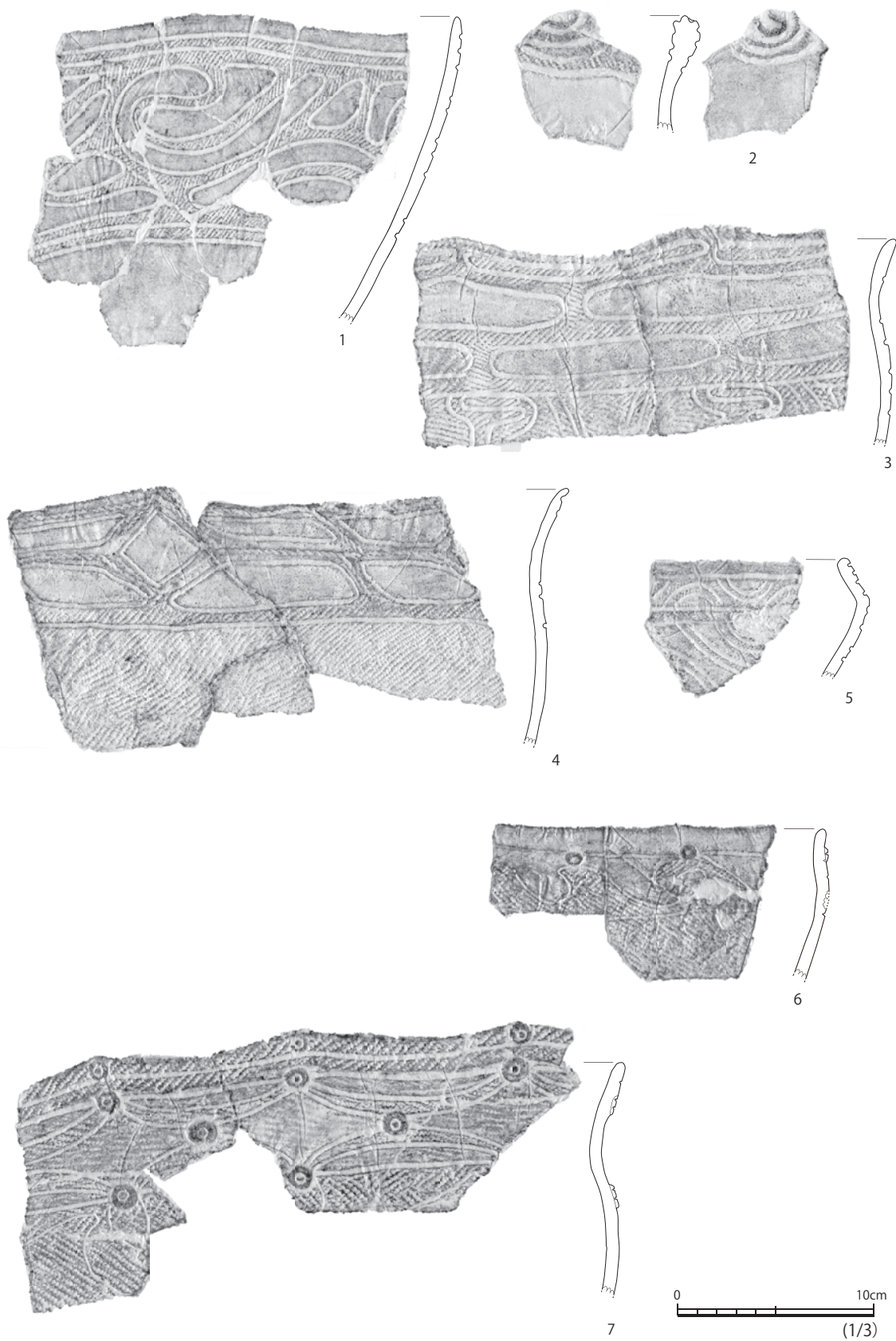
【位置】 調査区北、WO16・17、WP16・17 【規模】 7 × 1.2 × 0.06m 【重複】 NR 2 と連結する。



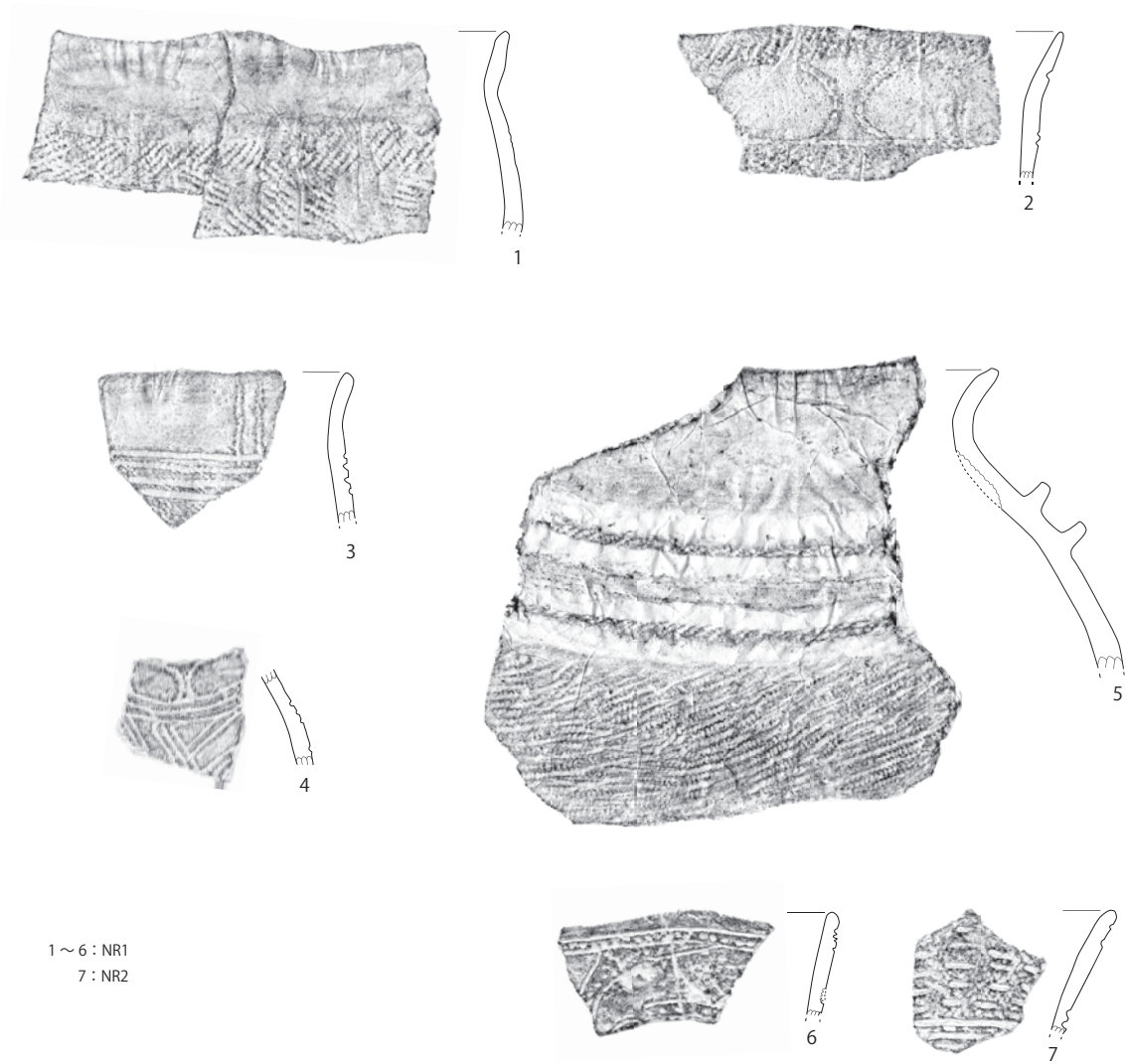
第 26 図 NR2・3



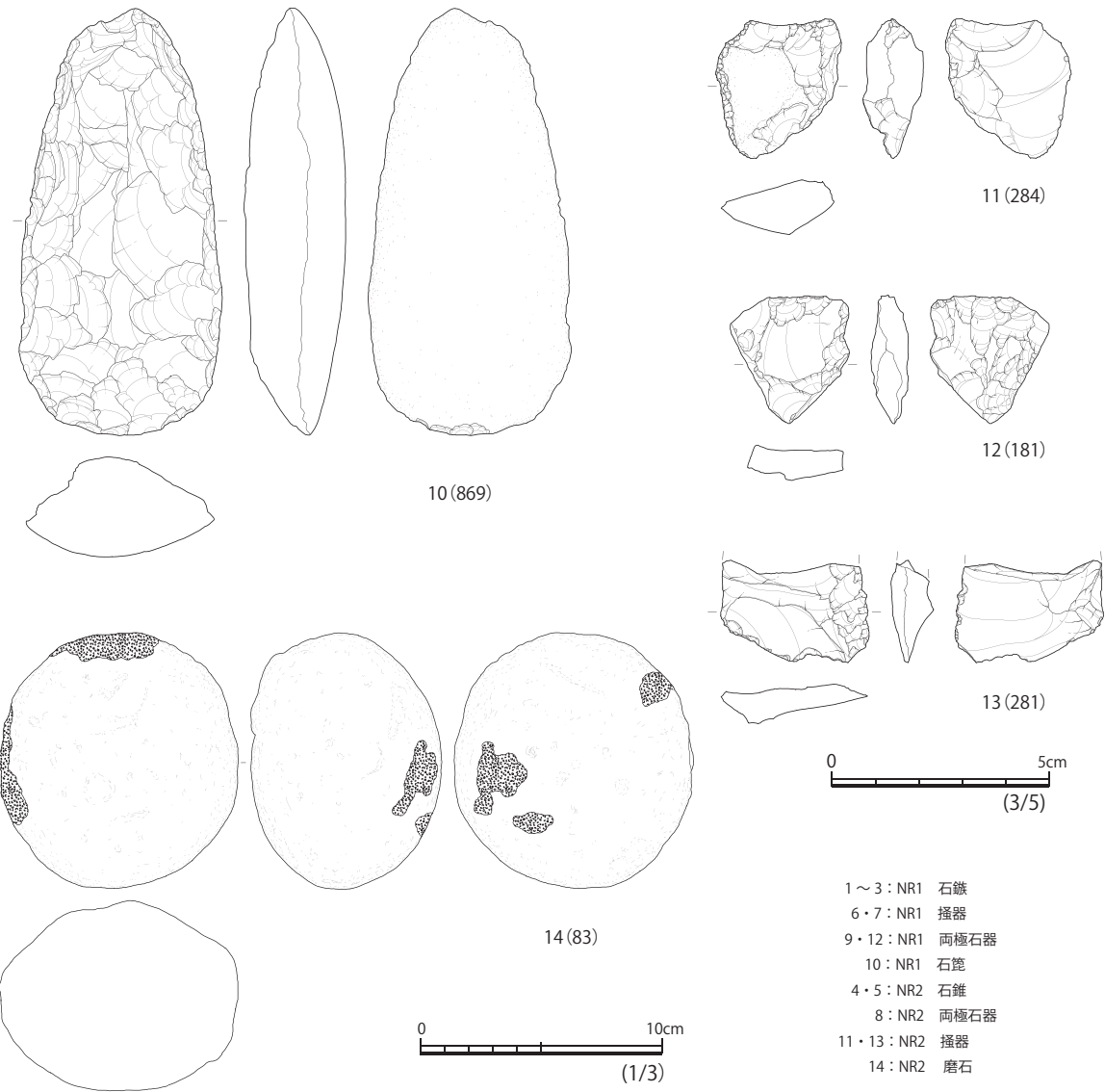
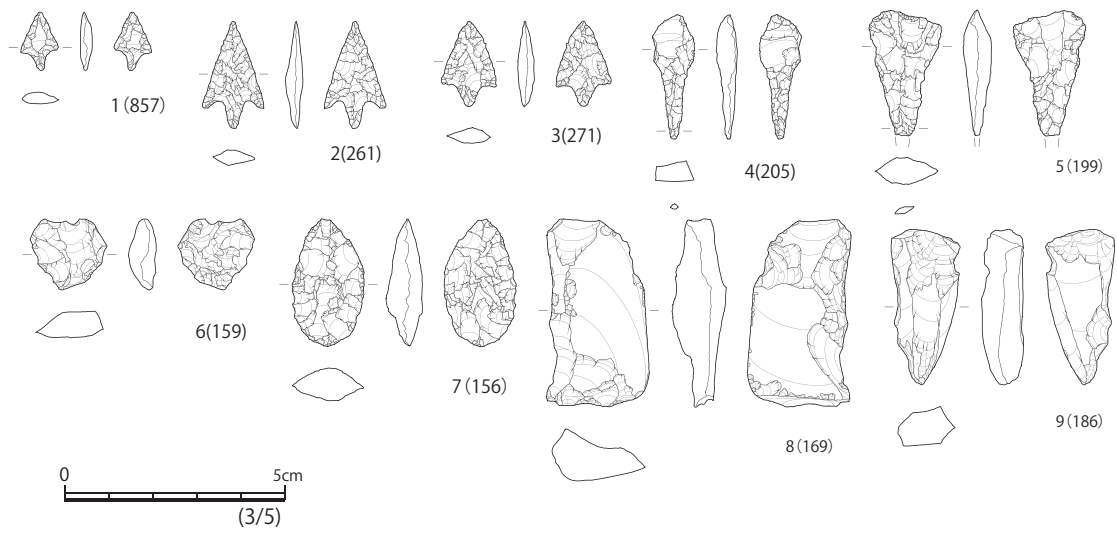
第 27 图 NR1 出土土器 (1)



第28图 NR1 出土土器 (2)

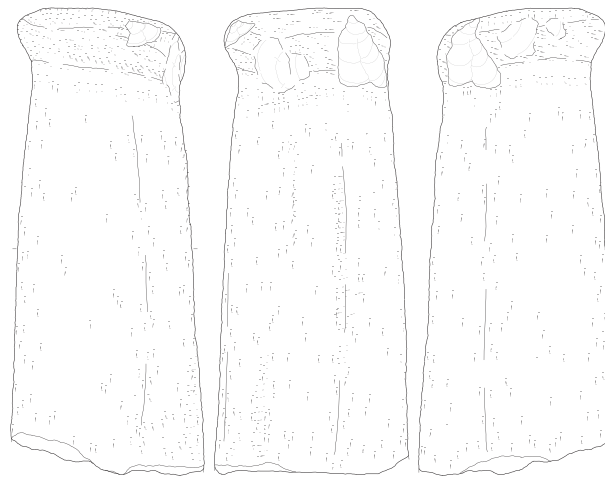
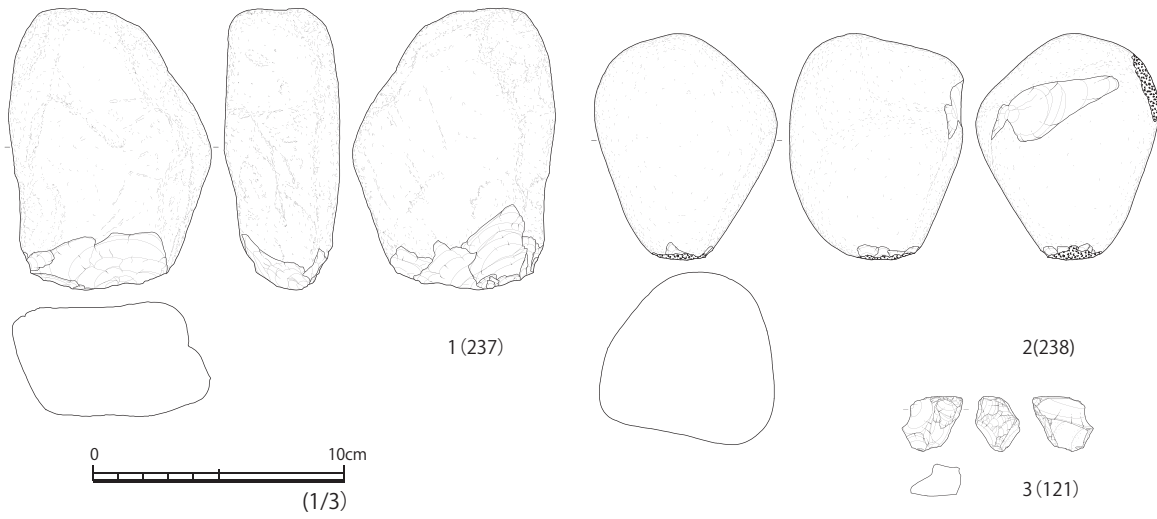


第 29 图 NR1・2 出土土器



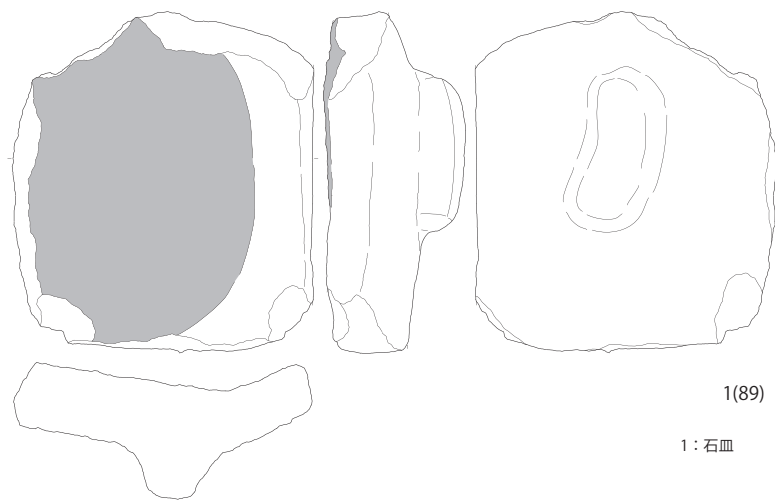
- 1 ~ 3 : NR1 石鏃
- 6 · 7 : NR1 搔器
- 9 · 12 : NR1 兩極石器
- 10 : NR1 石鏃
- 4 · 5 : NR2 石鏃
- 8 : NR2 兩極石器
- 11 · 13 : NR2 搔器
- 14 : NR2 磨石

第30図 NR1・2 出土石器 (1)



- 1 : NR1 礫器
- 3 : NR1 石核
- 5 : NR1 石棒
- 2 : NR2 敲石
- 4 : NR2 台石

第31図 NR1・2出土石器(2)



第 32 図 NR1 出土石器

4 遺構外の出土遺物

縄文土器

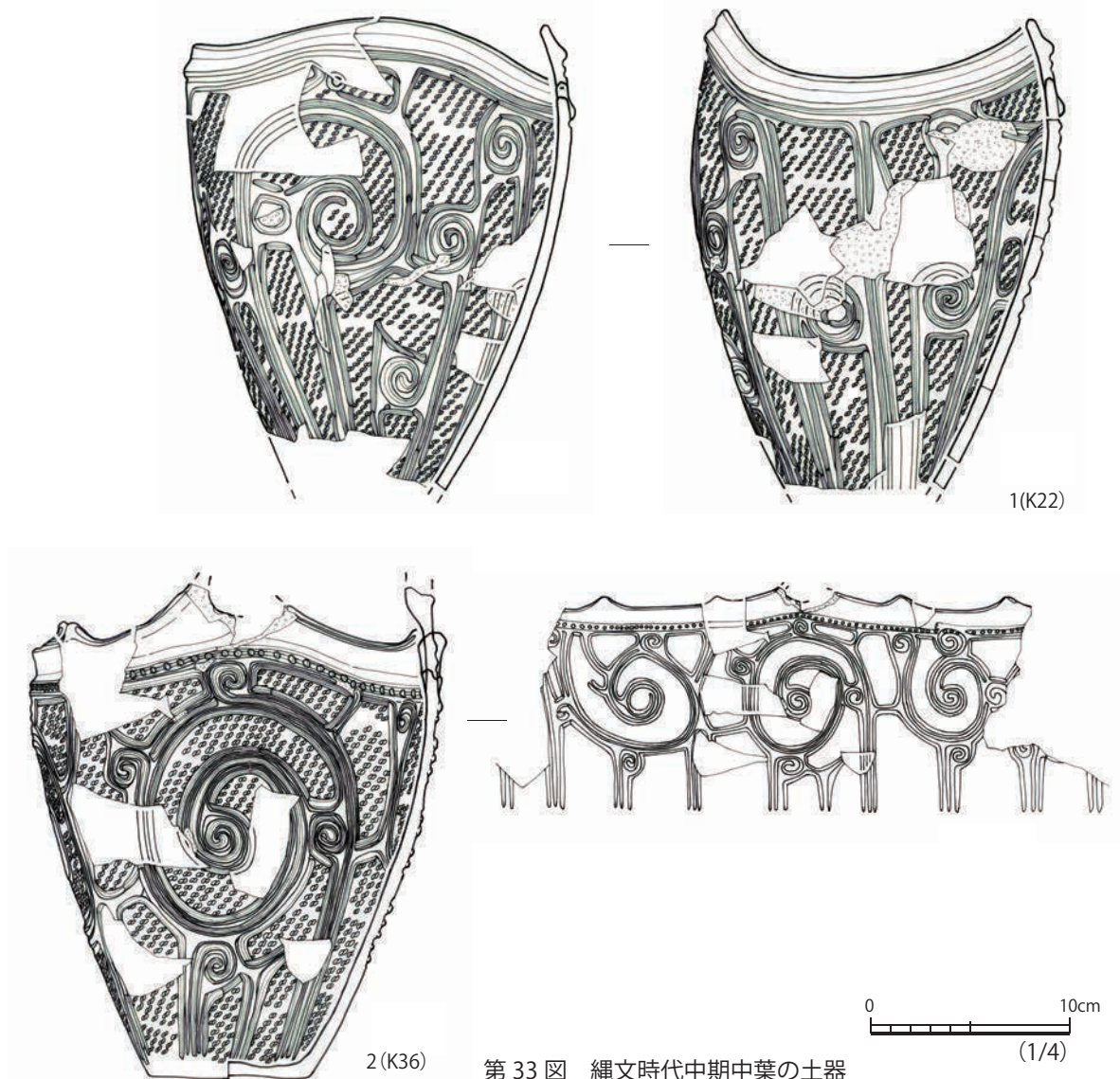
中期後半から後期後葉の土器が出土しているが、量的には後期前葉の土器が多い。

縄文時代中期の土器 (第 33・34 図、第 61 図 1・2 図版 21)

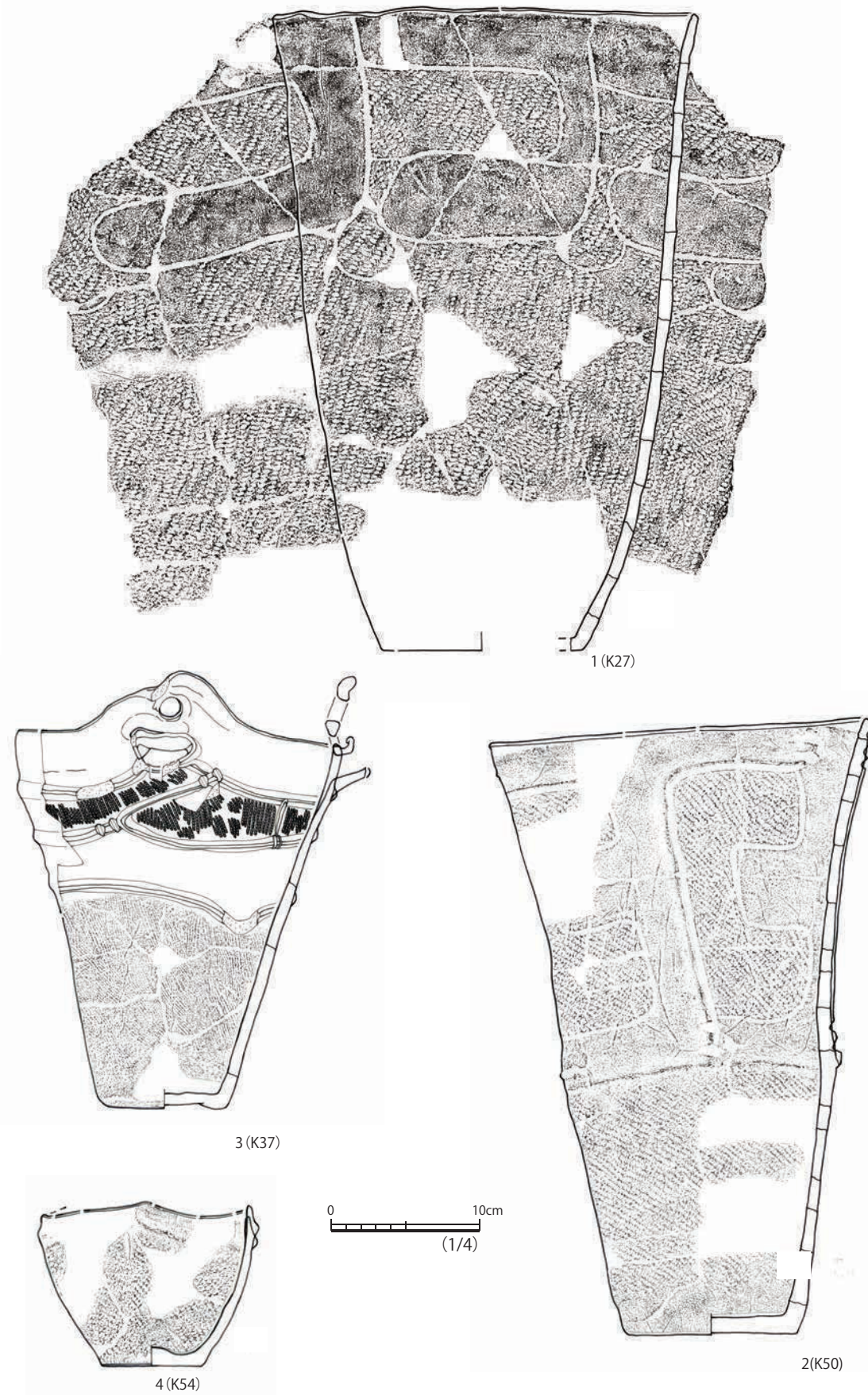
第 33 図は、中期中葉の大木 8 b 式の精製深鉢である。器形は 1・2 ともに全体として内湾し、肥厚口縁も共通する。ただし、1 の口縁は緩い波状を呈するが、2 の口縁には大小の突起があり、口縁をめぐる沈線に 1 に無い刺突文がある。ともに体部全面に渦巻文が展開されているが、1 は沈線で、2 は隆沈線で表現されている。1 と比較し 2 の方が加工度は高い。

破片資料の第 61 図 1 は、胴部が締め口縁に向かい外反する深鉢形で、体部文様は沈線のやや不規則な渦巻文であり、体部文様帯上端の沈線には、二重の刺突が加えられている。

第 34 図は、中期末葉の大木 10 式に比定される。1 は口縁部がわずかに外反する深鉢で体部上半部に J 字形磨消文が施されている。隣接する J 字文の下部を半円形の沈線が繋いでいるが、その 1 ケ所が磨り消されている。2 は胴部が屈折する深鉢で、J 字を重ねた形の磨消文が施されている。単位文様



第 33 図 縄文時代中期中葉の土器



第 34 図 縄文時代中期末葉の土器

は隆線と沈線の一体化した区画線で仕切られる。この区画線上の胴部を巡る隆線と接触する部分には、刻みが加えられている。

第 61 図 2 は、口縁に窓のある山形突起を持つ深鉢である。文様は、J 字崩れの磨消文で、磨消部の接点に鱗状の隆帯がある。

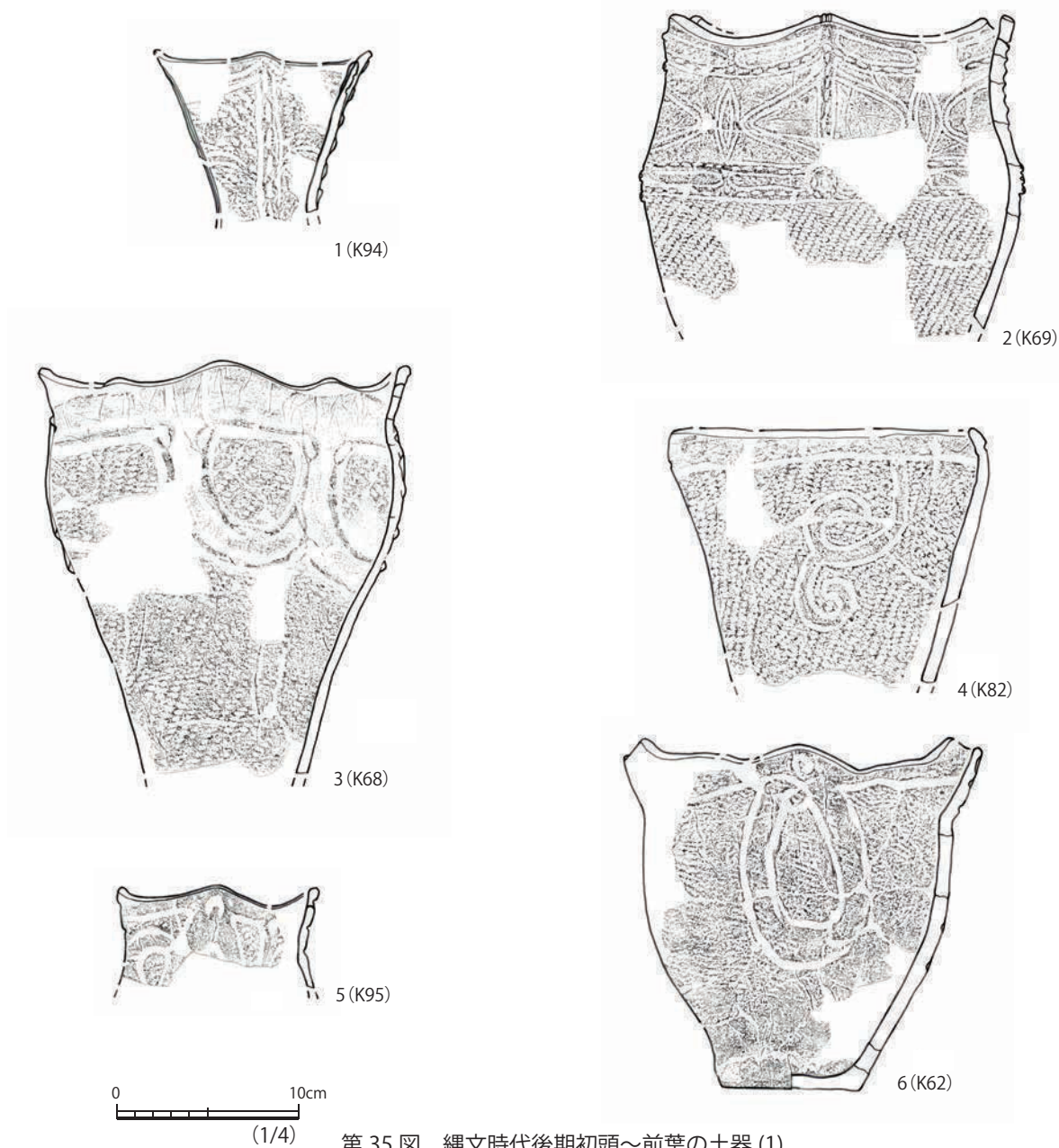
第 34 図 3 の注口付深鉢や同図 4 の鉢は、中期末から後期初頭の過渡期の土器と思われる。

縄文時代後期初頭から前葉の土器 (第 35 ~ 44 図、第 61 図 3 ~ 9・第 62 ~ 74 図 図版 21 ~ 25)

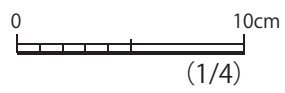
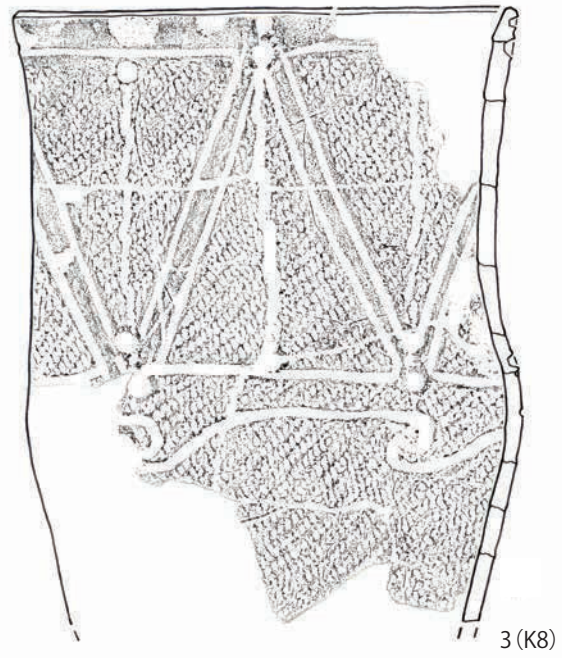
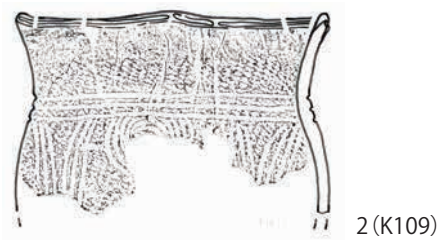
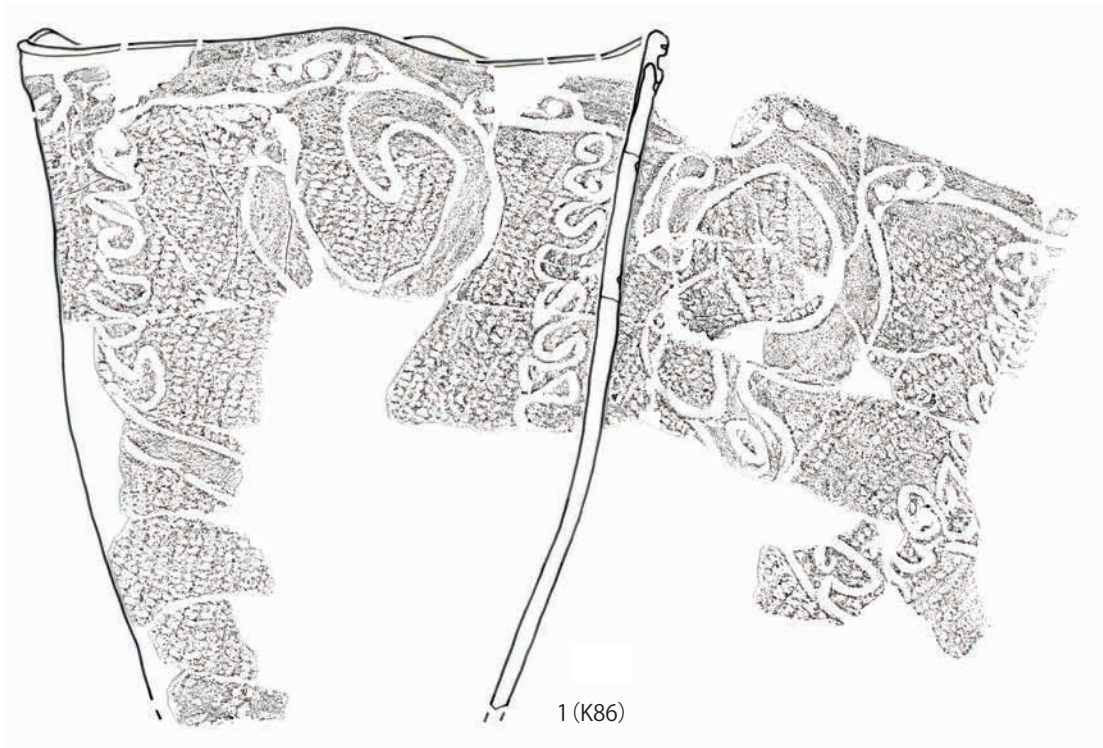
縄文中期後半の規格性の高い大木式土器から一転し、多様な文様の土器が作られる。

後期初頭に盛行する土器は、当地の門前貝塚を標式遺跡とする門前式土器である。

門前式の最大の特徴としては、隆線に刺突を加えて表現される連鎖状文がある。それは、第 35 図 2、第 39 図 2、第 40 図 1、第 41 図 1 に見られる磨消文の区画線、第 41 図 2 に見られる頸部と胴部の仕切



第 35 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (1)



第 36 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (2)

線、第41図3、第43図3・4、第44図1・3、第61図3～8に見られる口縁部突起の下の区切線などである。文様は、多様に展開する磨消技法によるS字・J字・Y字状文が主流となる。

第35図3、第43図4・5、第62図4に見られる大木10式のメガネ文を引き継ぐような半円文、第36図1、第37図1、第39図2、第62図3、第64図6、第65図9に見られる変形したS字・J字文、第38図2、第42図1、第62図1・2、第63図8に見られる変形したJ字文である。

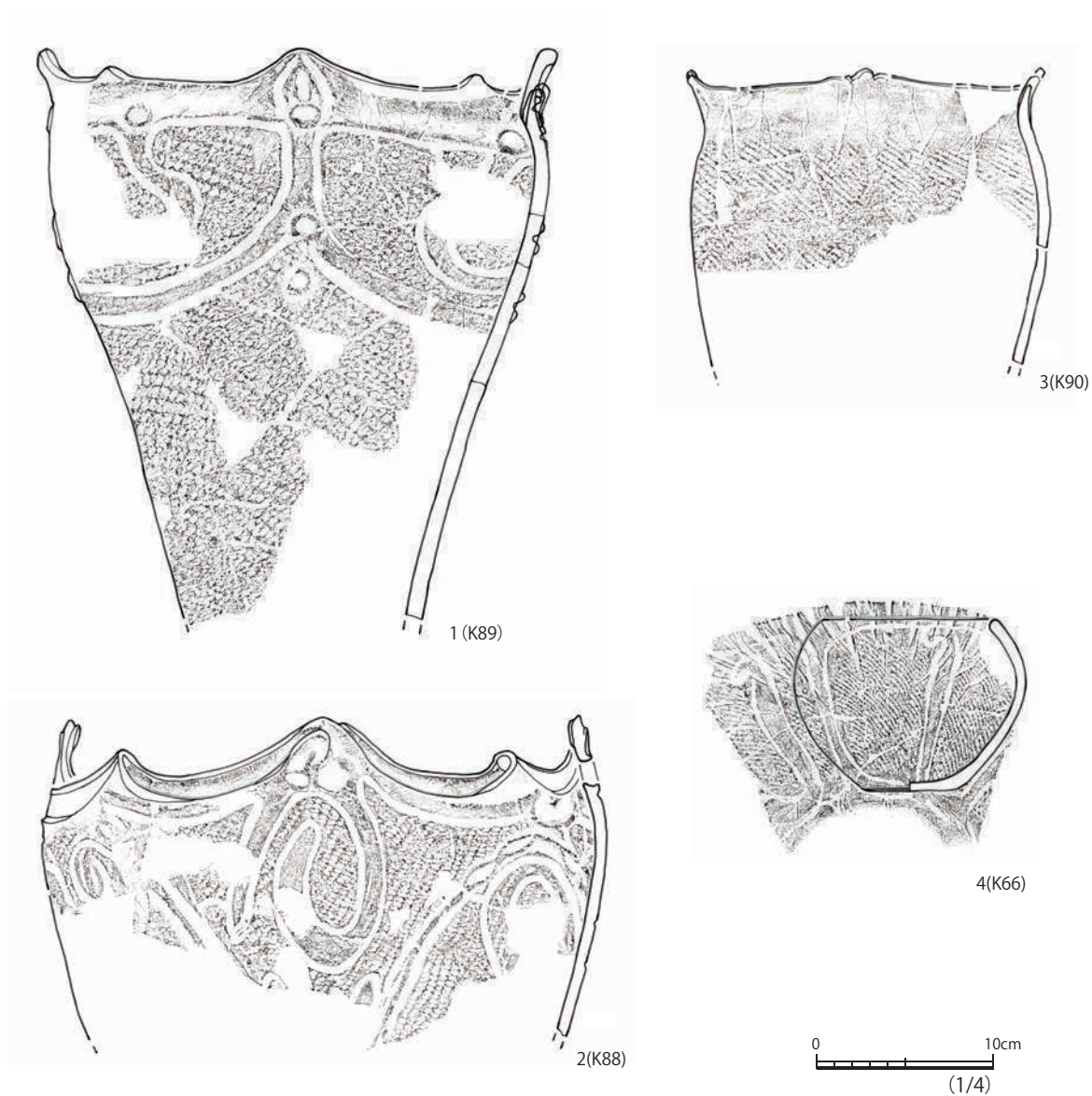
第35図6や第38図1、第34図3、第43図1・2、第44図1等は、S字・J字文の省略形と見ることができる。

これらの文様に付随して、第35図5、第38図1・2、第42図1、第62図3、第63図、第64図4には、縦の波状文（連続S字状懸垂文）や円文、円形の凹み、の字状文等の付加文使用が顕著である。

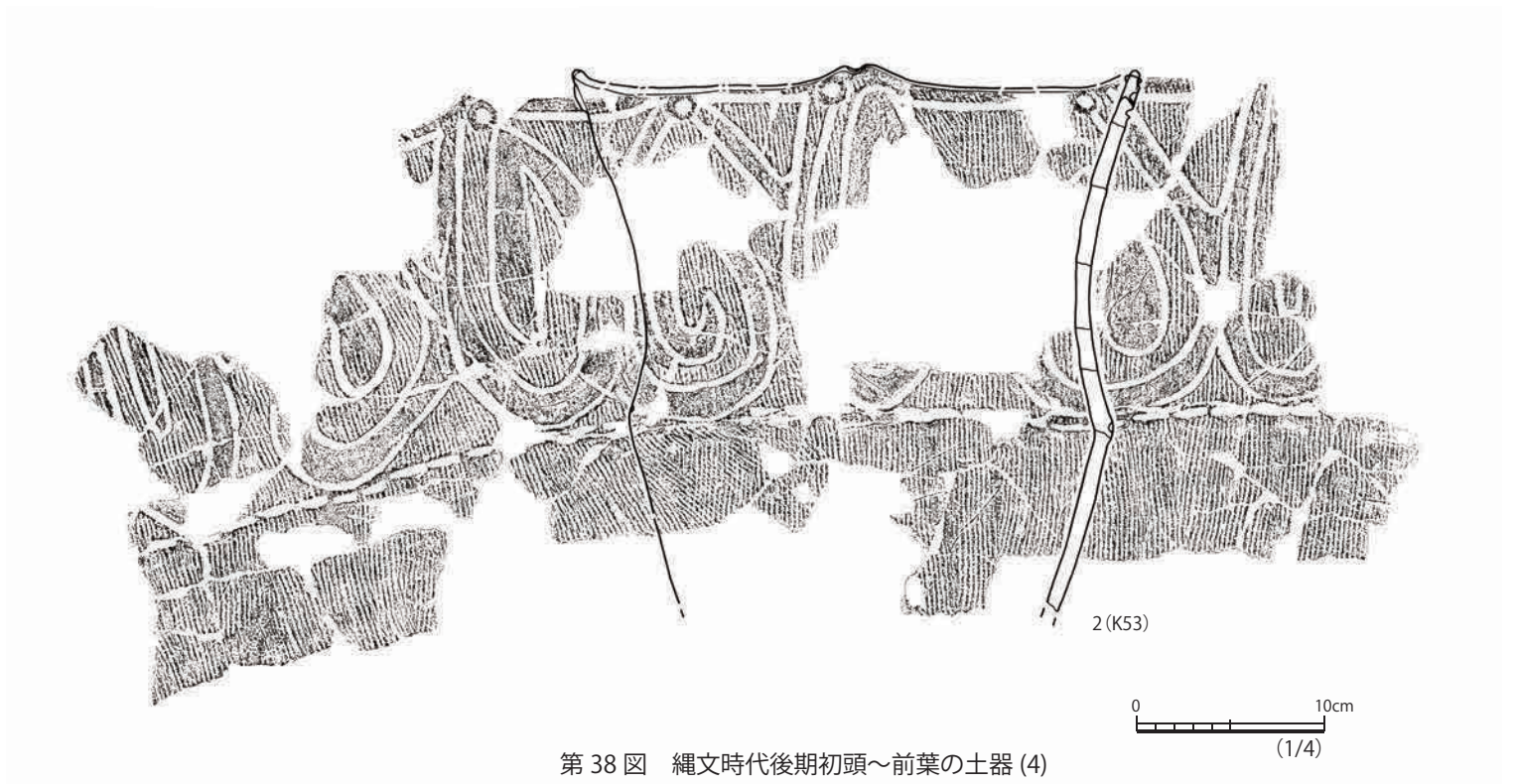
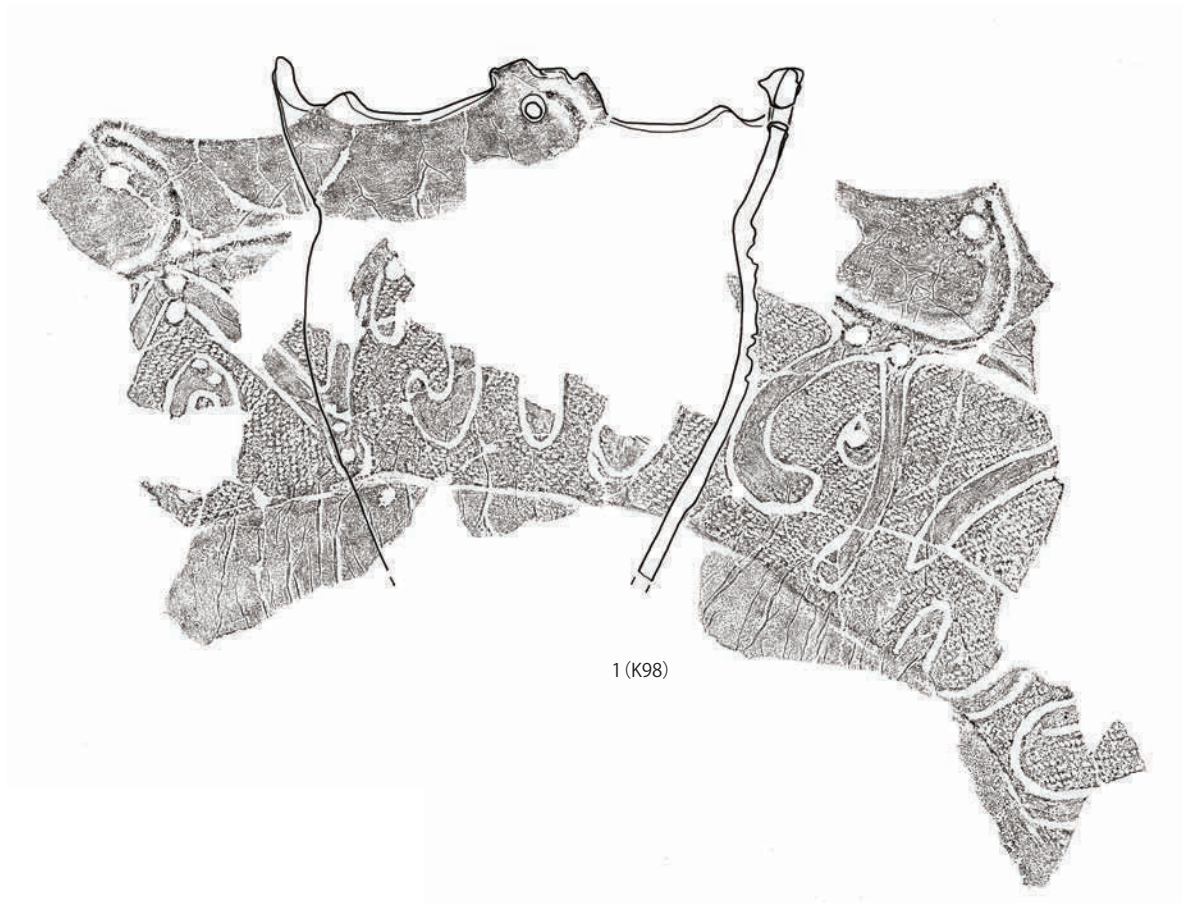
上記の土器群とは別に、体部上半を縦線で区切り、方形の文様を施文した土器群が併存する。

底部から内反気味に立ち上がり、胴部で内側に折れ、外反気味に口縁部へと広がる特徴的な器形を呈する。胴部の屈折部には隆線や沈線を施し、上の文様帯と下の地文帯を区画する。

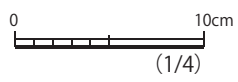
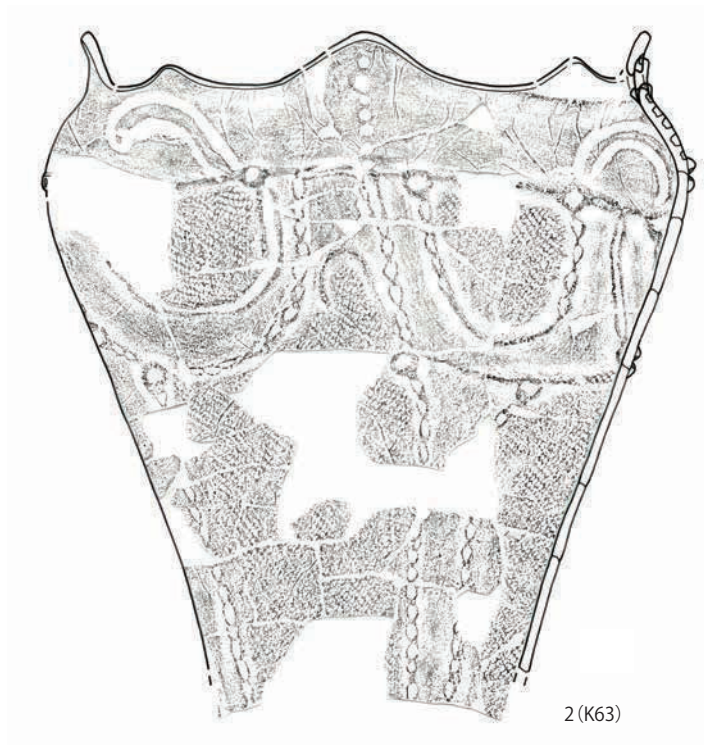
第41図4・5は、胴部と文様帯の縦区画線に隆線を用いている。



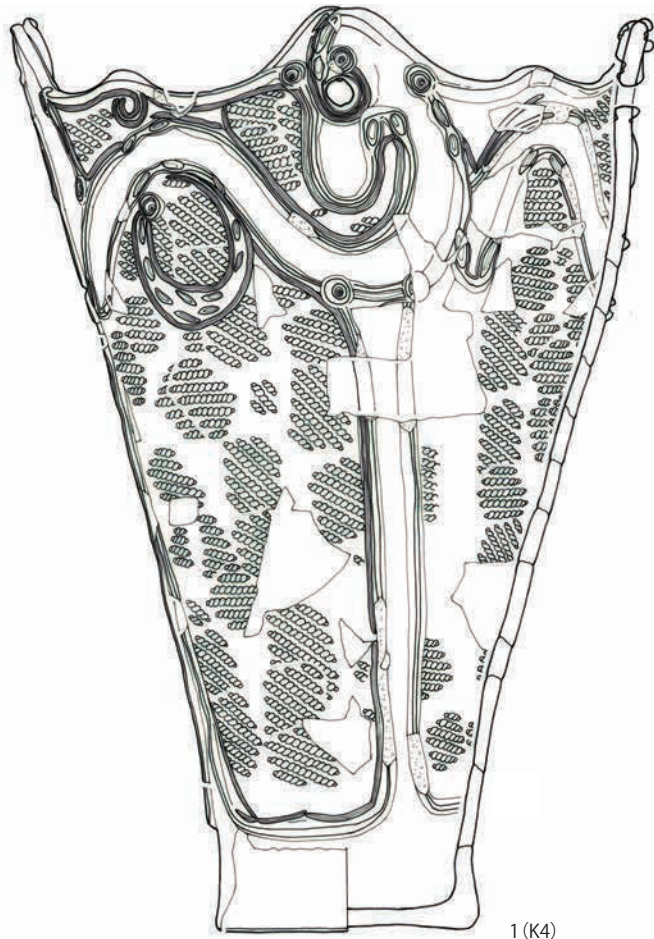
第37図 縄文時代後期初頭～前葉の土器(3)



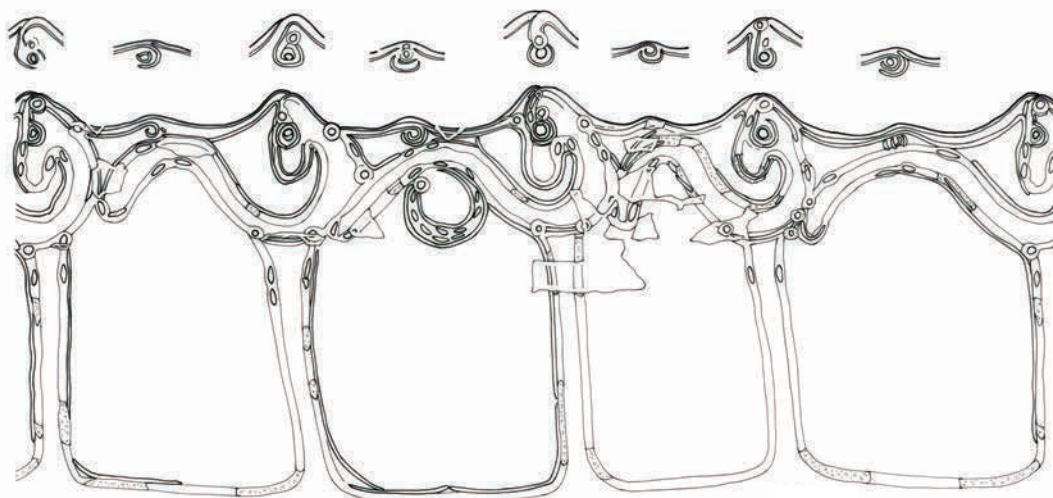
第 38 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (4)



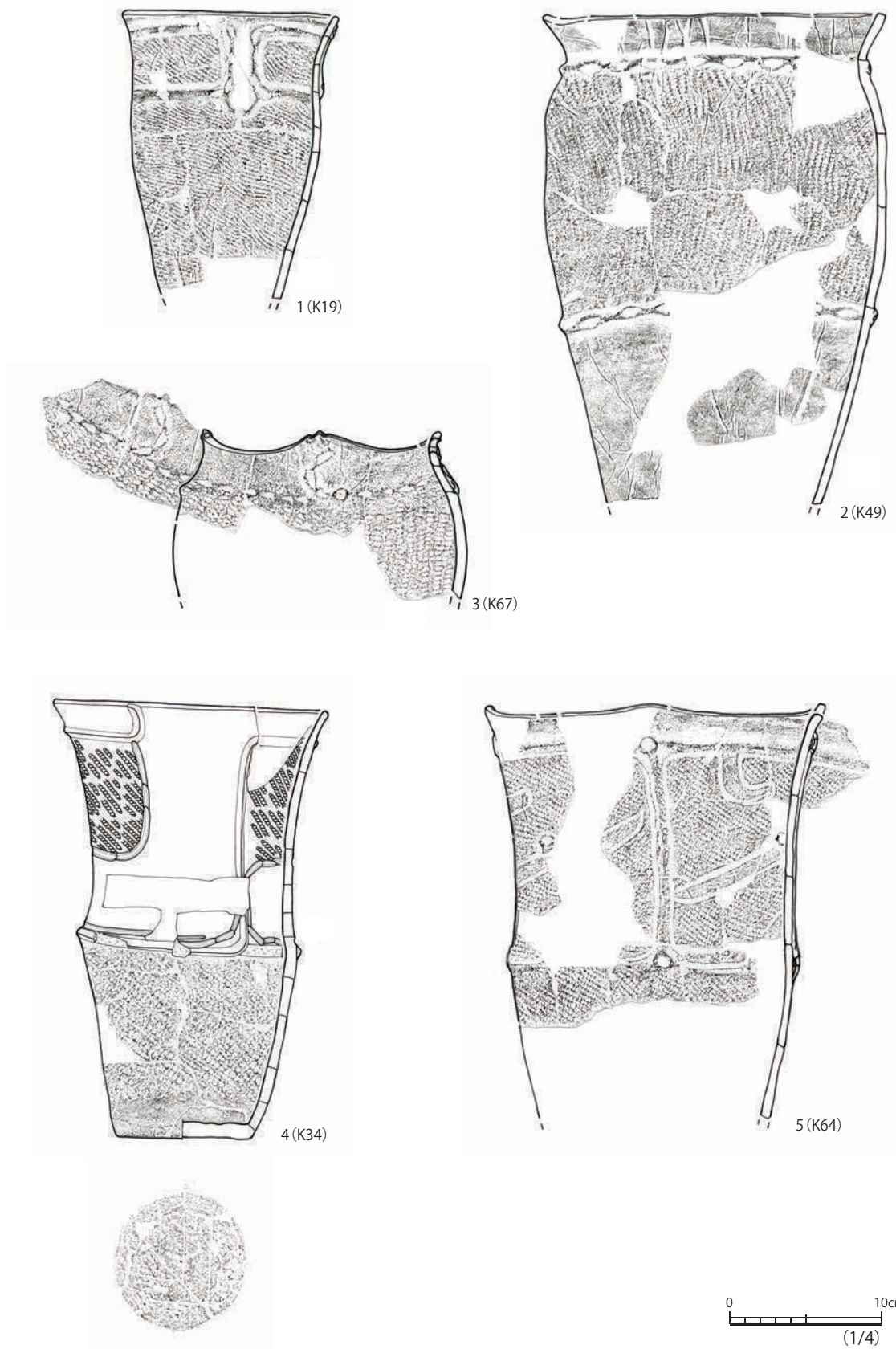
第 39 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (5)



1 (K4)



第 40 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (6)



第 41 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (7)

第72図2～6は器形、文様共に方形文系土器である。6に見られる連鎖文と縦波状文は併行する土器との関係を示している。第35図1と第43図2も方形区画を意識した施文の可能性はある。

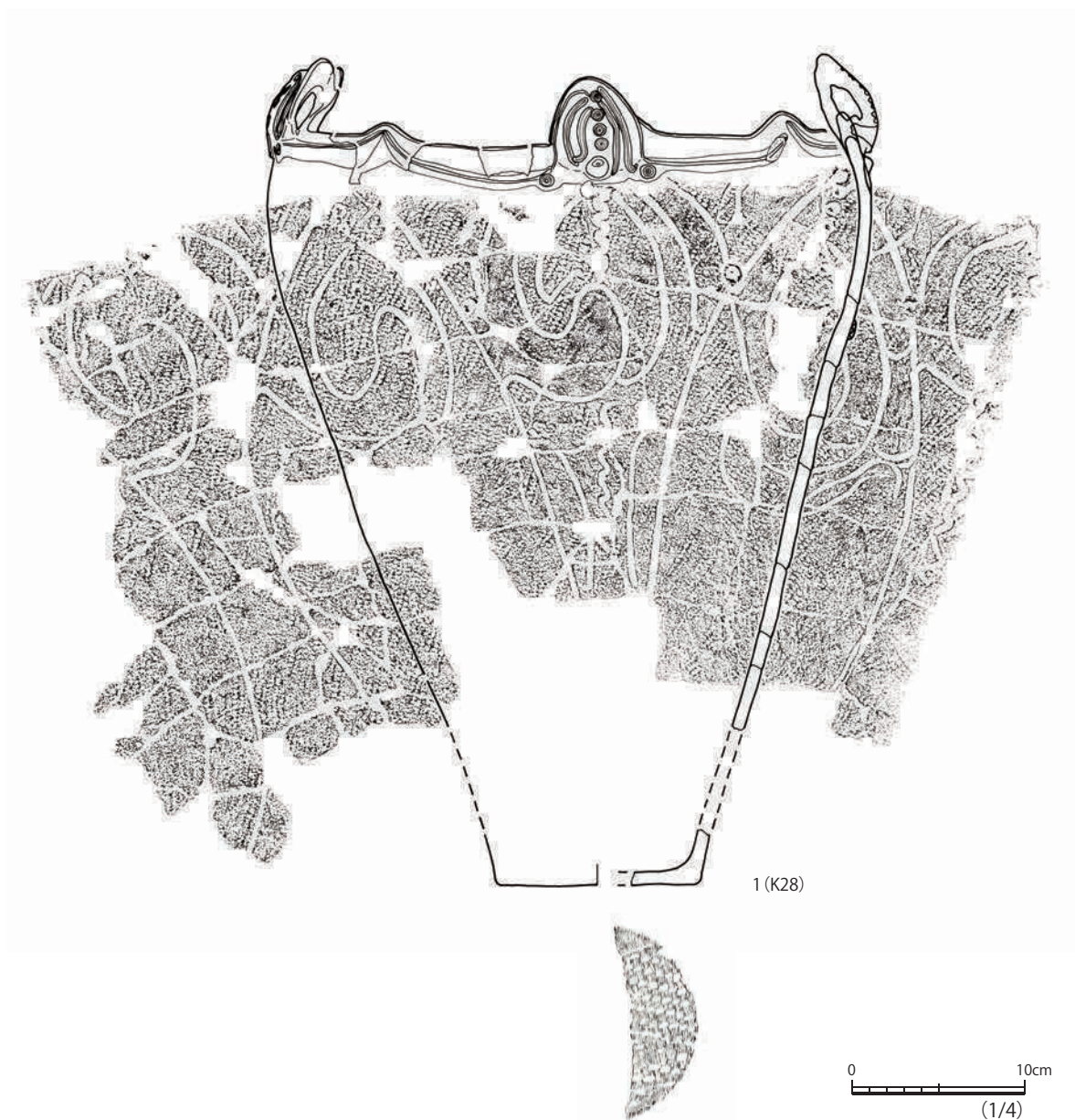
第72図7～9は、ボタン状文様や方形の隆線使用の点から、方形文の系列に入るであろう。

なお、同じ器形でも第38図2は変形渦巻文、第36図3は変形渦巻文由来かとも考えられる三角区画文が施されている。

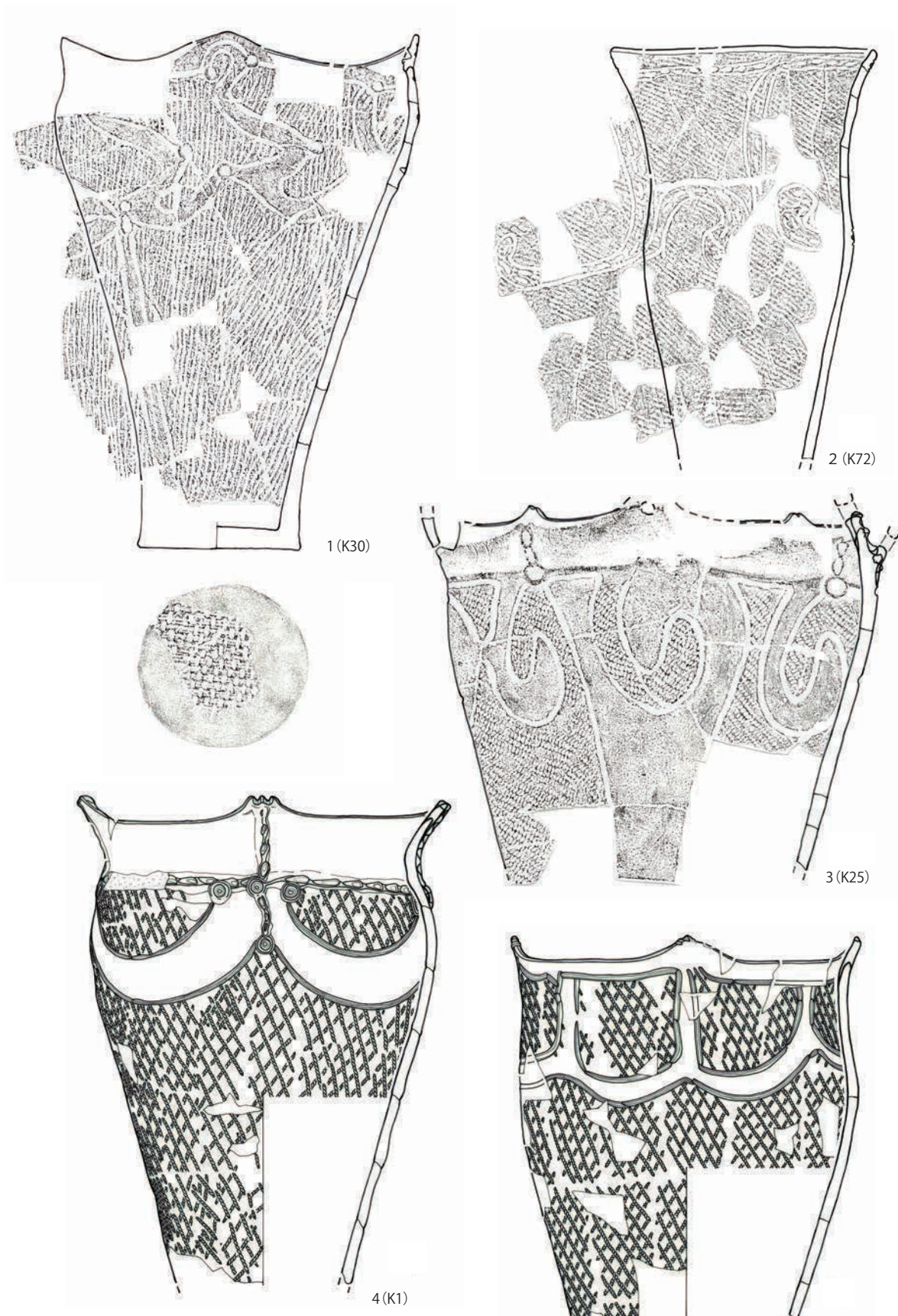
第73図1は、頸部と胴部、さらに土器上半の文様帯の縦の区画線として、連鎖文を使った希少例である。他の方形文系土器同様、燃糸文地の一部が磨り消されている。土器上半の縦区画線は、頸部から縦方向に下がり、胴部で右横方向に屈曲し、右側の縦区画線との交合点で再び縦方向に屈曲して下がっている。

2～3本の平行曲線によって磨消文を表現する土器群がある。

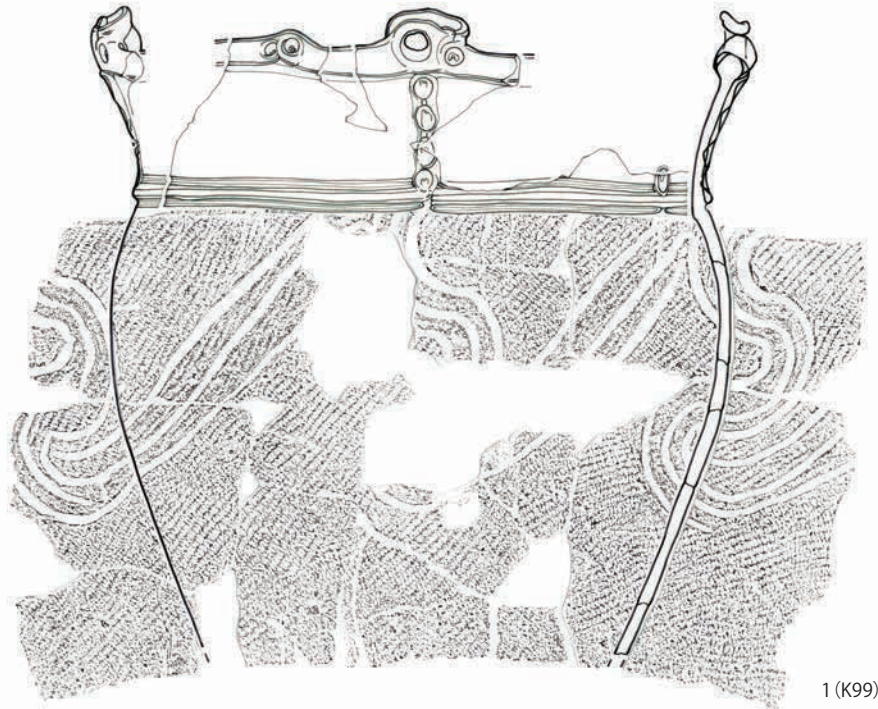
その文様は、第47図6、第48図1に見られる波状文、その発展形の第47図1・4・5、第67図1



第42図 縄文時代後期初頭～前葉の土器(8)



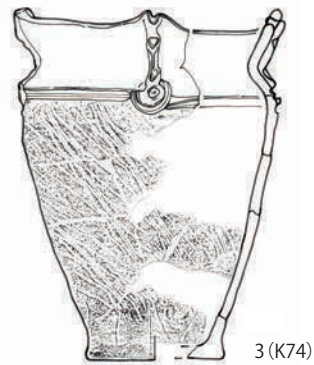
第 43 図 縄文時代後期初頭～前葉の土器 (9)



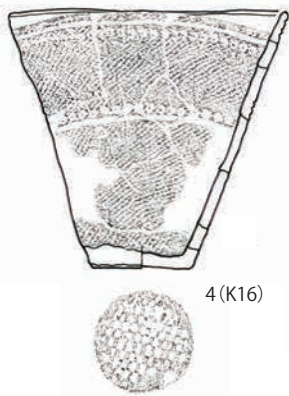
1 (K99)



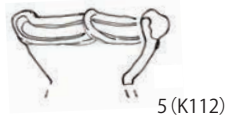
2 (K65)



3 (K74)



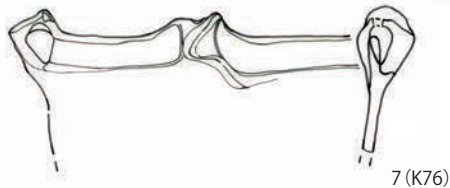
4 (K16)



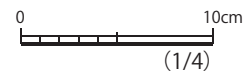
5 (K112)



6 (K103)



7 (K76)



第44図 縄文時代後期初頭～前葉の土器(10)

に見られる連続S字状文等である。

さらに、第46図2～4、第47図2・3・7～9、第48図2・3、第50図1～4、第66図1～6、第67図4～6では、斜線文、入組文等を加え複雑な反復文様を展開する。別に、第67図2・3に見られる格子状文もある。

なお、ごく少数ではあるが、同じ技法で曲線文のモチーフを直線化した文様を展開する第49図1・2や、第50図2・4、第75図4のように5本余りの平行線を加えた磨消文で飾る土器がある。

平行する複数の沈線を用い、必ずしも磨消文にこだわらない多様な文様展開をする、第68～71図に示した土器群がある。

第68図1・2の蕨状文を縄文地や無地に数段展開するもの。第68図5・6、第69図1～5の3本以上の沈線を使用する半円と直線の組み合わせによって文様を描出するもの。第69図6～13、第70図1・2・4、7～10・15、第71図1・2の2～3本の直線や円状文を組合わせて縄文地に施文するもの。第70図3・5・6は口縁突起部に刺突文や刻み文が見られる。第70図11～13は幾何学的磨消文が施される。

また、第46図5、第71図3～11・13・14のように、無文地に曲線文を展開する例もある。

なお第72・73図には、類例過少、残存部も過小のため分類不明であるが、後期前葉に比定されるものを一括している。

縄文時代後期前葉～中葉の土器(第45～50図、第75～78図 図版25・26)

第45図1、第75図1～3は、磨消文の縄文部に多数の平行線を引き、平行線と交差する直線、弧線、S字線で縄文帯を区切る文様が盛行する。

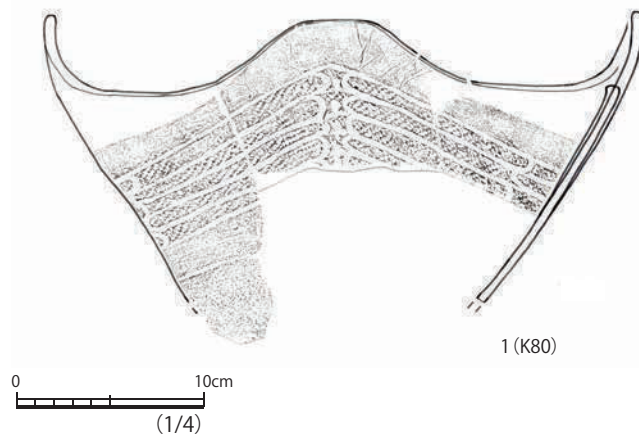
また第75図5～7、第76図1～3では、磨消文の縄文部の区画線の内側沿いに点線を描く文様がある。台付鉢等の特殊なものに付く特徴的な文様であり、出土数は少ない。なお、第50図6、第78図8・9に見られる隆帯に太めの刻みを加えた装飾もこの時期の特徴の一つである。

壺や台付鉢形土器等は、曲線を多用する磨消文で飾られる。第76図8、第77図1～3に見られる従来の単調なものに加え、第76図4～7、第77図4～10、第78図7・12では複雑だが流麗な曲線文が考案される。同様の文様は、第77図12・13の鉢類にも施文されている。

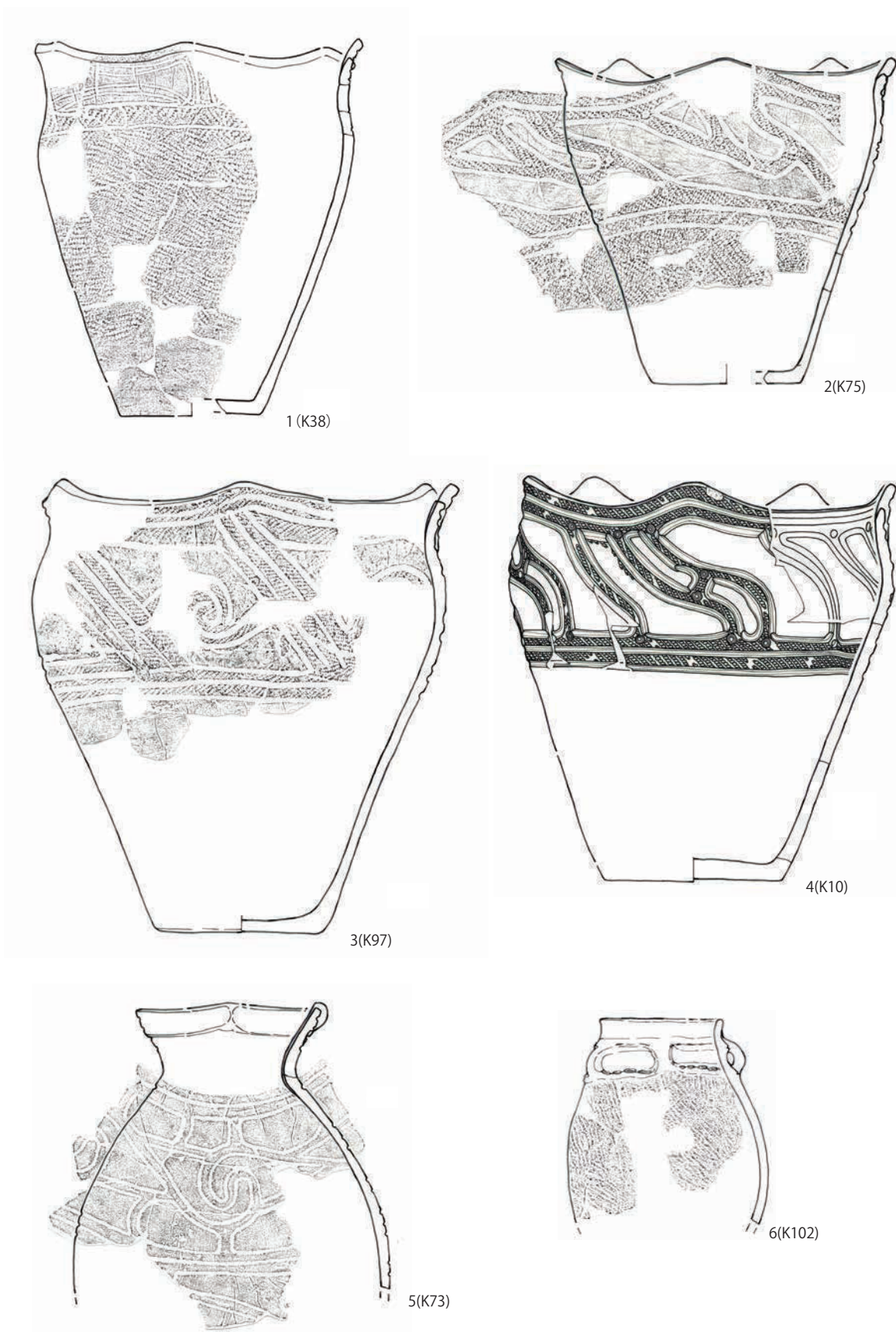
第78図1～6に示した小形の壺には、無文地に新種の文様が浮彫り風に施文されている。

縄文時代後期後葉の土器(第52・79・80図)

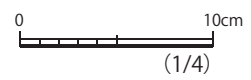
後期後葉になると、第52図1、第79・80図に見られるように、大柄な磨消文に替わり、小単位の文様を上下左右に連続展開するものが流行する。

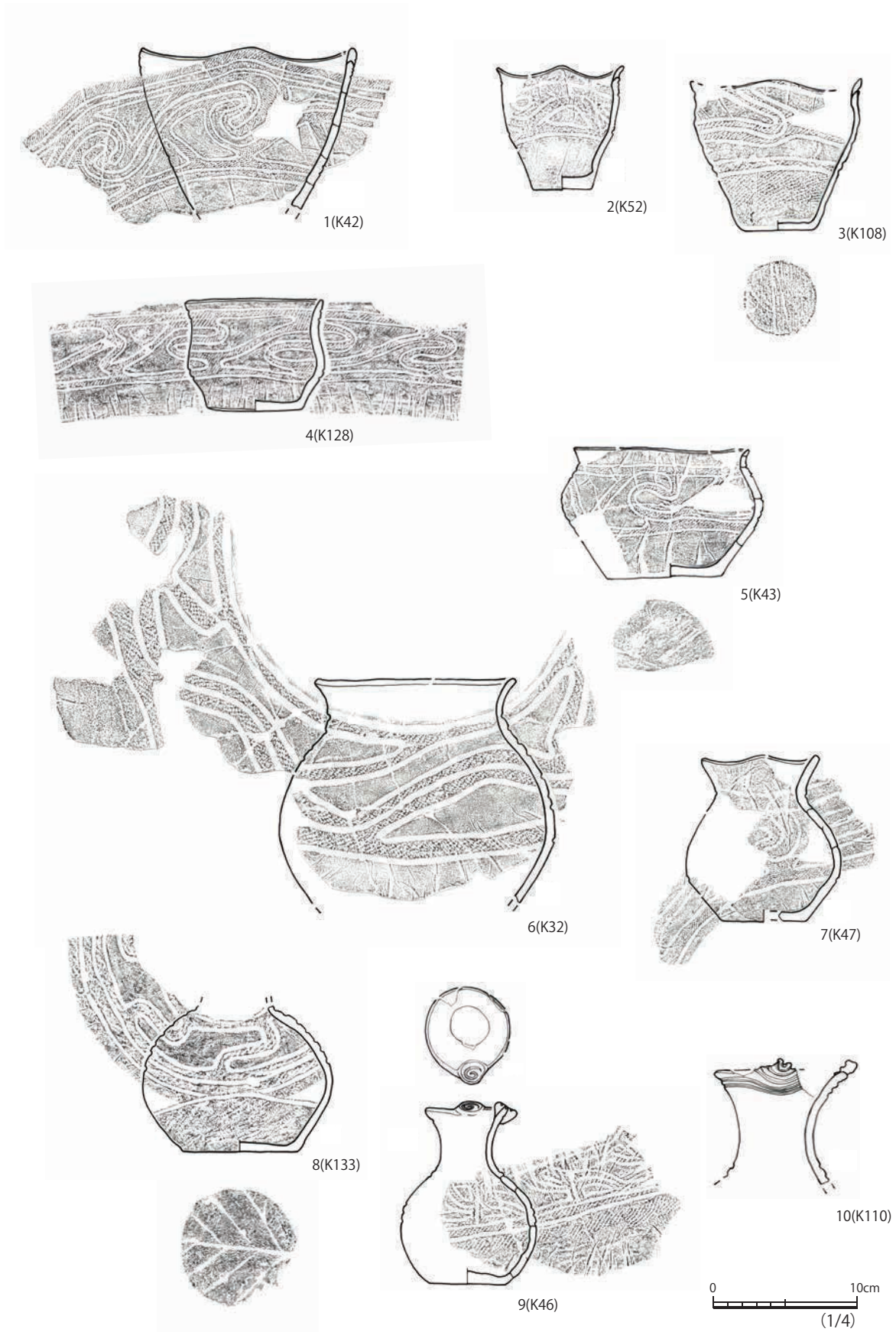


第45図 縄文時代後期中葉の土器

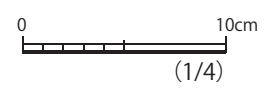
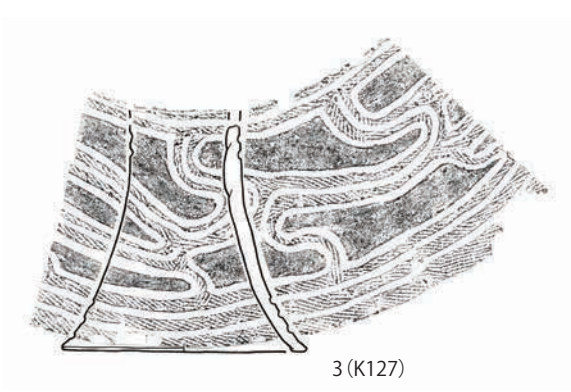
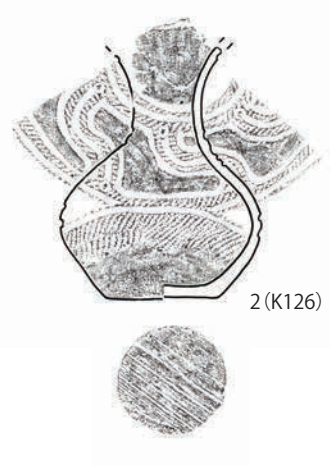
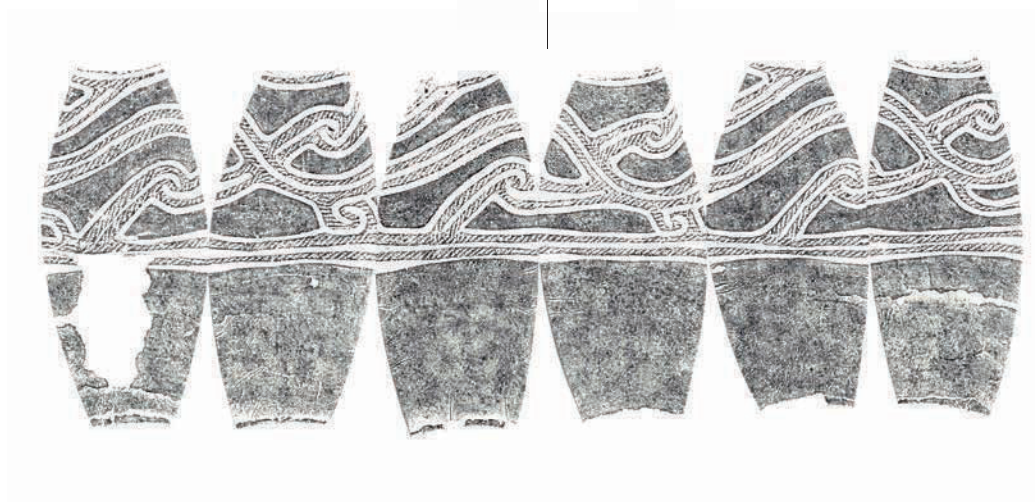
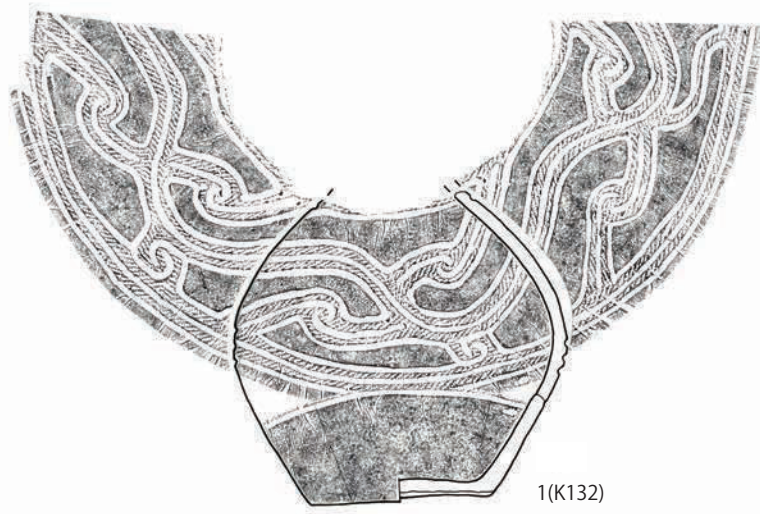


第46図 縄文時代後期前葉～中葉の土器(1)





第 47 図 縄文時代後期前葉～中葉の土器 (2)



第 48 図 縄文時代後期前葉～中葉の土器 (3)

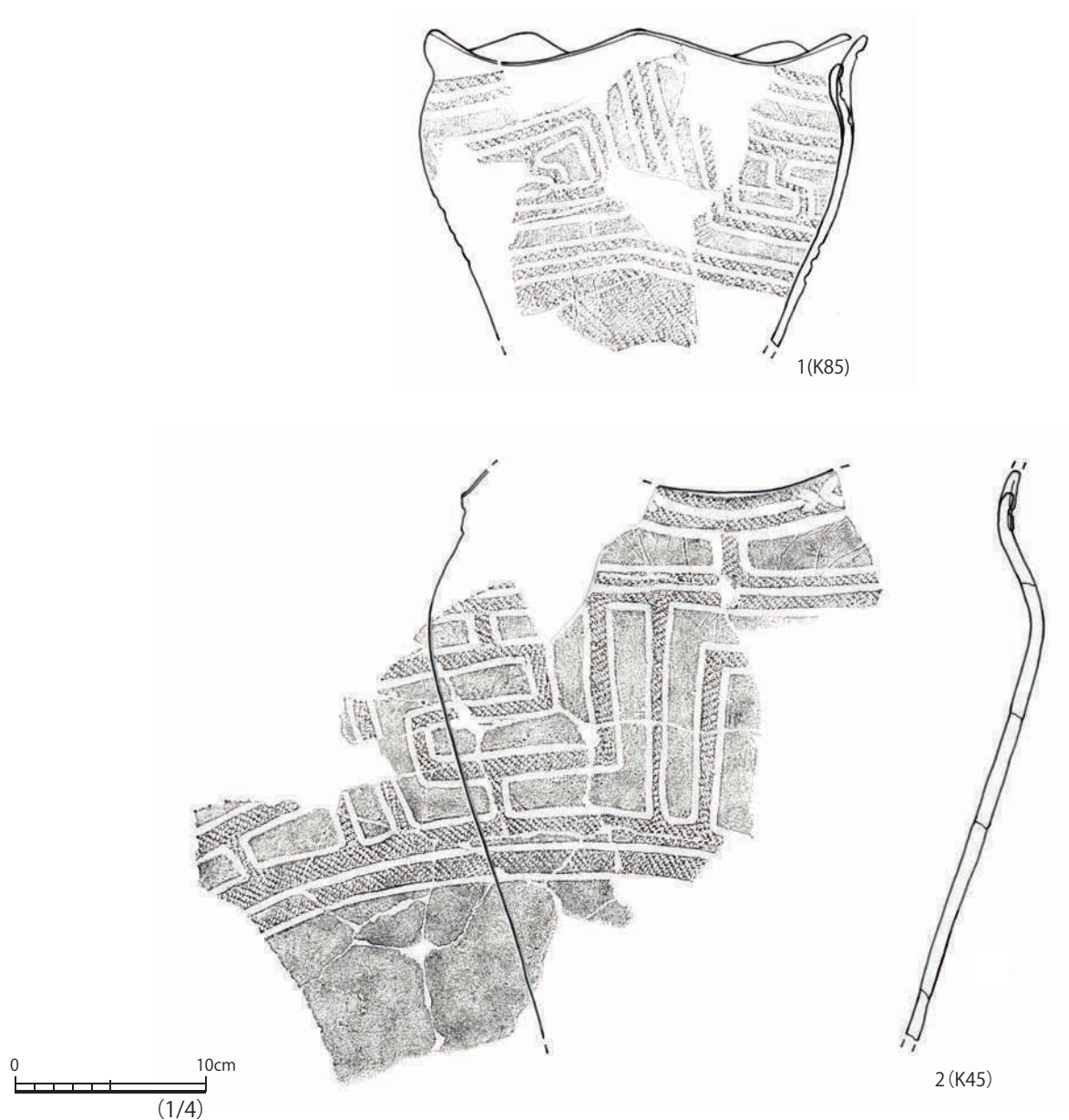
文様により2つのグループに分かれる。一つは瘤付文様の群、他は瘤なしの群である。

第79図1～14などの瘤付群は、弧線で囲った長楕円形の文様単位を、上下左右に連結展開する。長楕円部は、刻み・沈線・擦痕・縄文・撚糸等で埋めて、全体的には磨消文としている。長楕円部の中や端部等に瘤状の突起が付く。口縁部外側には瘤状突起より大きい縦長の突起が付く。この群の土器の口縁は平らである。

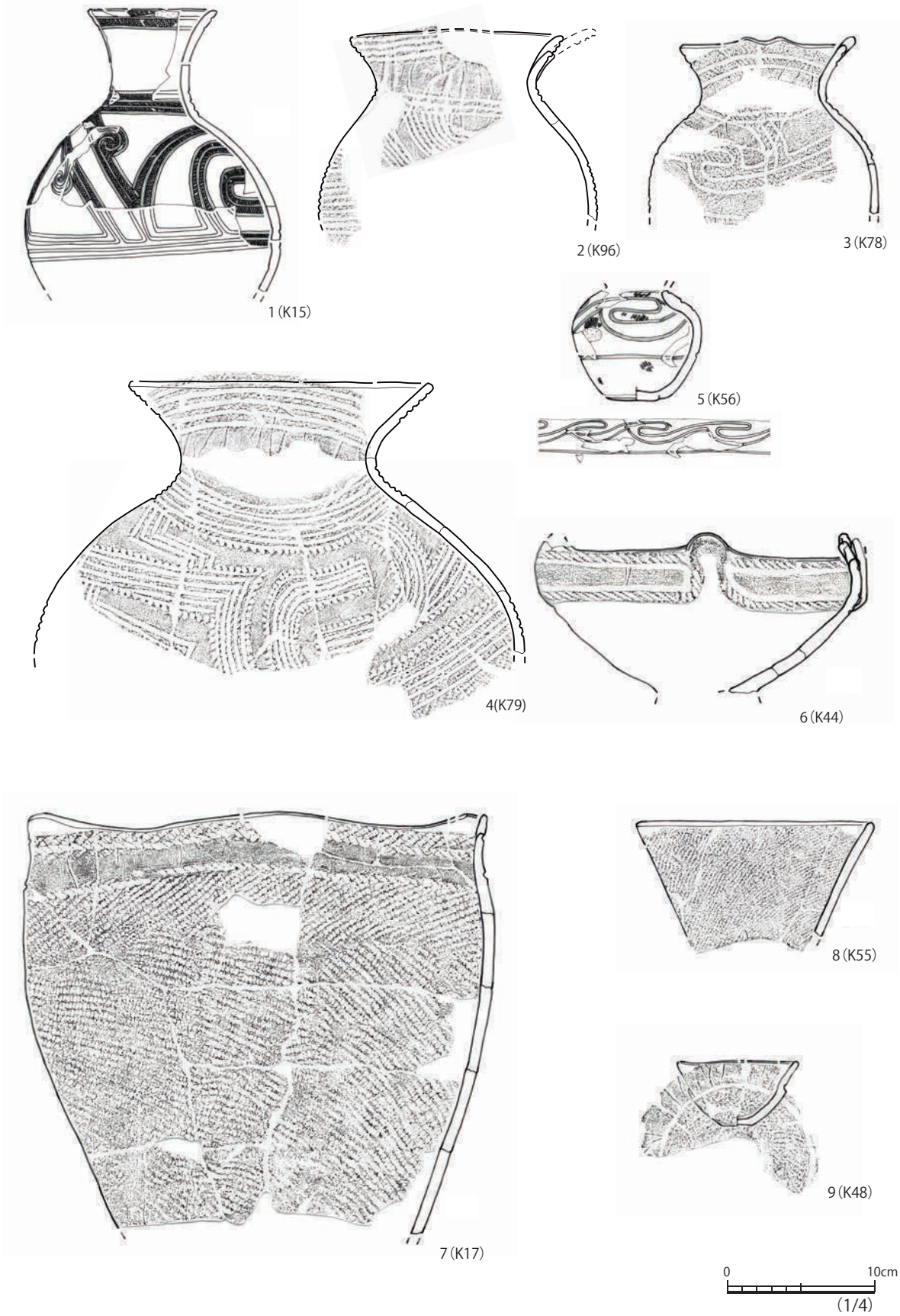
これとは対照的に、第52図1、第80図1～7などの瘤なし群は、口縁が山形突起で飾られるものの、体部には瘤状突起がない。また、体部文様は連続性のある磨消文である。

蓋他 (第51図 図版26)

1は、環状のつまみ部が残る蓋と推定される。2は、口縁部が鑿上に張り出し、2か所に橋状突起が付く小形の注口土器である。体部には方形状区画文が見られ、橋状突起には剥離痕が見られることから、上

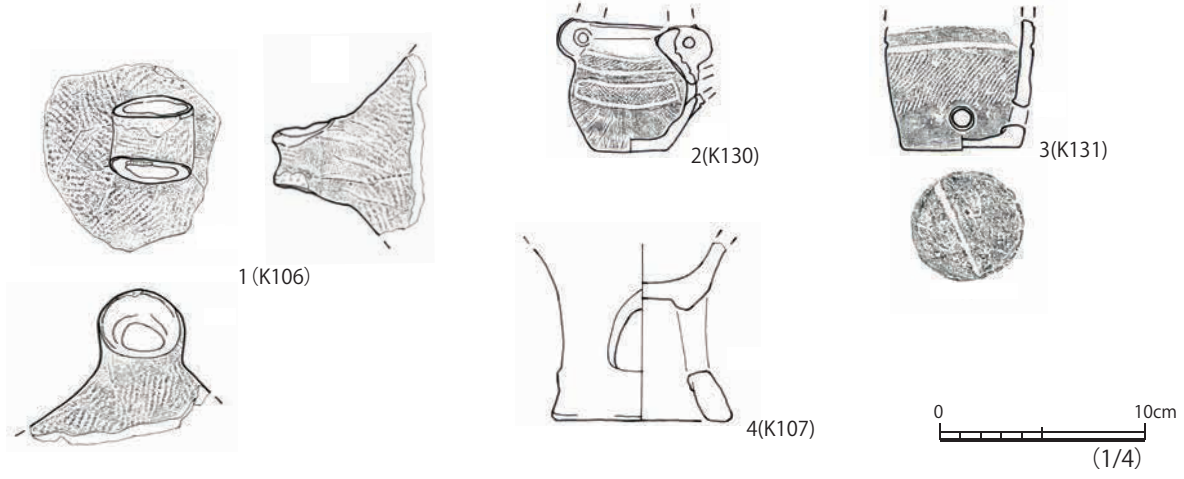


第49図 縄文時代後期前葉～中葉の土器(4)

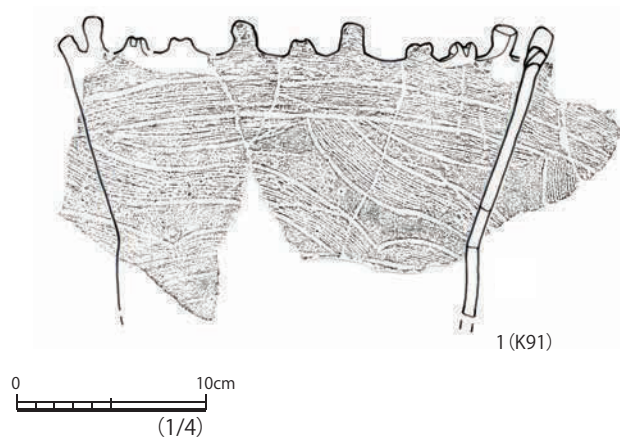


第 50 図 縄文時代後期前葉～中葉の土器 (5)

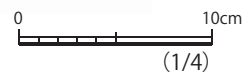
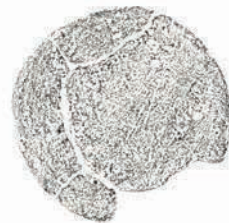
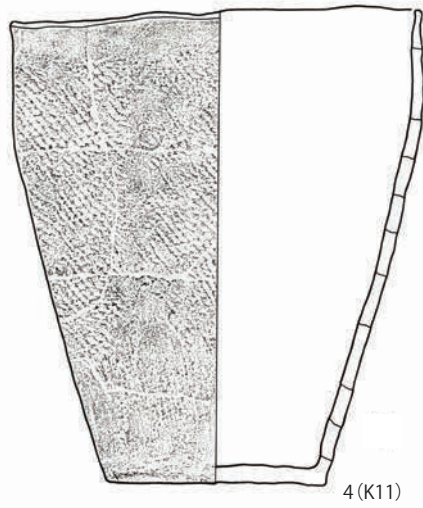
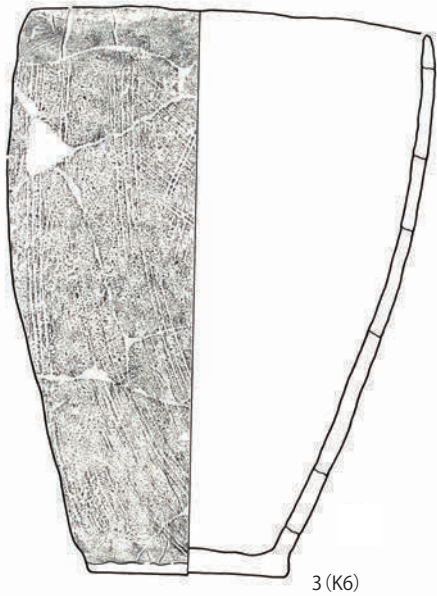
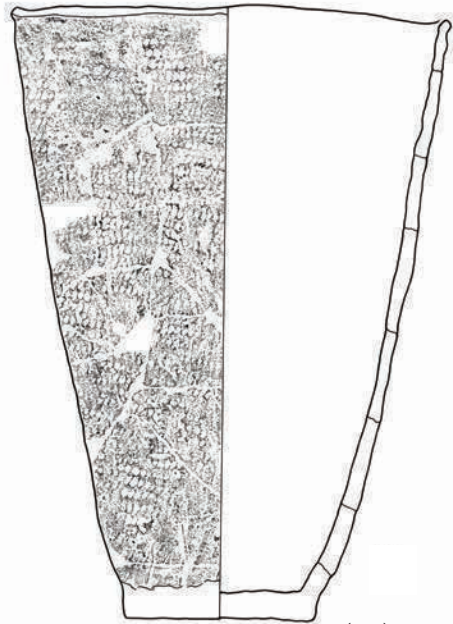
部には装飾が施されていたと推定される。3は、筒状の胴下部に貫通孔があり、単孔土器と見られる。4は、4か所に透かし孔がある高環形土器の台部分である。



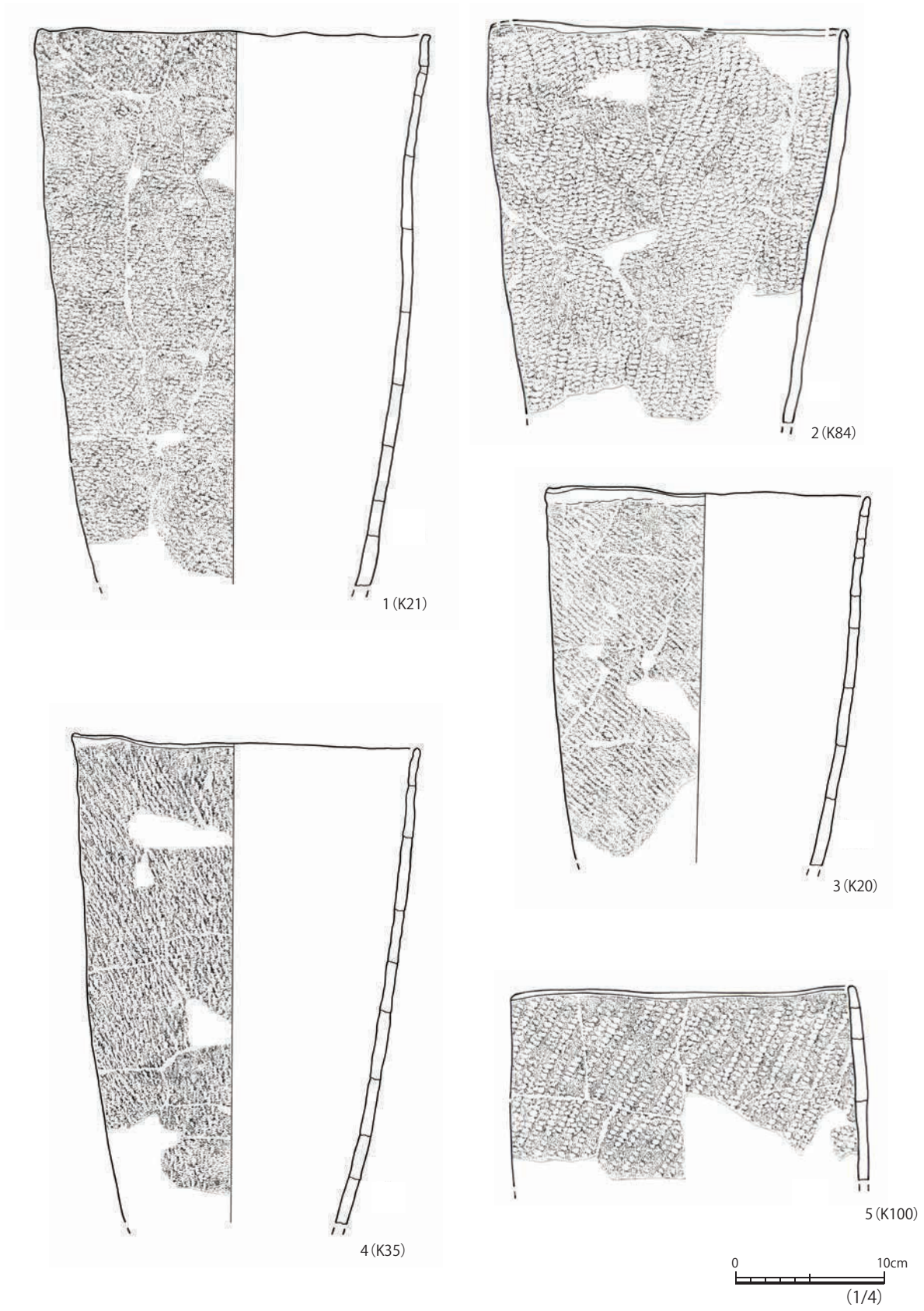
第51図 蓋 他



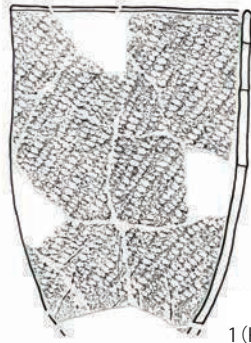
第52図 縄文時代後期後葉の土器



第 53 図 粗製土器 (1)



第 54 図 粗製土器 (2)



1 (K59)



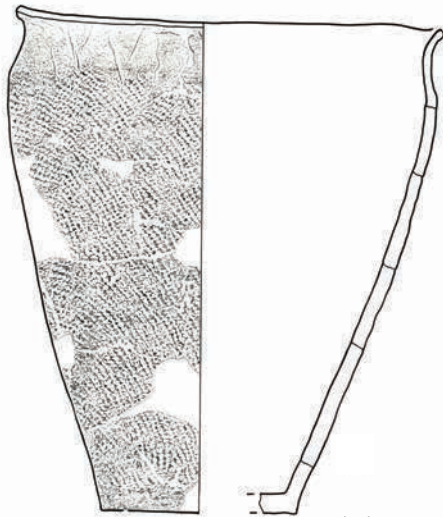
2 (K61)



3 (K114)



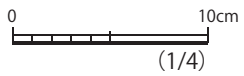
5 (K40)



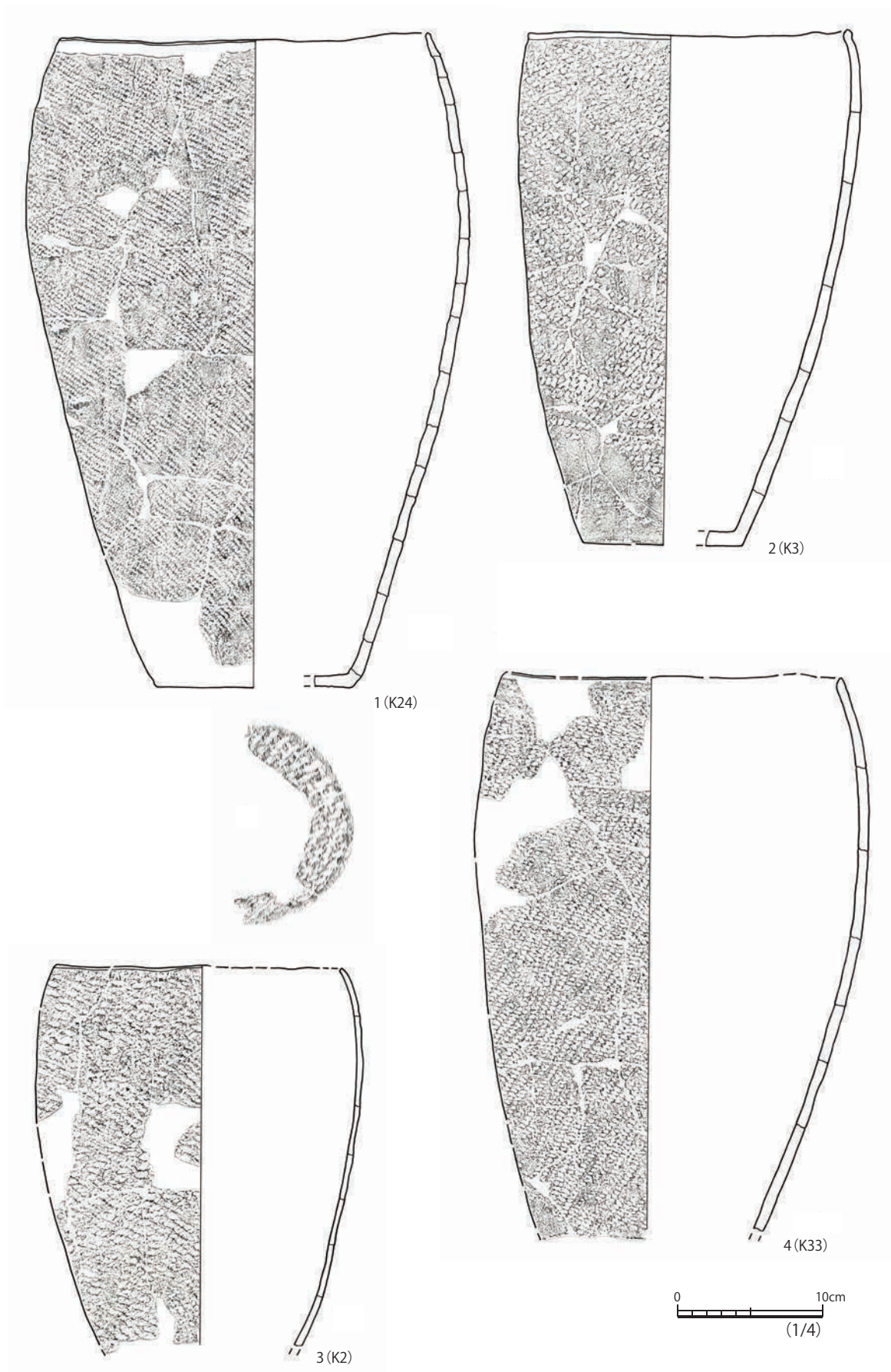
4 (K9)



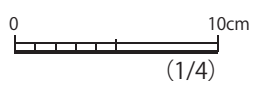
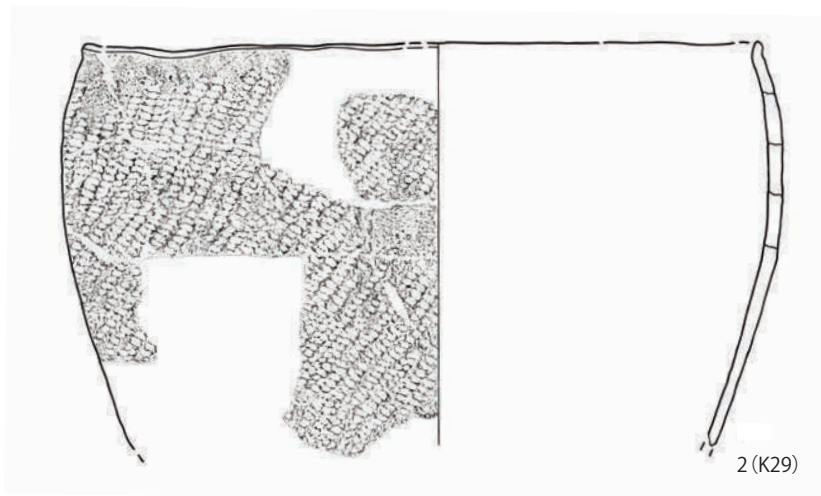
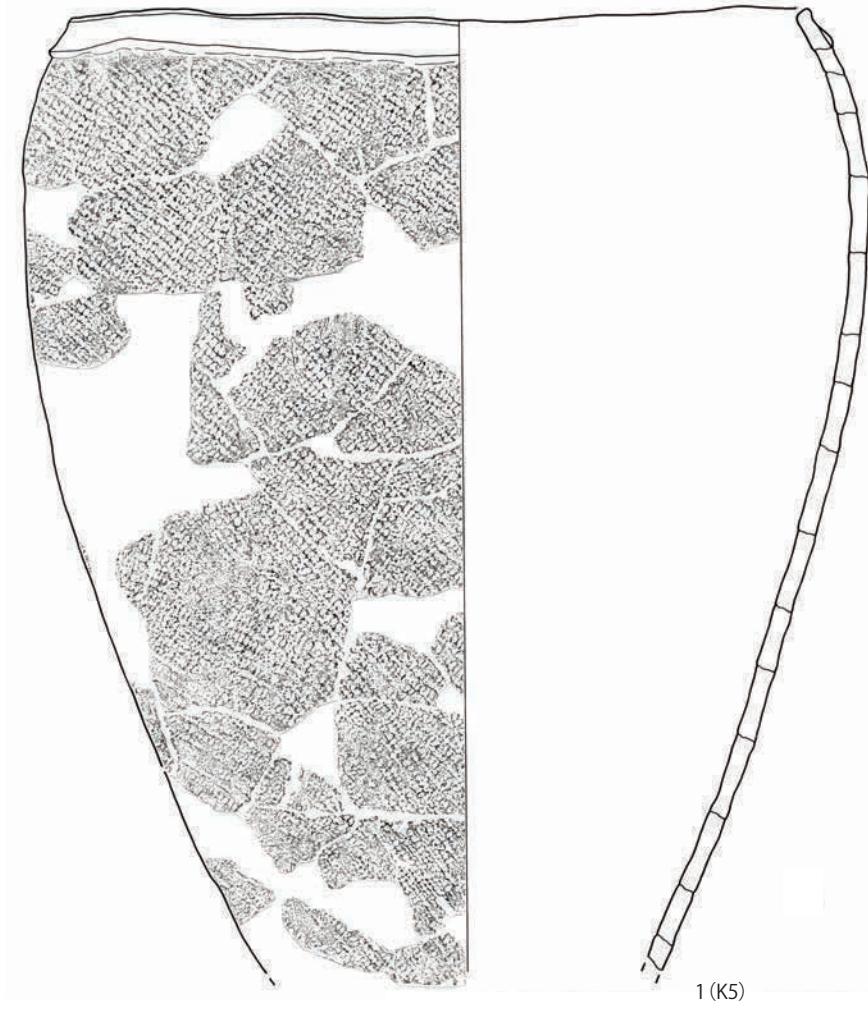
6 (K39)



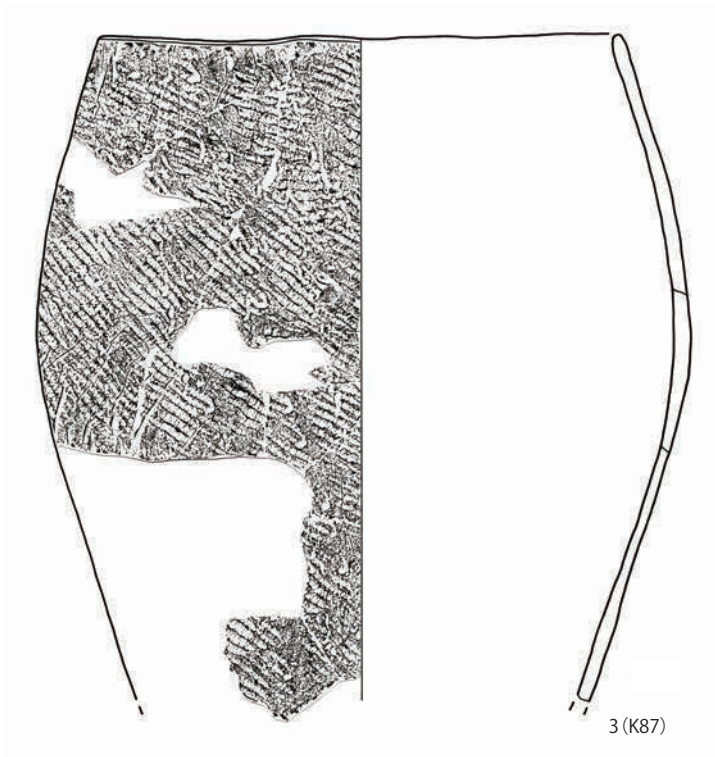
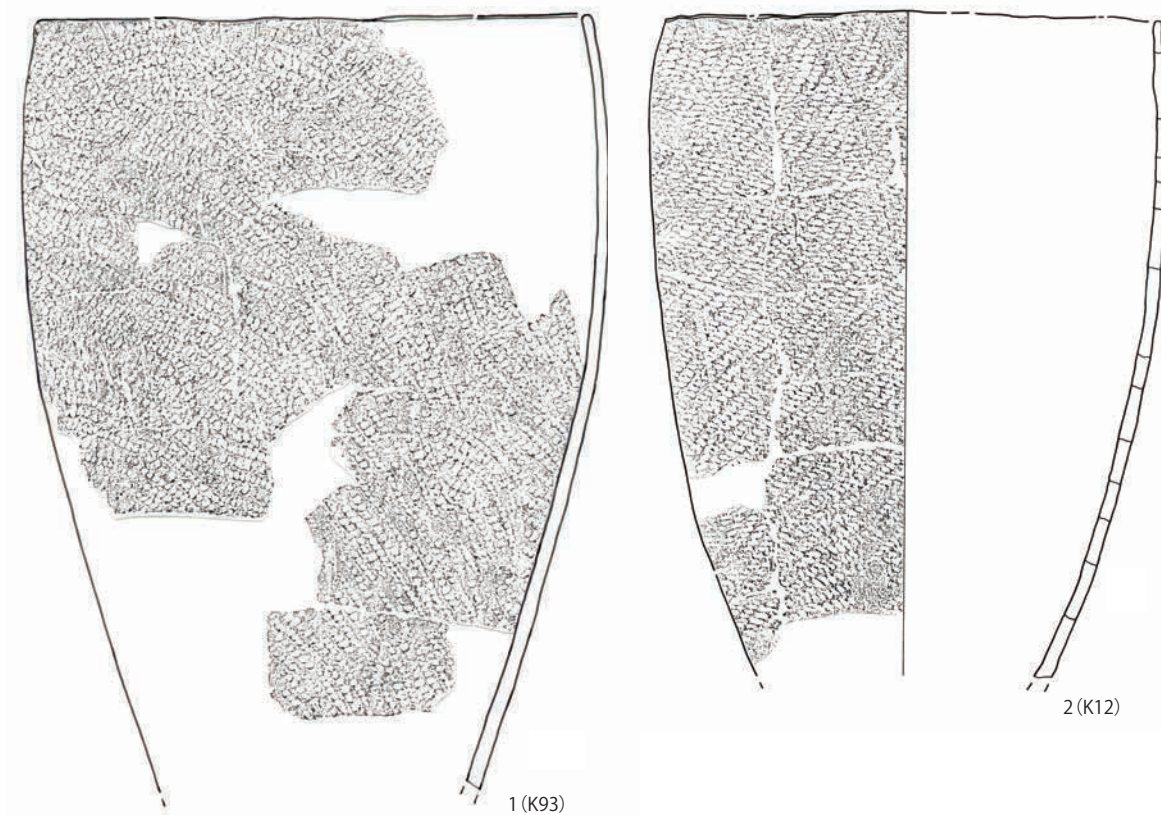
第 55 図 粗製土器 (3)



第 56 図 粗製土器 (4)



第 57 図 粗製土器 (5)

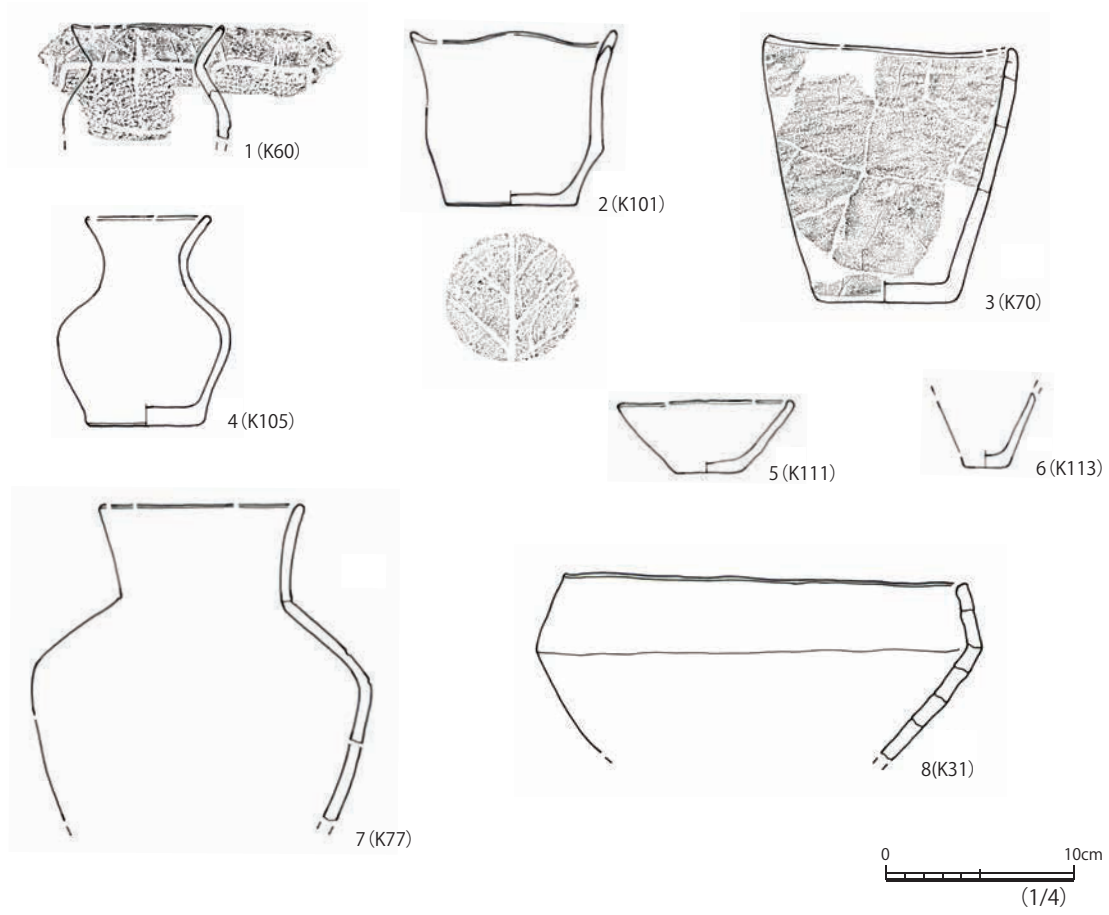


0 10cm
(1/4)

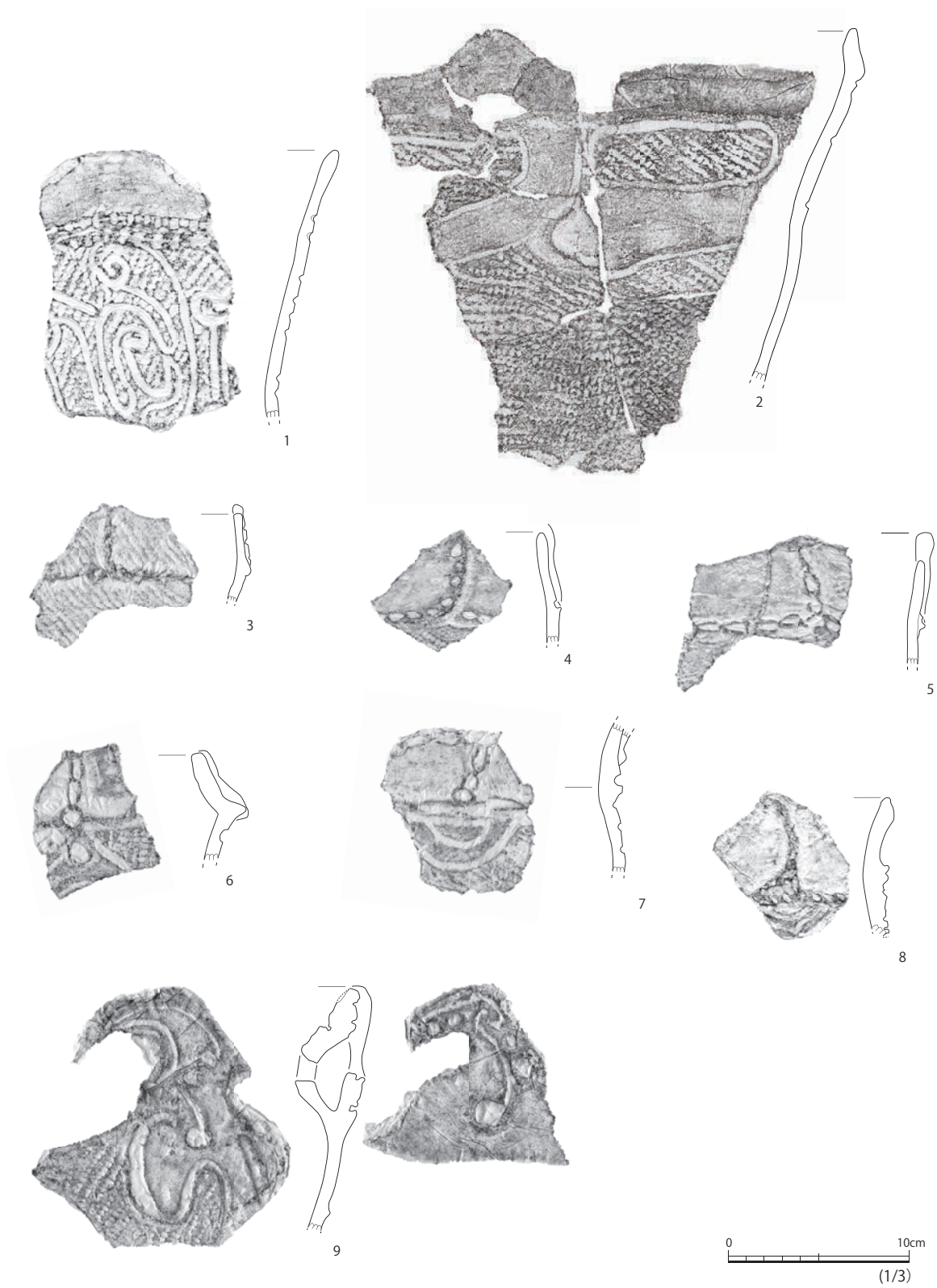
第 58 図 粗製土器 (6)



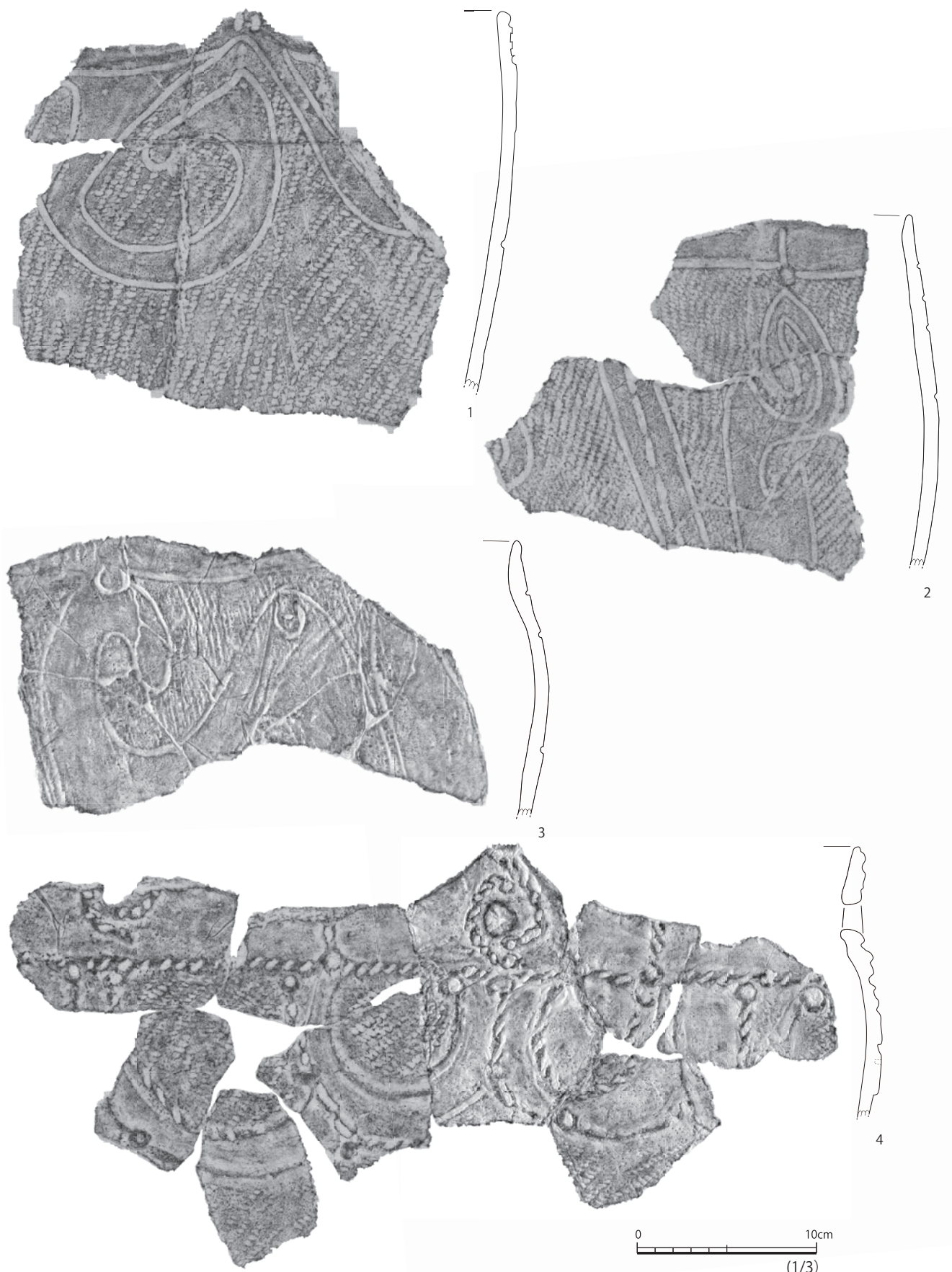
第 59 図 粗製土器 (7)



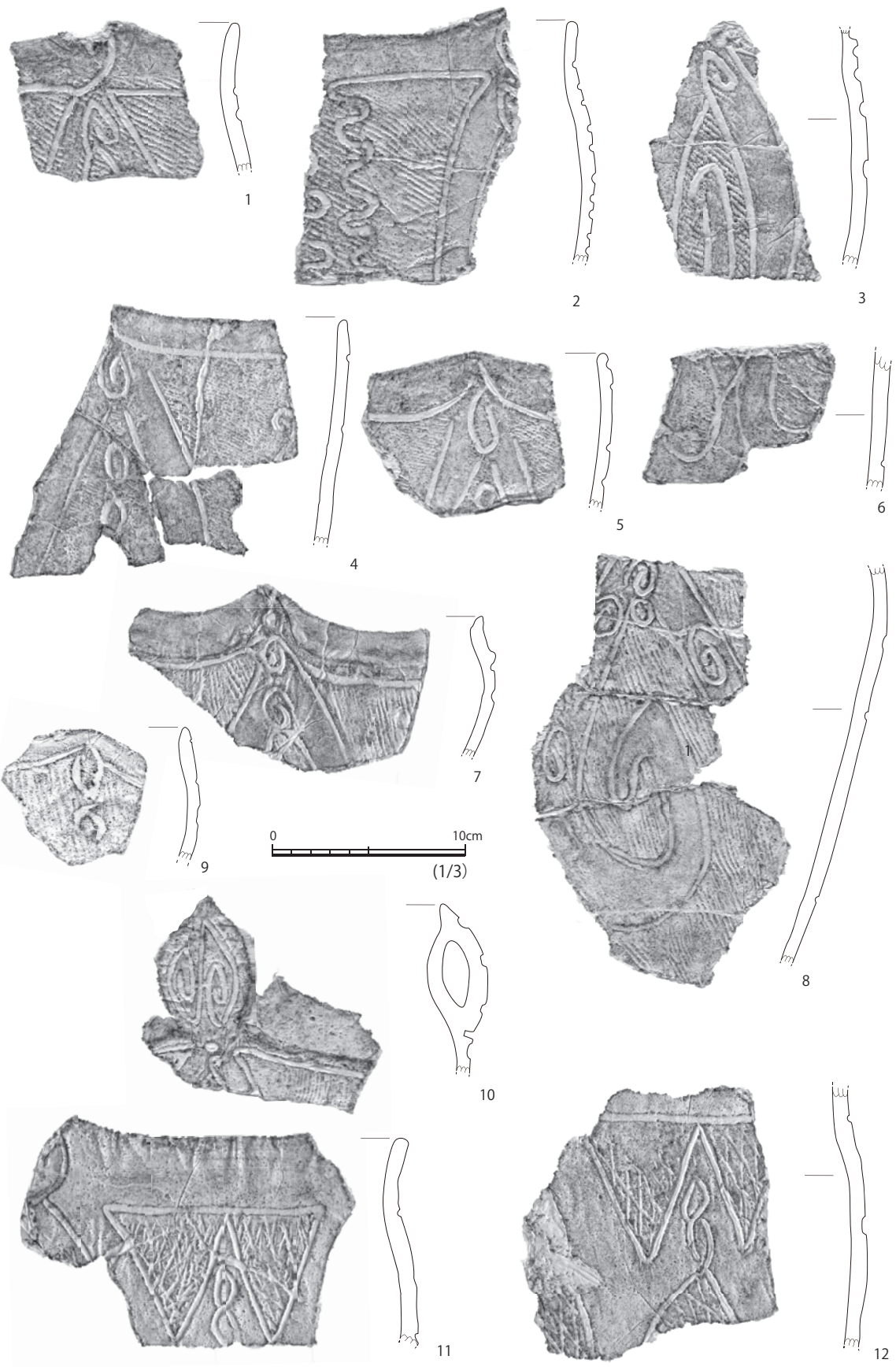
第 60 図 粗製土器 (8)



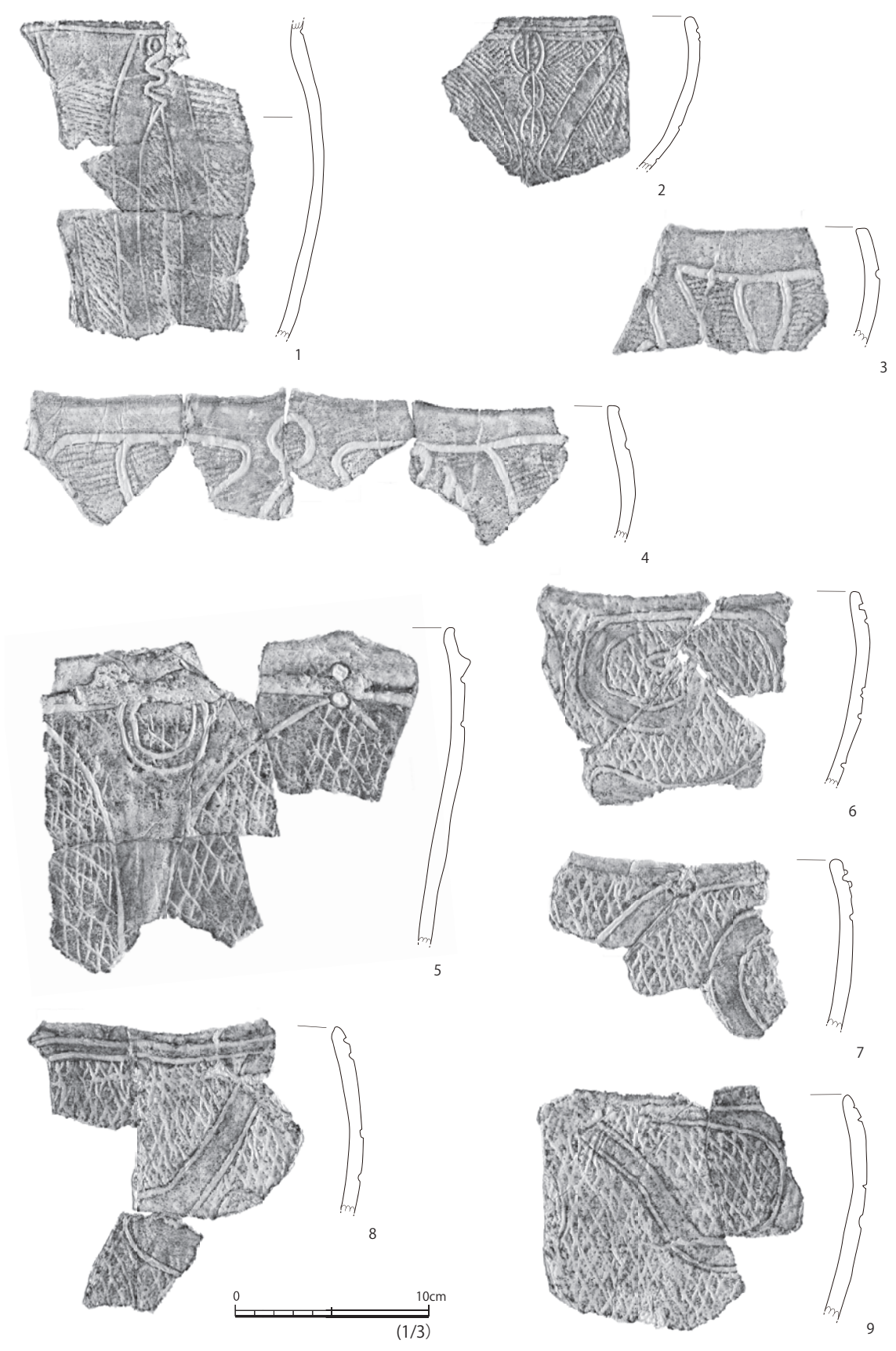
第 61 図 縄文時代中期末葉、後期初頭～前葉 (1)



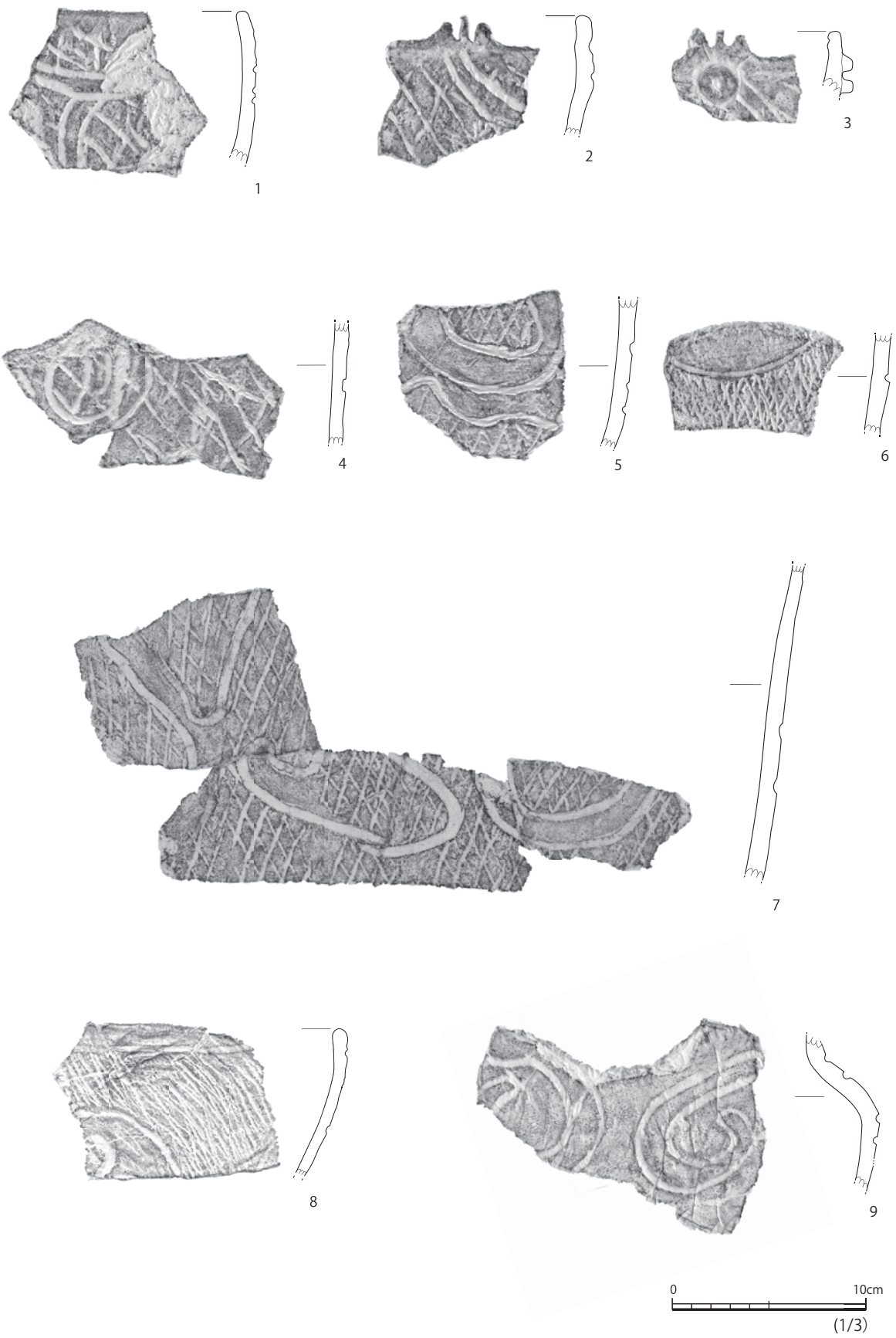
第 62 図 縄文時代後期初頭～前葉 (2)



第 63 図 縄文時代後期初頭～前葉 (3)



第 64 図 縄文時代後期初頭～前葉 (4)



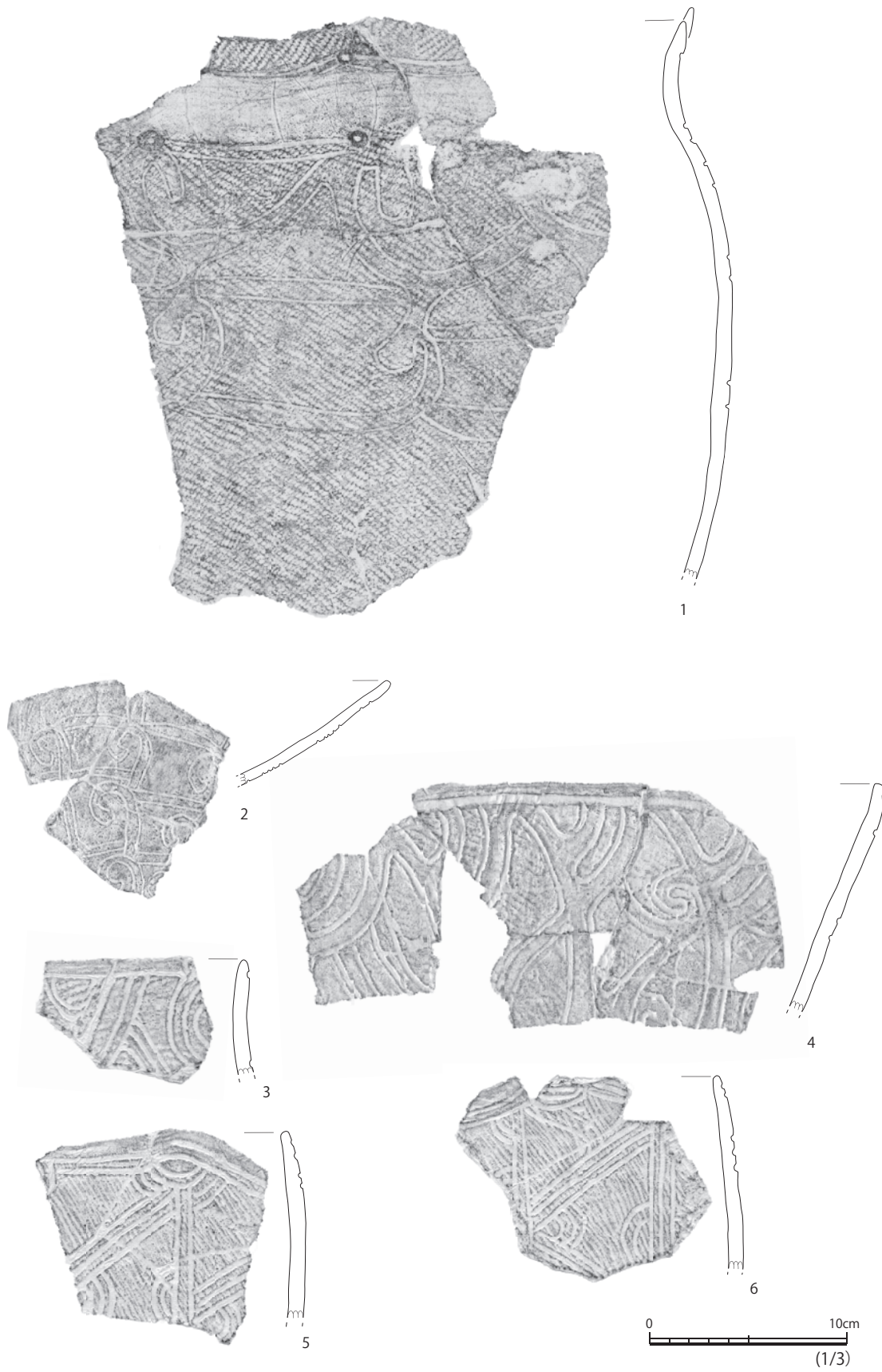
第 65 図 縄文時代後期初頭～前葉 (5)



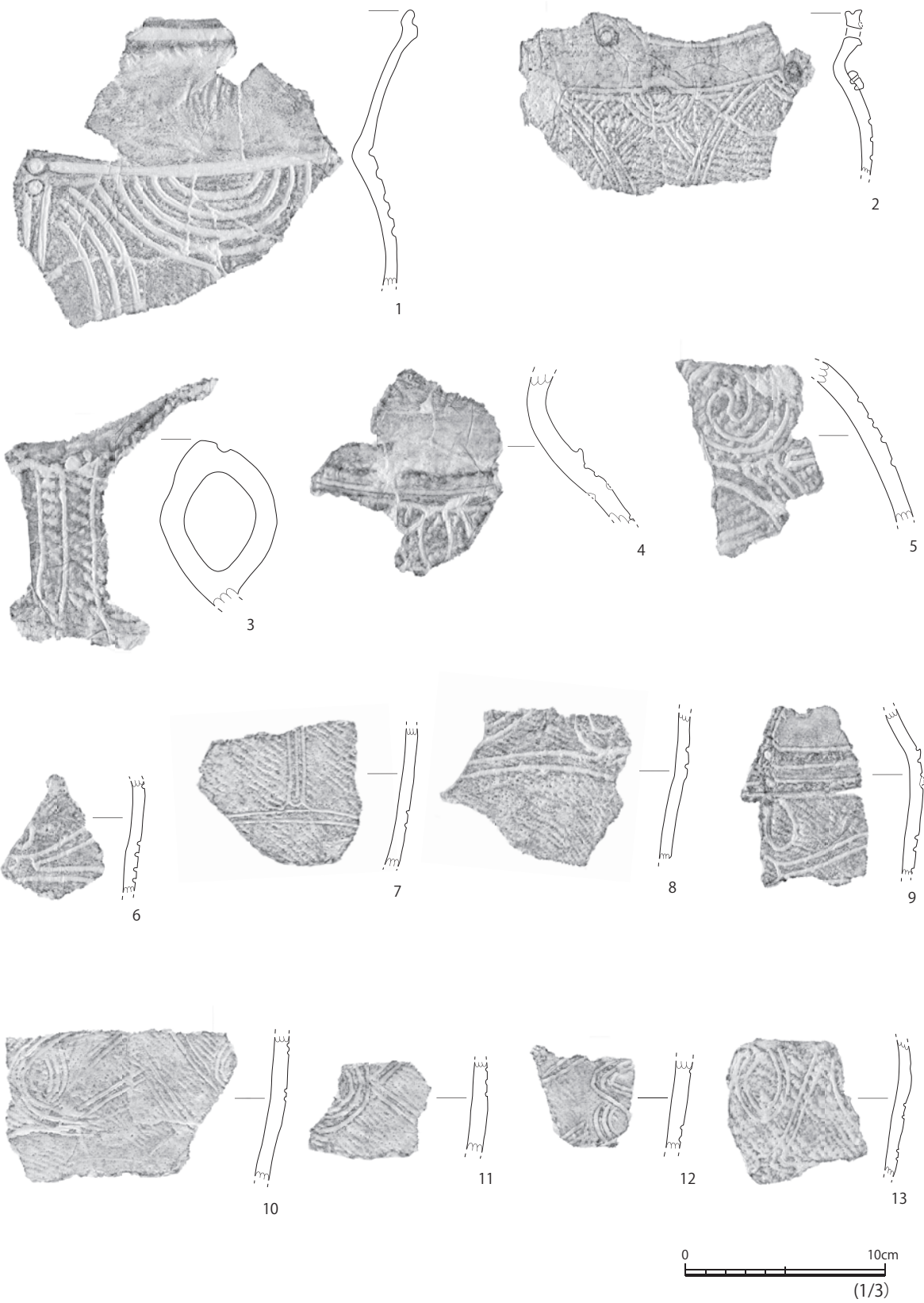
第 66 図 縄文時代後期初頭～前葉 (6)



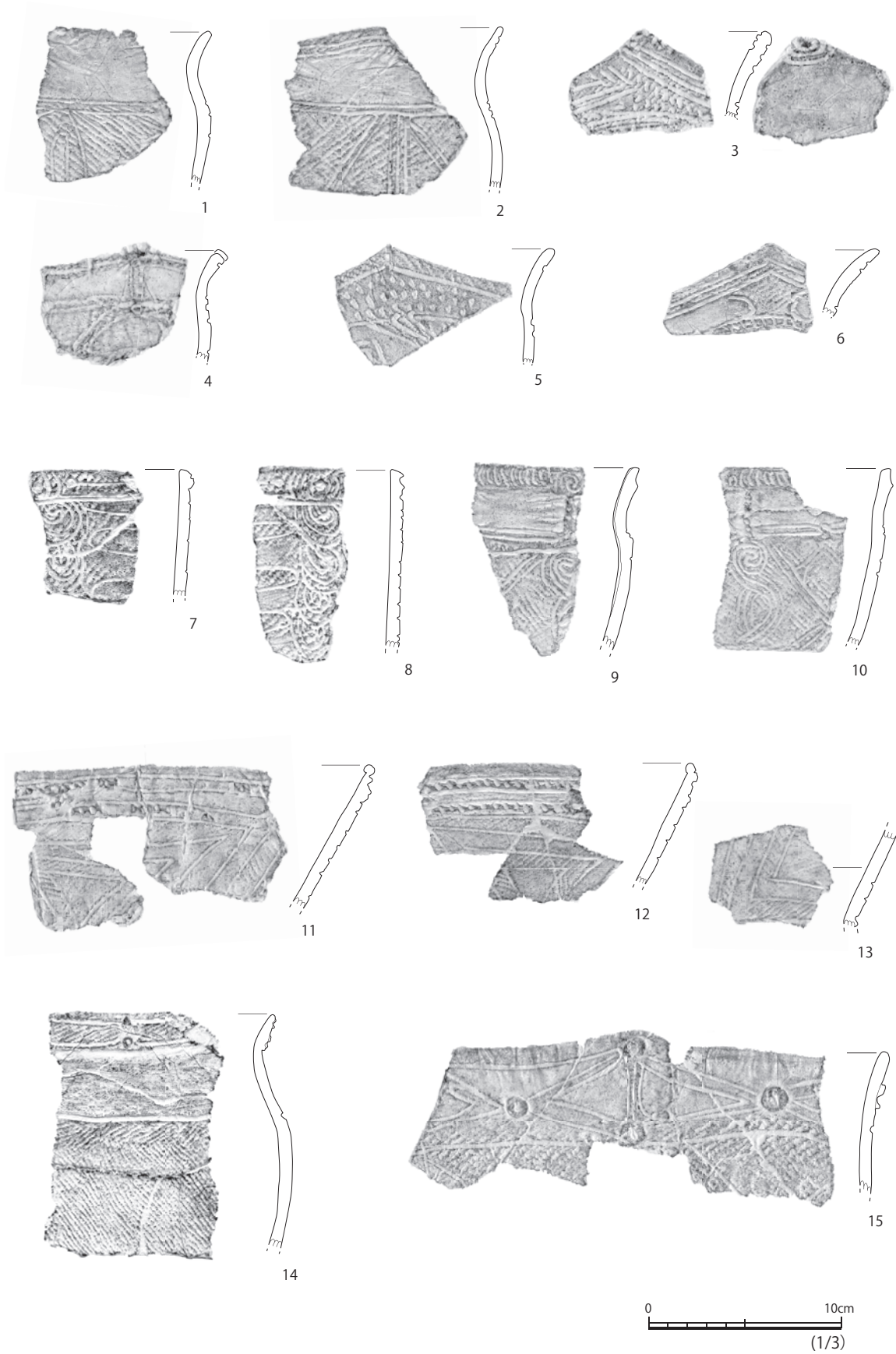
第 67 図 縄文時代後期初頭～前葉 (7)



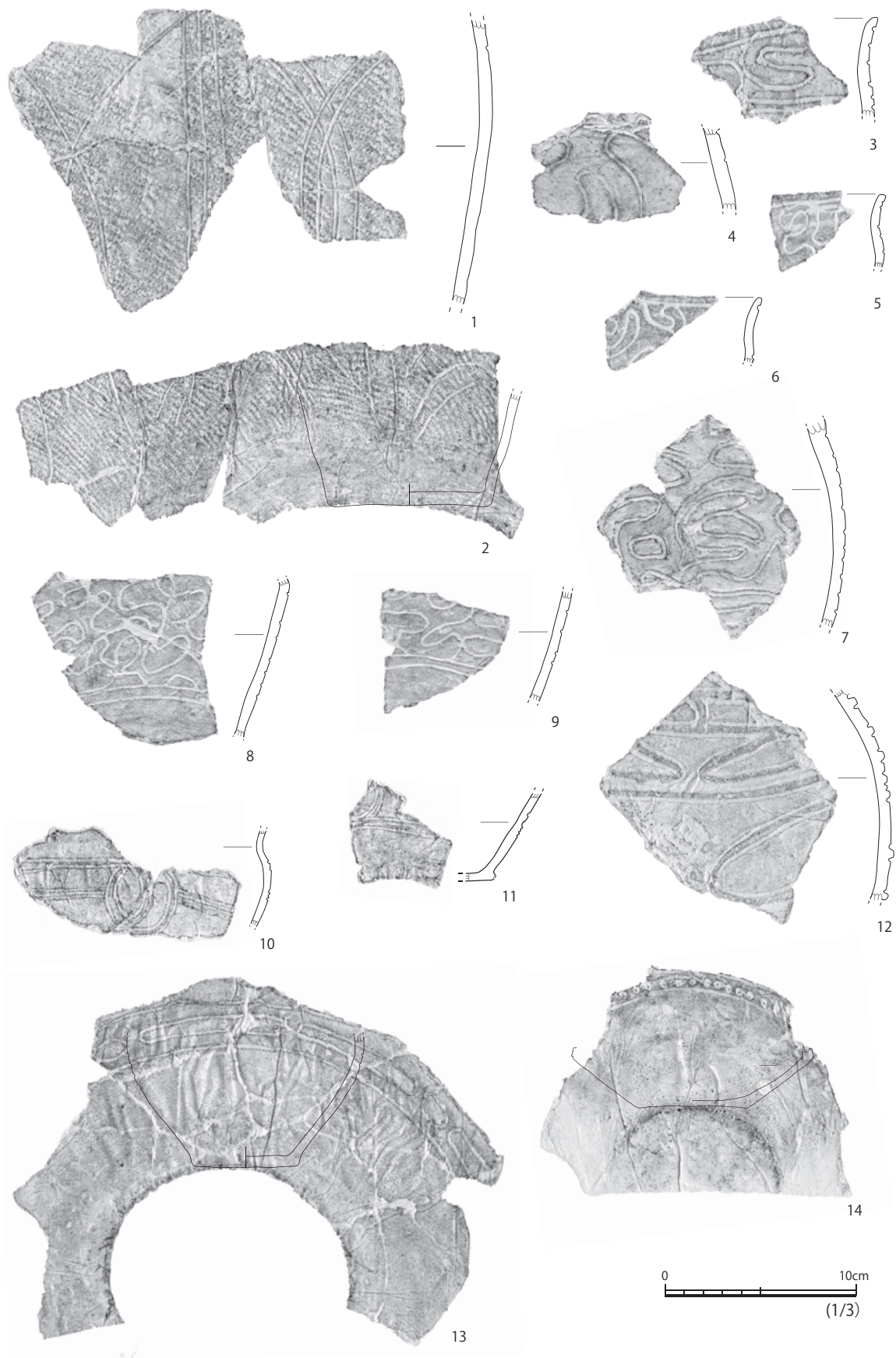
第 68 図 縄文時代後期初頭～前葉 (8)



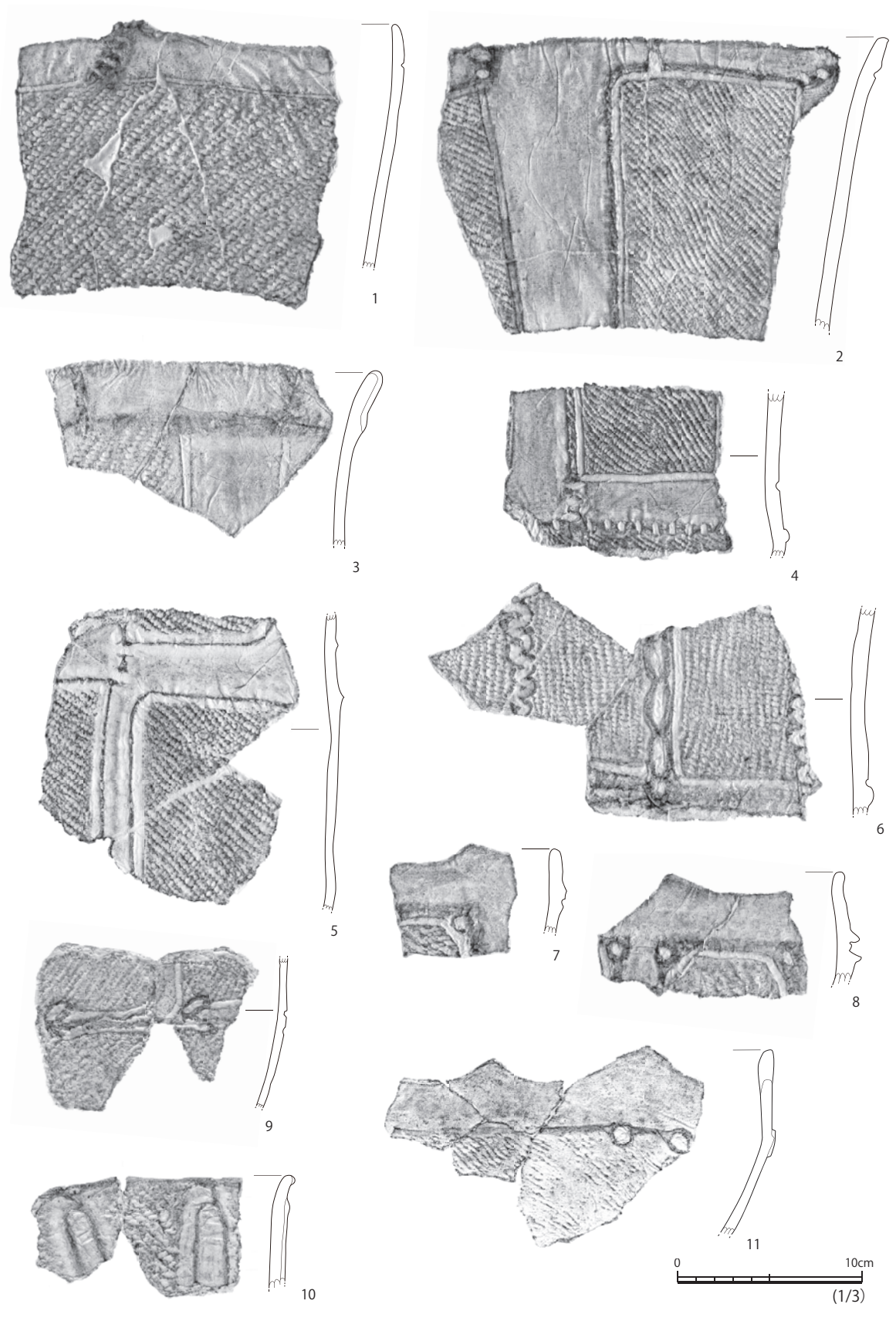
第 69 図 縄文時代後期初頭～前葉 (9)



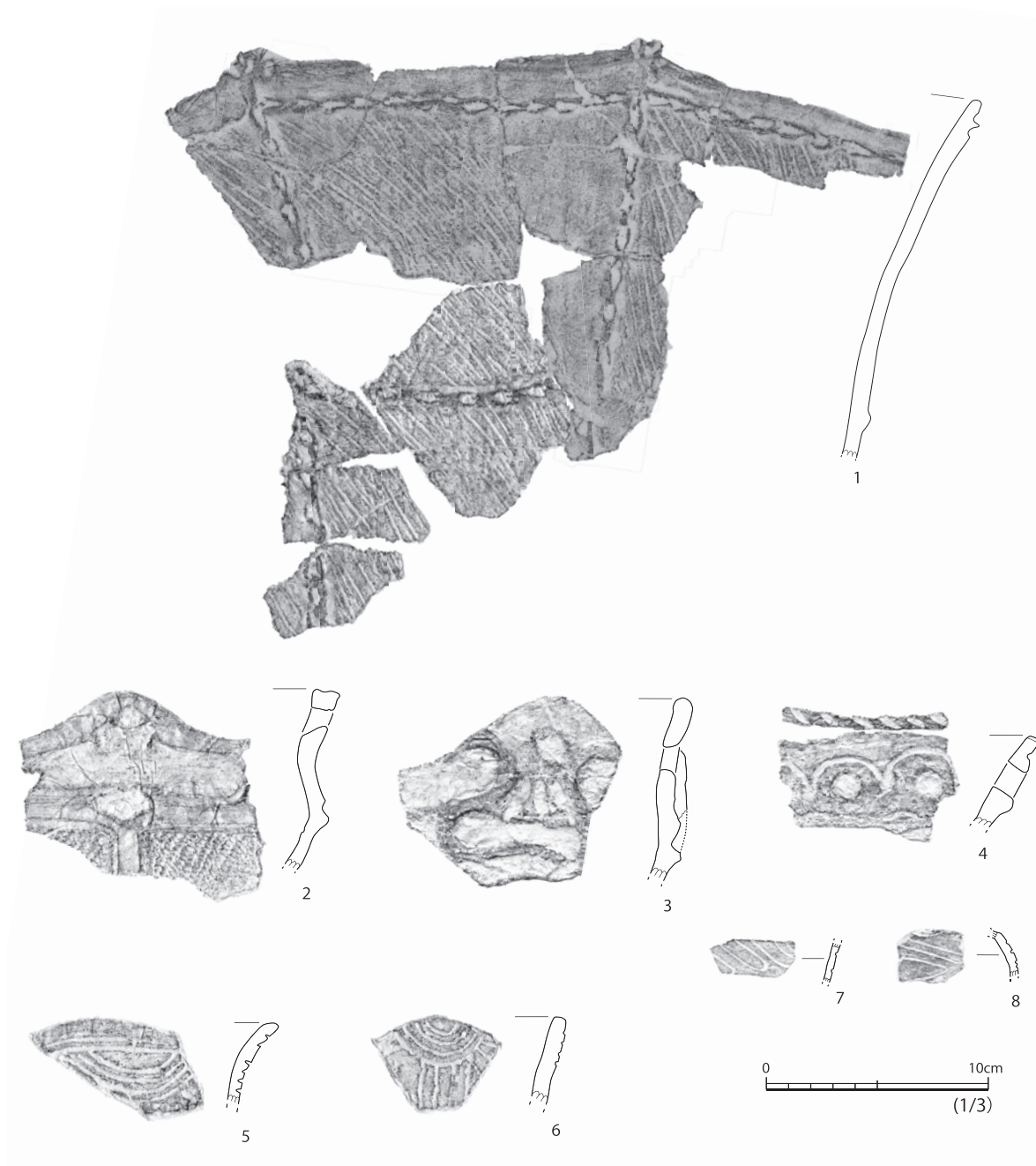
第 70 図 縄文時代後期初頭～前葉 (10)



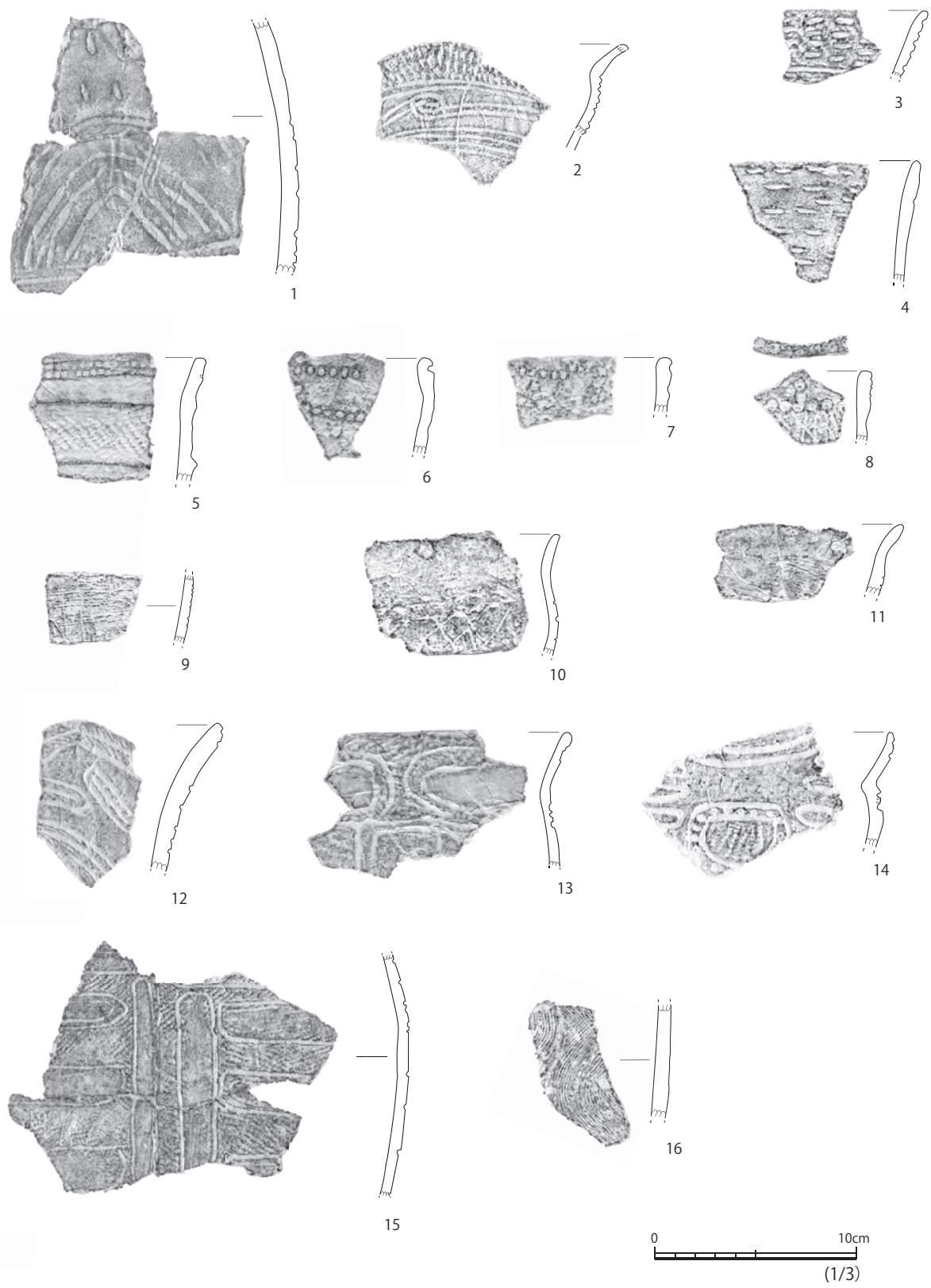
第 71 図 縄文時代後期初頭～前葉 (11)



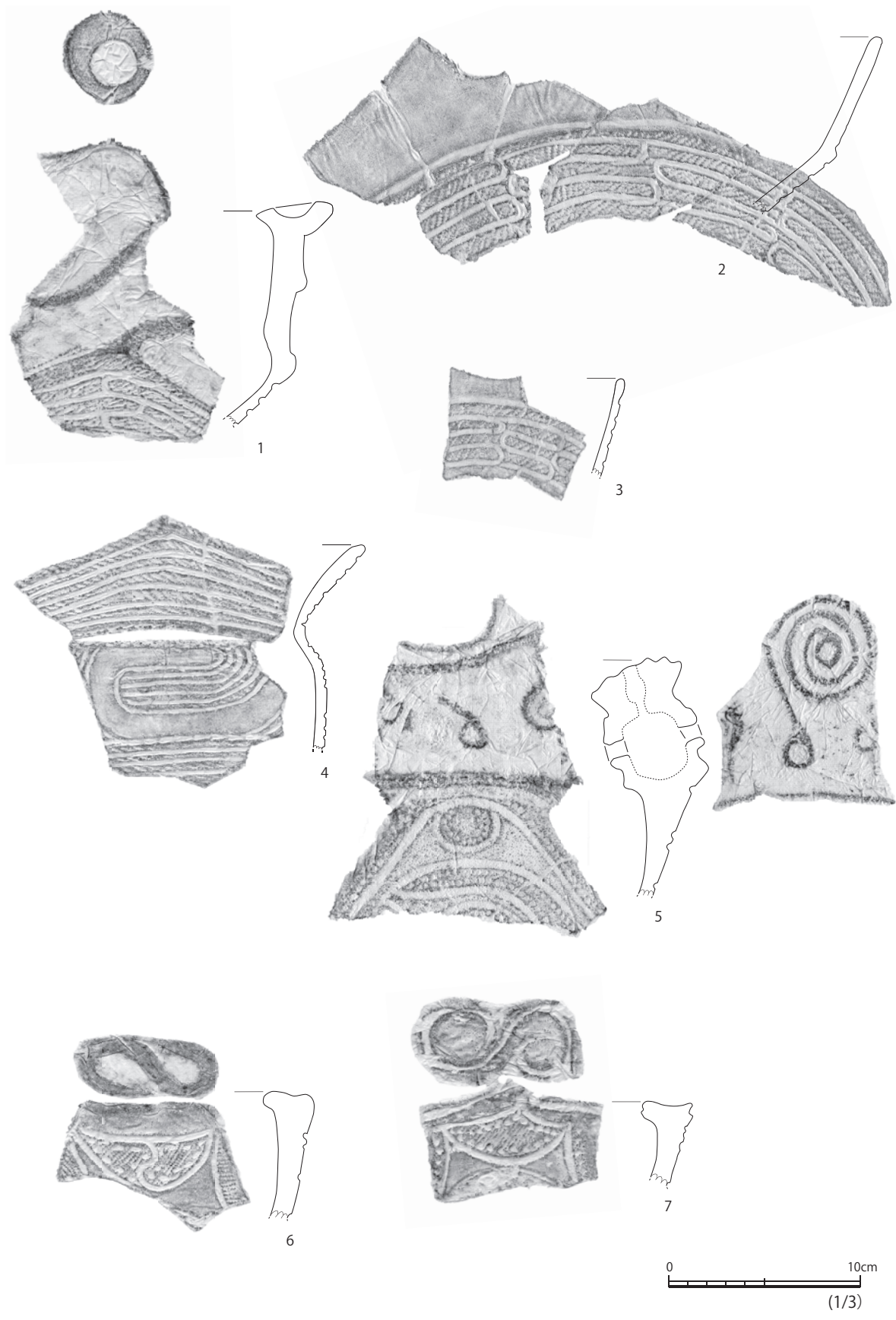
第 72 図 縄文時代後期初頭～前葉 (12)



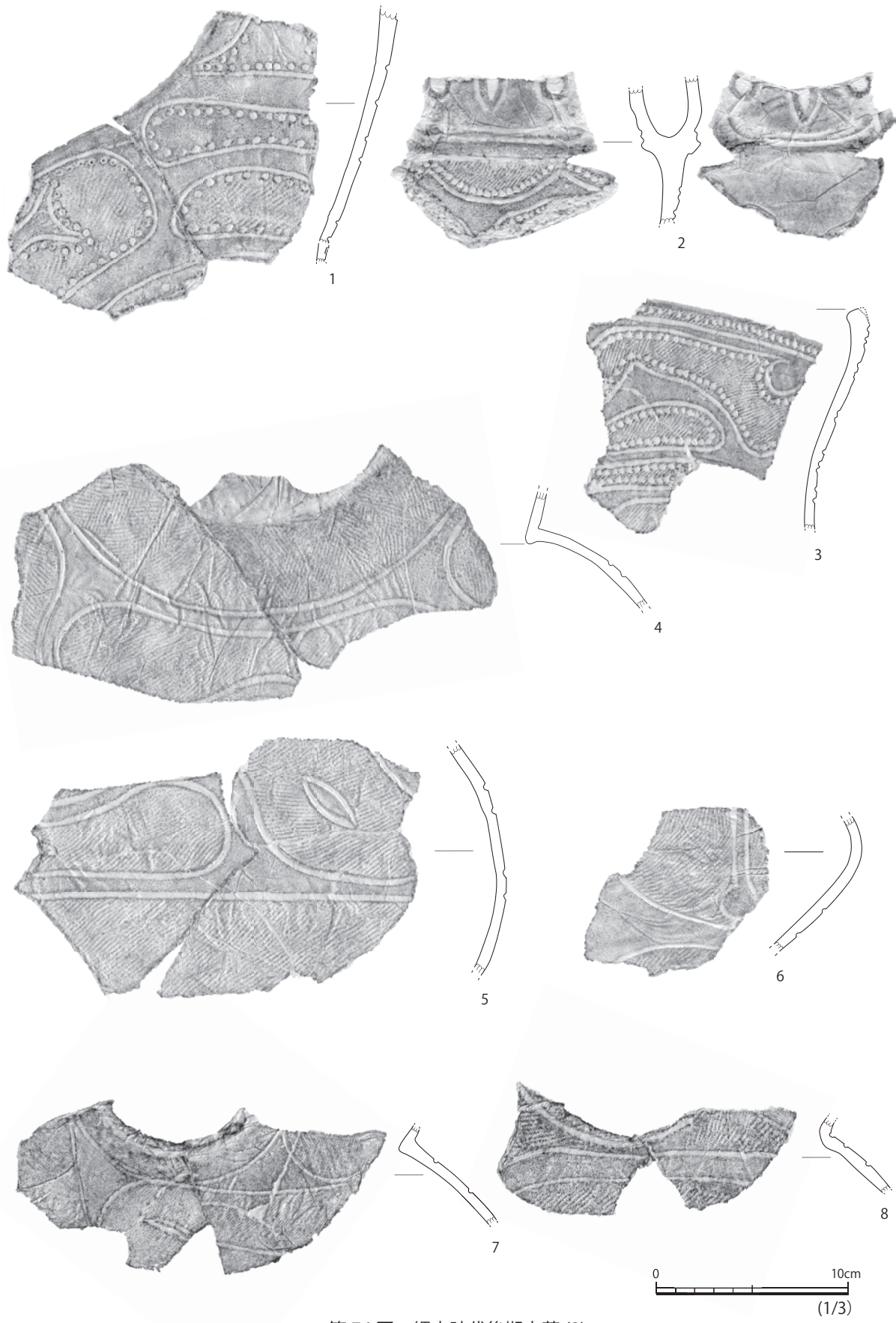
第73図 縄文時代後期初頭～前葉(13)



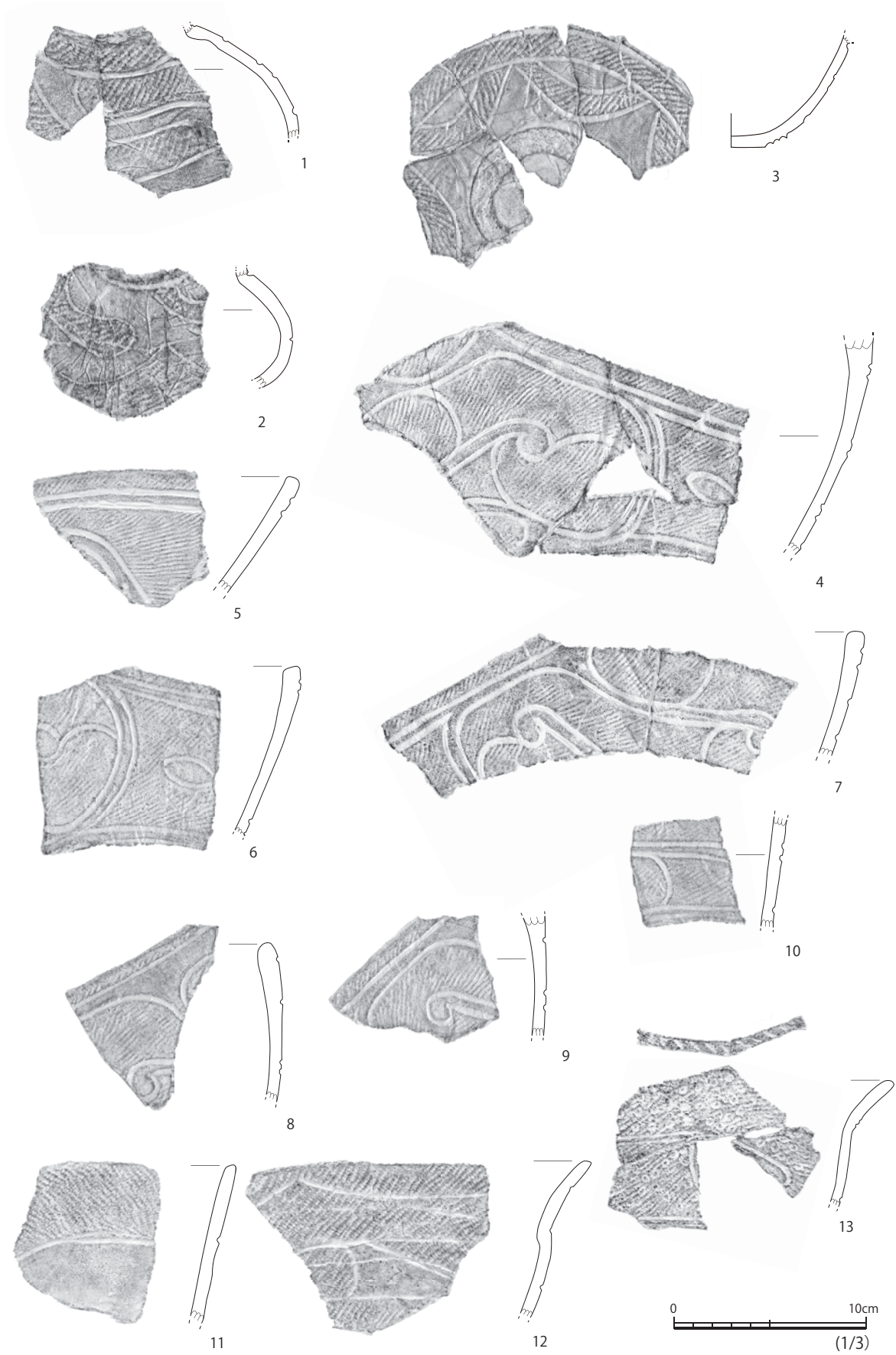
第 74 図 縄文時代後期初頭～前葉 (14)



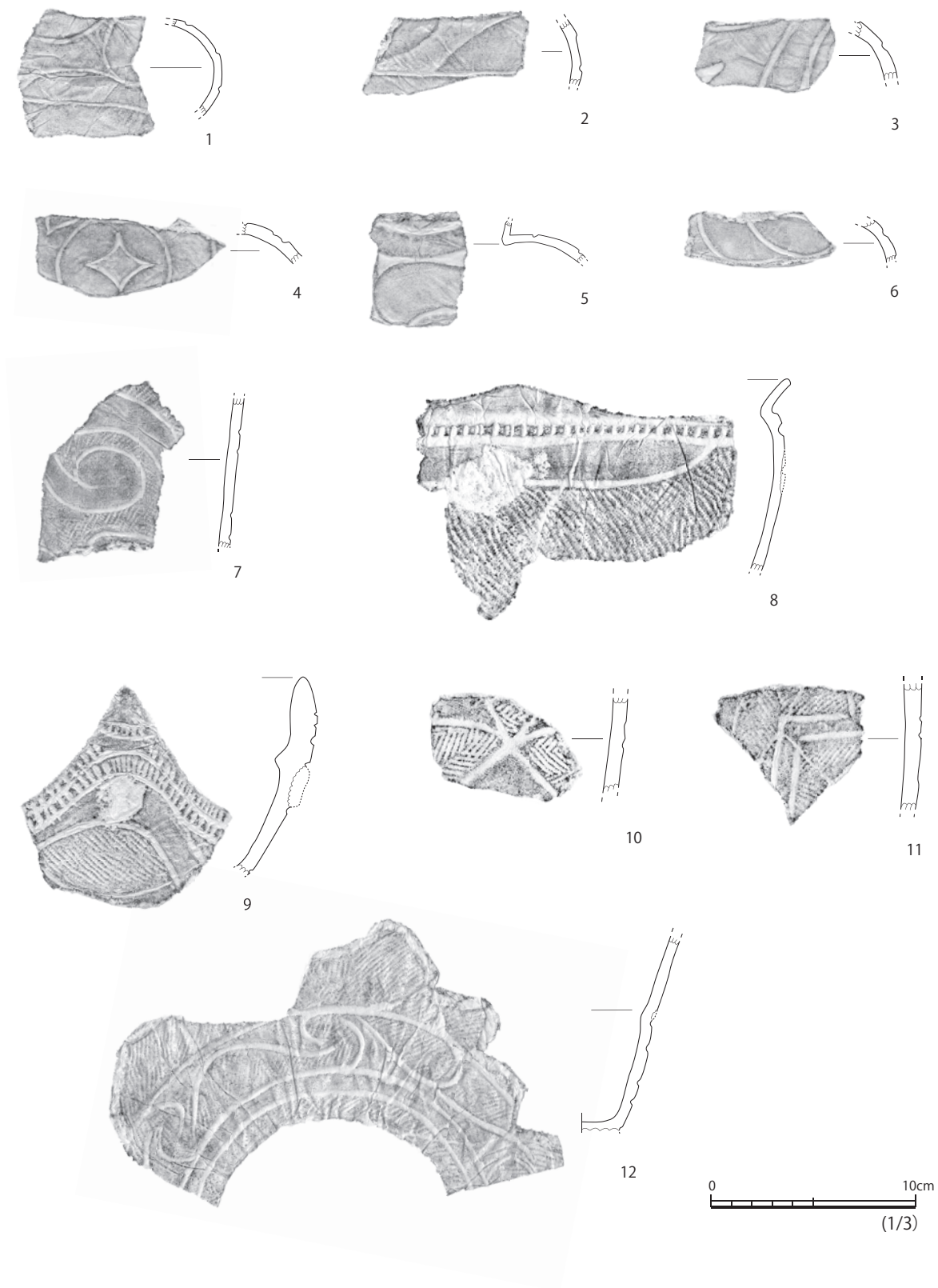
第 75 図 縄文時代後期中葉 (1)



第 76 図 縄文時代後期中葉 (2)



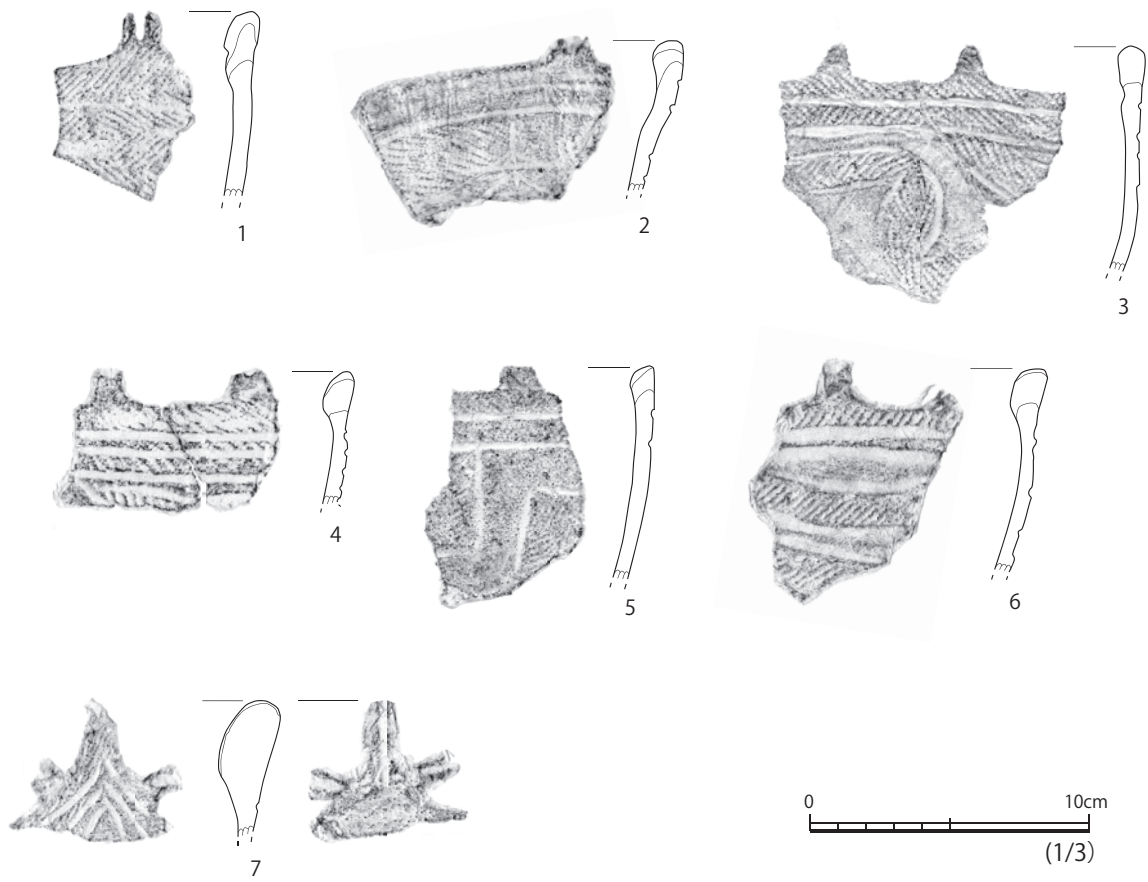
第 77 図 縄文時代後期中葉 (3)



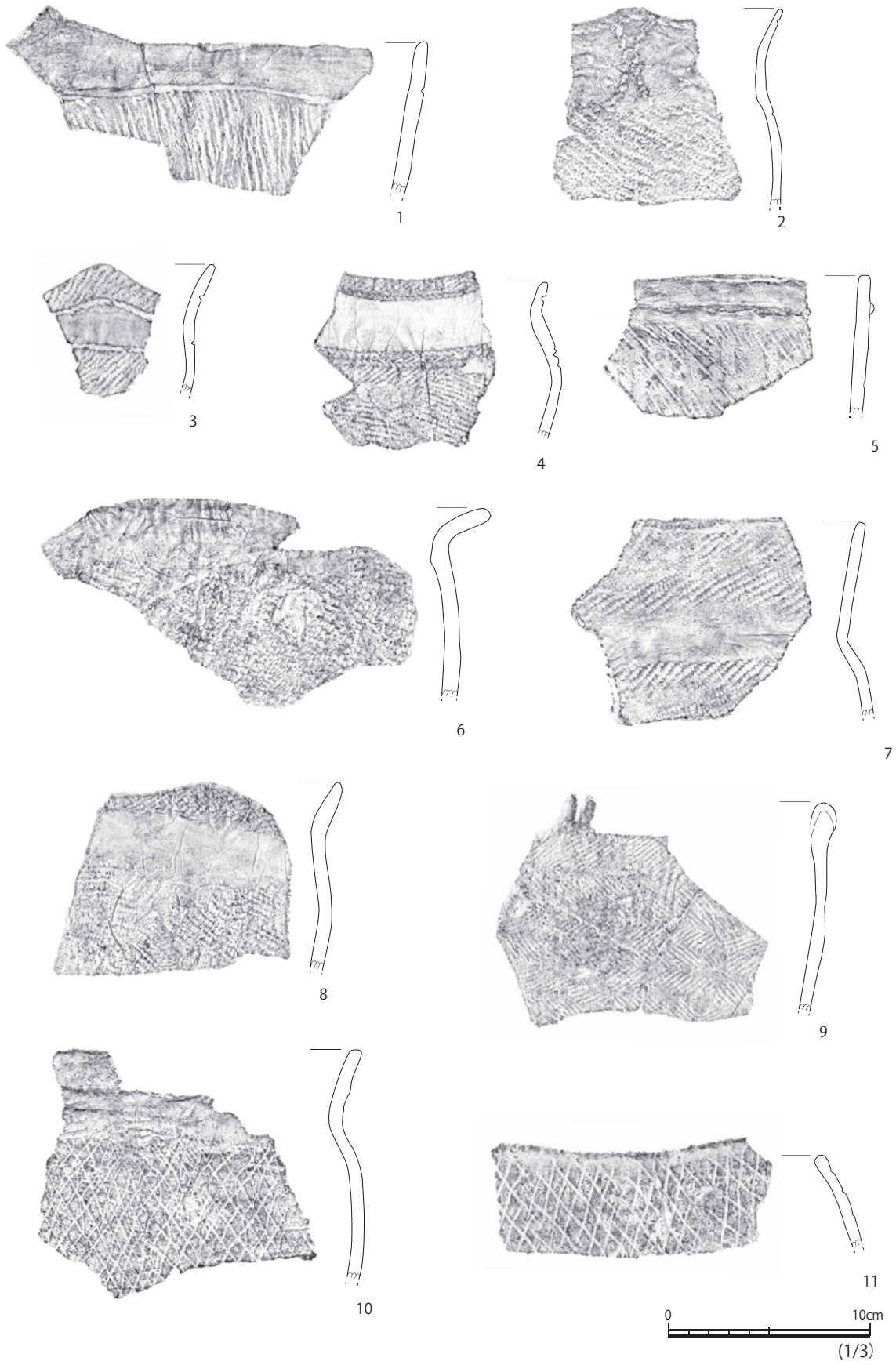
第 78 図 縄文時代後期中葉 (4)



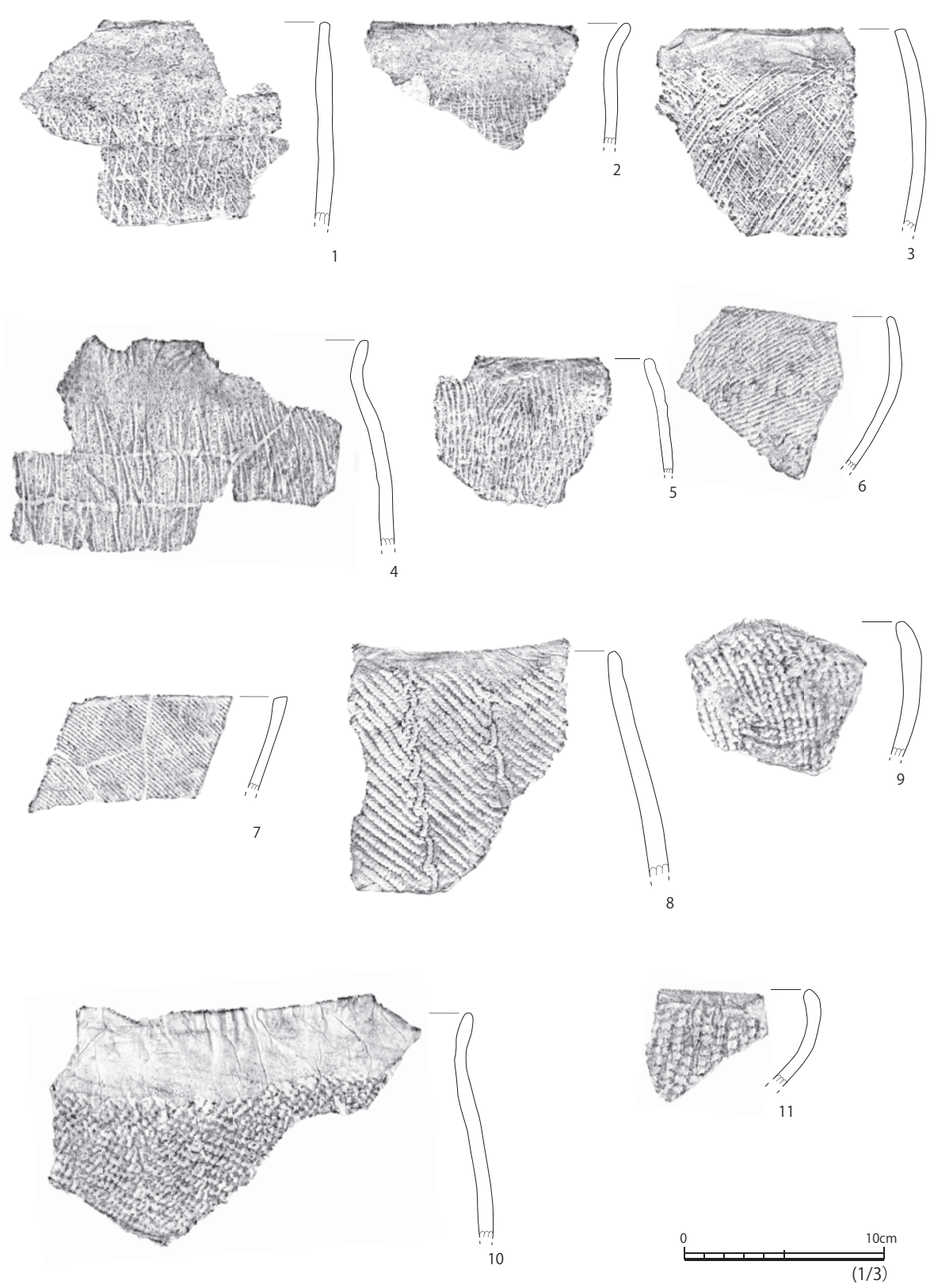
第 79 図 縄文時代後期後葉 (1)



第 80 図 縄文時代後期後葉 (2)



第 81 図 縄文時代後期粗製 (1)



第 82 図 縄文時代後期粗製 (2)

土製品

ミニチュア土器 (第 83 図 1 図版 30)

コップ形のミニチュア土器の欠損品と推定される。底面に網代痕が残る。

三角壙形土製品 (第 84 図 1 図版 31)

欠損品である。方形三面に連続する円形刺突により文様を描き、三角形面の図上底辺寄りの中央から貫通孔を長軸に沿って穿っている。

土版 (第 84 図 2 図版 31)

表裏面に連続する円形刺突文が見られる。半壊品と思われる。

有孔土製品 (第 84 図 3・4 図版 31)

3 は断面楕円形の棒状を呈し斧状土製品と推定されるが、上下端部が欠損している。全面に縄文が施される。上部中央に穿孔が見られる。4 は楕円球状で長軸に沿って穿孔されている。

耳飾り (第 84 図 5・6 図版 31)

5 は耳栓形で表裏面ともに連続する刺突により円文様を描く。側面中央は溝状に窪む。6 は鼓形をし、中心部を穿孔する。表裏面ともに外周部は欠損している。

腕輪 (第 84 図 7 図版 31)

筒状を呈する大形の腕輪の破片と思われる。全体の 4 分の 1 程度を残している。表面上端部には刻線を巡らせ、その下を長楕円刻線文と蛇行する刻線文で埋める。蛇行は屈曲を 5 回繰り返す、一つの文様単位とする。

鐸形土製品 (第 84 図 8～12 図版 31)

上端部が欠失している 9 を除き、鈕に穿孔がみられる。9・11・12 は刻線と列点で文様が描かれている。12 は頂部を帯状に盛り上げ、その上に列点を刻んでいる。

土偶 (第 85・86 図 図版 31)

85 図 1 は頭部と推定される。円形の顔面に粘土紐を貼付し目・鼻を表し、穿孔で口を表す。

2 は頭部・両腕を欠失した上半身である。板状逆三角形の胴部の胸に 2 か所の粘土貼付と刺突による列点文を描く、背面は無文である。3・4 も頭部・両腕を欠失した上半身である。表裏面ともに平版で刺突文がみられる。4 は右側身の一部も欠き、左胸と腹部中央に円形粘土貼付がみられる。

86 図 1 は胴接合部の形態から土偶腕部と推定した。2～5 は、その形状から脚部の一部と思われる。

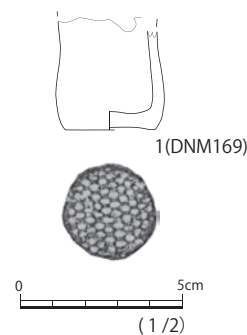
3 は胴部側接合面にアスファルト付着がみられる。5 は腰に推定される部位に、交差する刻線文がみられ着衣表現の可能性はある。

土器片製円盤 (第 87 図 図版 32 図表 1)

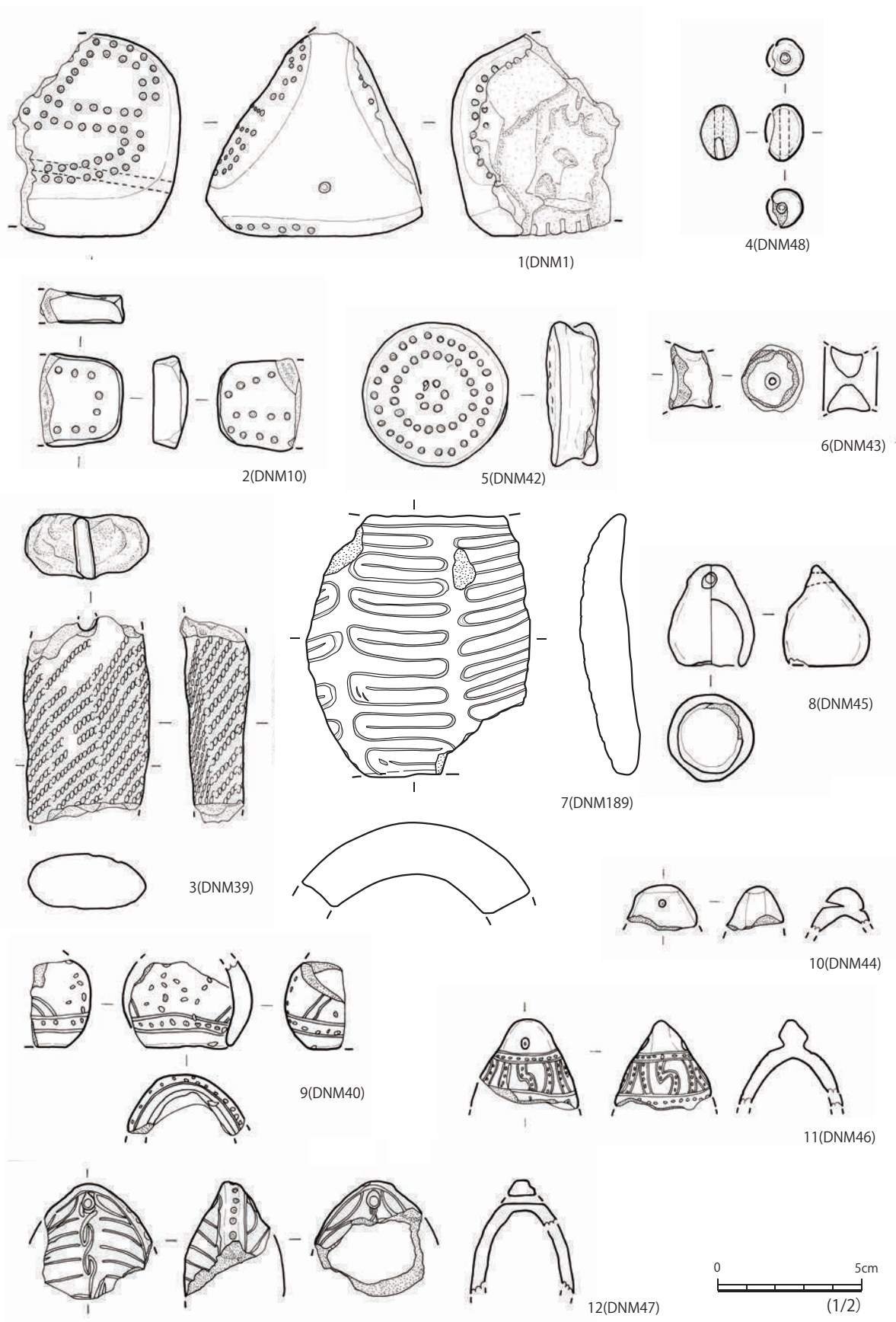
1 区から出土した土器片製円盤は、370 点を数える。調査区全域から偏ることなく出土した。全て縄文土器片を再利用している。破片の周縁を円形に整形している。周縁部に明確な挟り等の調整痕はみられず、表裏面ともに紐による結束に伴い見られる擦痕などの明らかな使用痕も観察できない。

87 図には、最大・最小のもの、長さと同幅でほぼ同じ長さで正円形に近いものを選び図示した。図表 1 に、1 区から出土した 370 点全ての土器片製円盤の正円性を数値化した値 (個体計測値の長さを幅で除した。1.0 に近似な程正円に近い) と重量を合わせ示した。

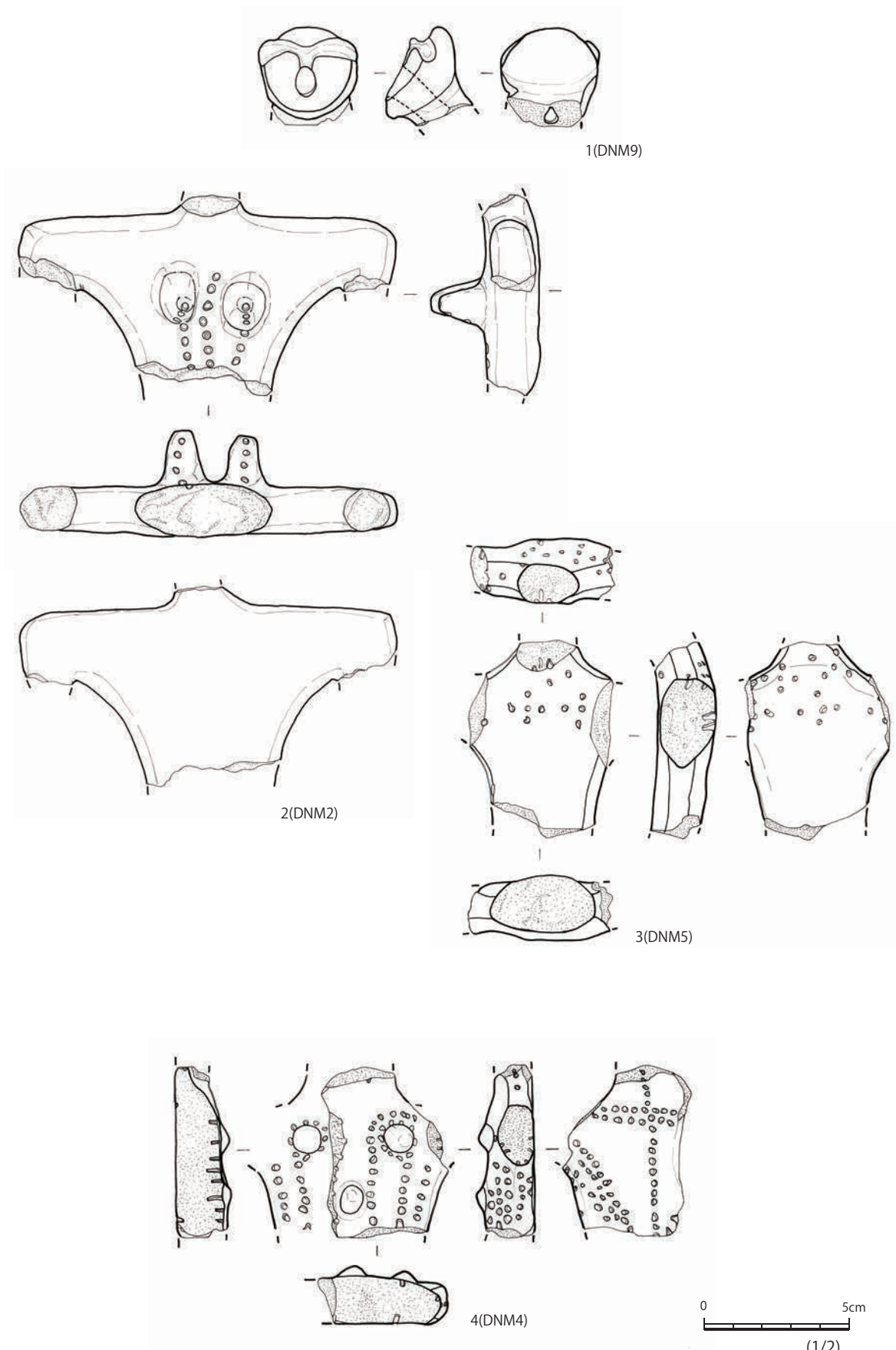
図表では正円率 0.8～1.2、重量 8～20g に集中がみられ、正円に整形し重量を均すことを意識したと推定できるが、その用途は不明である。



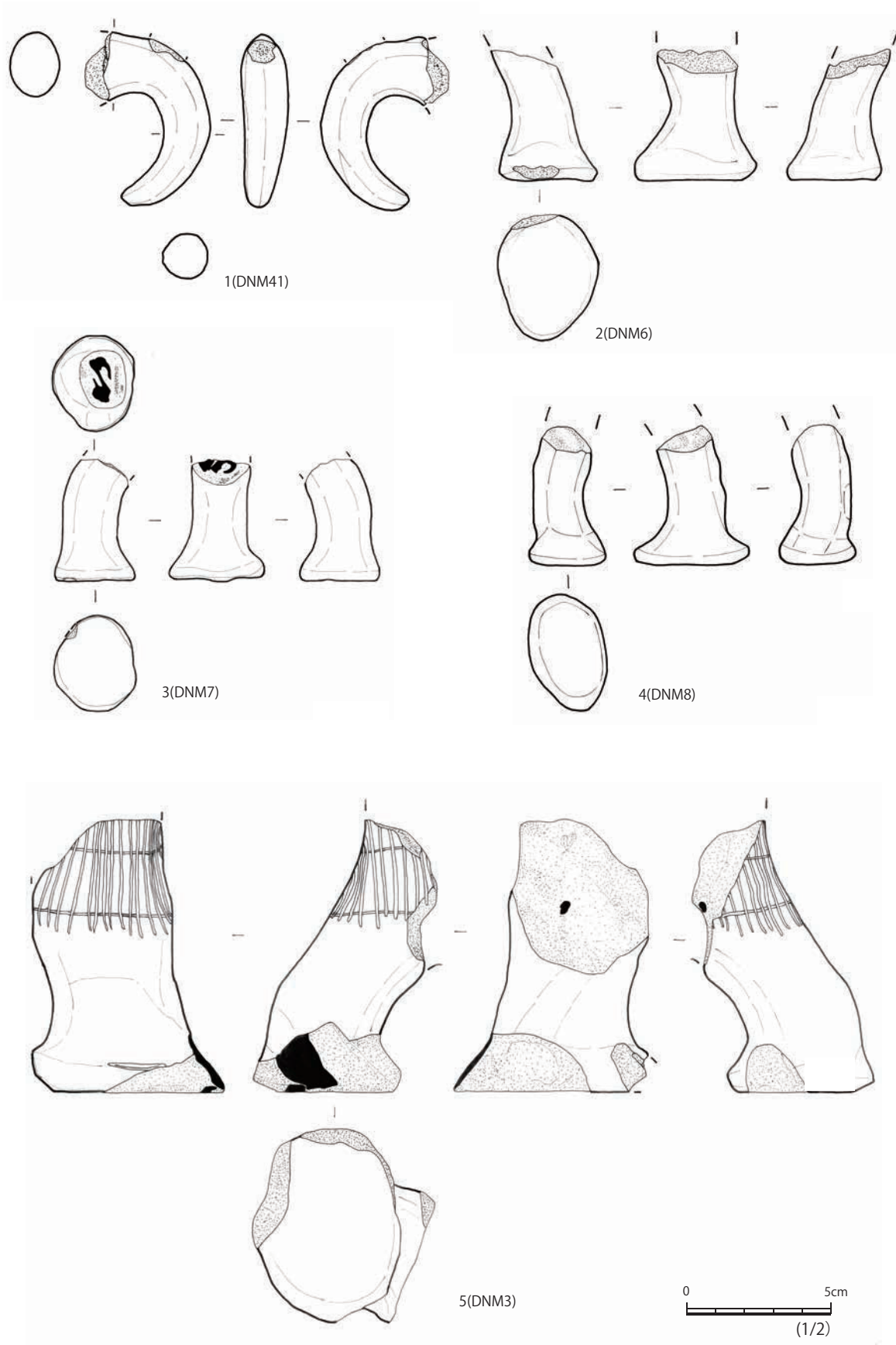
第 83 図 ミニチュア土器



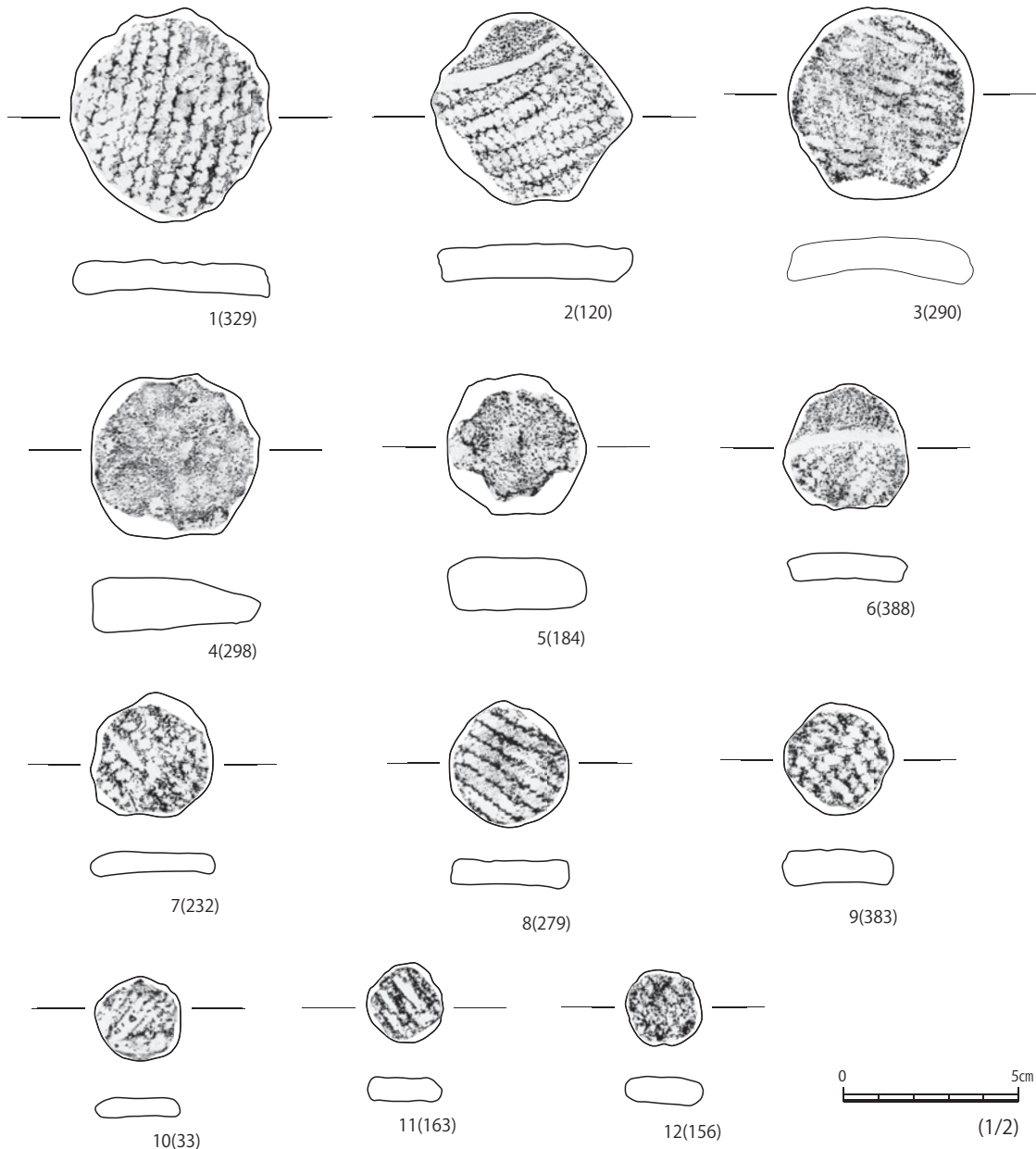
第 84 図 土製品



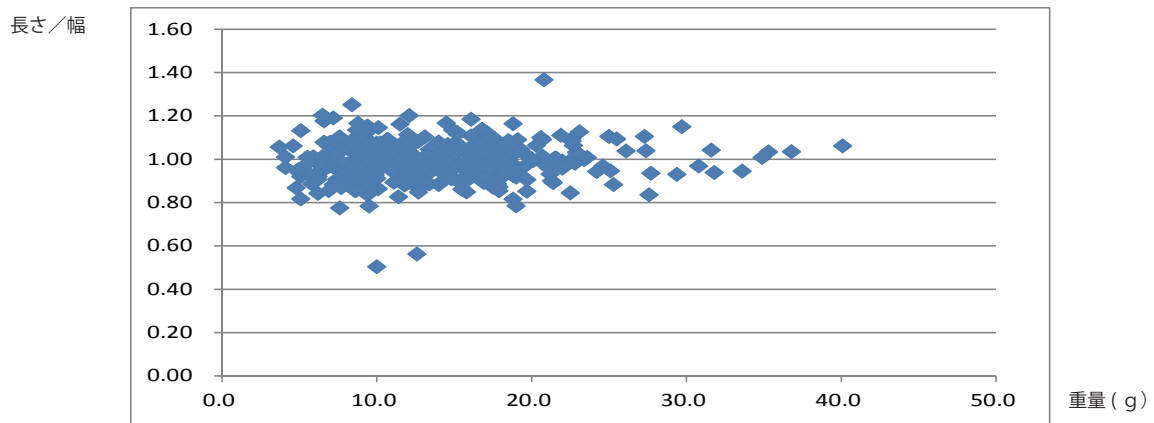
第 85 图 土偶 (1)



第86图 土偶(2)



第 87 図 土器片製円盤



図表 1 1区出土土器片製円盤の属性分布

石器

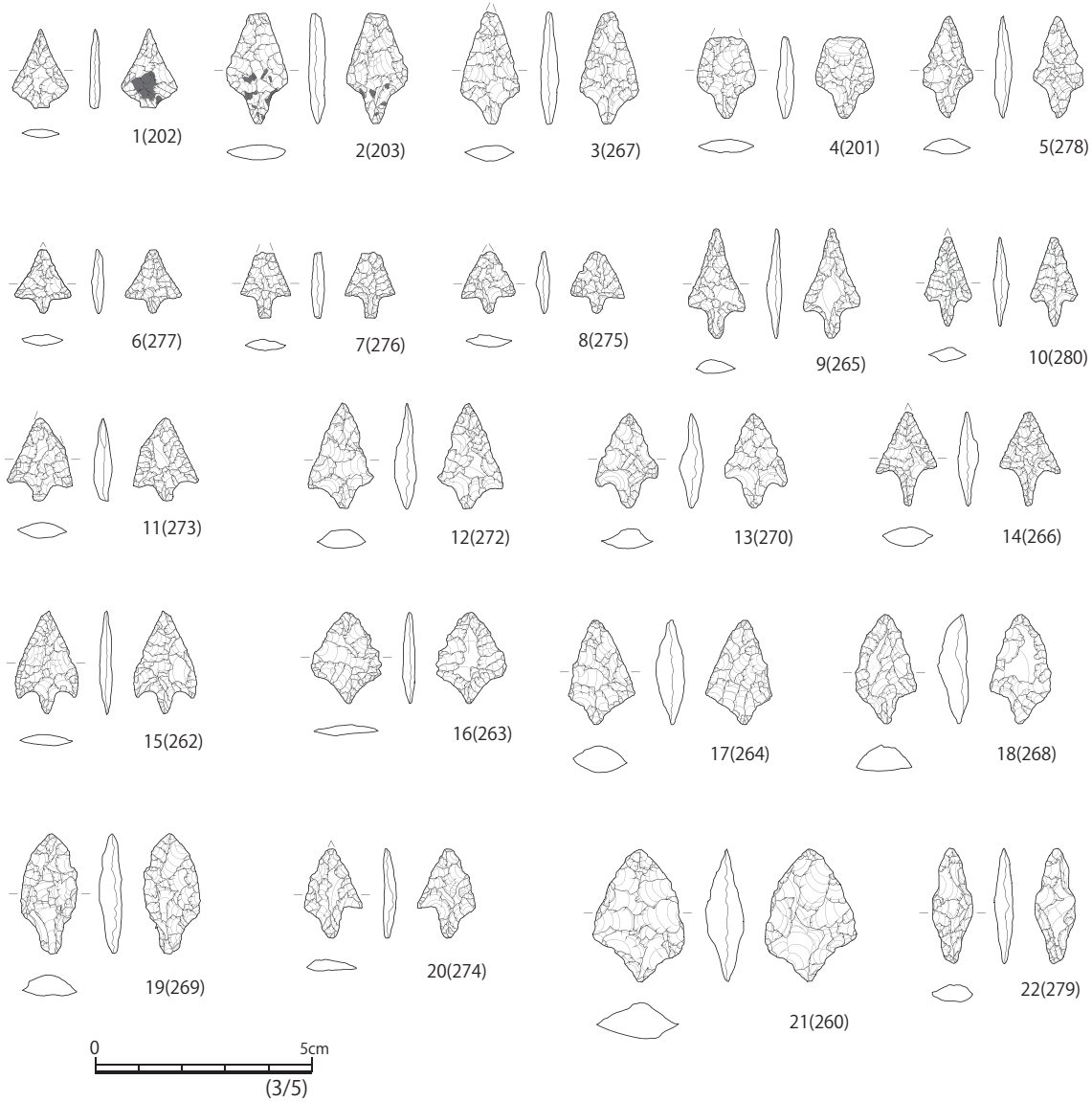
1区から出土した定形的な石器は総数903点で、内訳は石鏃360点・石錐26点・石匙14点・石篋4点・両極石器58点・搔器206点・石核13点・打製石斧7点・磨製石斧21点・敲石24点・磨石87点・砥石3点・凹石27点・礫器26点・石皿13点・台石10点・調整剥片等4点を数える。

石鏃(第88～90図 図版35)

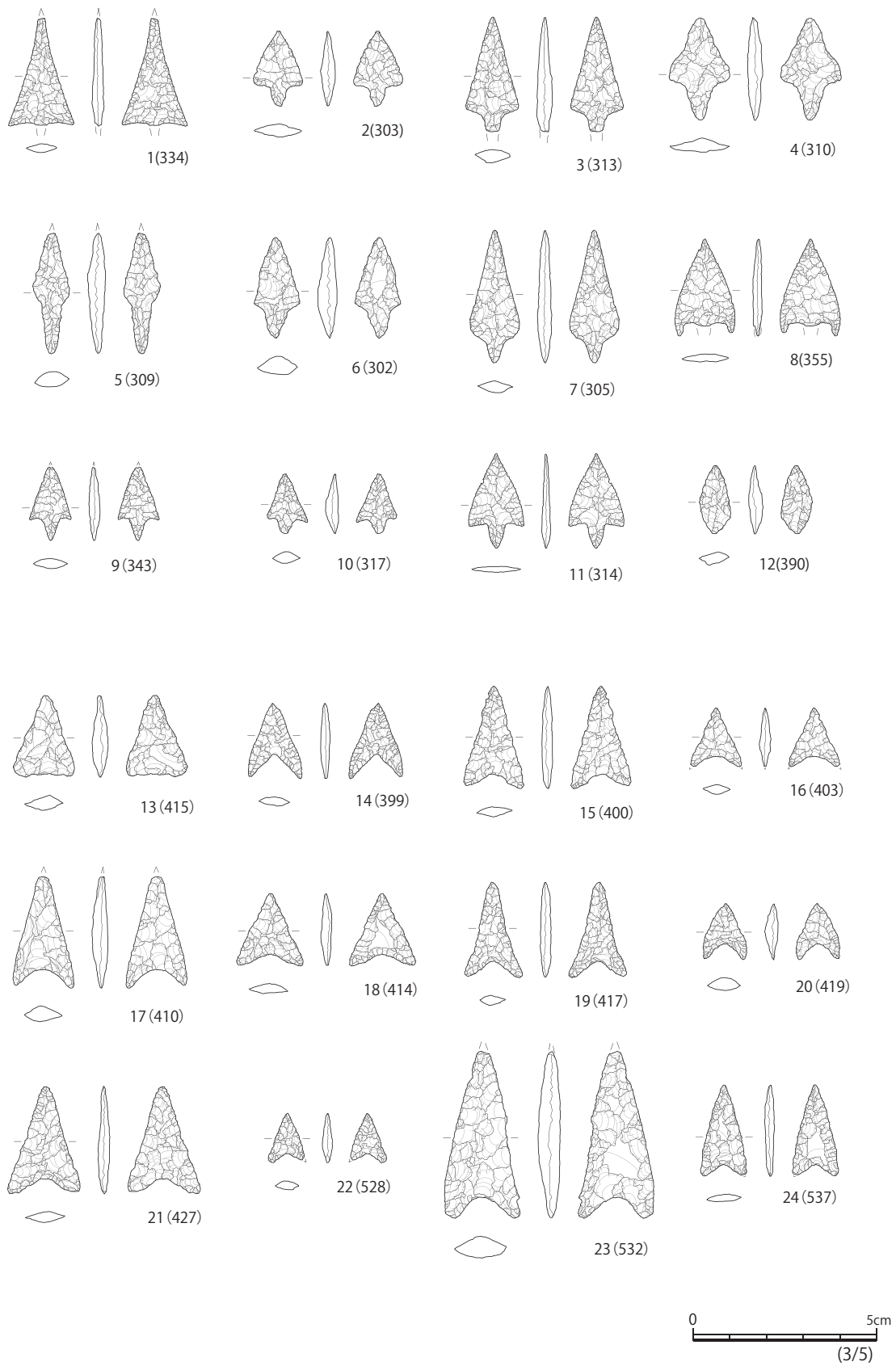
1区の遺構外から出土した石鏃は324点を数え、大きく有茎と無茎に分けることができる。有茎(第88図～第89図12)・無茎(第89図13～第90図21)を合わせ77点を図示した。

有茎をさらに基部形態によって、突出した基部から茎に至るもの(第88図1～5・第89図2～7)、直線状の平坦な基部に茎が付くもの(第88図6～10・第89図1)、内湾する基部の中央に茎がつくもの(第88図11～15・第89図8～11)、側縁の形状が左右非対称なもの(第88図17～21)、平面形が菱形状のもの(第88図22・第90図12)に細分できる。第88図1の裏面中央付近には、アスファルト付着痕がみられる。

無茎のものは基部形態によって、直線状で平坦な形状のもの(第89図13・第90図19)、基部中央



第88図 石鏃(有茎)



第89図 石鏃(有茎・無茎)

に挟りがみられ内湾するもの(第89図14~24・第100図1~11図)に大別される。

90図3には、表裏両面の中央に矢軸への装着に用いられたと思われるアスファルトの付着痕がみられる。20・21は、形状も整っておらず、両面に施された調整も粗い。未成品と思われる。

さらに茎の有無にかかわらず、身部長軸と基部の幅の長さ比率に着目すれば、おおよそ2:1を超える大振りのものでそれ以下の小形のものに分けられる。

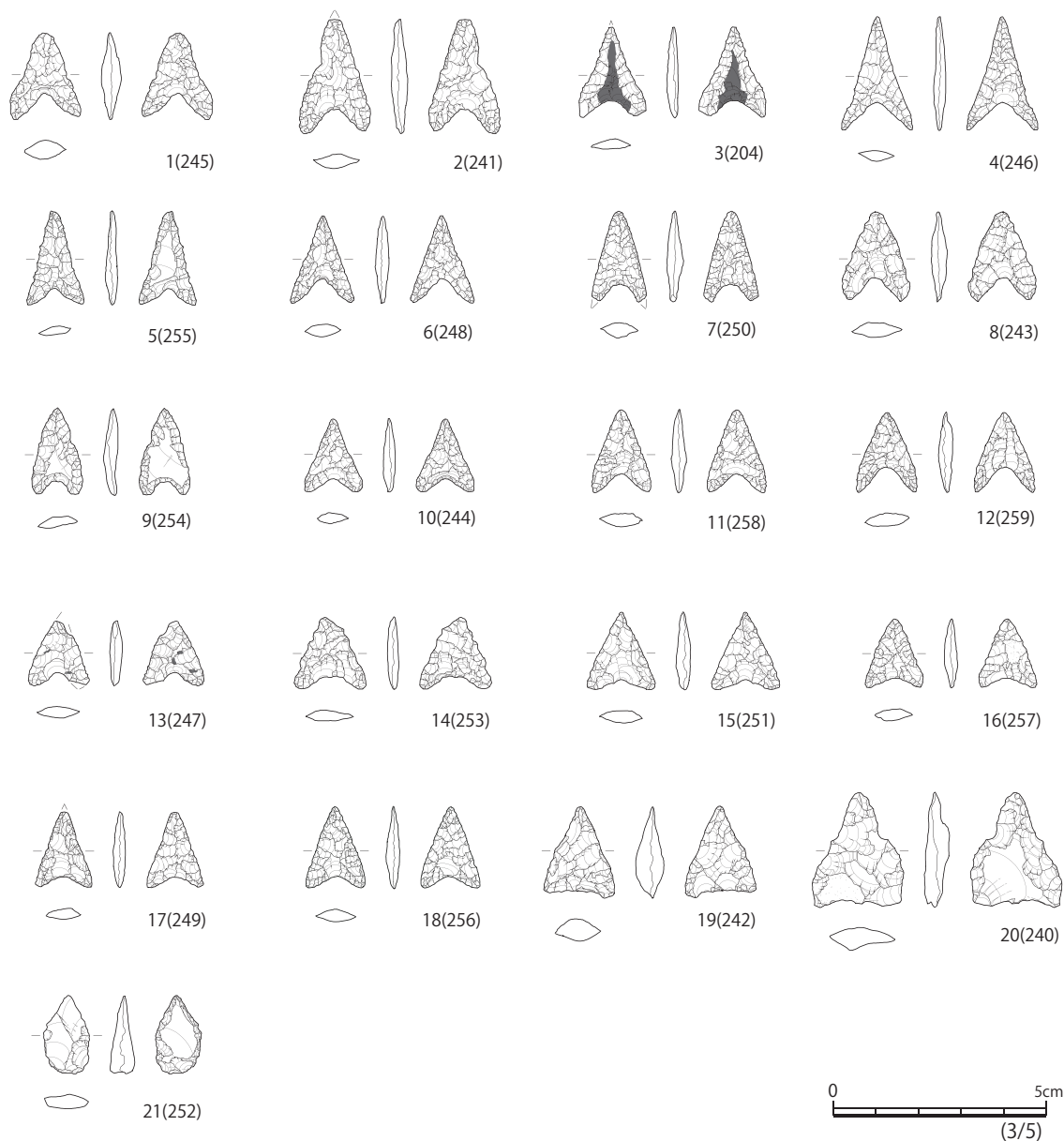
石錐(第91図 図版35)

穿孔を行う突起部とそれに回転を伝える摘み部が直交し、平面形がT字状をなすもの(第91図1~4)、突起部にやや厚みと幅を増した摘み部を連続して作出するもの(第91図6~8)、突起部と摘み部が明確に区分できないもの(第91図5・9・10)がみられる。

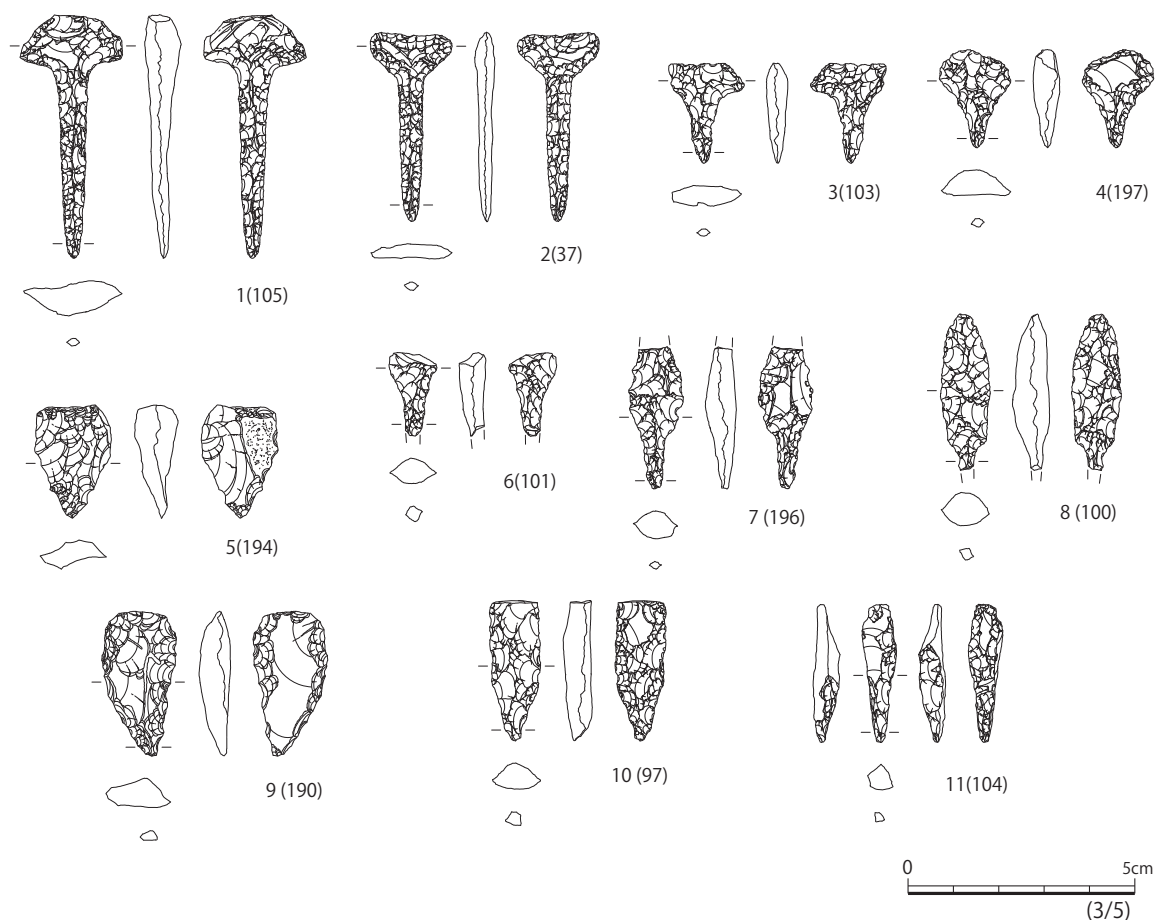
11は突起部のみの破片である。1・2は断面が菱形を呈する長い突起部をもつ。3・4は突起部が短い。

石匙(第92図 図版36)

刃部を作出した体部に摘み部を有する。摘み部に対し縦方向に刃部が作出される縦型(第92図1・



第90図 石鏃(無茎)



第91図 石錐

2)と横方向に刃部が作出される横型(第92図3・5・6)に大別できる。4は体部が方形を成し、全側縁に細部調整が施され刃部としている。縦・横の複合型といえる。第92図7・8は摘み部が残存した破片である。

石篋(第93図 図版36)

左右対称で上方が狭く、下方が広がる定形的な形態を示す。全て表裏面ともに調整剥離がみられる。刃部とした側縁の断面角度は概ね鈍角で、従って身部は厚い。

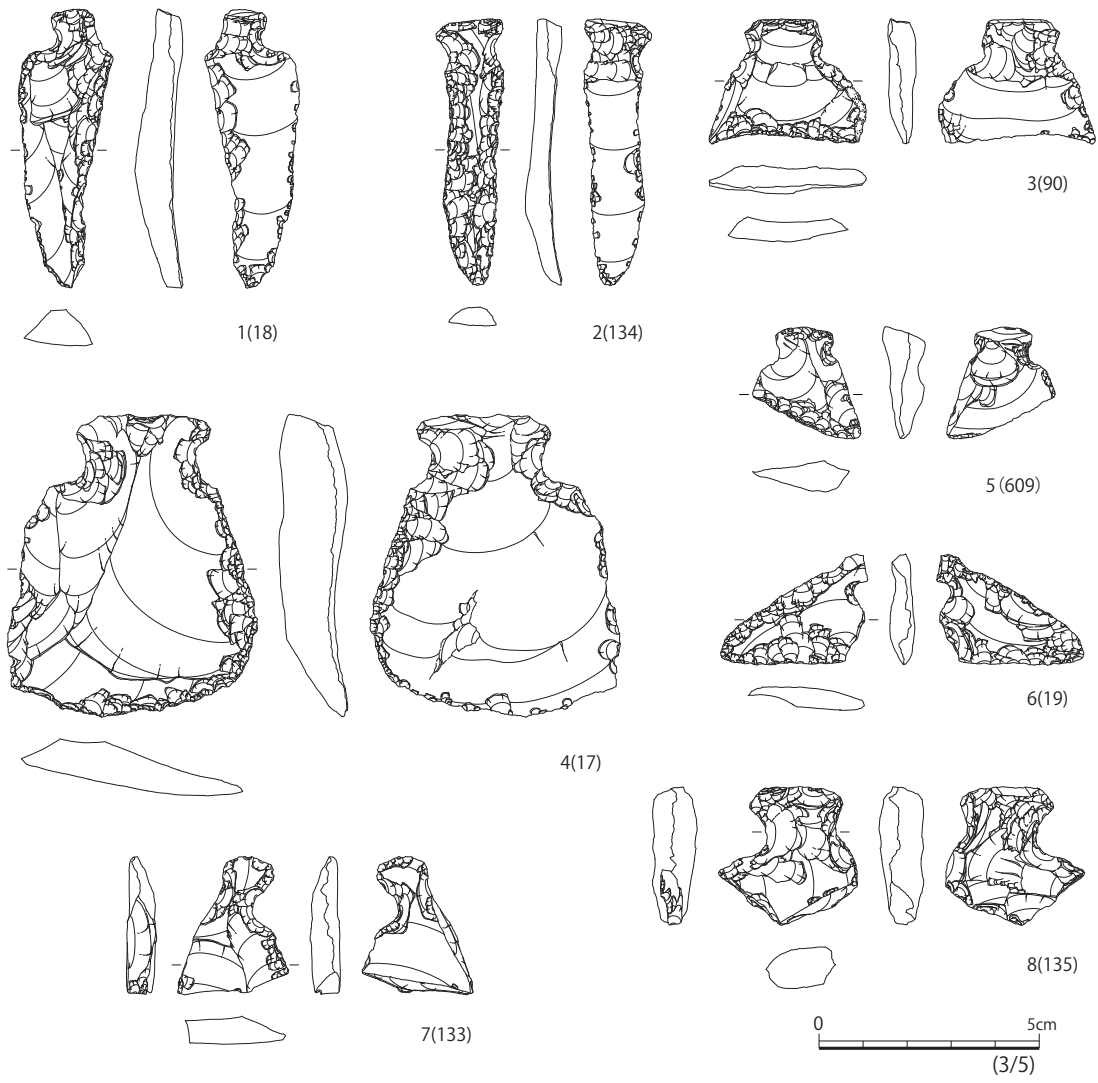
1は下側縁が直線的で、表面の調整が入念に行われているが、裏面は平坦面を作出するためやや粗い調整が加えられている。2は下側縁が湾曲し、上方が狭くなる楕円形の形状を呈する。表裏面ともに入念な調整が加えられている。3は二等辺三角形の形状を呈し、表裏面ともに入念な調整が施されている。

両極石器(第94・95図 図版36)

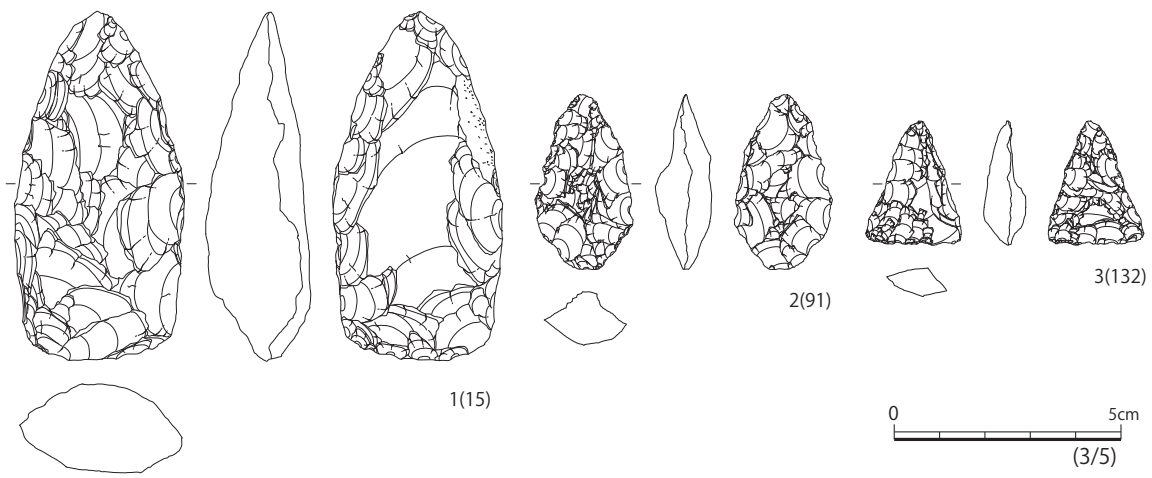
相対する両端部から打撃方向が交差する調整剥離がみられる剥片石器を一括した。方形状のもの(第94図1～3・9・11・13～18)と台形状のもの(第94図4～8・10・12・19～24、第95図)に分けられ、方形状のものには角がなく楕円に近いもの(第94図14・15)や台形状のものには、下部が極端に細くなるもの(第94図20～24、第95図)がある。

搔器(第96～102図 図版37～39)

側縁の全周あるいは一部に入念な調整剥離が施され刃部を作出する。大きさ・形状ともに多様な形態を呈している。刃部断面角度は、概ね鈍角である。



第 92 图 石匙

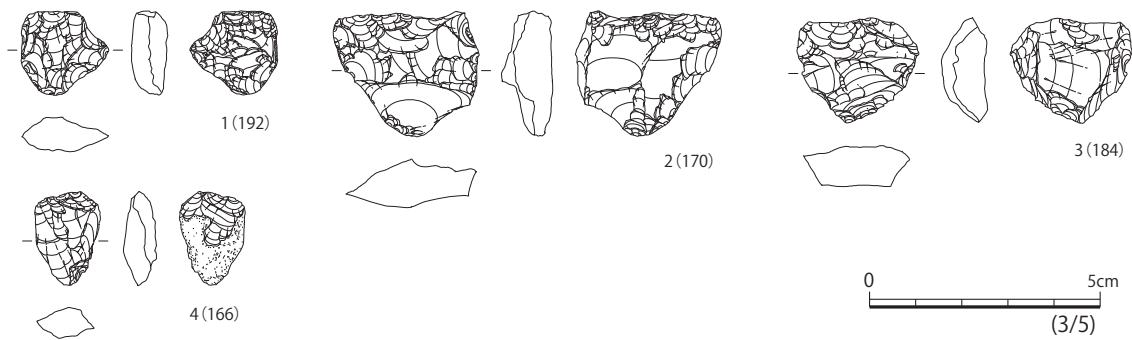


第 93 图 石篋



0 5cm
(3/5)

第 94 図 兩極石器 (1)

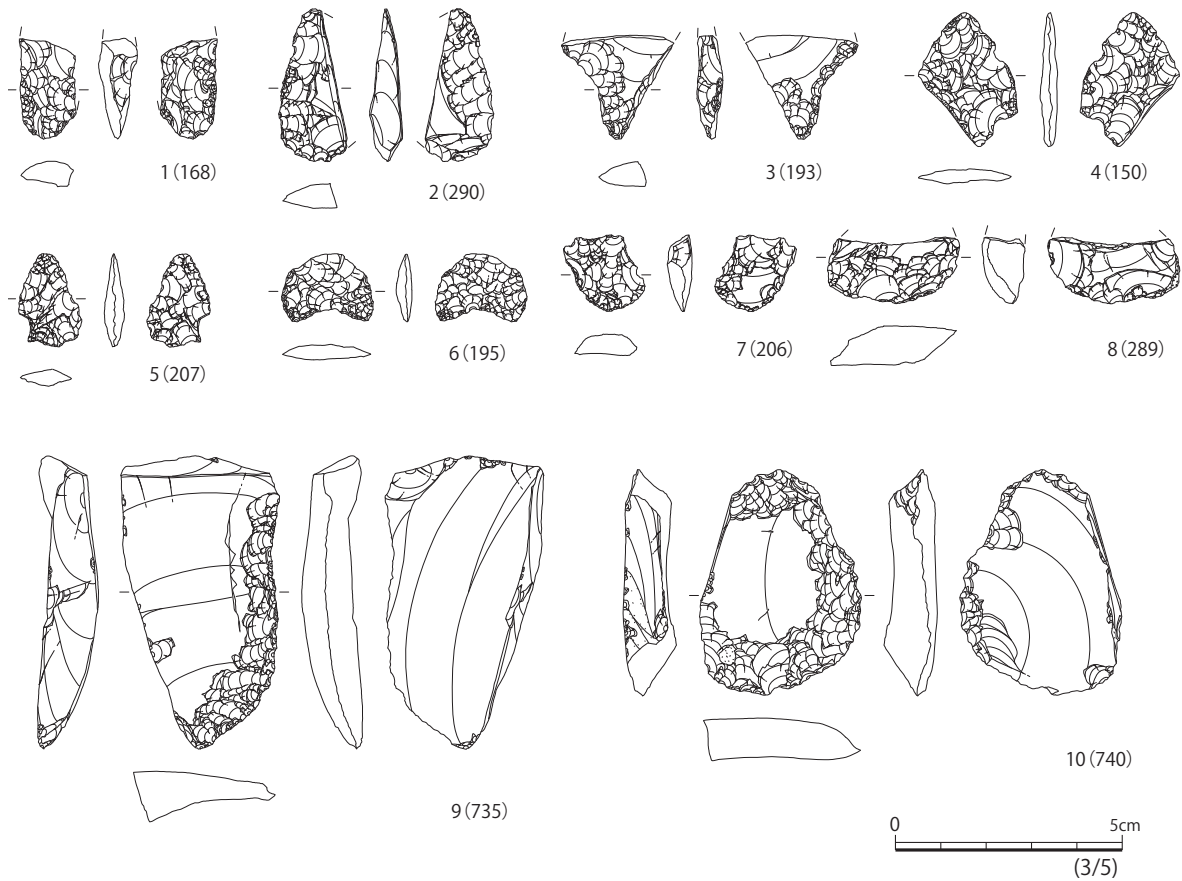


第95図 両極石器(2)

第96図の1～3は半壊品で、刃部とした側縁に特に入念な調整剥離がみられる。4～6は薄く不定形で、全面に入念な調整剥離がみられる。7・8は弧状の下端側縁を刃部としたと思われる。9・10は剥片の側縁の一部に集中して入念な調整剥離を加え刃部としている。表裏面ともに剥片作出時の剥離痕が残る。

第97図5～18は主に左右側縁を刃部としたと推定され、入念な調整剥離が同部位に観察される。二等辺三角形に近い形状を呈する。

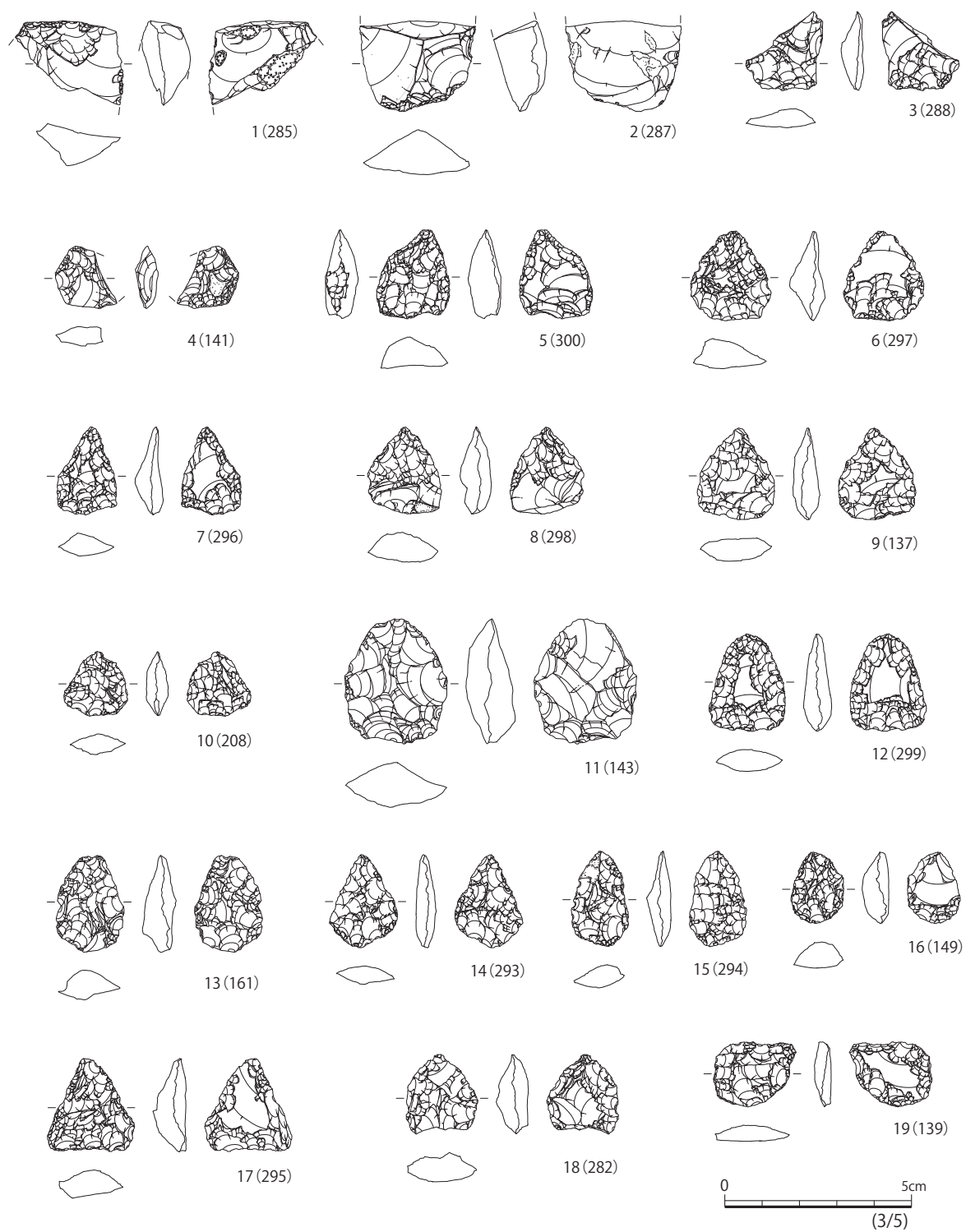
第98図1・2はやや大形のものである。1は礫皮面の残る破片の内湾する側縁を刃部とする。2は突出する端部の両側縁を刃部としている。扁平な剥片の表裏面に入念な刃部調整剥離がみられる。3～5は小形で突出した端部の両側縁を入念な調整剥離により刃部としている。6・7は下方に向かい身中が狭くなる楕円形の形状を呈し、側縁全周に入念な調整剥離を施し刃部とする。8～11は逆正三角形の形状を呈し左右両側縁あるいは片側を刃部とするもの。12・13は台形状を呈し左右両側縁を刃部とする。



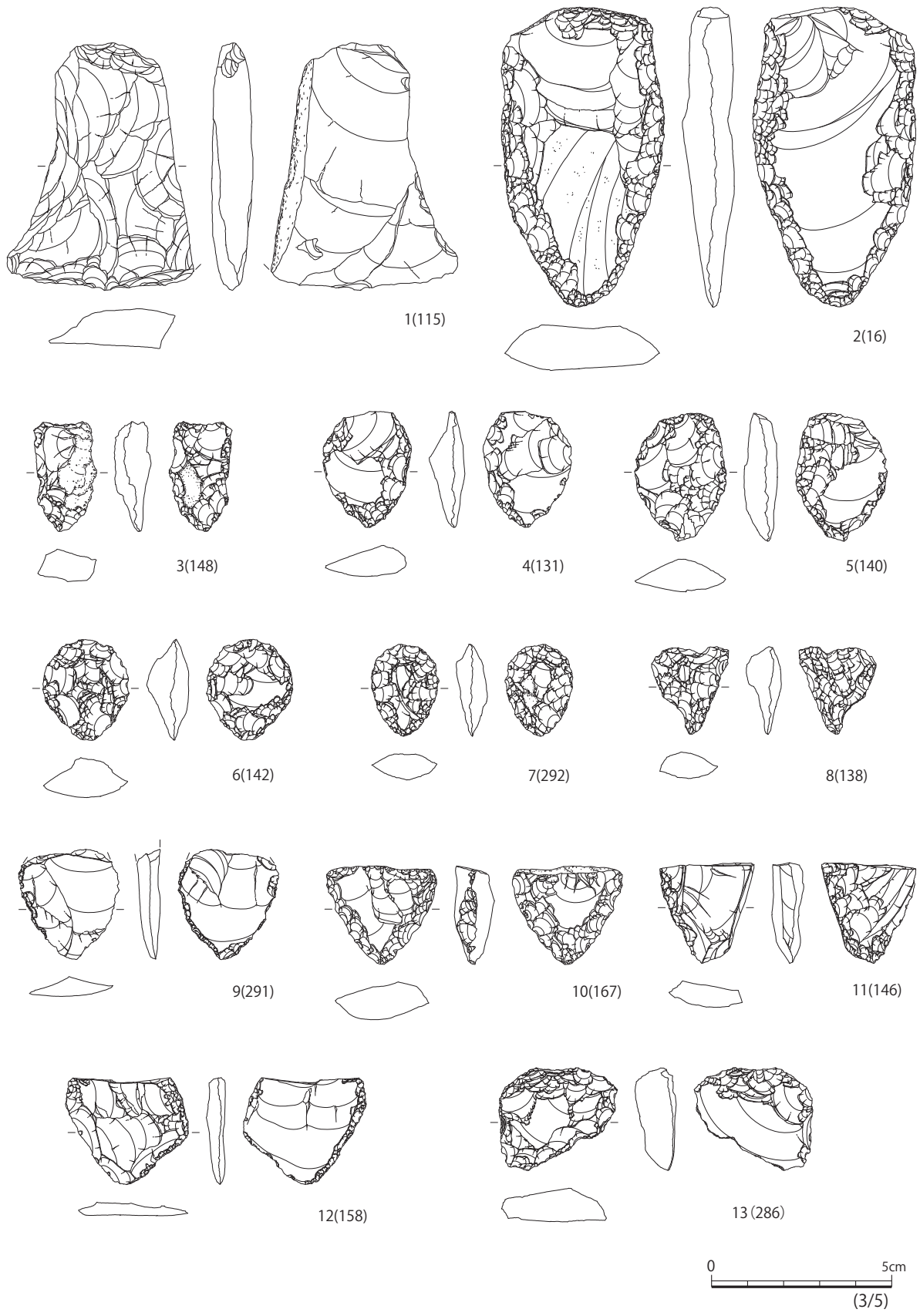
第96図 搔器(1)

第99図1～5・第100図9は三角翼状の形状を呈し、側縁に表面あるいは表裏面から入念な調整を加え刃部としている。第99図6～9は側縁の一部が突出する。

第100図1～3は多角・不定形を呈し、表裏両面に粗い調整が施されている。4～6は縦長の剥片を刃部とする側縁のみに調整を加えている。7・8は打痕が残る横長の剥片の緩く湾曲する側縁に鈍角の刃部を作出する。



第97図 搔器(2)



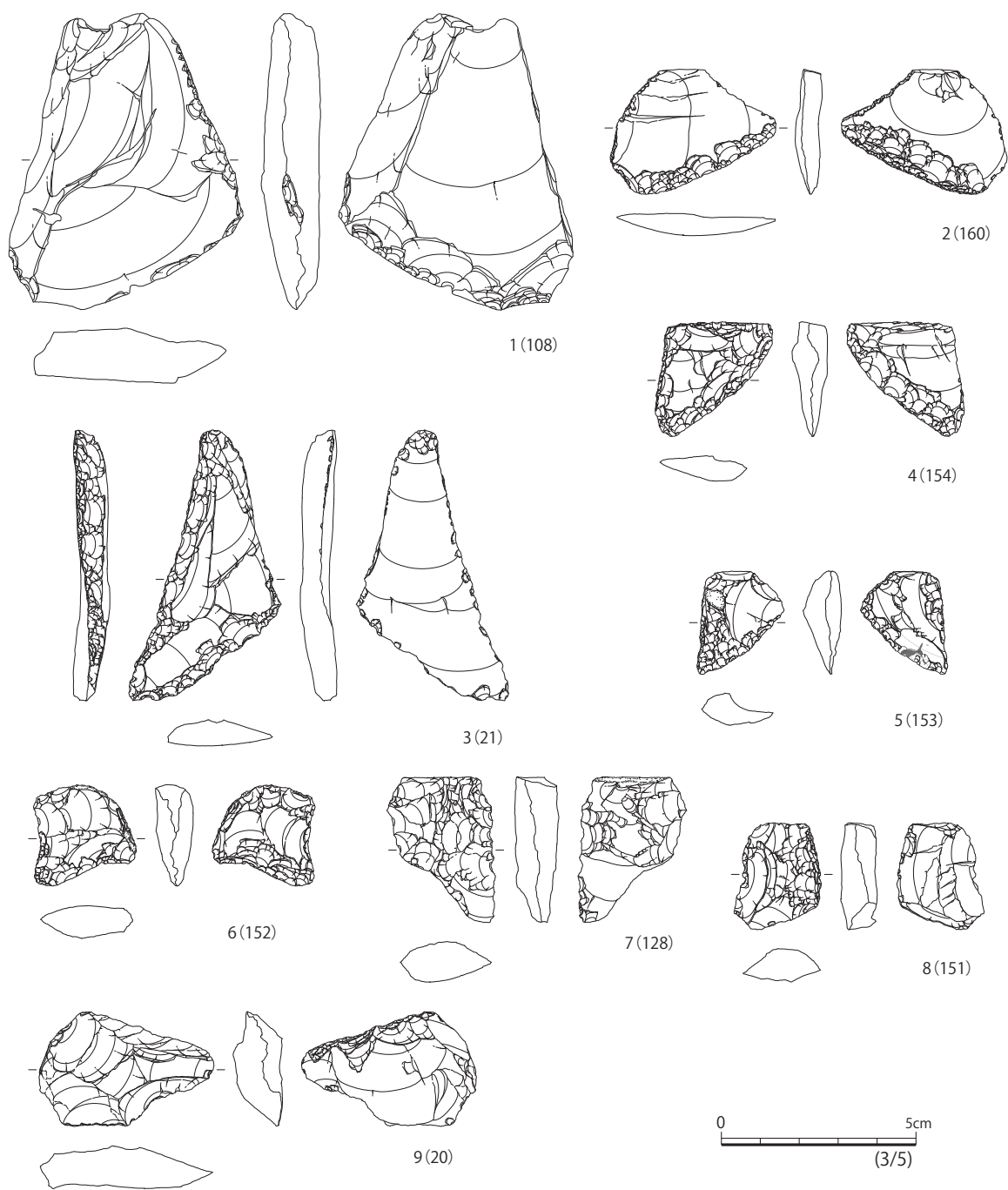
第98図 搔器(3)

第 101 図 1～3 は長方形を呈し、左右両側縁あるいは片側を刃部とする。4 は断面が台形を呈し左右両側縁に鈍角の刃部を作出している。

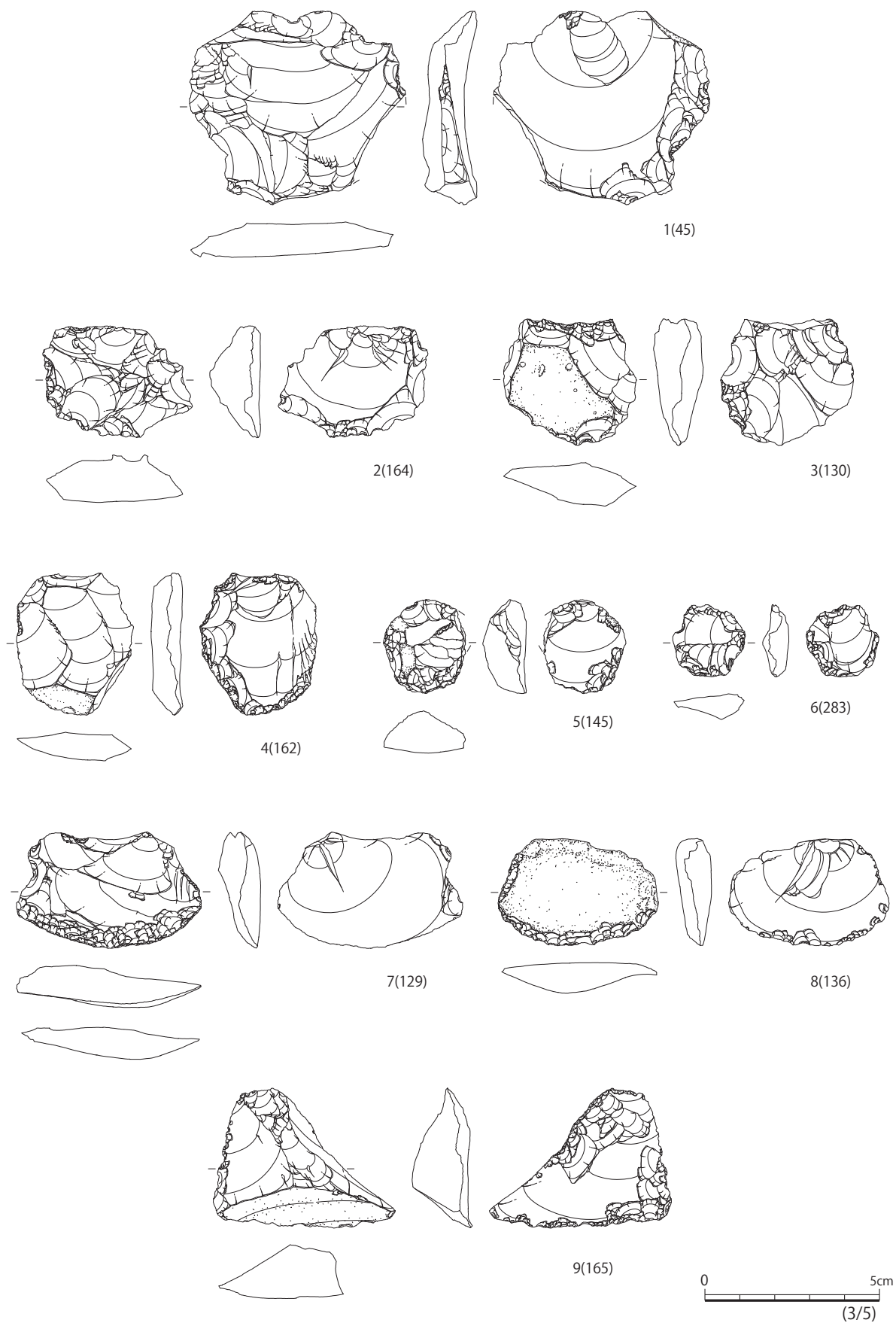
第 102 図は大形の搔器を一括した。1 は円形を呈し全周を刃部とする。2～6 は半円形に近い形状で主に湾曲する側縁を刃部とする。7 は角に丸みのある方形を呈する。左右両側縁を刃部とする。

石核 (第 103 図 図版 39)

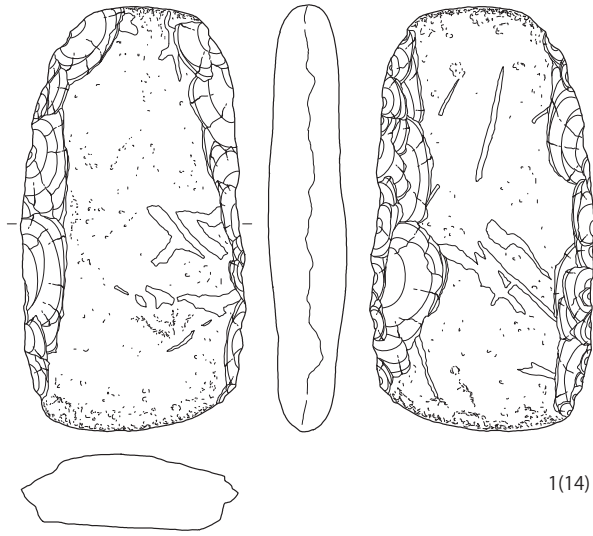
全て石器素材剥離後の残核である。1～3・5～10 は打面調整がみられる。主に打面方向からの加撃により連続的に剥片を得たことが伺える。4・11・12 は不定方向からの加撃により剥片を得ている。



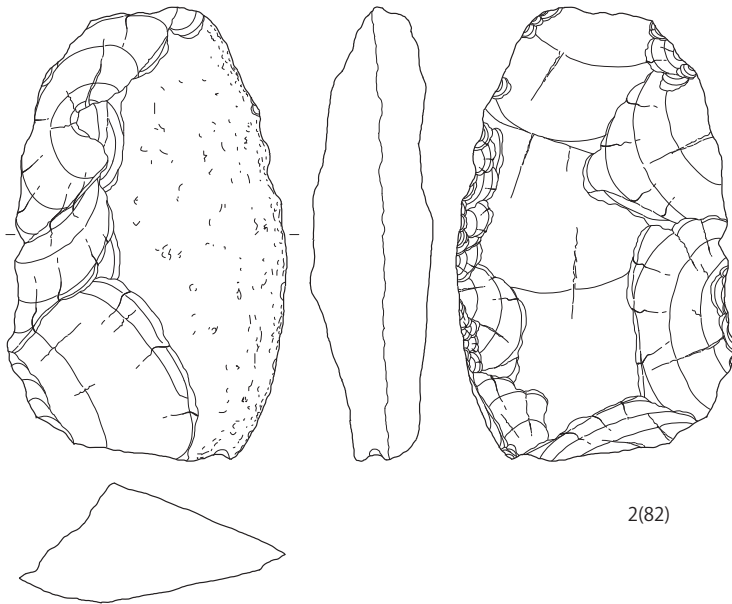
第 99 図 搔器 (4)



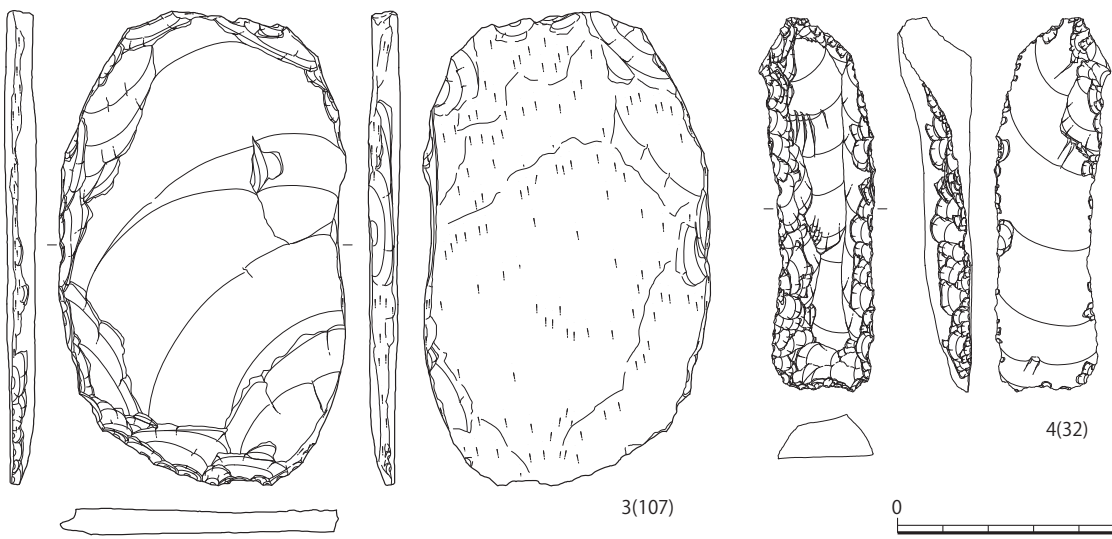
第 100 图 搔器 (5)



1(14)



2(82)



3(107)

4(32)

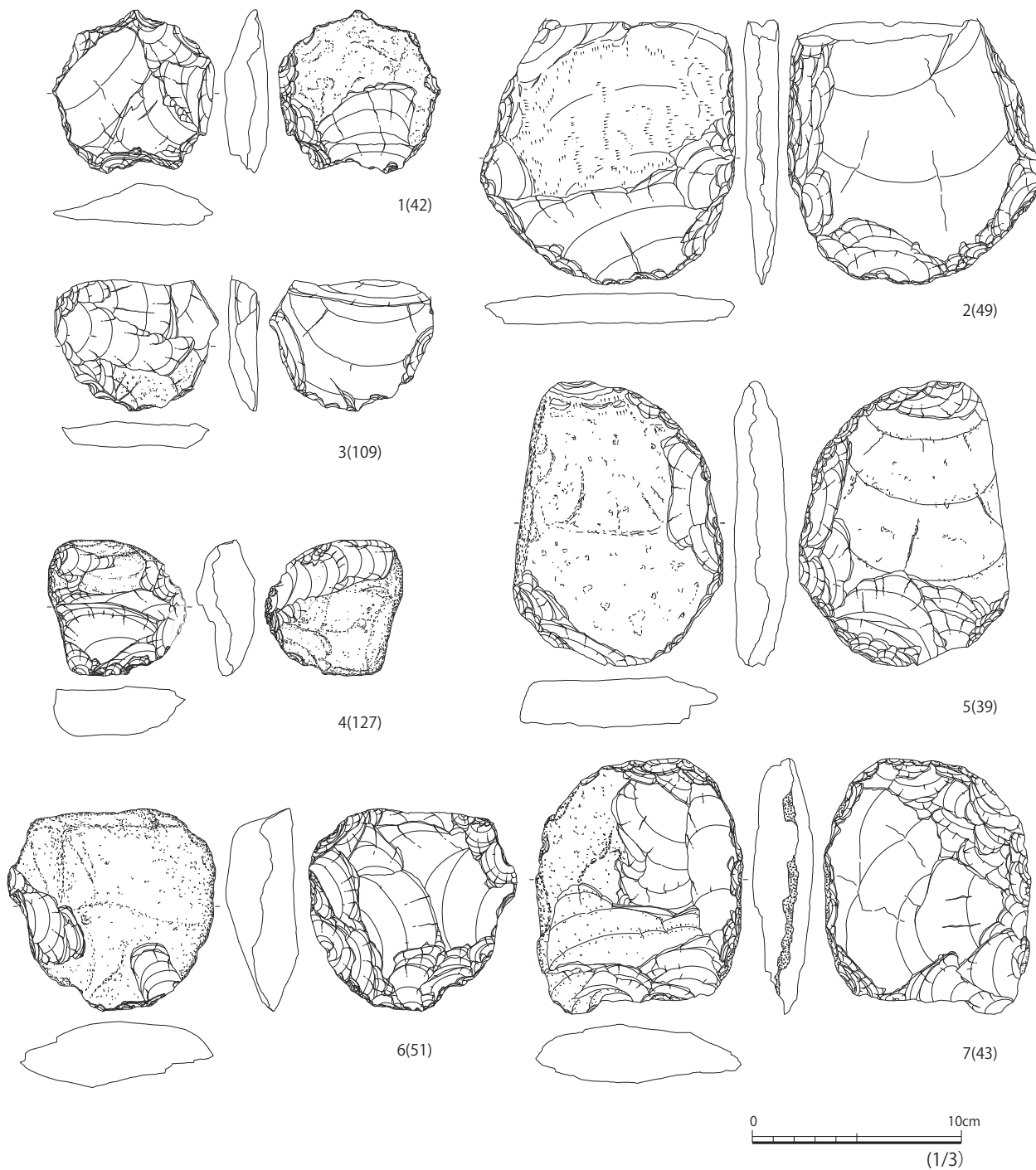


第 101 図 搔器(6)

打製石斧 (第 104・105 図 図版 40)

第 104 図 5 を除き礫皮面が残る。第 104 図 1 は下側縁の刃部にむかって身中が広がる。2・4 は方形を呈し表面には礫皮面が残るが、裏面は粗い調整剥離が施されている。全周の表裏両面には調整剥離が見られ、特に刃部である下側縁部は入念な調整が加えられる。3 は半壊後、新たに下側縁部を刃部とする調整が加えられている。5 は厚みがあり、弧状の下側縁を刃部とする。

第 105 図 1 は大形で厚みのある分銅形の石斧である。表裏面ともに礫皮面を残す。



第 102 図 搔器 (7)

磨製石斧 (第 106・107 図 図版 40・41)

第 106 図 1～4・6 は刃部である下側縁部にむかって身巾が広がる形状を呈する。3 を除き刃部には使用痕と推定される刃こぼれ状の剥離がみられる。6 の表裏面には著しいつぶれ痕や剥離が観察される。破損後の用途を変えた再利用が推定される。5・7・8 は半壊品で、おおよそ下半部にあたる。

第 107 図はすべて半壊品である。1～3 は刃部が残る先端部、4 は中央部、5 は中央部付近の破片、6～11 は基端部が残る半壊品である。いずれも表裏面ともに入念に研磨されている。

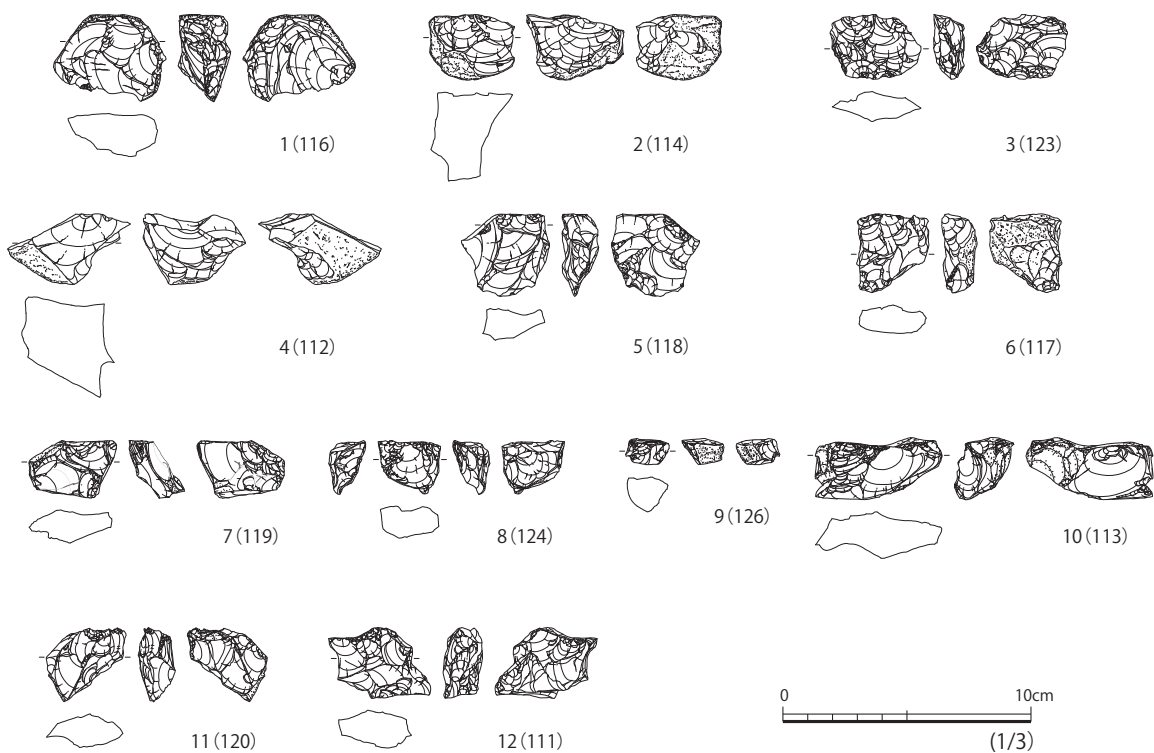
敲石 (第 108～110 図 図版 41・42)

観察される調整や使用痕の中でも、周縁部に敲打痕が見られる礫石器を一括した。

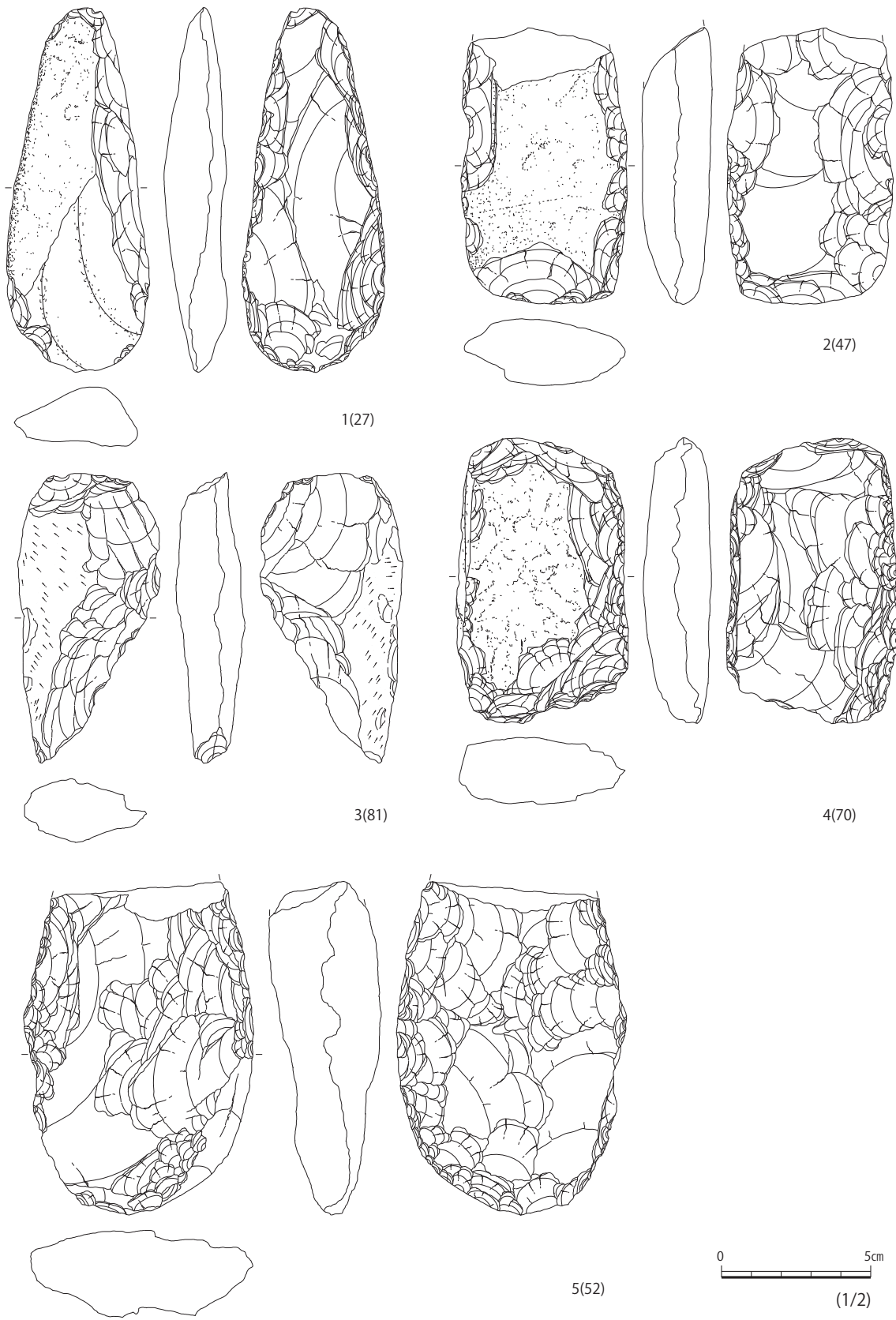
第 108 図、第 109 図 1・2 は円形を呈する。第 108 図 1 は扁平な円形を呈し、裏面下側縁に敲打による剥離がみられる。2・3 は断面が卵形を呈し、周縁部から表裏両面まで敲打による剥離やつぶれ痕が観察される。4・5 は下側縁に敲打痕の集中がみられ、同部位を作用部とする。

第 109 図 1 は上下端部付近に敲打痕の集中がみられる。2 は左側縁が敲打により波状に剥離している。3～6 は不整楕円形を呈する。3 は表面に、4・5 は表裏両面に凹が認められ、敲打痕は上下端部にみられる。6 は身部中央付近に僅かな段差を持ち、下端部に敲打による細かな剥離痕が認められる。

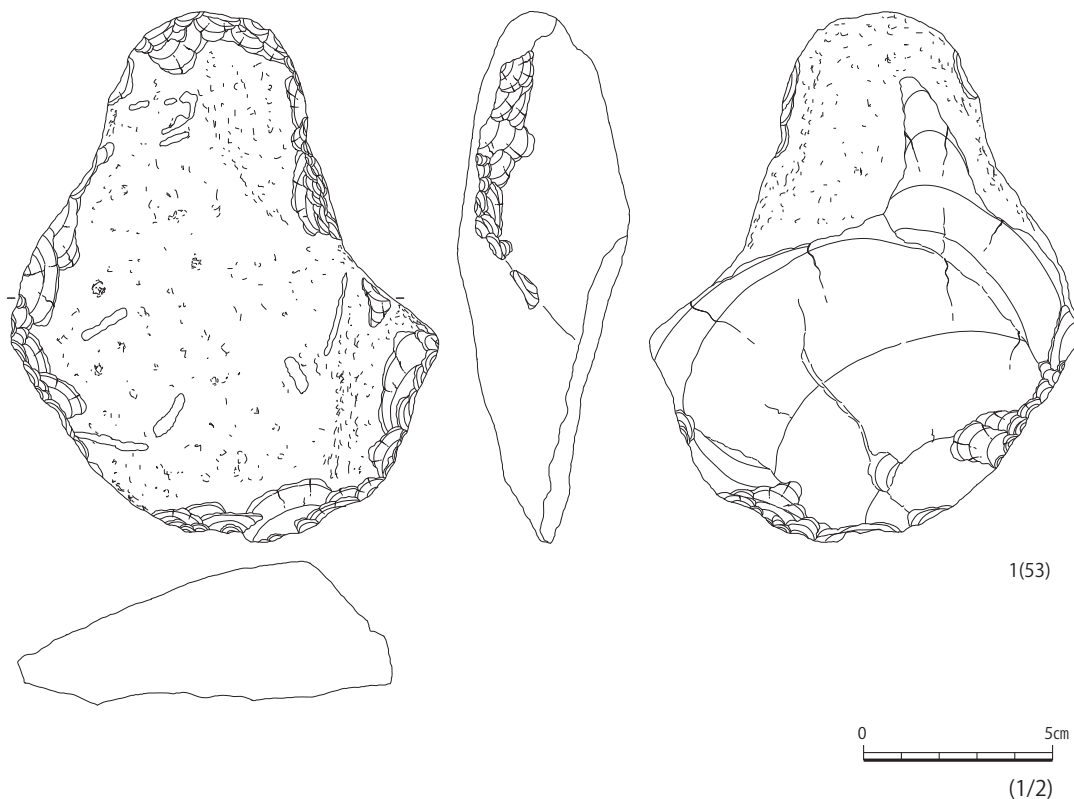
第 110 図 1・3・4 は楕円形を呈し、上下端部に敲打痕がみられる。1 は上下端部に複数の剥離が観察され、両端を作用部位とする。3 は上下端部に敲打による細かなつぶれ痕がみられる。4 も上下端部に剥離やつぶれ痕がみられる。2 は身幅が下方へむかい広がる形状を呈し、裏面の下半部に凹が 2 か所みられる。敲打によるつぶれ痕が上端部に、剥離が下端部に観察される。5・6 は半壊品である。5 は主に下端部を作用部位としたと思われるが、裏面の両側にも剥離がみられる。6 は下端部に細かな剥離が観察される。7 は方形を呈し、表裏両面に凹がみられ、下端部につぶれ痕がみられる。8 は菱形を呈し、下端の頂部付近につぶれ痕が集中している。表裏両面に凹がみられる。9 は不整形で表裏両面に凹がみられる。側縁の全周に敲打によるつぶれ痕が観察される。10 は半壊品で表面に凹が、裏面に研磨痕がみられる。



第 103 図 石核



第 104 図 打製石斧 (1)



第105図 打製石斧(2)

磨石(第111～113図1 図版43)

器面の一部に使用による研摩痕が認められる石器を一括した。

第111図1は表面全体に研摩痕がみられる。2は表裏面ともに研摩痕が認められるが、上半部は自然劣化による剥離が著しい。3は全面に研摩痕が残る。

第112図1は下端部を欠くものの表裏両面に研摩痕が観察される。2は卵形の自然石を利用したと思われる、裏面に研摩痕が残る。3は表裏両面に研摩痕がみられ、右側縁に剥離が集中している。同部位を敲打に使用した可能性がある。

第113図1は長楕円形を呈したと推定され、全面に研摩痕が残る。表裏両面に凹がある。

砥石(第113図2 図版43)

扁平で全面に研摩痕がみられる。半壊品である。

凹石(第114図 図版43)

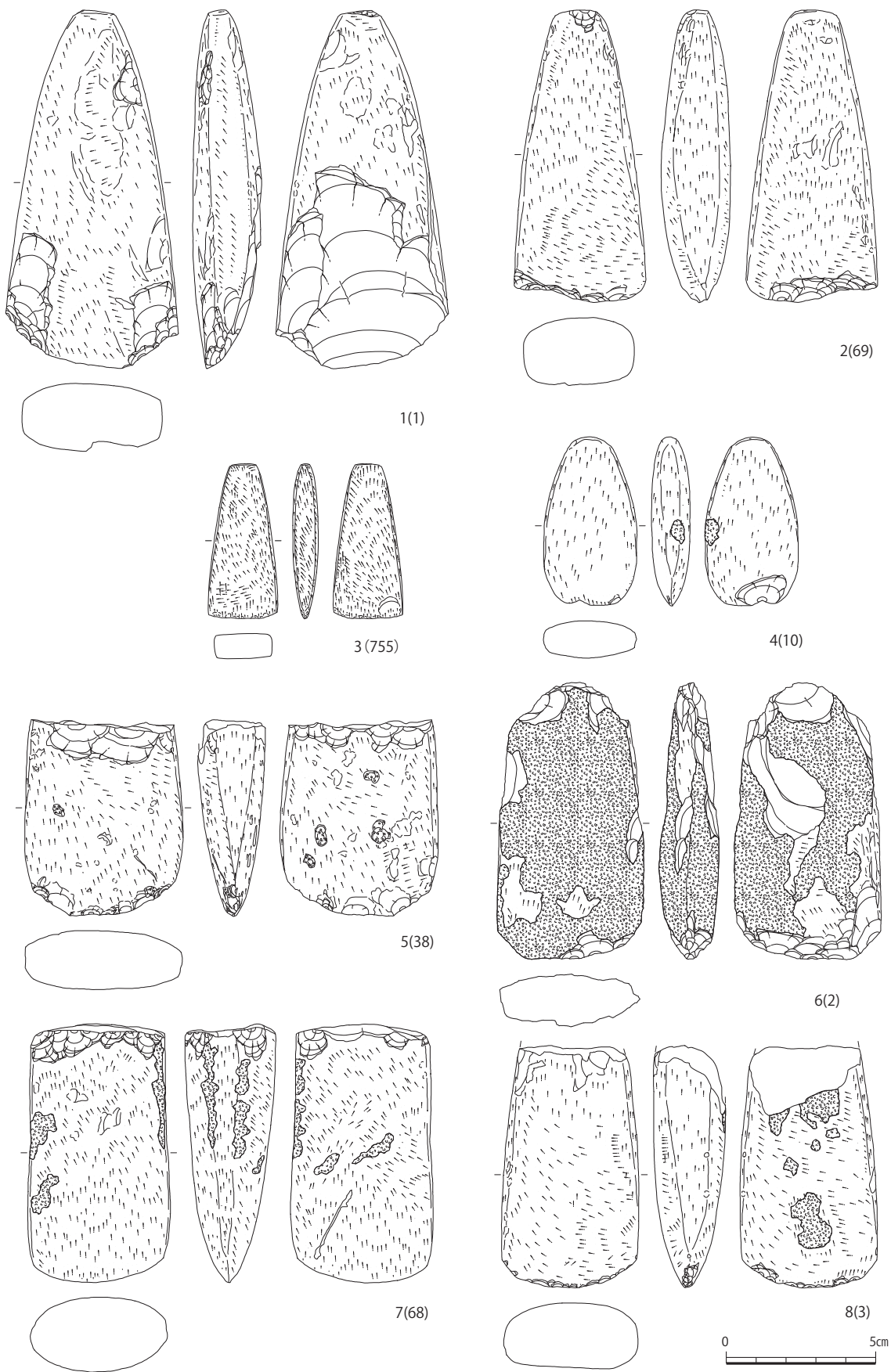
1は半壊品である。表裏・側面に凹がみられ、表裏面ともに全面研摩されている。2は表裏両面に凹がみられる楕円形を呈する。

礫器(第115～119図 図版44・45)

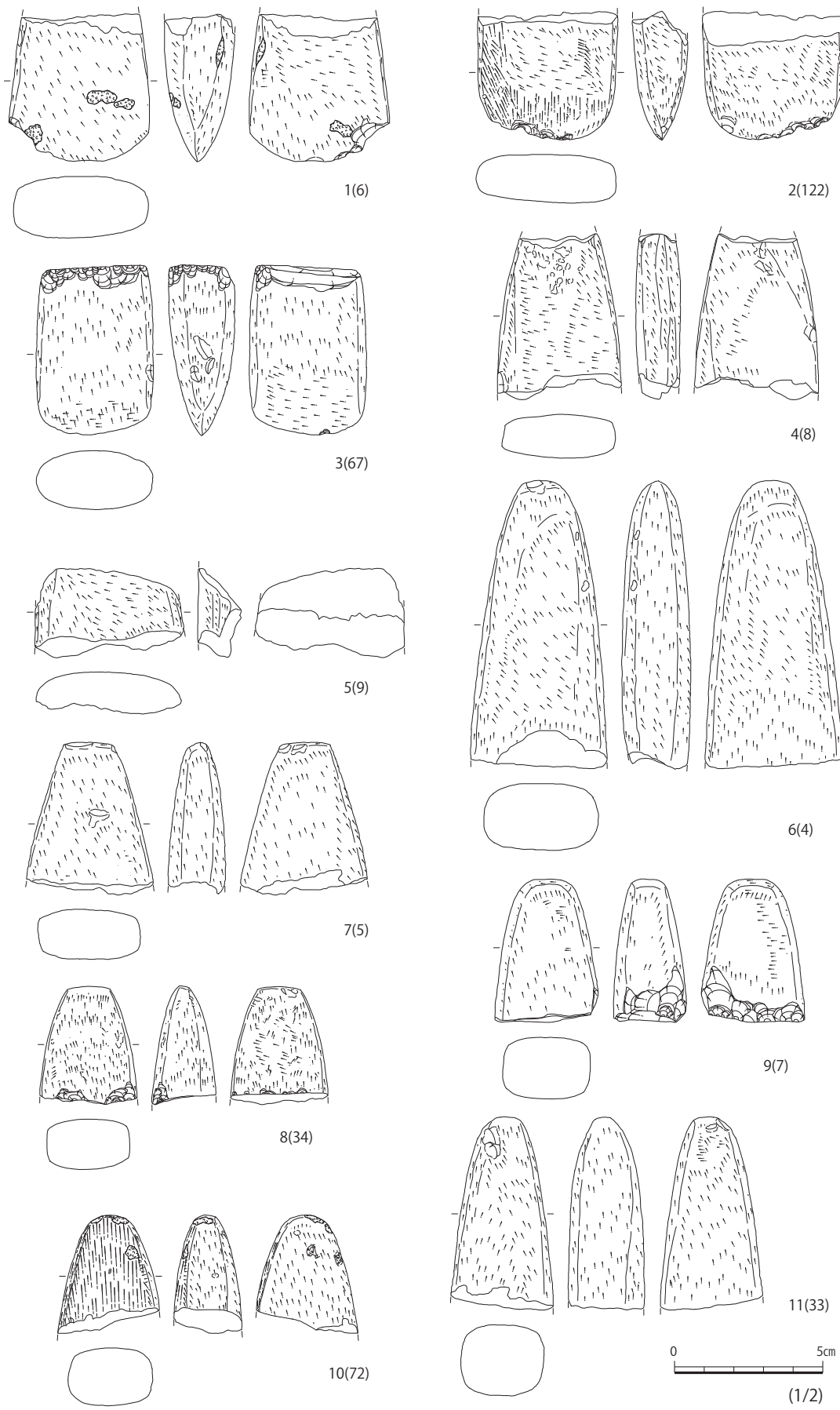
大形礫や大形剥片の一部を粗く調整し、利器としたものを一括した。その用途は特定できず、切断や粉碎など多様であったと推定される。

第115図1は台形を呈し、厚みがある扁平な礫の下側縁部に粗い調整を加えている。2は断面三角形の縦長の礫の下端部を粗く打ち欠き刃部とする。3～5は方形を呈する。3は上側を除く側縁部を粗く打ち欠き刃部を作出している。4は上下端部を調整し刃部とする。5は上下端部を片面からの調整によって鈍角の刃部を作出している。

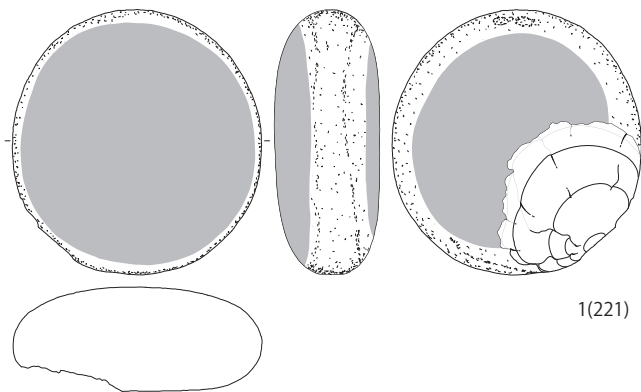
第116図は一侧縁が弧状を呈する大形の礫器である。1は大形の扁平な剥片で、弧状の側縁部を刃



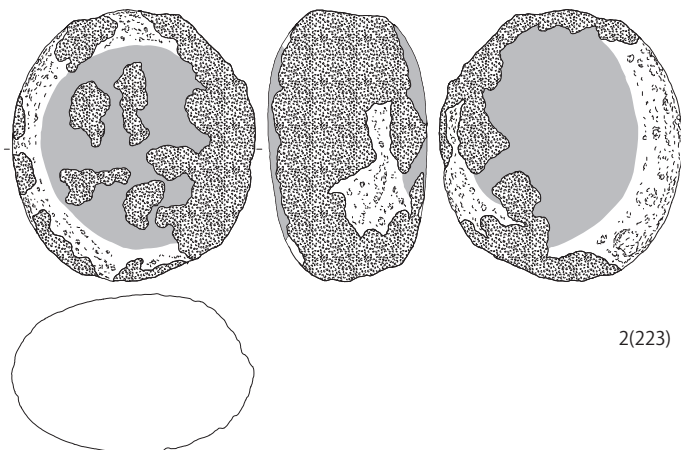
第 106 图 磨製石斧 (1)



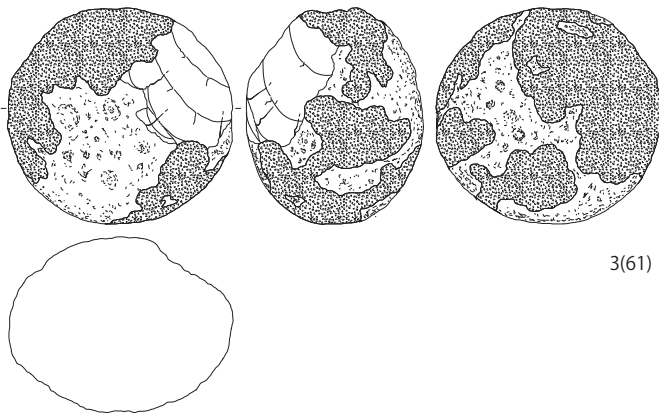
第 107 図 磨製石斧 (2)



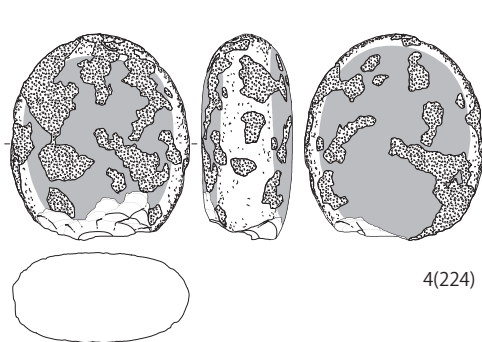
1(221)



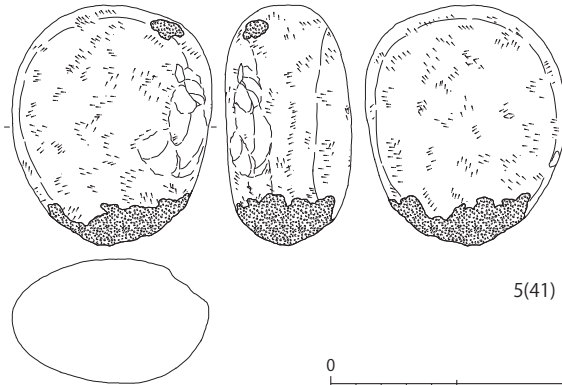
2(223)



3(61)



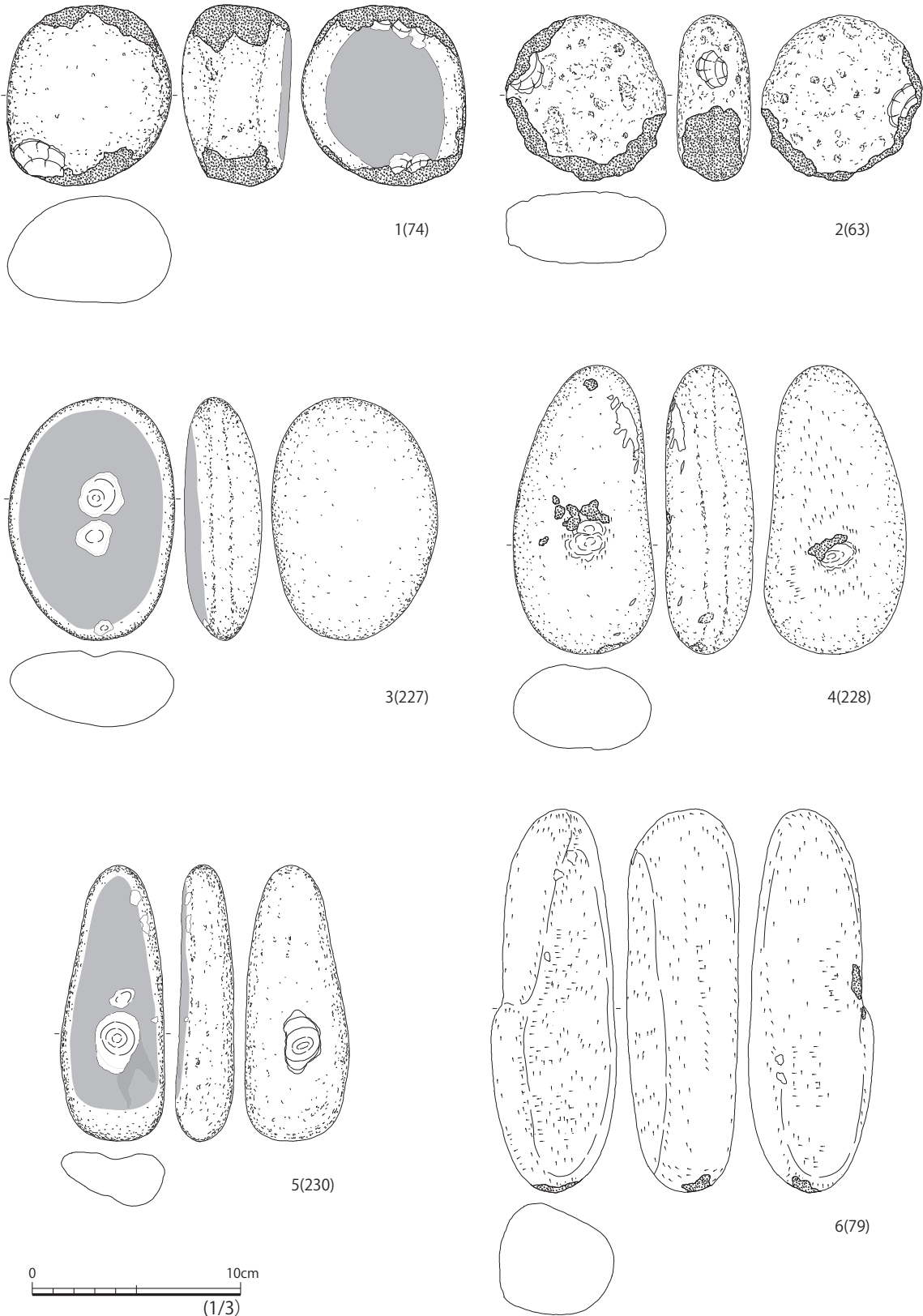
4(224)



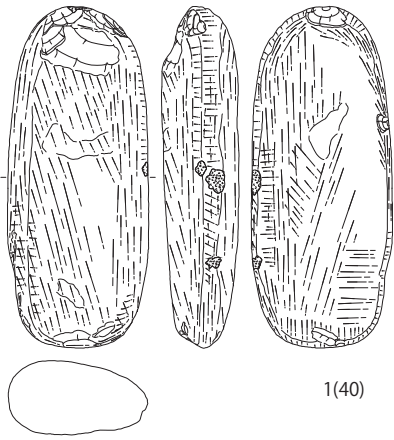
5(41)



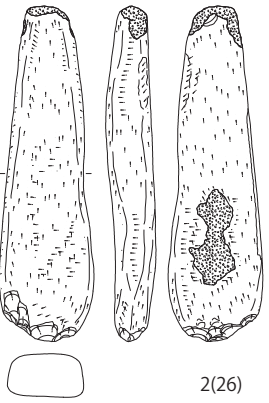
第 108 図 敲石 (1)



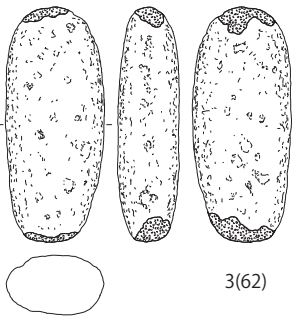
第 109 図 敲石 (2)



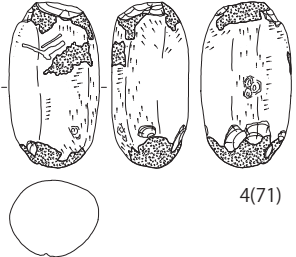
1(40)



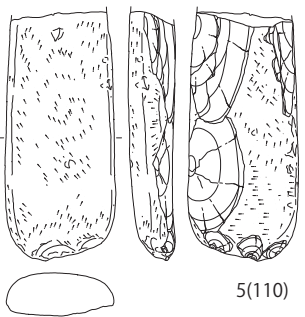
2(26)



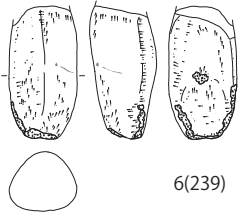
3(62)



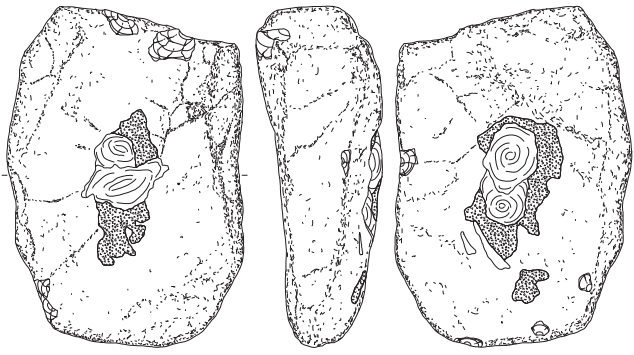
4(71)



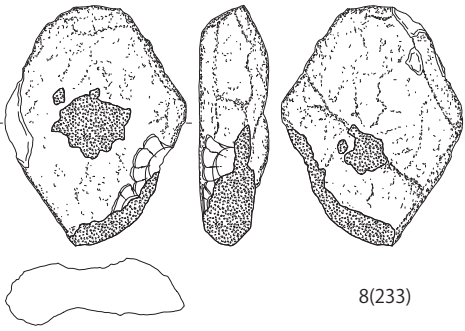
5(110)



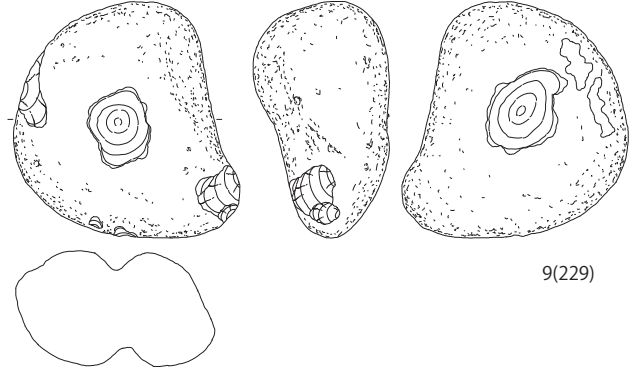
6(239)



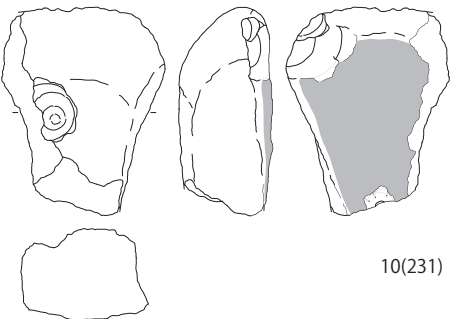
7(225)



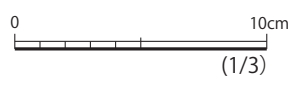
8(233)



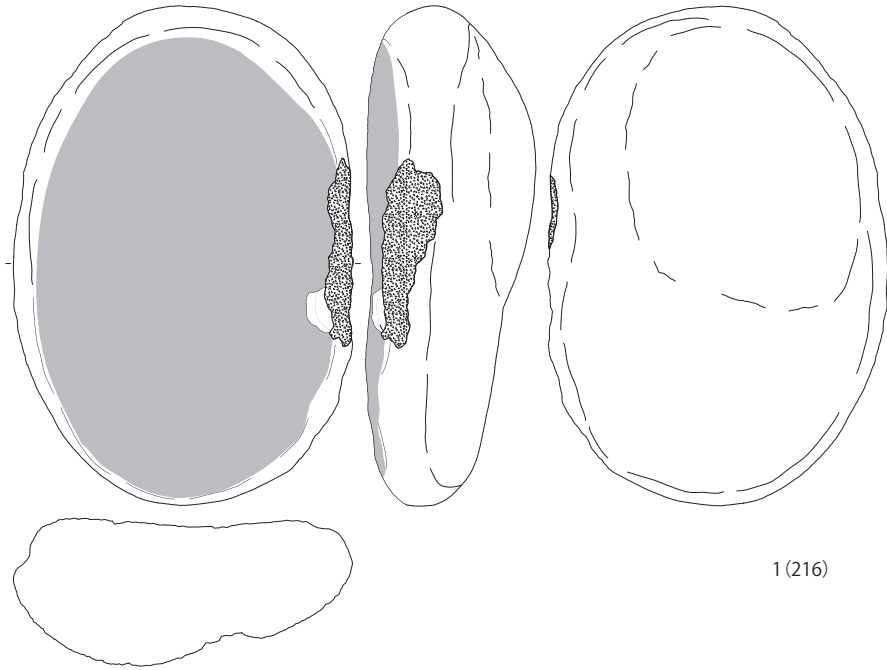
9(229)



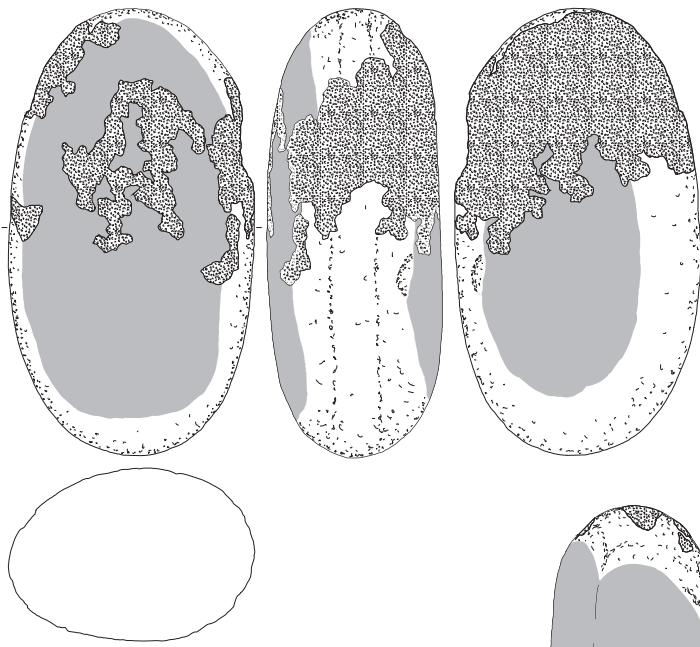
10(231)



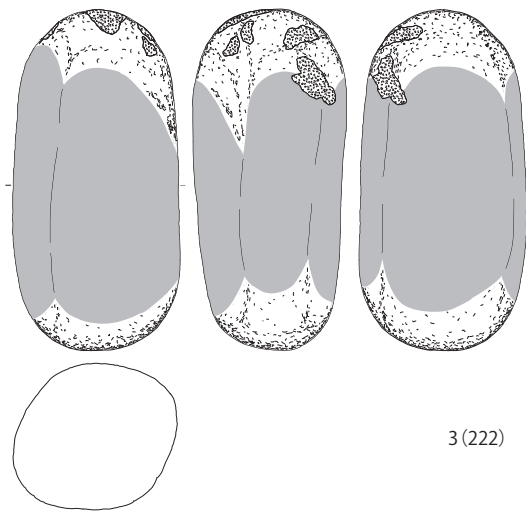
第 110 図 敲石 (3)



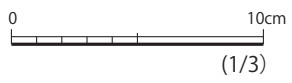
1(216)



2(220)



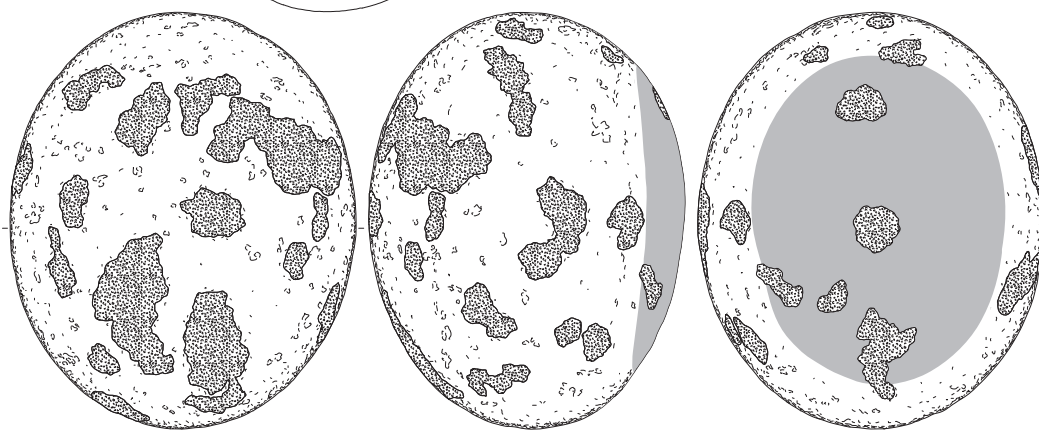
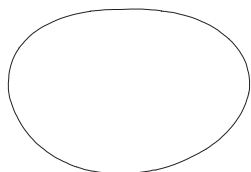
3(222)



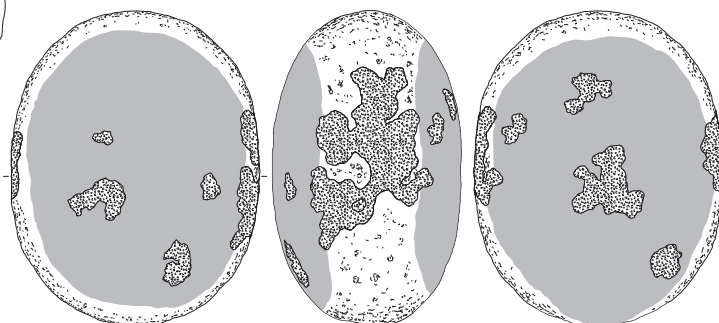
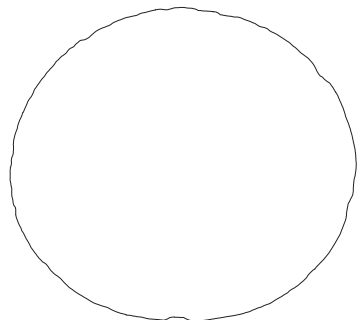
第 111 图 磨石 (1)



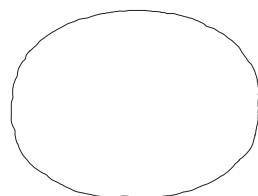
1 (235)



2 (218)



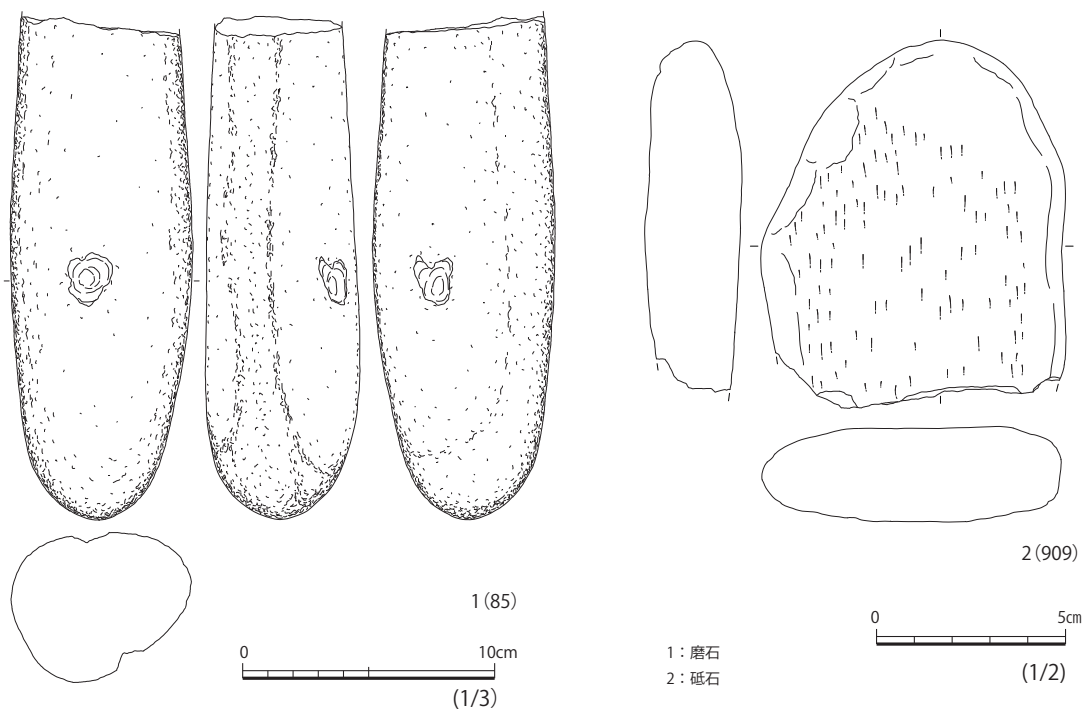
3 (219)



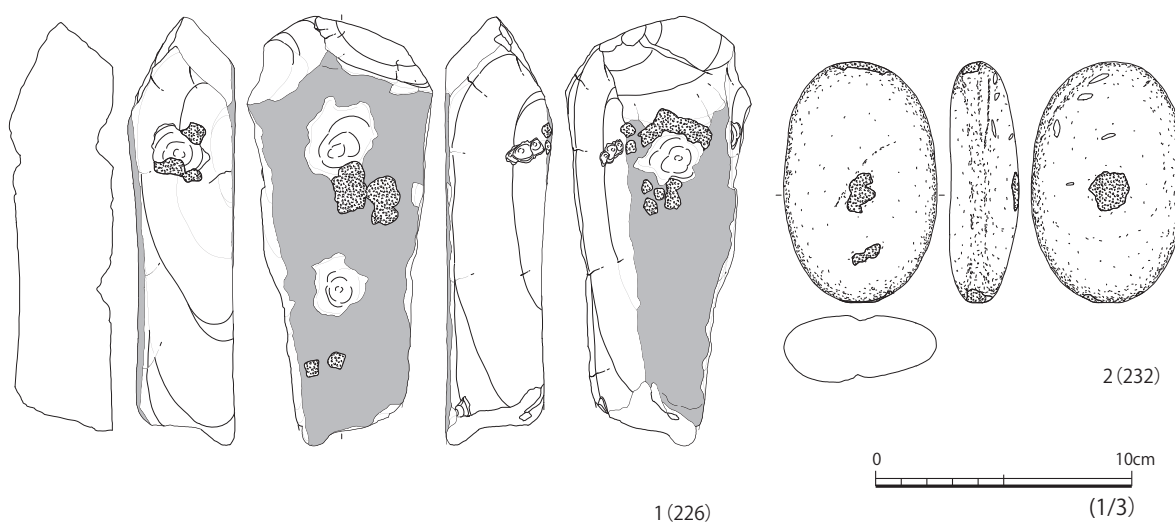
第 112 図 磨石 (2)

部とする。2は下側縁部に粗い調整を施し刃部とする。3は下側縁部に表面から連続的に調整を加え鈍角の刃部を作り出している。

第117図は小ぶりの礫器である。1は直線状の下側縁部を粗く打ち欠き刃部とする。2は礫皮面が残り、母岩から1次加工で得られた厚い剥片に粗い調整を加え利器としたと推定される。3は一部礫皮面を残すが、表裏両面に調整を加え下側縁に鋭利な刃部を作出している。4は自然石に表裏両面から数度の打撃を加え刃部を作出する。5は自然石に表面から下側縁部に連続的な調整剥離を施し、鈍角な



第113図 磨石(3)・砥石



第114図 凹石

刃部を作出している。6は厚みのある扁平な自然石の突出した下側縁を粗く打ち欠き刃部としている。7は表裏面ともに礫皮面が残り、母岩を分断し得られた1次加工剥片の下側縁に調整を加え刃部としている。

第118図は自然石の側縁の一部を粗く打ち欠き刃部としている。1・2は刃部調整が粗雑で、恒常的に利器として使用したとは思われない。3は下側縁を鈍角な刃部とする。

第119図1は扁平な大形自然石で全周に敲打痕が残る。2は側面が菱形を呈し、下側縁を刃部とする。
石皿(第120・121図 図版45・46)

研磨面の外周に一段高くなった縁辺を有し、皿状の形状を示す石器を一括した。全て破片である。

第120図1は裏面に方形の脚部を作り出している。2は表裏両面に研磨面が認められる。3は厚く、表裏両面に研磨面がみられる。

第121図1は、よく使いこまれ研磨面は深くすり減っている。2の断面は皿状に縁辺に向かい緩く立ち上がっている。

台石(第122・123図 図版46)

比較的軽量で造作が容易な凝灰岩製の石皿とは異なった、大形で重量もある花崗岩や玄武岩の扁平な自然石に研磨痕が観察される。運搬には労力を要し、据え置いて主に研磨作業台にしたと推定される石器である。

第122図は不整形で角張っているが表裏面ともに平らでものを一括した、作業台として安定性がある。1・2は表面に研磨痕が観察される。3は表裏両面に研磨痕が残る。

第123図は丸みがある扁平な自然石を利用しているものを一括した。3は破片である。いずれも表面に研磨痕が残る。

石製品

石棒(第124図 図版47)

円柱状に加工された石棒の破片を一括した。

第124図1・2は円柱状に研磨加工された大形石棒の基部である。2は丁寧に円柱状に研磨された小形石棒の破片である。4は大形石棒の剥片と思われる。

石剣・石刀(第125図 図版46)

第125図1は断面の中央が膨らみ峰となる両刃で、石剣の破片と思われる。2は片方側縁のみを研磨し、直線状の刃部を持つ石刀の破片、3は背部が弧状に湾曲し、刃部が直線状の石刀の破片である。

石製装身具(第126図 図版46)

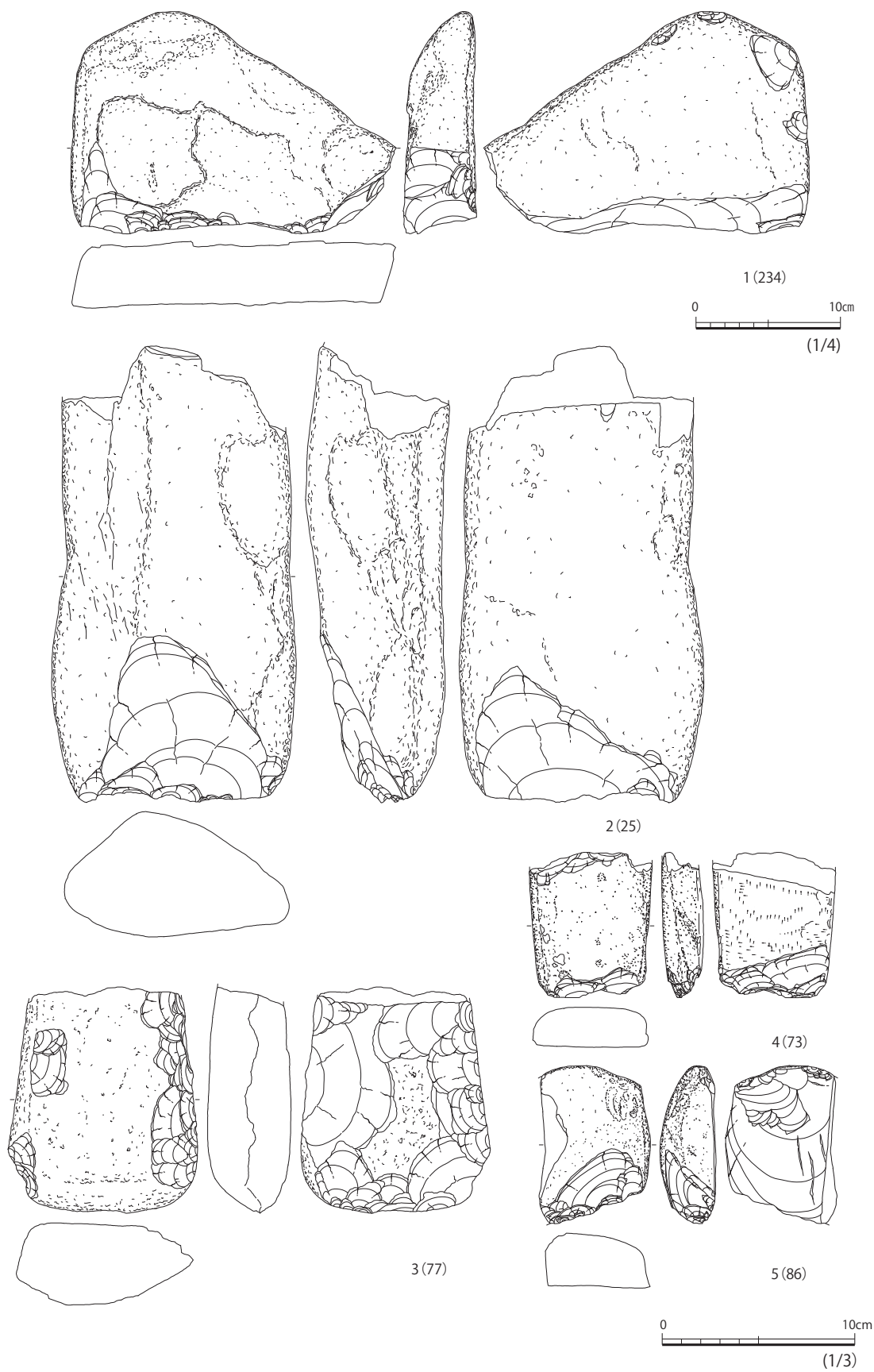
有孔装飾品の半壊品と思われる。薄く丁寧に研磨されている。

石製容器(第127図 図版47)

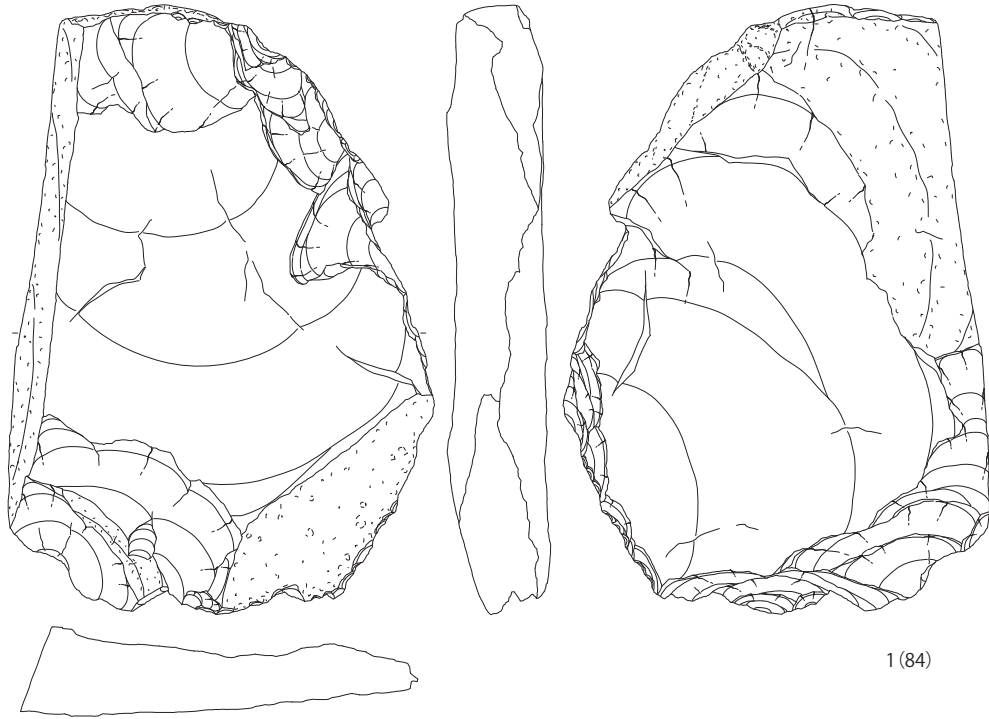
白色で均質な凝灰岩を整形し容器としたと思われる。内外面ともに平滑に仕上げられている。

石製円盤(第128図 図版47)

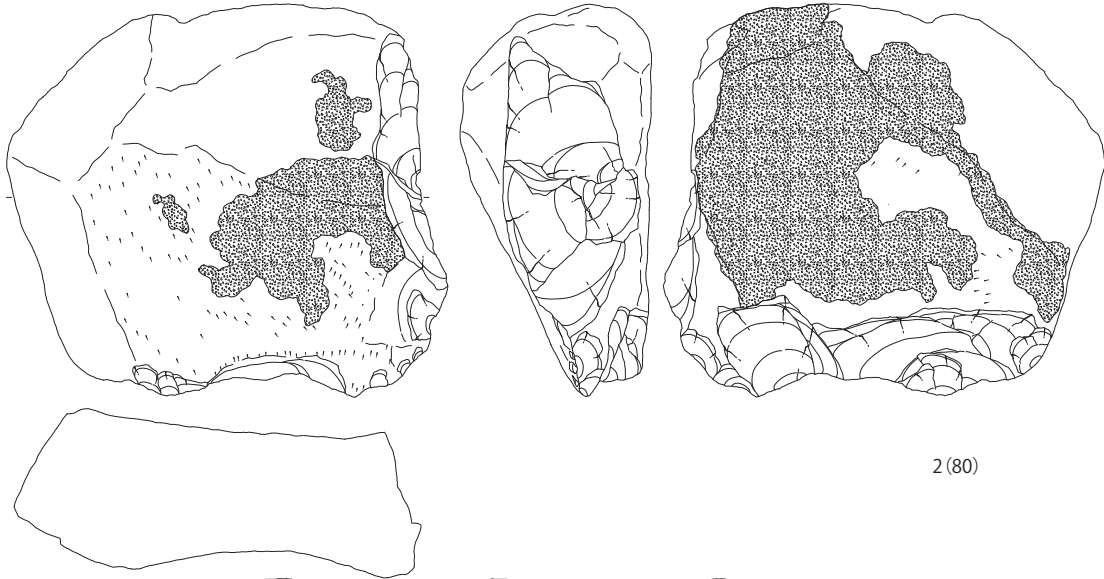
板状に剥離した剥片の周縁を打ち欠き円形に整形している。形状・規格ともに均一性が伺える。



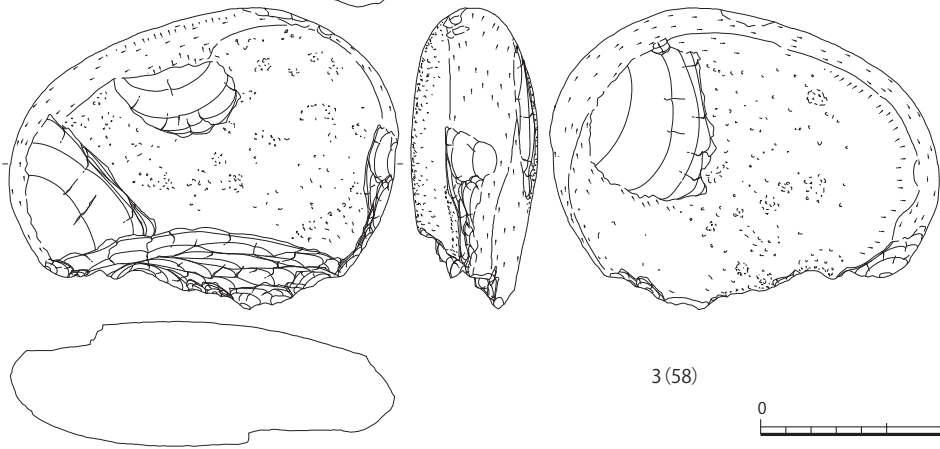
第115図 礫器(1)



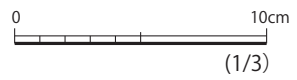
1 (84)



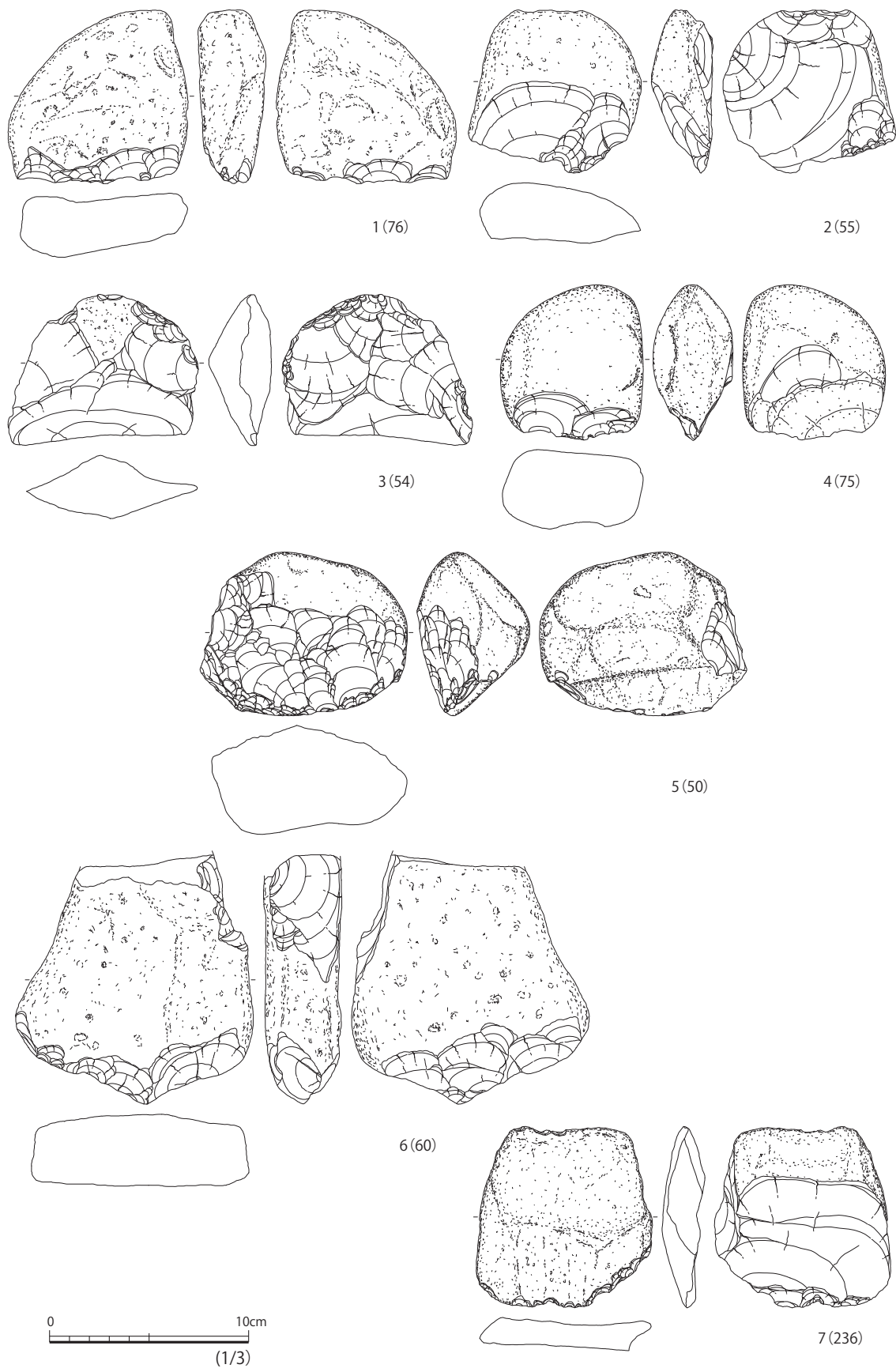
2 (80)



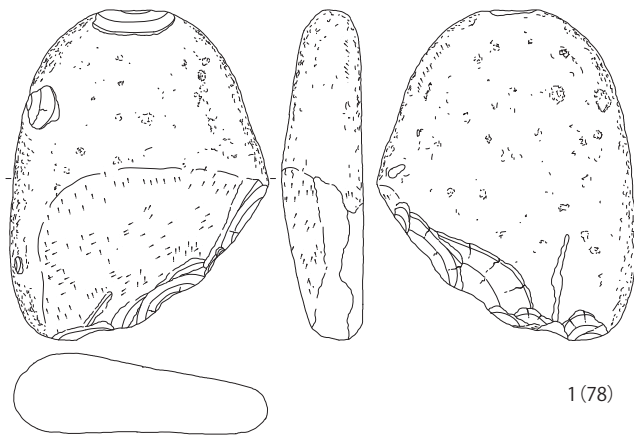
3 (58)



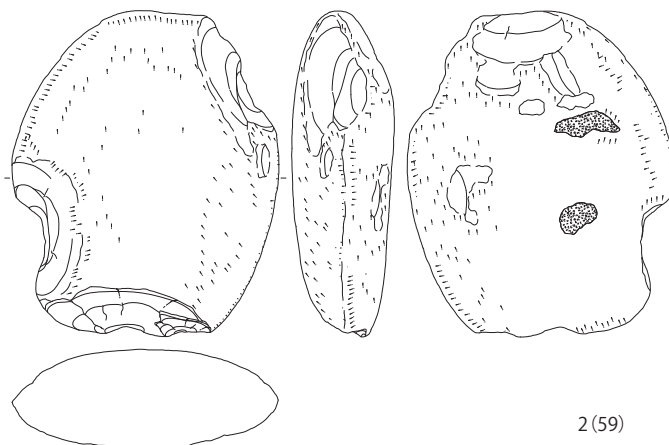
第116图 碟器(2)



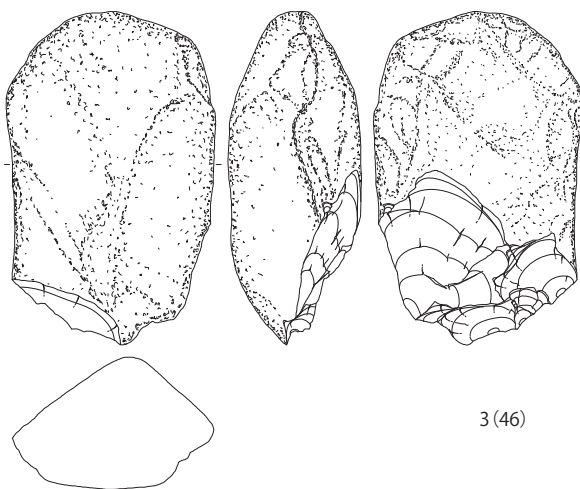
第117図 礫器(3)



1 (78)



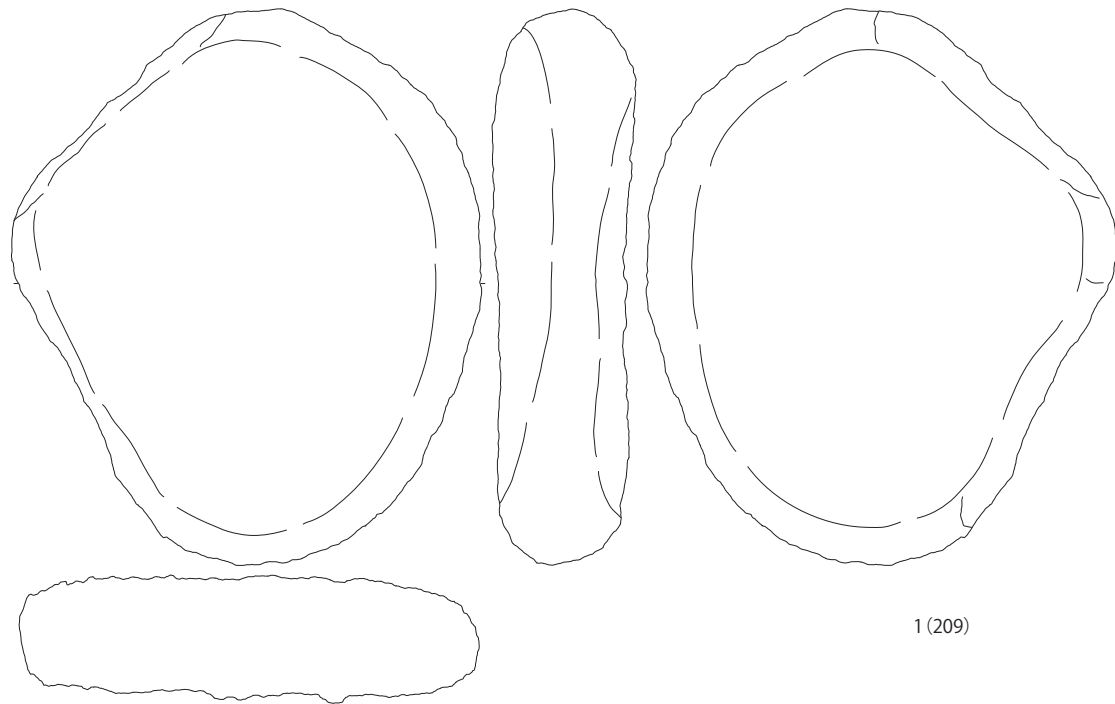
2 (59)



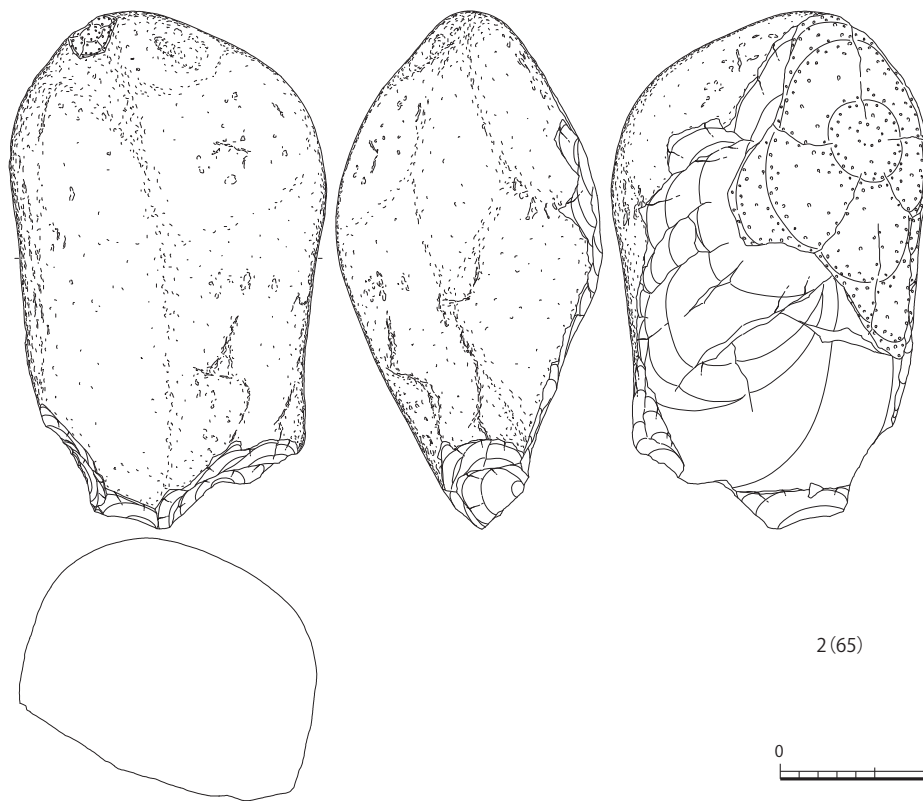
3 (46)



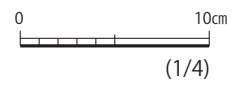
第 118 図 礫器 (4)



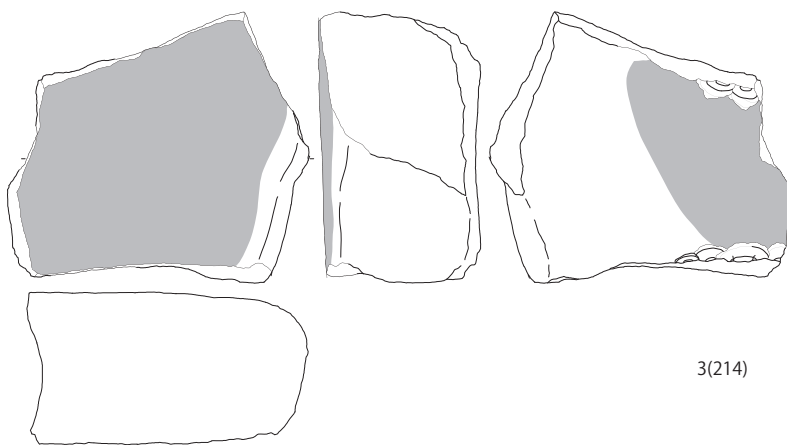
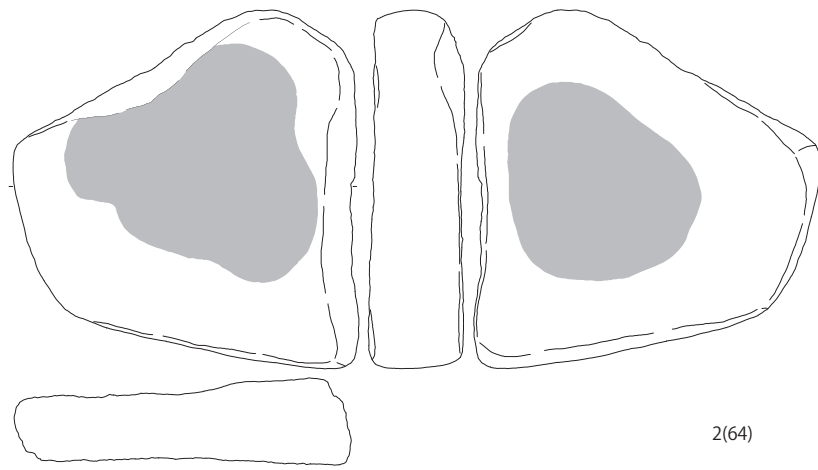
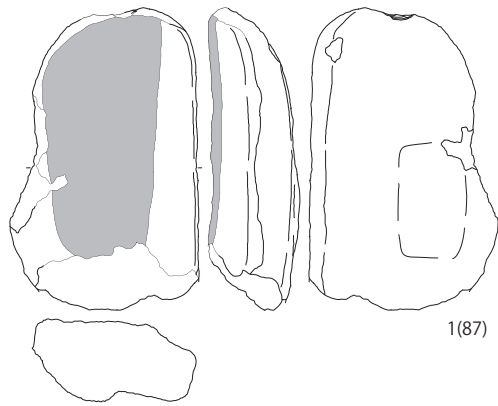
1 (209)



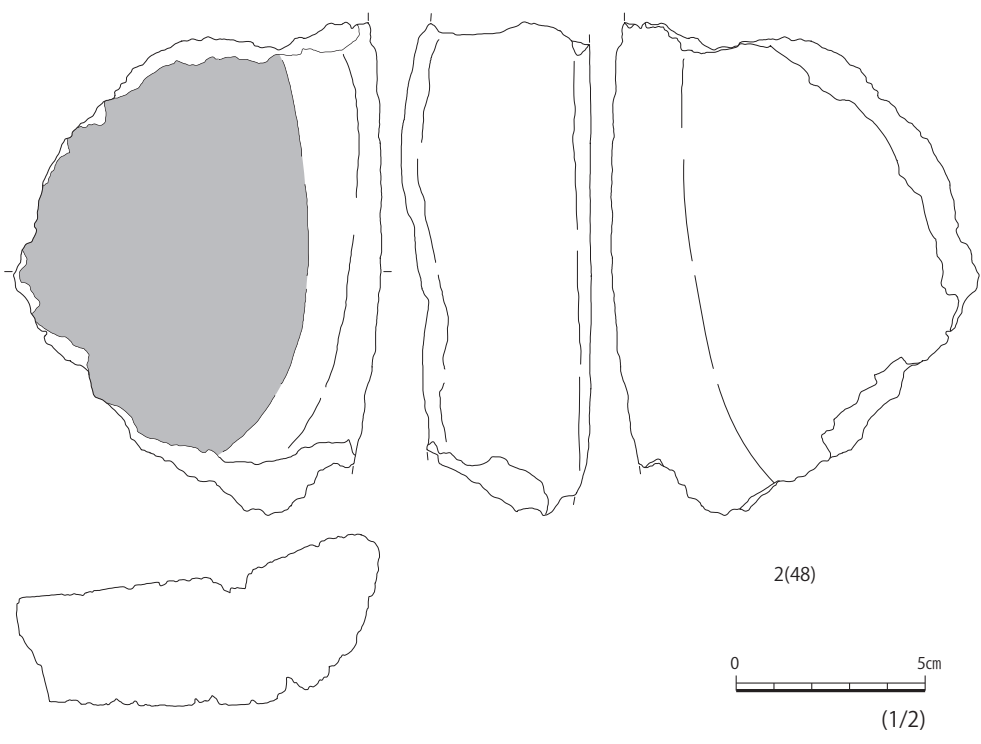
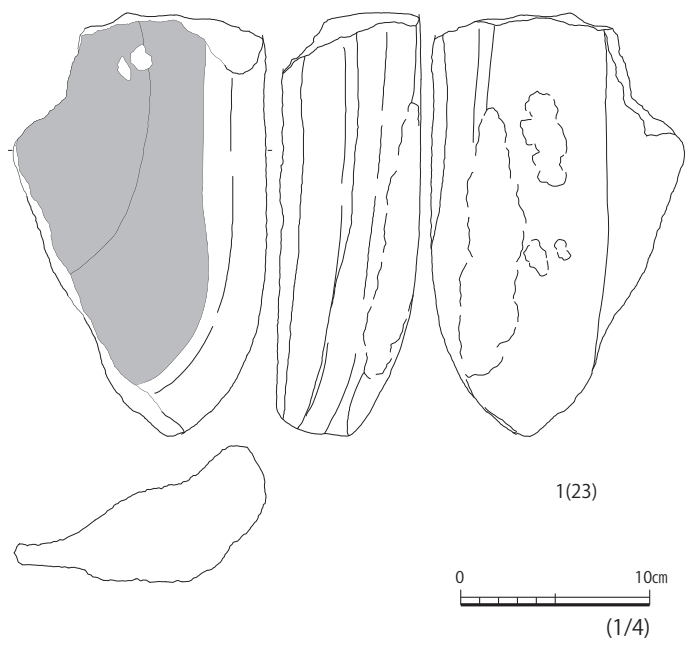
2 (65)



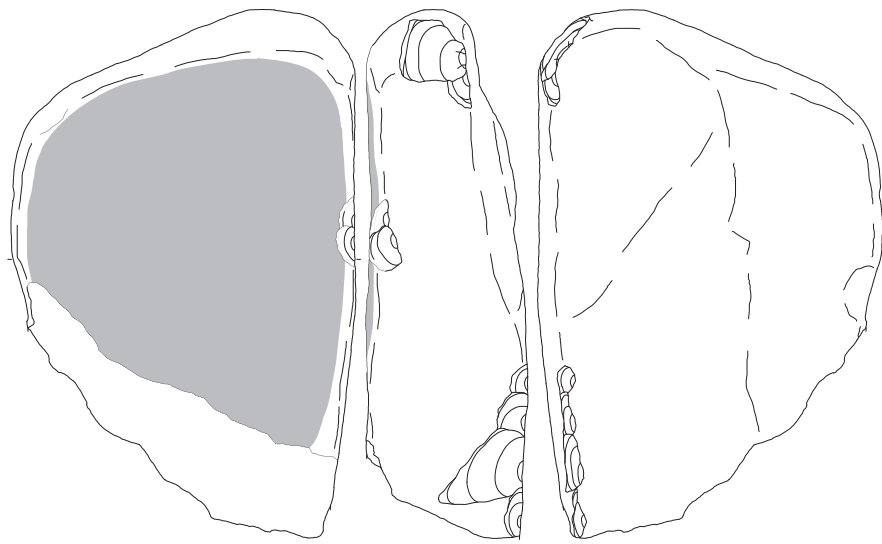
第 119 図 礫器 (5)



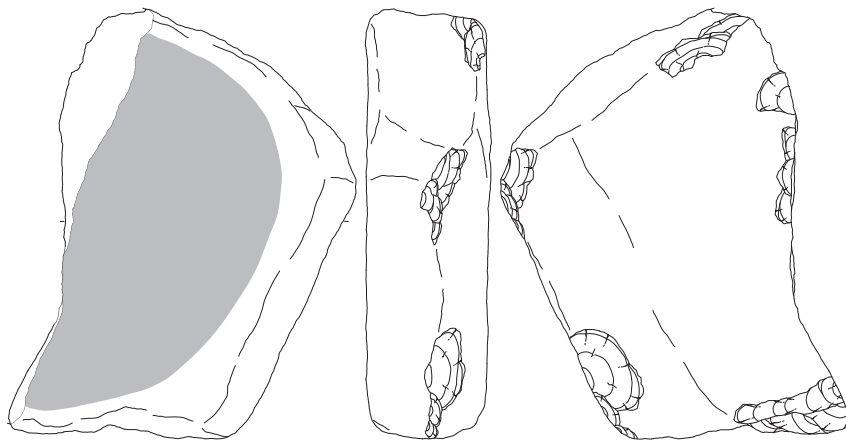
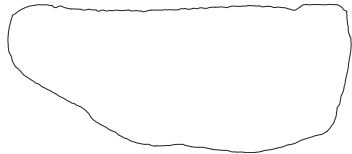
第 120 図 石皿 (1)



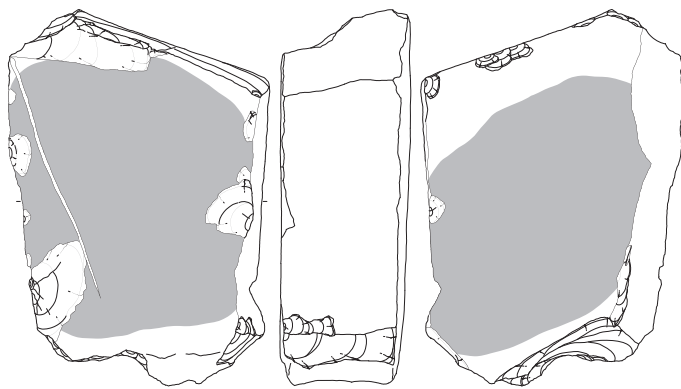
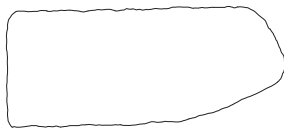
第 121 図 石皿 (2)



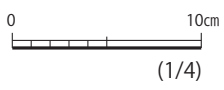
1(212)



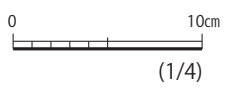
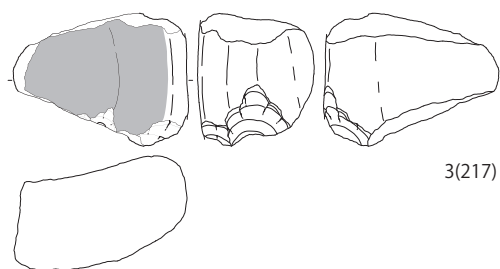
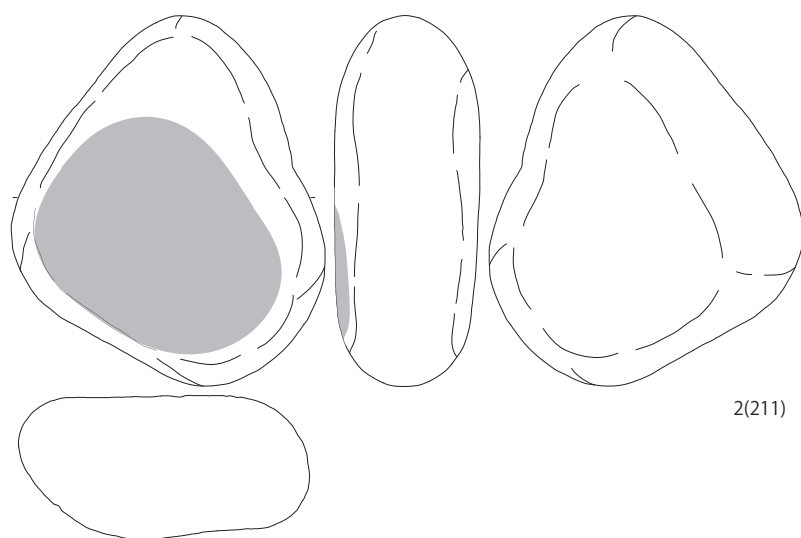
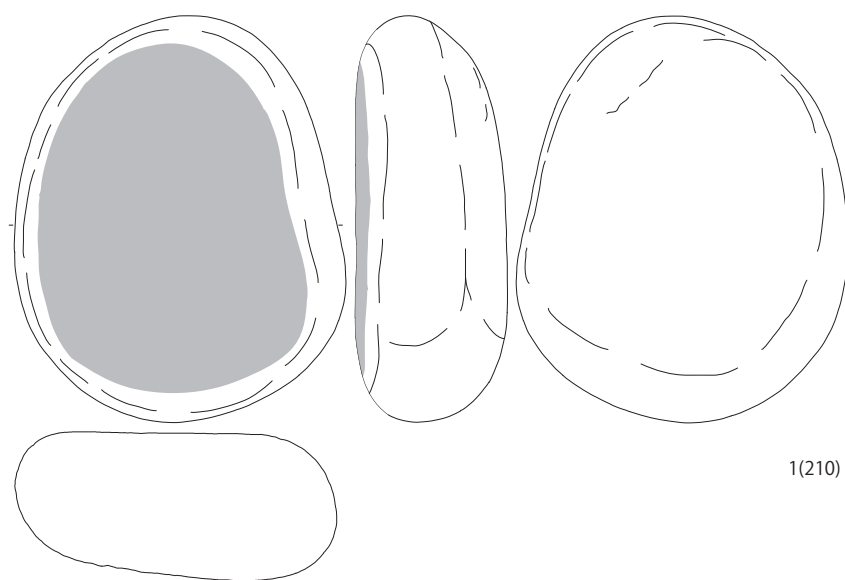
2(213)



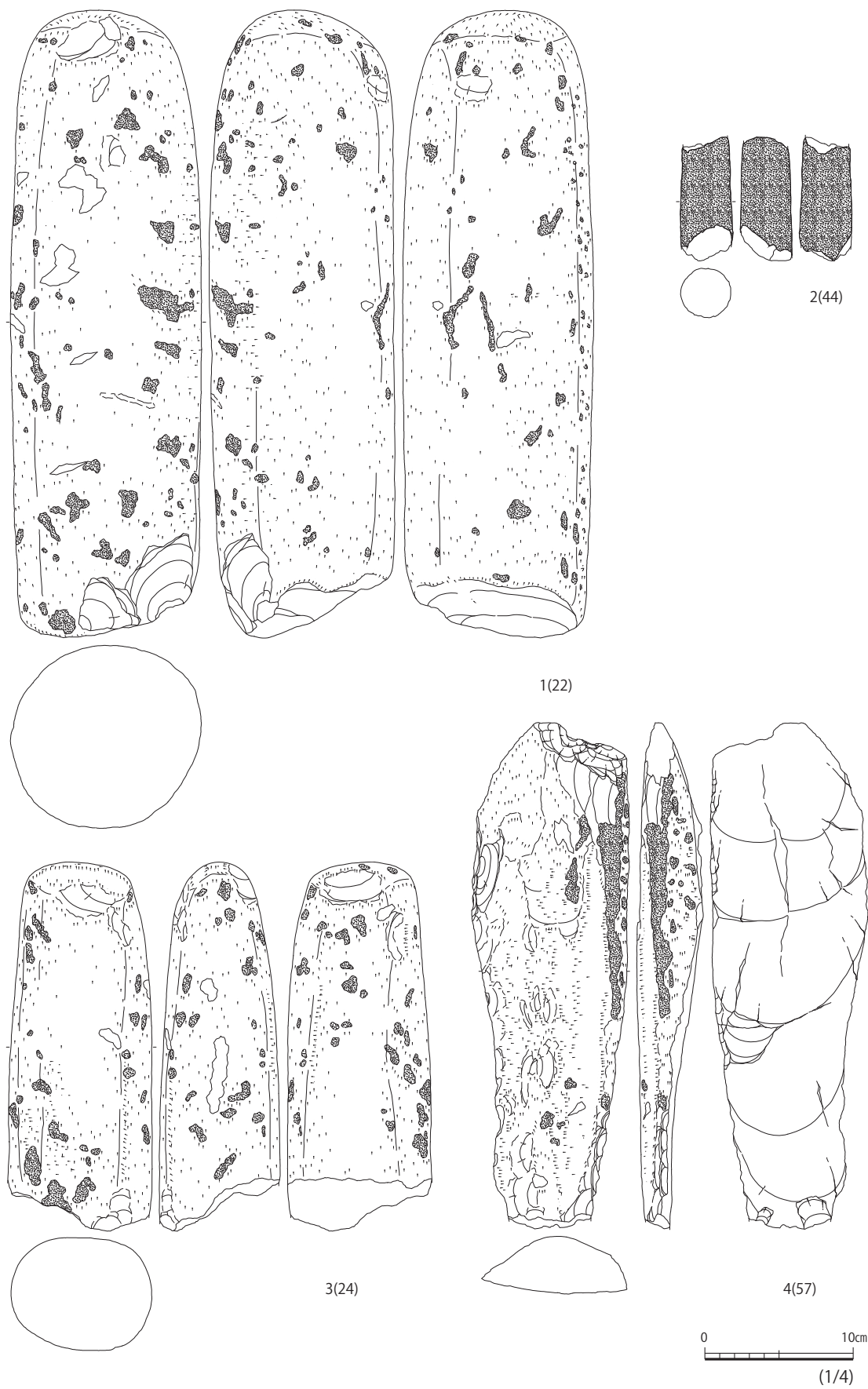
3(215)



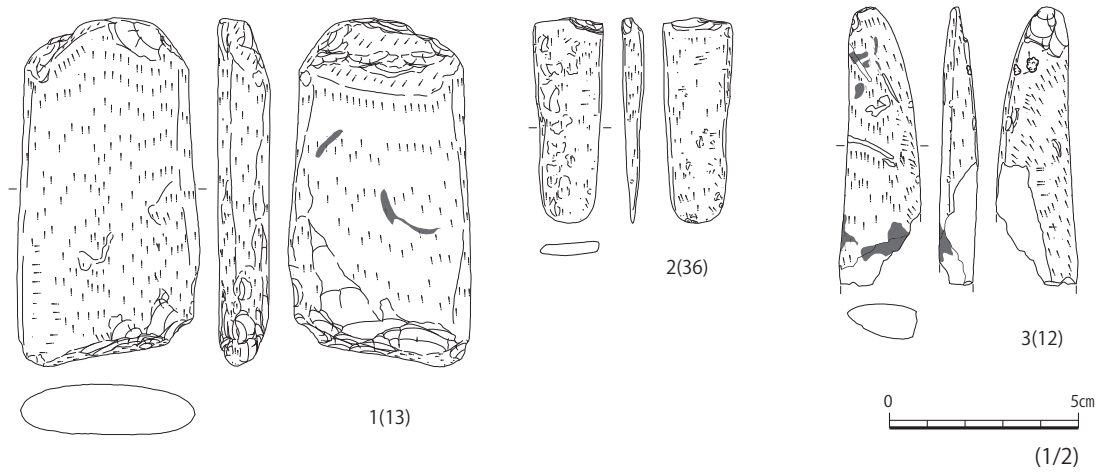
第 122 图 台石 (1)



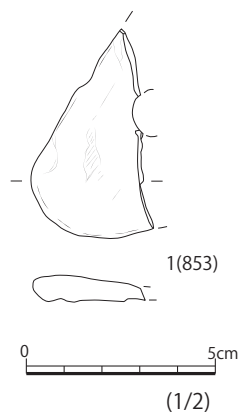
第 123 図 台石 (2)



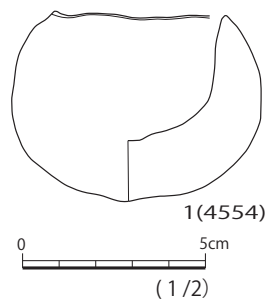
第124図 石棒



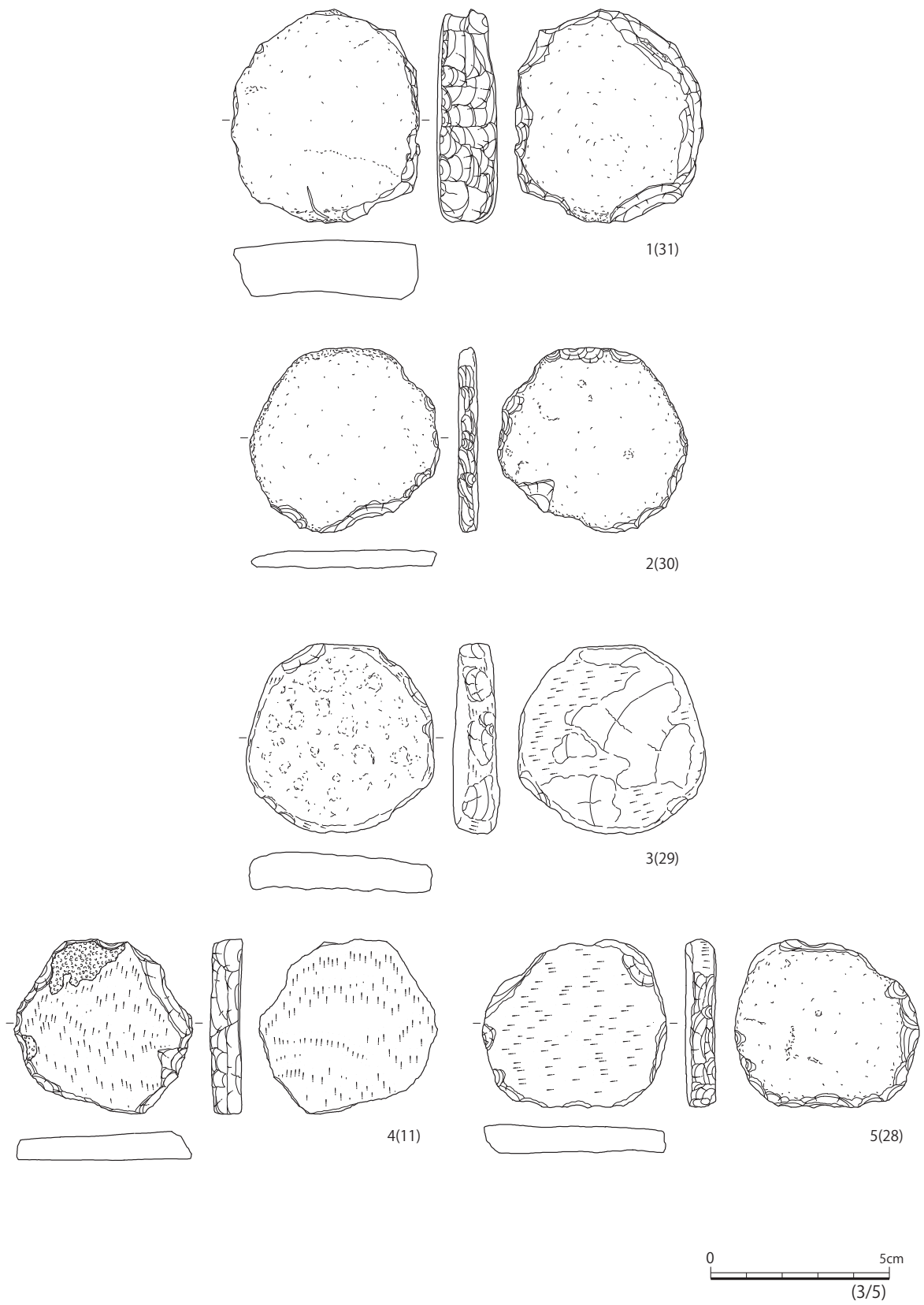
第 125 図 石劍・石刀



第 126 図 石製装身具



第 127 図 石製容器



第 128 図 石製円盤